

呼して、城を抜かんと欲す。
ドツと揚ぐる吶喊の聲は、天地に震うて、城も、壁も、吹き飛ばされんばかり。

二

城上より、東軍を望み見れば、旌旗、野を掩ひ、雲に聯なる。

既にして、東軍、猛然として、來り迫る、滔々たる勢ひ、

赤坂城址の碑

河内國南河内郡赤坂村大字水分の上方に在りて金剛山の西麓に位す楠木正成の築く所。



宛がら、堤を決する怒濤に似たり。

城中、聞たり、音もなく、聲もなし、敵兵、益々侮りて、近く進む、正成、機を見て、蹶然として起ち、一聲高く、

『ツレ射よ』

と呼ばれば、櫓より、矢間より、霏々たる亂矢、雨の如くに、降り濺ぐ、萬矢、虚發なし、東軍、見るべく、倒れ死するもの、一千餘人、諸軍、皆、驚き怖れて、

『扱も、心憎き敵の振舞かな、一日、二日の中に、攻め落さんこと、叶ふまじ、此上は、暫らく、陣を構へて、交るべく、攻め立てんこそ好けれ』

と戒め、各々軍を退くること數町、胄を脱し、鎧を釋きて、暫し、人馬の脚を憩ふ。

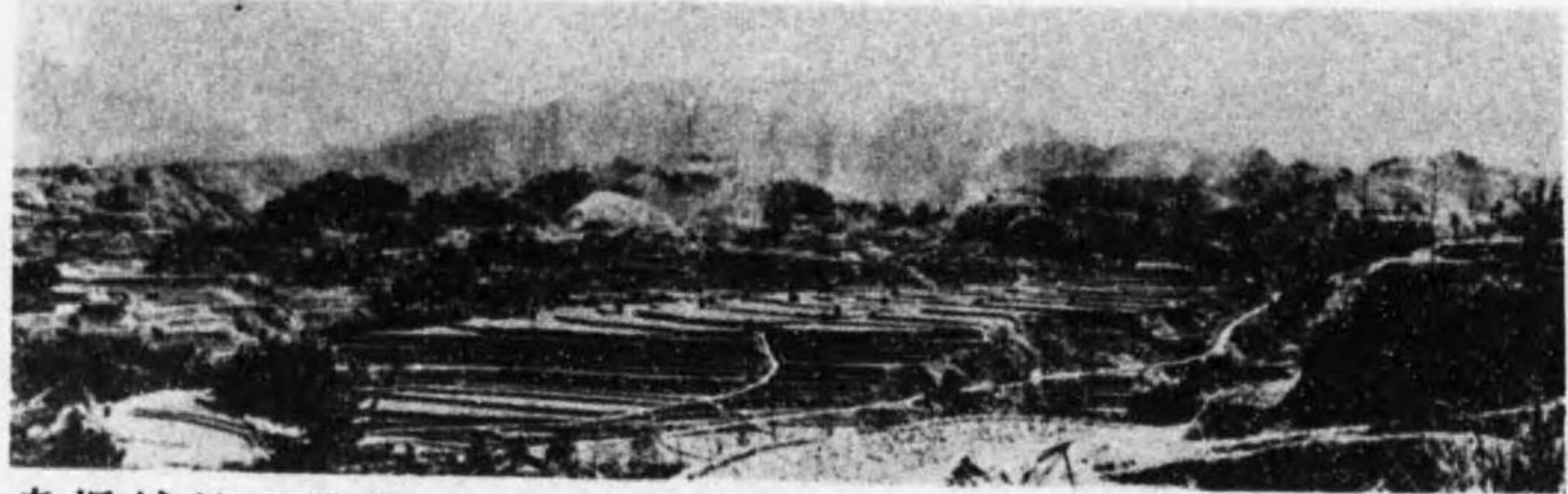
正成、城上より、此有様を望みつゝ、獨り何事をか微笑む。

三

金鼓の聲、忽然として、山谷に震ひ、一隊の人馬、突如として、右手の樹陰より現はる、東軍、アナヤと驚く間もなく、一隊の人馬、又もや、左手の樹陰より露はる。

一手は、正成の弟七郎正秀、一手は、其一族和田五郎正遠、

各々部下百五十騎を提さげて、横さまに、東軍を衝く。機は今ぞ、正成、奮然として、



赤坂城址の眺望

此れは河内國南河内郡赤坂村大字桐山なる上赤松城址より展望せる風景にして正面にあるは金剛山左にあるは葛城山なり楠氏世々の居館ありし山の井は左方の建物のある邊なり。

『イザや、打つて出でん』

と呼はり、二百餘騎を率ゐて、疾風の如くに、城中より突出す。

三隊の將士、皆、勇猛、前に在るかと思へば、忽然として、後に在り、右を突くかと思へば、倏然として、左を突く、神出鬼没、目にも留まらず。

東軍、不意を打たれて、度を失ひ、右往左往に、逃げ惑ふ、一陣敗るれば、他の陣々、皆、望み見て、

『素破や、敵の大軍、押し寄せしぞ、ソレ引けや』

と奔めきく、先きを争うて、石川河原の方に、走り退く、五十餘町の間、死屍横はり、兵器落ち散りて、足を踏み入るべき餘地もあらず。

四

東軍、是れより、深く怖れて、敢て進まず、

『伏勢に備へざればこそ、不覺をも取りつれ、此上は、先づ、敵の後詰の道を絶ちて、進むべし』

と謀り、先づ、山を狩り立て、民家を焼き拂はんとす、東軍の先鋒本間山城守、澁谷刑部大輔の二人、憤然として、

『親は討たれ、子は死したるものを、命生きたりとして、何かはせん、我等が手勢なりとも、馳せ向ひて、討死せん、續けや者共』

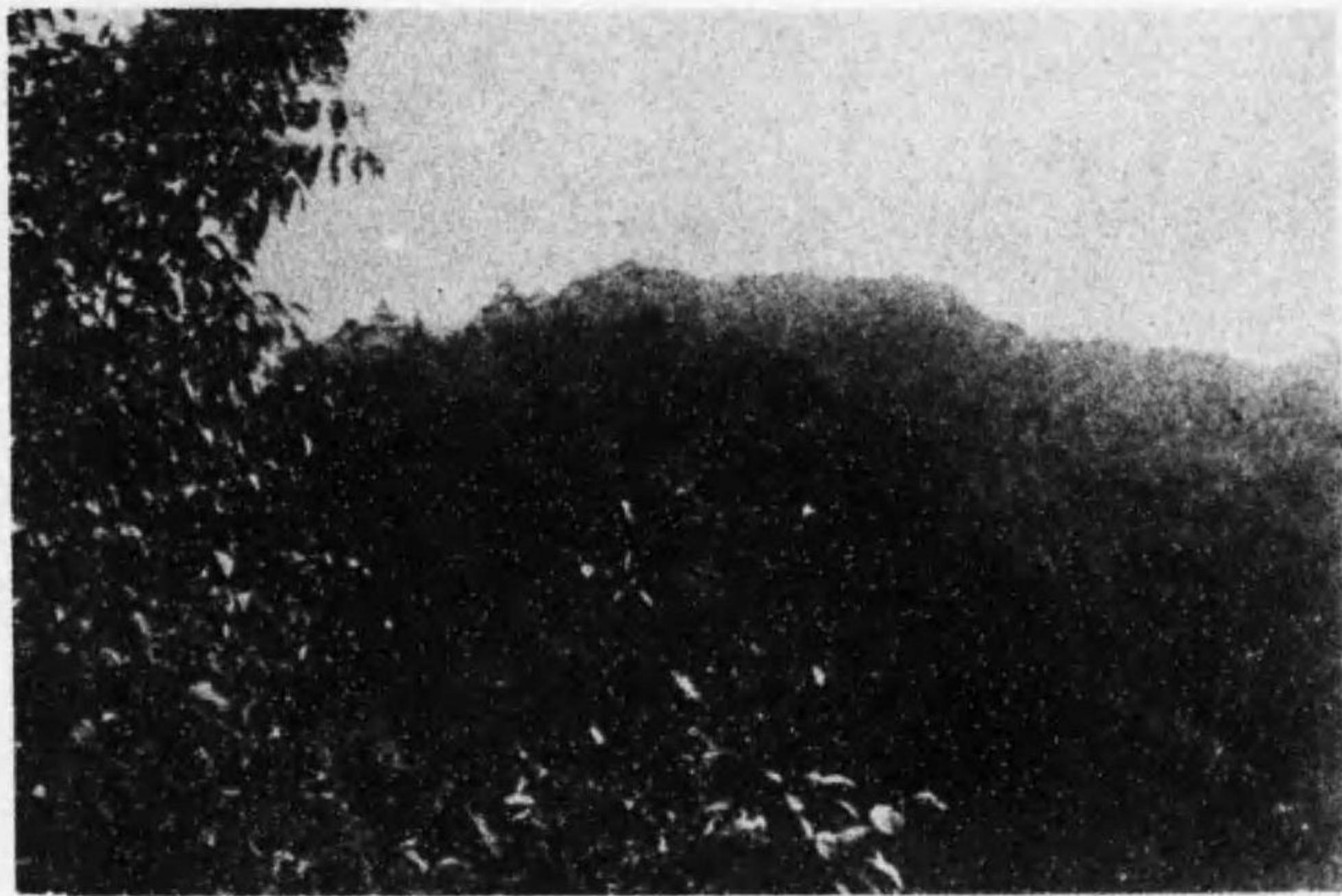
と呼ばり、忽ち馬に策うちて、馳せ出づ、血氣の勇士、斯くと見るより、皆、後れじと、馳せ向ふ、軍監長崎四郎左衛門高資、今は、棄て置かれず、

『本間、澁谷を討たすな、進めや進め』

と呼ばり、諸軍を指揮して、奮進す、城に迫るもの、一萬餘騎、其餘は、山手に陣して、敵の援軍に備ふ。

先鋒の諸兵、早、堀を越え、柵を抜きて、犇々と進む、正成、自若として、動かす。

赤坂城址
赤坂城址は河内國南河郡赤坂村大字森屋の東南に在り此れを下赤坂城となす。



東軍、益々勢ひを得、一齊に、塀に蟻附するもの、一千餘人、アワヤ、跳りて、中に入らんとす、正成、忽ち、

に斷つ、周囲の城塀、忽ち轟然として、崩れ落つれば、攀ぢ上れる東軍、皆、地に墜ちて死す。塀は倒るれども、尙、塀あり、計らざりき、一重と見えしは、二重の塀なりしならんとは。東軍、呆れ惑ひて、惘然たること少時、忽ち大木巨石、雨の如くに、濺ぎ懸りて、頭を割られ、手足を折らるゝもの、又七百餘人。東軍、益々驚き恐れて、遠く引き退き、柵を樹て、櫓を設けて、復た敢て迫らず。

五

相持すること數日、東軍の將士、相議り、
「東八ヶ國の軍勢を以て、此小城一つを、攻め落し得ずば、後の世までの耻辱なり、逸ればこそ、損じもせめ、手段を以て、攻むれば、何とて、落すに難からん、イザヤ、押寄せん」
手に、櫓を把つて、復た城壁の下に迫る、
「攀ぢ登らば、又もや、切つて、落さるべきぞ、引き倒せや、引き倒せ」

と呼はりつゝ、各々熊手を、塀に引つ掛け、曳や〜と、引くこと五六次、塀、揺らぎ〜と、今や、崩れんとす。城兵、忽ち長柄の櫓杓を以て、煮え懸へる熱湯を、容赦もなく、澆ぎ掛け、浴せ掛く、東兵、大に驚き、櫓を棄て、熊手を投りて、慌て、走り退く、面爛け、皮膚糜れて、悩み苦しむもの、二三百人。

東軍、力を以て攻むれば、正成、略を以て防ぎ、東軍、術を以て攻むれば、正成、又策を以て禦ぐ、東軍、四十倍の大兵を以てして、蕞爾たる此一小城を、奈何ともすること能はず、

「此上は、兵糧攻めと爲さんこそ、好けれ」

諸軍、柵を樹て、壘を構へ、遠く城を圍むこと、又十餘日。

六

城中の糧食、漸く乏し、今は、僅かに、數日を支ふるに過ぎず、正成、部下の諸將を會めて、

「今や、兵糧、漸く盡きて、城の運命も、早や、極まりぬ、我れ、天下に先んじて、大事を擧ぐ、死は、固より、覺悟の上ぞ、されども、未だ君を世に出だし參らせず、

何ぞ輕々しく死すべきや、一旦、伴はり死して、深山に隠れ、敵、引き去らば、復た打つて出でん、是れ身を全うして、敵を滅ぼすの計略ぞかし、如何に思はるゝぞ面々」
と言へば、衆、皆、之れを賛す、正成、乃ち命じて、大なる坑を鑿たしめ、死屍二十を、其中に入れて、上より、薪炭を掩ふ。
用意、忽ち成る、正成、風雨の夜を待ちて、策を施さんとす。

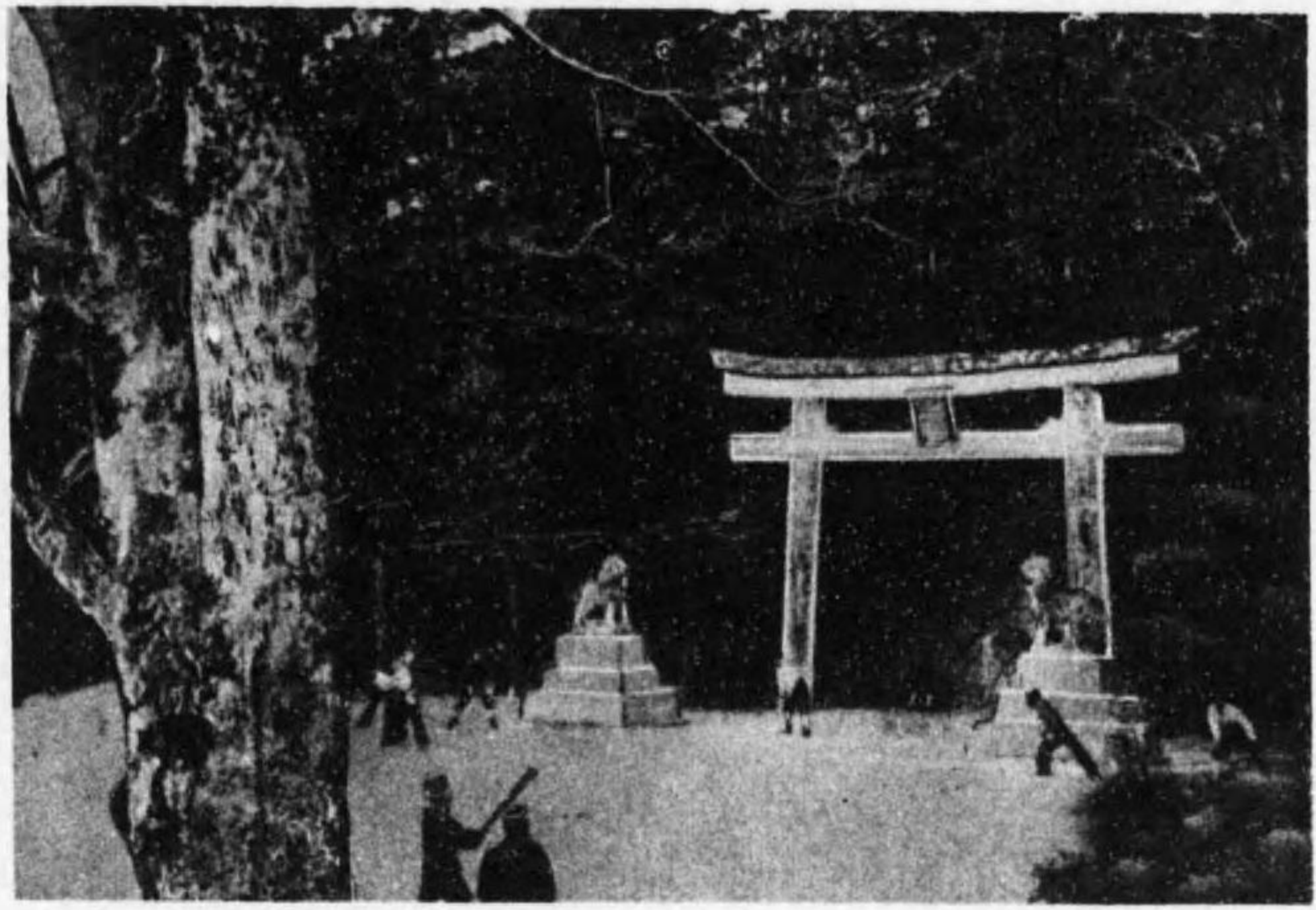
居ること一二日、再々たる雲氣、山後より湧きて、見る見る、一天に漲り渡る、俄頃にして、風吹き起り、雨降り荐り、暗澹たる光景、物凄きばかり、正成、

「イデヤ、今宵こそ、遁がれ出づべけれ」

と思ひ、夜に入るを待ちて、士卒に向ひ、
「汝等、皆、思ひ〜に、城を落ちよ、されども、大勢、一時に出づれば、敵に覺られん、五人、三人づつ、忍びやかに落ち候へ」

と命じ、心利きたるもの一人を、後に留めて、
「汝、暫らく、跡に留まり、我の四五町も、落ち延びた

建水分神社
建水分神社は河内國南河内郡赤坂村大字水分に在り赤坂城址は此上方に位す。



へて、城を出づ、敵將長崎四郎左衛門高資の厩前を過ぐる

らん頃、
火を坑の
上へ掛け
候へ、敵
兵、火の
手を見れば、
赤坂落城
せりと思
ひて、我
れ先きに、
馳せ來ら
ん、其時、
敵に紛れ
て、遁が
れ來よ』
と命じ、親
臣數人を隨

や、敵兵、俄に騒ぎ立ち、
「素破や、馬盗人ぞ、ソレ射よ」
と筒りつゝ、各々弓を把つて射る、一矢、忽ち正成の臂に
中れども、幸に、薄手さへも負はず、難なく走りて、金剛
山に入る。
既にして、城中、火起る、東軍、望み見て、勇み立ち、
「素破や、城は落ちけるぞ、餘すな、漏らすな、一人殘
らず、討ち取れや」
と呼はり、勝鬨を作つて、ドツと、一時に込み入る、
城中、間として、人なし、坑中を發き見れば、焼け死せる
死骸多し、東軍の將士、
「あな哀れや、正成は、早、自害してけり、敵ながらも、
惜しき武夫かな」
と言ひつゝ、泫然として、皆、鎧の袖を絞る、高資、乃ち
紀州阿瀬川の住人湯淺定佛を留めて、城代となし、諸軍を
率ゐて、引き還る。
事、忽ち遠邇に聞ゆ、四方勤王の士、皆、心沮む。

一宮城址

櫻山慈俊擧兵の地

備後國蘆品郡網引村は、元、宮内村と稱す、福山の西北、
四里の地に在り、村中に、小丘あり、櫻山と曰ふ、老松、
枝を交ゆ、丘上に、小祠あり、櫻山神社と曰ふ、南朝の
忠臣櫻山慈俊を祀る、實に其義兵を擧げたる處。
山腹に、一寺院あり、中興寺と曰ふ、慈俊の木像を安置
す、碩儒五弓雪窓、其祠堂の記を作る。

其附近に、吉備津神社あり、一ノ宮と曰ふ、故に、慈俊
の據る所を、一ノ宮城と稱す 今は、縣社たり。
慈俊、本姓は宮、名は元正、櫻山四郎と稱し、髪を削り
て、慈俊と號す、父を、三郎正盛と曰ふ、具平親王の玄
孫小野宮大納言源師頼の裔なり、諸書に、茲俊に作るも、
慈俊を正とす。
慈俊は、楠木正成と、莫逆の友たり、元弘元年、率先し
て、勤王の兵を擧げ、事、成らずして、自殺す、明治十

六年八月六日、正五位を贈られ、三十六年、更に、正四位を追贈せらる。

蕞爾たる小丘、青山、其後を擁し、清流、其前を遶る、老松、鬱蒼として、枝を交ゆるもの、是れぞ南朝勤王の魁首櫻山入道慈俊の舊址なる。

吉備津神社 其一
此れは備後國蘆品郡網引村大字宮内に在り當國の一の宮なり櫻山慈俊の築きたる一宮城と云ふは此境内なりしなり。



吉備津神社 其二



兵を分ちて、近邑を伐つ、木梨又太郎信平等の諸豪、來り屬して、兵勢、益々振ふ。

笠置、未だ陥いらず、楠木兵衛正成、兵を赤坂に起せしとの注進、鎌倉に達し、中一日を隔て、慈俊、旗を一の宮に揚げしとの急報、又も鎌倉に達す。

北條相模入道高時、大に驚き、大佛陸奥守貞直、足利治部大輔高氏等の六十三將に命じて、急ぎ西下せしむ。

慈俊、一舉して、備後の南半國を、切り離く、士は勇み、兵は奮ふ、遠征の機、今や來る、

『安藝をや攻めん、備中をや討たん』

慈俊、首を傾むくこと少時、

『主上、笠置に在はします、若かず、東を先きにせんには』

乃ち兵を提さげて、備中に向はんとし、新市、戸手を過ぎ、神邊に到る、時に、

『笠置陥りて、主上、賊に捕はれ給ひぬ』

との飛報、上國より達す、慈俊、聞いて、驚かず、既にして、

慨然として、志を決す、

『臣として、君の難に赴くは、唯、其及ばざらんを恐るるとかや、争かて、成敗利鈍を問ふの違あるべき、功成らば、君の御爲め、國の爲めなり、事敗るれば、我が一命を捧ぐるまでぞ』

俄かに、一ノ宮城に立て籠りて、勤王の義旗を翻へす、遠近、風を望んで、來り屬するもの、八百餘人、慈俊、乃ち

『赤坂陥りて、兵衛殿には、討死し給へり』

との飛報、又來る、慈俊、尙も、驚かず、心、靜かに、前途の手段を、打ち案ず。

此事、何時しか、軍中に漏れ聞えければ、士氣、頓に沮喪し、

『五畿内の官軍、皆、敗北せる上は、所詮、此軍、叶ふべくもあらず』

櫻山神社

櫻山神社は備後國芦原郡網引村大字宮内に在り贈正四位櫻山慈俊を祀る。



と囁きつ、皆、我れ先きにと、逃げ失せて、跡に留まるもの、一族、郎等、唯、二十餘人に過ぎず、今は、進まんやうもあらず、慈俊、

『弓矢取る身の、運盡きなば、自害せんこと、固よりの覺悟ぞ、今更、何の驚くことやある、イザ、疾く、還らん、此處に留まるも、甲斐あらじ』

直に一同を促がして、還らんとす、宮城野六郎、進み出でて、

『戦は、一旦の勝負に係はり候はず、九州には、菊池、大友あり、四國には、土居、得能の候、一先づ、當國を御開きありて、孰れへか、身を寄せ給ひ、暫らく、時の到るを待たせ給はんこそ、萬全の策に候べけれ』

と諫む、慈俊、

『我れも、爾か思はざるにはあらず、去りながら、當時、相模入道の勢ひ熾なれば、主上、既に捕はれ給ひたる今日、誰かは、敢て其向ふに立つべき、親しきものも、匿まひ得ず、疎きは、尙更、頼むべからず、人手に掛かりて、恥を曝さんよりは、潔よく、腹掻き切りて、君の御

爲めに死せんこそ、寧ろ大丈夫の振舞なれ』
と告げ、直ちに、陣を引き拂ひて、一ノ宮城に馳せ還り、
妻子をも具して、城北なる吉備津神社に入る。
慈俊、神前に額づきて、黙禱すること少時、用意の酒を、
取り出でて、名残の宴を開く、頓て、郎等の一人を見返り
て、

『我れ、自害せば、社壇に、火を掛けて、焼き拂ひ候へ』
と告ぐ、井上源藏、席を進めて、

櫻山慈俊(宮内中興寺藏)



『御生害は、然ることながら、社殿を焼き拂ひ給ふは、
如何なる思召しに候やらん、思ひ止まらせ給ふべし』
と諫むれば、慈俊、莞爾として、

『我れ、此御社に、信仰の頭を傾くること、年久し、今
や、社殿、大破に及びぬれば、如何にもして、造營し奉
つらんと思ふうち、計らずも、今日の仕宜とはなれり、
我れ、若し之れを焼きなば、必定、再建の沙汰こそある
べけれ、生きて、大願を果し得ず、死して、宿望を達せ
んこと、亦、好からずや』

と告ぐ、夫人、年二十七、嫡子年八歳、與に其傍に待す、
慈俊、杯を納めて、靜かに、

『サ、用意よくば』

と言へば、二人、ニッコと笑み、

『何時なりとも』

と言ひつゝ、首を伸ばして、掌を合はす、慈俊、さらばと、
二人を、我手に掛け、返す刀に、腹掻き切つて、前に伏す。
氣比宮越前、坂上新藏人、長尾孫六、新井彈正、西山左馬
助、黒髮彌七、今村主馬入道以下二十三人、我れ後れじと、

皆、自殺す、炎焰、忽ち騰りて、社殿、悉く灰となる。

櫻山の遺芳、楠木の餘薫と與に、千秋、水く滅せし。

櫻山慈俊終焉の地は、吉備津神社なること、太平記を始
め、諸書に記載する所なり、然るに、古記録に「吉備津
神社の北數町の観音堂云々」とあるに據りて、之れを網
引村大字上安井の観音堂に擬し「櫻山公主從墓跡」と刻
せる碑石まで建て、之れを表す、是れ馬屋原呂平の著
西備名區に、

観音堂 櫻山二十四士の墓所

元弘の亂に、櫻山四郎入道慈俊、こゝにて自殺す、櫻
山夫婦、ならびに、二十四族の墓あり、近きころまで
は、一間餘に二間餘、小石を疊みあげ、其上に、石塔
ありしが、無心の庵僧、これをうがちて、畠となし、
古の姿を失ふ。

とある記事に基づきしなり、されども、此處にては、少
しく、遠隔に失するの感ありしが、此頃に至り、同村大
字宮内十日市の観音堂、即ち金龍庵の所在地は、曾て、
上安井村に屬せしことありて、彼の西備名區の記事こそ

は、全く、此観音堂の事なりしを、發見されたり、此地
は、吉備津神社の北、數町に在りて、正しく、古記録に
吻合するを見る。
此金龍庵は、慈俊の遺子勝松、即ち高垣肥前守信次が、
保育の恩を受けたる垣田六郎左衛門義清入道の菩提を弔
はんが爲めに、建立せしものにして、功德院殿金龍道性
居士と云へる義清の法號に基づきて、庵號となせしもの
なりと云へり。

然れども、此地にして、慈俊焉局の地ならんには、信次
は、其父母の爲めに、一寺を建て、其冥福を修すべき
に、さはなくして、義清の爲めに、草庵を建て、其菩
提を弔へりと云ふは、聊、疑問なり。

按ふに、此處は、慈俊主從の自殺せし地にはあらず、恐
らく、義清入道が、草庵を建て、墓石を設けて、一同の
冥福を修したる地なるべく、其自殺したるは、矢張、吉
備津神社ならんかと想像せらる。

慈俊は、楠木正成と與に、兵法を大江修理亮時親に學び
たりと稱せられ、或は、鬼一法眼の兵法を相承して、之

これを正成に傳授したるものとも稱せらる、其首として、勤王の義旗を挙げたるもの、最初より、彼我、互に相呼應せるものなること、疑ふべからず。

院いんの庄しやう

兒島高德題詩の地

院の庄は、美作國苦田郡院の庄村の大字なり、元弘二年三月、後醍醐天皇の隠岐遷幸に際して、行在所となし給へるは、此大字院の庄の地なり。

此地に、作樂神社あり、後醍醐天皇、及び兒島三郎高德の靈を祀る、明治二年、津山藩主松平三河守慶倫の創建に係る、石碑あり、貞享五年七月、之れを建つ、外に、銅碑あり、明治二十六年七月、之れを建つ。

舟坂山は、播磨國赤穂郡舟坂村より、備前國和氣郡三石村に通ずる國境の山なり、今、山陽鐵道三石隧道の通ずる所、眞に天險無比の地なり。

上

主上、宇治の平等院に在はします。

六波羅の兩探題、神器を、新帝に傳へ給はんことを、請ひ奉つる、主上、固く許させ給はず、中納言藤房を以て、

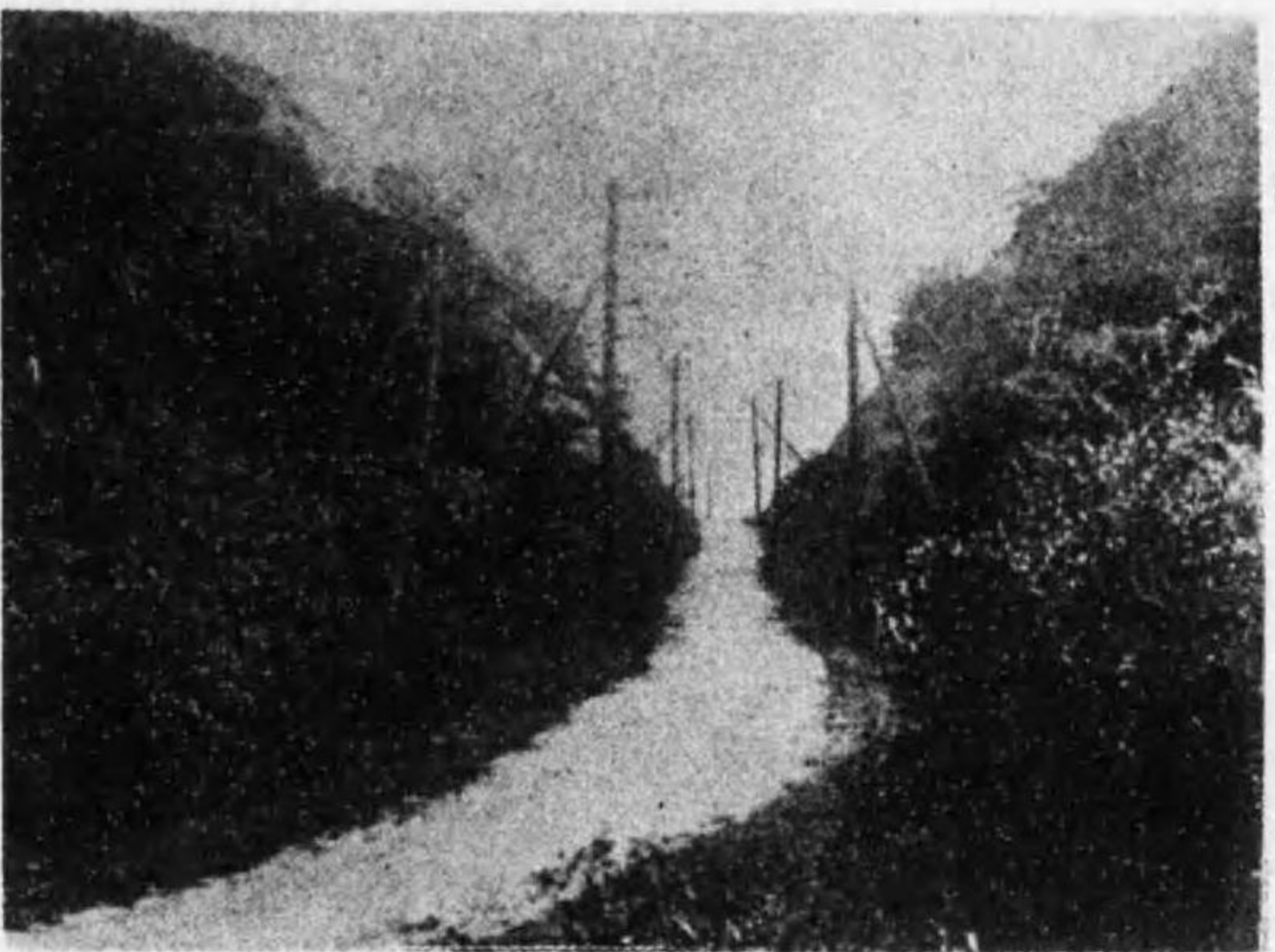
『三種の神器は、古より、親しく、繼體の君に授けさせ給ふものにて、臣下の手に觸るべきものにあらず、且や、神鏡は、笠置の本堂に取り残り、神璽は、山中の樹枝に、懸け置き奉つる、寶劍ありと雖も、是れ武家の輩、玉體に近づき奉つらん時、親ら其刃の上に伏させ給はんずるものぞ、暫したりとも、御身を放させ給ふべからず』

と告げしめ給ふ、天語、凜として、威あり、兩探題、返し奉つらん言葉もあらず。

兩探題、更に、六波羅に迎へて、押し籠め奉つらんとす、主上、臨幸の儀式を備へずば、還幸あらせ給ふまじき由、仰せ下させ給ふ。

兩探題、乃ち鳳輦を調へ、袞衣を進めて、六波羅に迎へ奉つる、名こそ臨幸とは申せ、數萬の武士、鳳輦の前後左右を、打ち守りて、尋常の行幸に、似つべくもあらず、

舟坂峠
舟坂峠は播磨國赤穂郡舟坂村より備前國和氣郡三石村に通ずる境界に在り兒島高德の鳳輦を待ち受けたる處。



『扱も、淺まし
しの浮世かな』
庶民、皆、見送り奉つりて、涙を掩はざるはあらず。

六波羅に入らせ給ひて後は、武士の垣、武器の壁、厳しく、四方を取り巻きて、警固、おさくおさく
怠らず。
時しも、冬の始

めなれば、空忽ち曇りて、又晴れ、時雨、忽ち注ぎて又歇む、主上、雫滴たる軒端を、仰ぎ見させ給ひて、

住み慣れぬ板屋の軒のむら時雨

音を聞くにも袖はぬれけり

など遊ばしつ、何角につけて、御嘆きにのみ、沈ませ給ふ。其年も、何時しか暮れて、元弘二年となりぬ、高時入道、僧衣を献つりて、御難髪を請ひけれども、主上、許させ給はず、

『さらば、遠國へ行幸あらせ給へ』
と申し、終に隠岐へ遷し奉つるに、事定まる。

花さへ咲き出づる彌生の七日、主上、御心細くも、京師を出で立たせ給ふ、供奉には、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、女房には、三位局のみぞ、従ひ奉つる。

千葉介貞胤、佐々木佐渡判官高氏等、五百餘騎を以て、前後を警固し奉つる、老幼男女、犇と御車に取り纏りて、嘆き悲み、

『見よ、今に、鎌倉も、亡ぶべきぞ』
と訃りつ、悲憤の餘に、キリキリと、切齒するものさへあり。

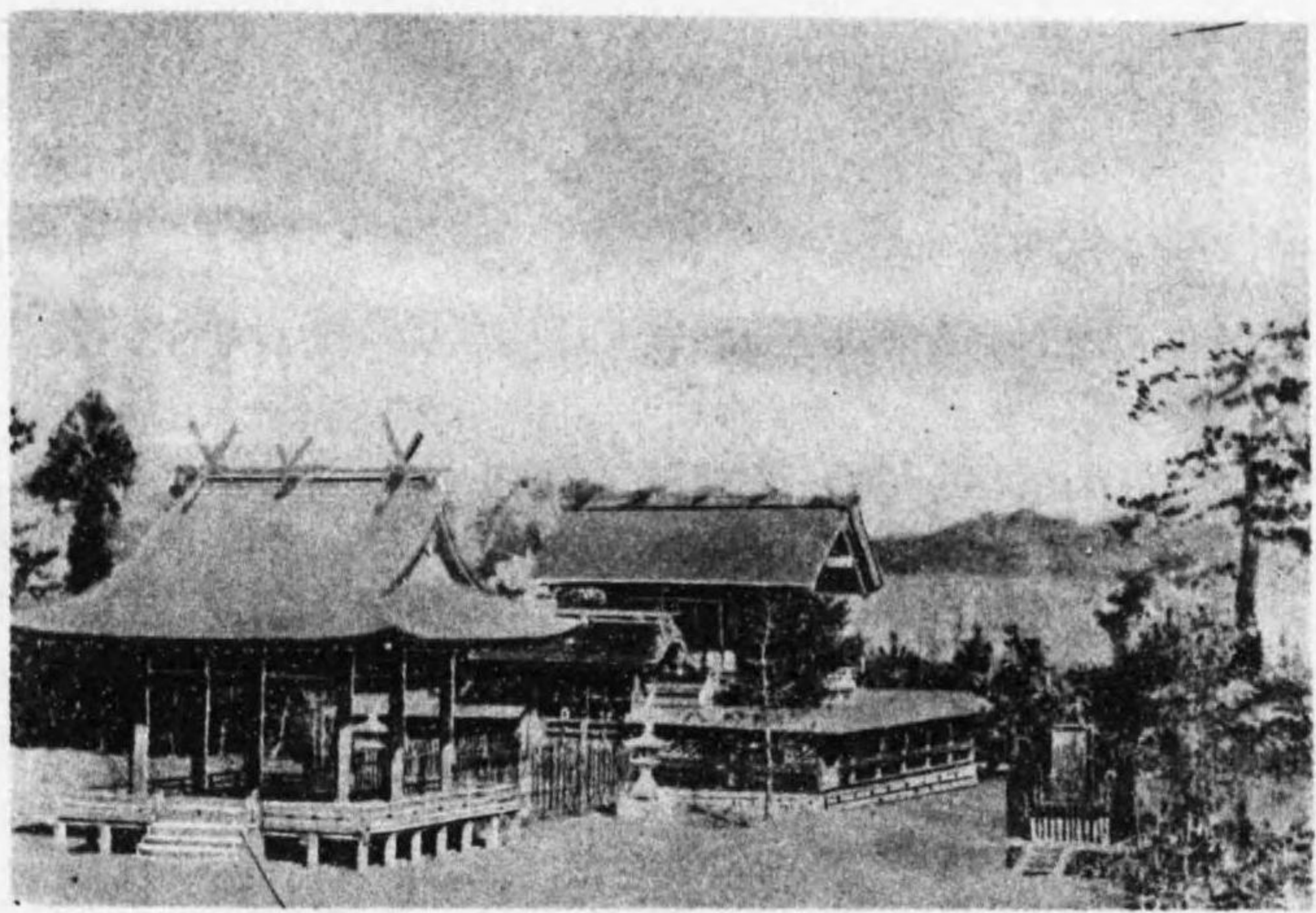
鳥羽に着かせ給へば、御館、狭くして、下卒、御前近くまで、充ち彌る、主上、感慨に堪えさせ給はず、

あはれとは汝も見るらん我民を

思ふころは今もかはらず

作樂神社

美作國吉田郡院庄村大字院庄に在り後醍醐天皇及び見島高德を祀る明治二年津山藩主松平慶偏の建つる所今縣社たり。



と口吟ませ
給ふ、斯か
る中にも、
尙、民草を
思し給ふ大
御心ぞ、有
り難き。
福原を過ぎ
させ給ひて
は、淨海の
惡逆、今に
比して、尙、
輕しとや、
思し召され
ん、一の谷
を經給ひて
は、北條の

末路、亦、昔の如くなれかしとぞ、思し給ふらん。
名にし負ふ明石の浦も、御胸の暗を、晴らし奉つらんやう
はなけれど、音に聞く高砂の松は、還御の時をまつとこそ、
壽き奉つるべけれ。
野花、春を彩どるは、御心の憂さを慰め奉つらんとてにや、
山禽、梢に語ふは、御胸の鬱を拂ひ奉つらん心にこそあな
れ。

山路、世路、孰れか險はしき、天道、人道、何れか私ある、
夢の中には、夢もあれ、現の外には、現もなく、晝は晝に
て、御身の上を案じ給ひ、夜は夜にて、御國の末を嘆かせ
給ひ、慵き旅路を重ねつ、漸く美作吉田の郡院の庄へと、
着かせ給ひぬ。

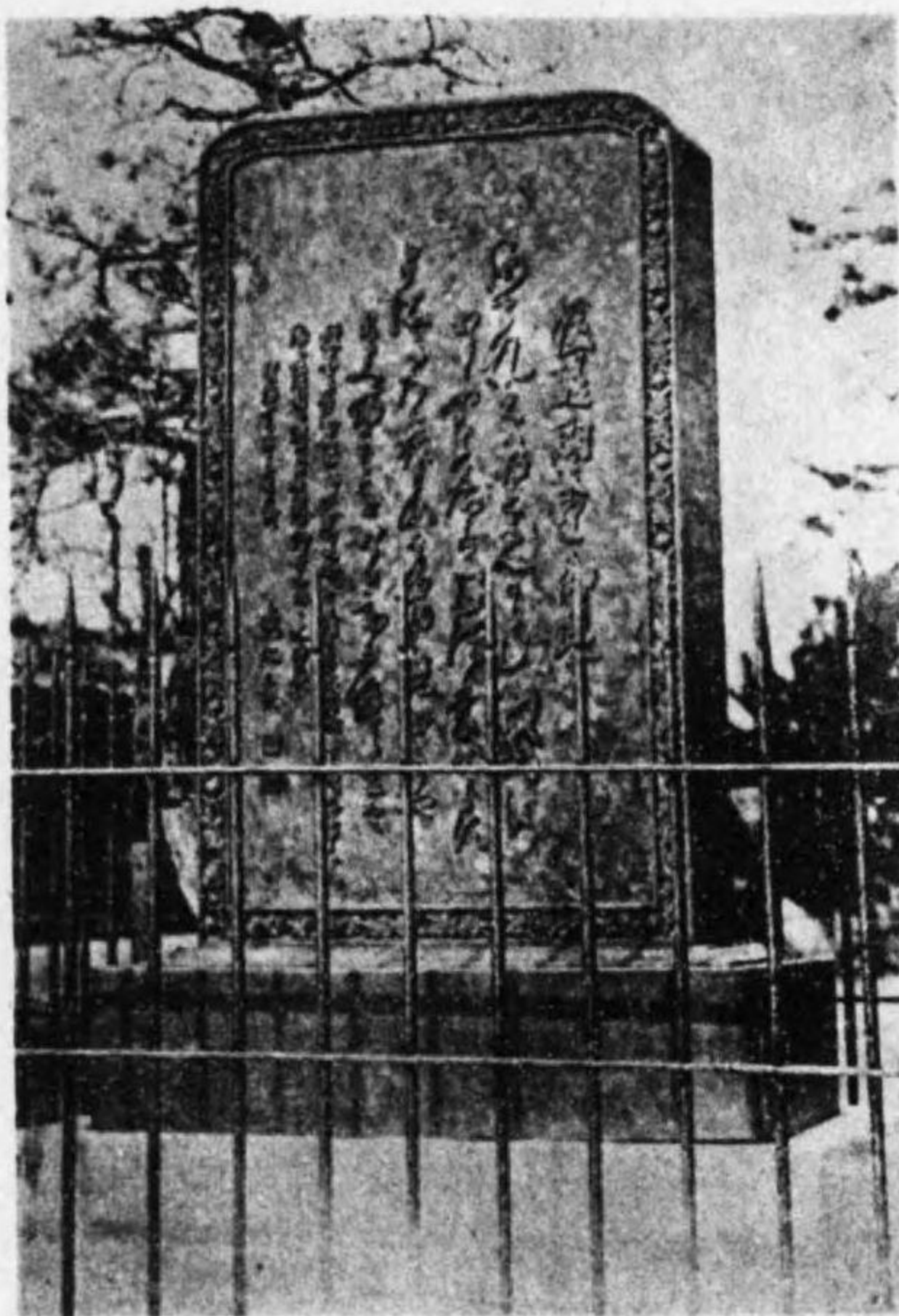
下

兒島三郎高德、備前に在り、平生、義を尙び、節を重んず。
主上、笠置に幸ましましてしと聞いて、御味方に、馳せ參せ
んとす、會々笠置陥り、主上、亦、賊手に落ちさせ給ふ、
「今は、是非もこそなけれ」
高德、空しく、涙を吞んで、時機を待つ。

既にして、主上、隱岐へ遷され給ふと、傳へ開きて、慨然
として憤り、急ぎ腹心の一族を、召し集めて、

「志士仁人は、身を殺して、仁を成すところ申せ、生を
食ほりて、忠を忘れ、義を忘るゝものは、人にあらず、
イザヤ、主上臨幸の御途次、奪ひ奉つりて、勤王の義旗
を、揚げ候はん、假令、屍を戰場に曝らすとも、名を萬
世に遺さんこそ、武夫たるもの、面目なれ、如何にや人
人」

院庄行在所記念碑(明治二十六年七月建設)



と言ひつゝ、屹と、一座を見廻はせば、義に勇む面々、誰
かは、敢て異議あらん、

「實にや、仰せの通りに候なり、何とて、一命を惜み候
はん」

皆、潔よく、言ひ放つ、高德、

「さらば、路次の難所に、待ち受け奉つらん、舟阪山こ
そ、然るべけれ、イザ來よ」

と言ひさま、急ぎに急いで、舟阪山に、馳せ向ふ。

舟阪山は、播磨、備前の境に在り、夙に、天險無比を以て
開ゆ、高德、且ある山陰に、隠れて、今やくと、御輦
の來るを待つ、如何にやしけん、待てどもく、御輦來ら
ず、高德、

「子細ぞあらん、急ぎ容子を見て參れ」

心利きたる部下を遣はして、容子を見せしむれば、計らさ
りき、山陽道には、懸かせ給はず、播磨國今宿より、折
れて、山陰道に向はせ給はんとは、高德、聞いて驚き、

「さらば、美作の杉坂に於て、待ち受け奉つらん」

直に三石より、山を越え、谷を踰え、採みに採んで、杉坂

に到れば、遺憾、早、既に此處をも過させ給へる後なりき、士卒、痛く望みを失うて、皆、悉く散じ去る、

『今は、如何にとも、詮術なし、切めては、我が所存の程にても、上聞に達し奉つらん』

高德、唯一人、姿を變へて、御跡を追ひ奉つる。

頓て、院の庄にて、追付き奉つれども、警固、嚴しければ、御座に近づき奉つらん術もあらず、

『日暮れば、復た手段もあらん』

兒島高德の木像



高德、物陰に忍びて、時機を窺ふ。

夜、漸く更けて、四邊、漸く静けし、高德、密かに、行在所の御庭に、忍び入れば、大なる櫻樹、花咲き亂る、

『これにこそ、我が真心を寫し置かめ』

高德、徐かに、樹皮を削り、矢立を取り出でて、すらすらと、題する一聯の詩句、

天莫空勾踐 時非無范蠡

と書し終りて、御座の方を、伏し拜み、涙を攪つて、復た忍び出づ。

天明けて、警固の武士、忽ち此文字を見出しぬ。

武士は、即ち武士、文事に暗し、天と云ふ字、時と云ふ字などこそ、讀み得れ、其他の文字は、得知らず、

『何と讀むべき字ぞ、如何なる意味ぞ』

大勢、集まり見れども、一人として、知るものあらず、主上、聞こし召され、其文字を寫し取らせて、御覽せさせ給ひつゝ、

『扱は、忠義の武夫ありて、朕を助くるところ覺ゆれ』と思させ給へば、御頼母しさ、言ふばかりなく、

『朕、何とか、新島守として果つべき』

早くも、回天の偉業を、御心の中に、期させ給ふ。

斯くて、山路、雲路に、七日を費やして、其月の十三日、雲州美保の湊へと、着かせ給ふ。

此處にて、順風を待ち合はせ給ふこと十餘日、三百の兵船に、守護せられて、隠岐に着かせ給へば、佐々木判官清高、島後の國分寺に、黒木御所を作りて、入れ奉つる。

小越王の下、尙、一范蠡あり、眞天子の下、何とか、千范蠡なかるべき、主上の御心、私に頼ませ給ふは、實にも此一事。

後醍醐天皇の御道筋は、播磨國姫路の西方、飾磨郡高岡村の今宿より、其儘、西進すれば、船坂峠に至るべきも、此處より、東北に折れて、余部、東嶮崎、栗栖、佐用、西庄を過ぎ、杉坂峠の南なる方の峠を越えて、美作に入り、土居、江見、楢原、勝間田、津山を経て、院の庄に達し給へるものと思はる。

十津川郷

護良親王御潜匿の地

十津川郷は、大和國吉野郡の南部に在り、元弘元年、護良親王、南都般若寺より、十津川郷に入りて、戸野兵衛に頼り、更に、竹原八郎に頼らせ給ふ。

竹原八郎の宅址は、吉野郡大塔村大字辻堂に在り、竹原忠顯は、實に其後裔なり、明治二十八年八月十九日、十津川大洪水の際、家屋流失して、所藏の寶器、古文書、皆、亡失す、八郎の墓は、舊宅址の近傍に在り、伯爵東久世通禧、其文を撰ぶ。

戸野兵衛の宅は、辻堂を距ること、二十餘町なる大塔村大字殿野の山腹に在り、眞宗西教寺住職戸野梁觀は、實に其後裔なり、寺に、親王より賜はりしと云ふ古刀二口、並に兵衛の古刀二口を藏す、永祿年間、火災に罹りて、古書、多く焼失す。

大塔宮、六士、三僧を随へて、南都を忍び出で給ひ、御姿を變へて、紀州熊野の方へと、落ちさせ給ふ。尊き御身にも似させ給はで、宮の御脚の健かさ、驚き奉つるばかり、高き山も、深き壑も、宛がら、平地の如くに、歩ませ給ふ。

雲を分けて、峰に入り、峰を越えて、又雲を踏み、數日を経て、大和國十津川の里へと、入らせ給ふ、且ある山中に辻堂あり、

「一時の雨露を凌がんに、屈竟の場所ぞ」

宮、其中に入りて、笈を解かせ給ふ、御附の面々、在々所所に往きて、合力を求め、

「熊野參詣の山伏ども、道に迷ひて、此あたりへ、漂らひ來り候、哀れ、一飯を施し給へ」

と言へば、山村の民は、情渾く、

「さらば、是れにて、飢を凌ぎ給へ」

とて、粟の飯、椀の粥など、思ひくくに、取り出でて進む、宮、

「斯かる所こそ、身を忍ぶに安けれ」

と思しつゝ、辻堂の中に在はしますこと、兩三日。

一日、光林房玄尊、由ありげなる家の門前に抵る、こゝぞ、上十津川の殿野と云へるところ、中より出で來る童に向ひて、

「この家主は、誰ぞ」

と問へば、童、

「これは、竹原八郎入道の甥御に、戸野兵衛殿と申す人にて候」

と言ひ捨て、立ち去る、玄尊、

「是れこそ、弓矢取りて、然るものと聞き及ぶ仁なれ、如何にもして、頼まばや」

と思ひつゝ、門の内に入りて、事の様を窺ふ、折しも、中に、

「あはれ、貴き山伏の來れかし、祈らせ參らせんに」

と獨語つは女の聲、玄尊、

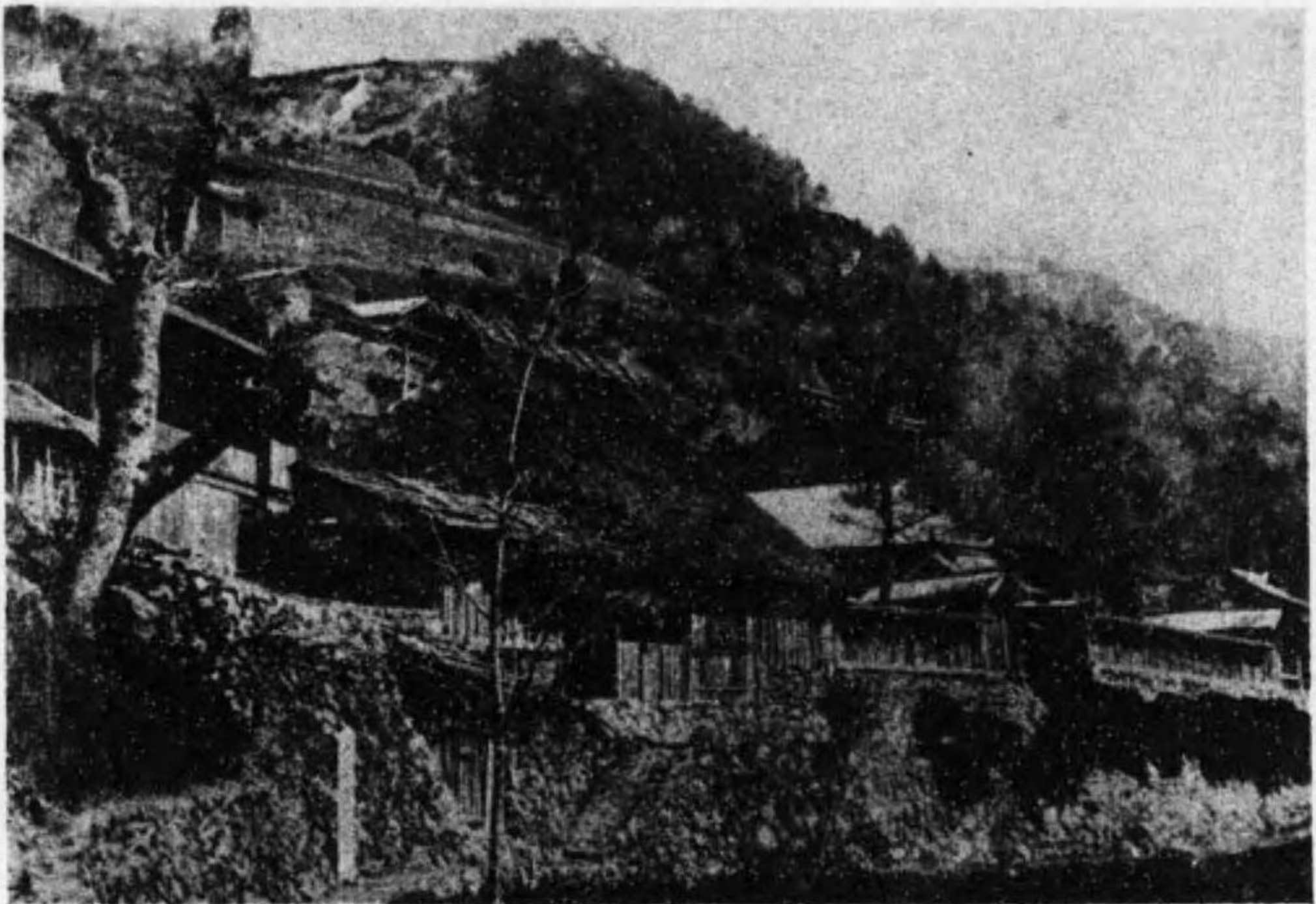
「扱は、病者こそあれ、屈竟の事ぞ」

と心の中に打ち喜び、忽ち、聲高らかに、

「これは、三重の瀧に、七日打たれ、那智に、千日籠りて、三十三所の靈地巡禮の爲めに、罷り出でたる山伏に

戸野兵衛の邸

大和國吉野郡大塔村大字殿野なる戸野兵衛の邸なり。



こそ候へ、

道に踏み

迷ひて、

此里に出

でて候、

あはれ、

一夜の宿

を貸し給

へ」

と呼ばれば、

聲聞き付け

て、一人の

女中、いそ

くと、出

で來り、

「扱は、

神佛の御計らひとこそ覺ゆれ、家主の女房にて候もの、物の怪につかれて候、祈り給ひなんや」

と言ふ、玄尊、

「我等は、唯の山伏なれば、叶ひ候まじ、彼に見ゆる辻堂の中に、先達こそ在はし候へ、請じ給はんや」

と言ひつゝ、辻堂の方を指さし示せば、女中、

「さらば、其先達の御房こそ、此れへ伴はせ給へ、此上なき奇特にこそ」

とて、喜ぶこと限りなし、玄尊、走り歸りて、此由を申せば、宮、

「さらば、參らん」

御供の人々を率て、兵衛の館へと、臨ませ給ひぬ。

前の女中、又も立ち出でて、此方へと導く、宮、徐々と、病者の臥房へ、進ませ給ひ、嚴かに、加持を行はせ給へば、不思議なるかな、物の怪、忽ちに落つ、家主の兵衛、且、驚き、且、喜び、

「扱て、御房の法力、驚くに餘りあり、著へたる物もあらねば、引出物とても候はず、枉げて、十餘日、此

處に、御逗留あらせ給へ』
と述べ、強いて、引き留め奉つりて、懇に歎待す。

二

一夜、家主の兵衛、宮の御前に出でて、四方八方の物語に、夜を更かす、兵衛、勤王の志厚し、

『方々は、定めて、聞こし召され候はん、大塔宮、京師を落ちさせ給ひて、熊野の方へ、赴かせ給ひぬと承はりて候、三山の別當定遍は、無二の武家方なれば、御身の上、最と氣遣はし、あはれ、此里へ入らせ給へかし、土地こそ狭う候へ、四方、皆、峻岨にて、十里二十里の内へは、鳥だに通ひがたし、人には、誠ありて、武藝も、優れてこそ候へ、昔者、平家の嫡孫維盛も、我等の先祖を頼みて、此處に在はし、さしも源氏全盛の世にも、恙なう在はし候ひしなり』

と物語り出づ、熱誠の色、面に形はれて、更に、偽はりあるべしとも思はれず、宮、聞こし召されて、頼母しくぞ、思し召す、

『若し、大塔宮の、此處へ御頼みあらば、まこと、一臂

の力を、盡し候はんや』

それとなく、問はせ給へば、兵衛、

『申すにや及び候べき、身、不肖と雖も、若し、某の身に罹かることの候は、吉野十八郷のものまでも、皆、力を戮はせ候なり、宮を匿まひ奉つらんこと、何の仔細か候はん』

と思ひ入つて、言ひ放つ、宮、屹と、木寺相模に、目配ばせし給へば、相模、突と、兵衛の方へ、膝を押し進めつつ、
『今は、何をか包み候はん、あれなる先達の御房こそ、正しく、大塔宮に在はしまし候なれ』

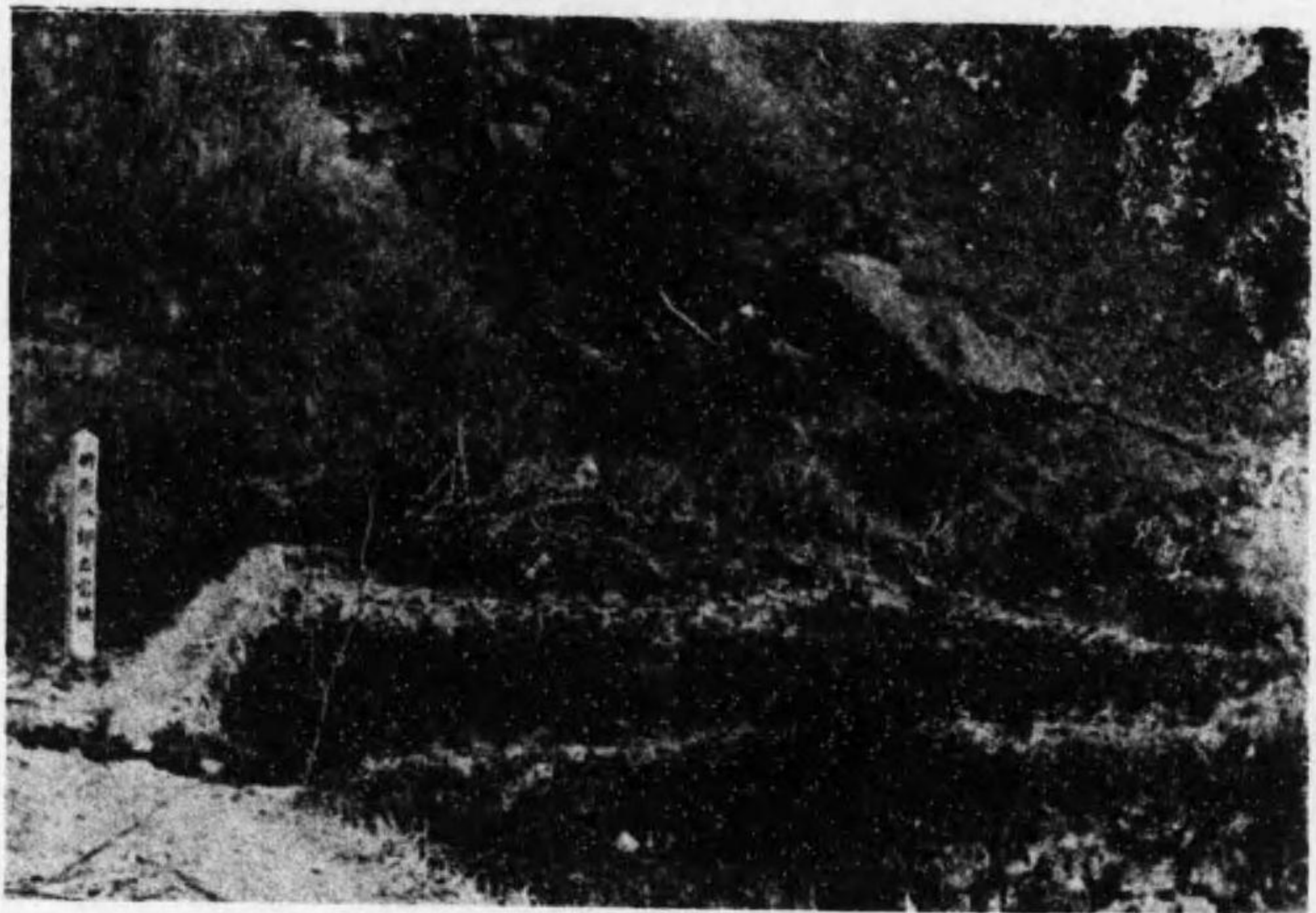
と告げて、實を明かす、されども、兵衛は、半信半疑、只、彼方此方と、顔を見廻はしぬ、片岡八郎、矢田彦七の二人、
『あら暑つや』

と言ひさま、忽ち兜巾を取つて、捨つれば、月代の跡、隠れもあらず、兵衛、忽ち打ち驚き、

『實にも、山伏にては在はさざりけり、然りとも心得ず、今日までの尾籠、幾重にも、許させ給へ』
と述べて、ハツと、飛び退りさま、首を疊に摺り付けく

竹原八郎の宅址

大和國吉野郡大塔村大字辻堂に在り明治二十二年八月十九日の山津浪の爲めに崩壊せらる此れは其残部なり。



入道宗規の許に遣はして、此由を報ず、入道、亦、勤王の

詫び入り奉

つる。

三

今は、一寸も捨て置かれず。

兵衛、急に黒木の御所を構へて、

宮を置き奉つり、四方の山々に、

關を設けて、嚴重に、守備を修し、

急ぎ使を叔父竹原八郎

心厚し、

『さらば、此方へ請じ奉つらん』

急ぎ、宮を辻堂の里なる我が館に迎へ奉つる。

宮、此に在はしますこと、半年ばかり、終に還俗あらせ給ふ、八郎入道の息女滋子、才色並び秀づ、御傍近く召されて、甲斐々々しく、冊づき奉つる。

義に厚き十津川の郷民、皆、心を寄せて、あはれ、一命を捧げ奉つらんと、勇み立つ。

四

風聞、遠近に隠くれなし、熊野別當定遍、聞いて驚き、

『さらば、勢の附かぬ中に、疾く討ち滅ぼし奉つらん』

と思ひ、急ぎ、十津川に、馳せ向はんとす、既にして、

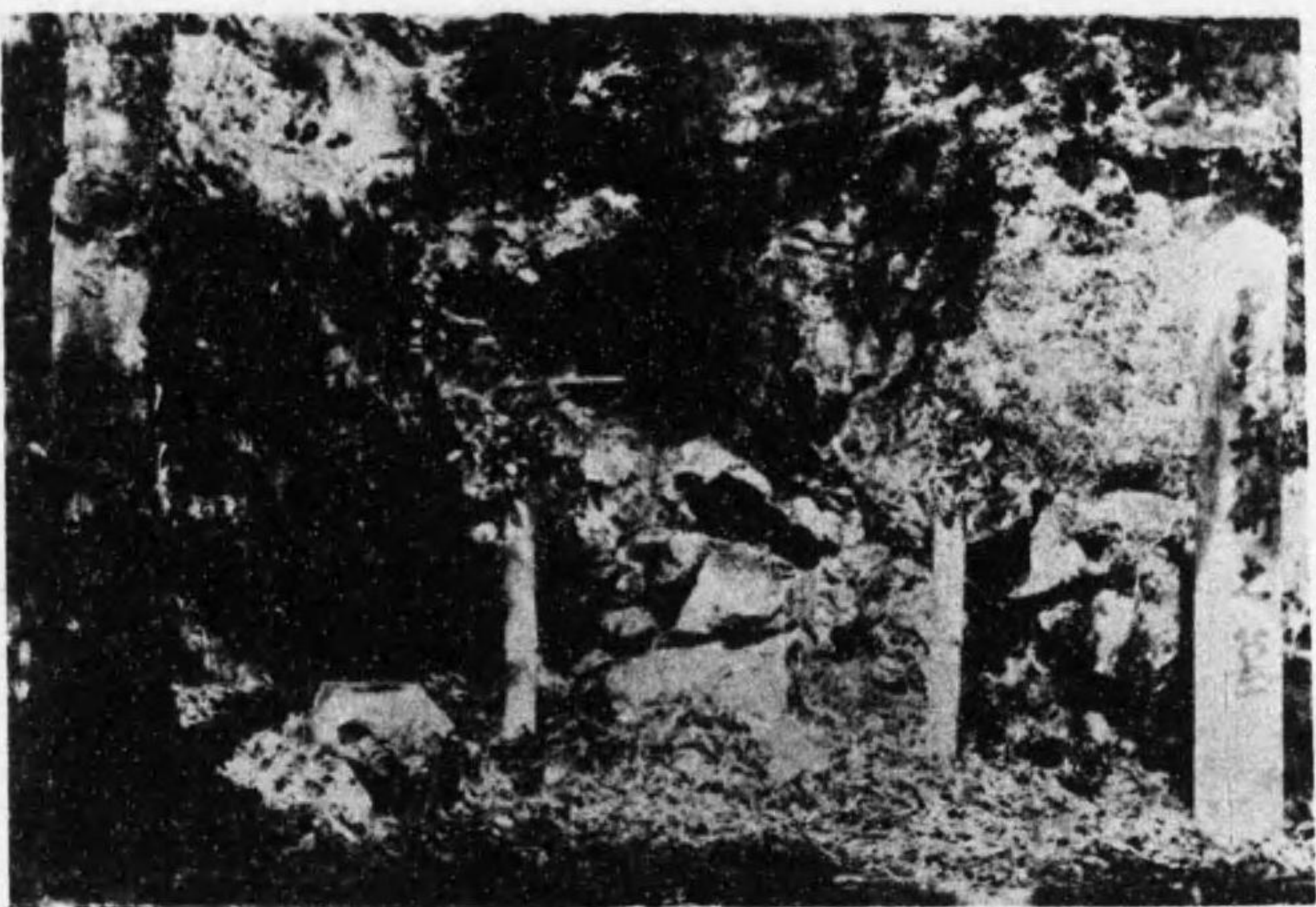
『十津川は、山高く、道峻はし、十萬の兵を以て、向へばとて、ヨモ、勝利を得べからず、若かず、計を以て、宮を他へ誘き出し奉つらんには』

と思ひ返し、諸所に、制札を建て、

『大塔宮を、討ち奉つらんものには、身分の高下に係らず、伊勢の車間の庄を、恩賞に充てがはれ、定遍よりは、

六萬貫を與ふべし、御身内の人を、討ちたらんものには、五百貫を與ふべし、誓詞、疑ひあるべからず』

戸野兵衛の墓
大和國吉野郡大塔村大字殿野に在り。



と掲げて、
其奥に、起
請文の詞を
も附す。
實にや、怨
には、迷ひ
易し、さし
も、義氣厚
き郷民も、
『土民よ
り、一足
飛に、一
庄の主と
ならん時、
今を措き
て、何時

かは来るべき』

と思へば、今や、漸く心を動かさんとす、八郎入道の嫡男彌五郎、亦、宮を計り奉つらんとするの形跡あり、

『今は、此處にも、留まるべからず』

宮、早くも、其れと覺らせ給ひ、御供の人々と與に、密かに、十津川を忍び出で、高野の方へと、赴かせ給ふ。

途中に、小原、芋瀬、中津河の諸庄あり、皆、北條に屬す、無事に通る過ぎんこと、容易ならじ、宮、

『危ふきを冒さざれば、安きを求めがたし、兎も角も、芋瀬庄司を頼みて見ばや』

と思召し、直に芋瀬庄司の許に立ち寄り、御説を傳へさせ給ふ。

庄司、宮を側なる御堂の中に、置き參らせて、我が館へは、迎へ奉つらず、使を以て、

『三山の別當定遍、武命を含みて、一々、隱謀の徒を、關東へ注進に及び候ひぬれば、左右なく、通し參らせんこと、後日の罪科、免がるべからず、去りながら、宮を引き留め奉つらんこと、恐れ多し、御供の内、名の知ら

れたる人、一兩人を賜へ、然らずば、御紋の御旗を賜ふべし、合戦せし證據として、武家へ渡し候はん、此儀、御承引なきに於ては、餘儀なく、一矢仕るの外は候はず』

と答へ奉つれば、宮、ハタと、當惑あらせて、兎角の御言葉もあらず、赤松律師則祐、忽ち進み出でて、

『主の命に代り奉つらんこと、臣たるもの、道に候なり、則祐、御大事に代はり奉つり候べし』

と述べ、敢て義の爲めに、一命を捧げ奉つらんとす、平賀三郎、斯くと聞きて、末座より、進み出で、

『斯る艱難の中に、隨ひ奉つるものは、皆、股肱とも、耳目とも、思し召され候べし、一人と雖も、左右なくは、失はせ給ふべからず、馬物具を捨つるは、戦場の習ひ、さまでの恥辱にも候はず、御旗をこそ、賜ふべけれ』

と申す、宮、實にもと思して、金銀を着けたる日月の錦旗を、庄司に賜ふ、庄司、受けて、押し戴き、

『此上は、何か苦しう候べき、疾く、落ちさせ給ふべし』

と述べ、道を開きて、通し奉つれば、宮、其儘、此里を過

ぎさせ給ふ。

五

御供の一人村上彦四郎義光、途中にて、宮に後れ奉つり、疾く追付き奉つらんと、急に急いで、馳せ来る、忽ち芋瀬庄司と、道にて行き逢ふ、不圖、其從者の持てる旗を見れば、紛れもあらぬ宮の御旗なり、義光、歩みを停めて、

『その御旗、如何にしてか得つる』

と詰る、庄司、仔細を語れば、義光、忽ち憤然として怒り、

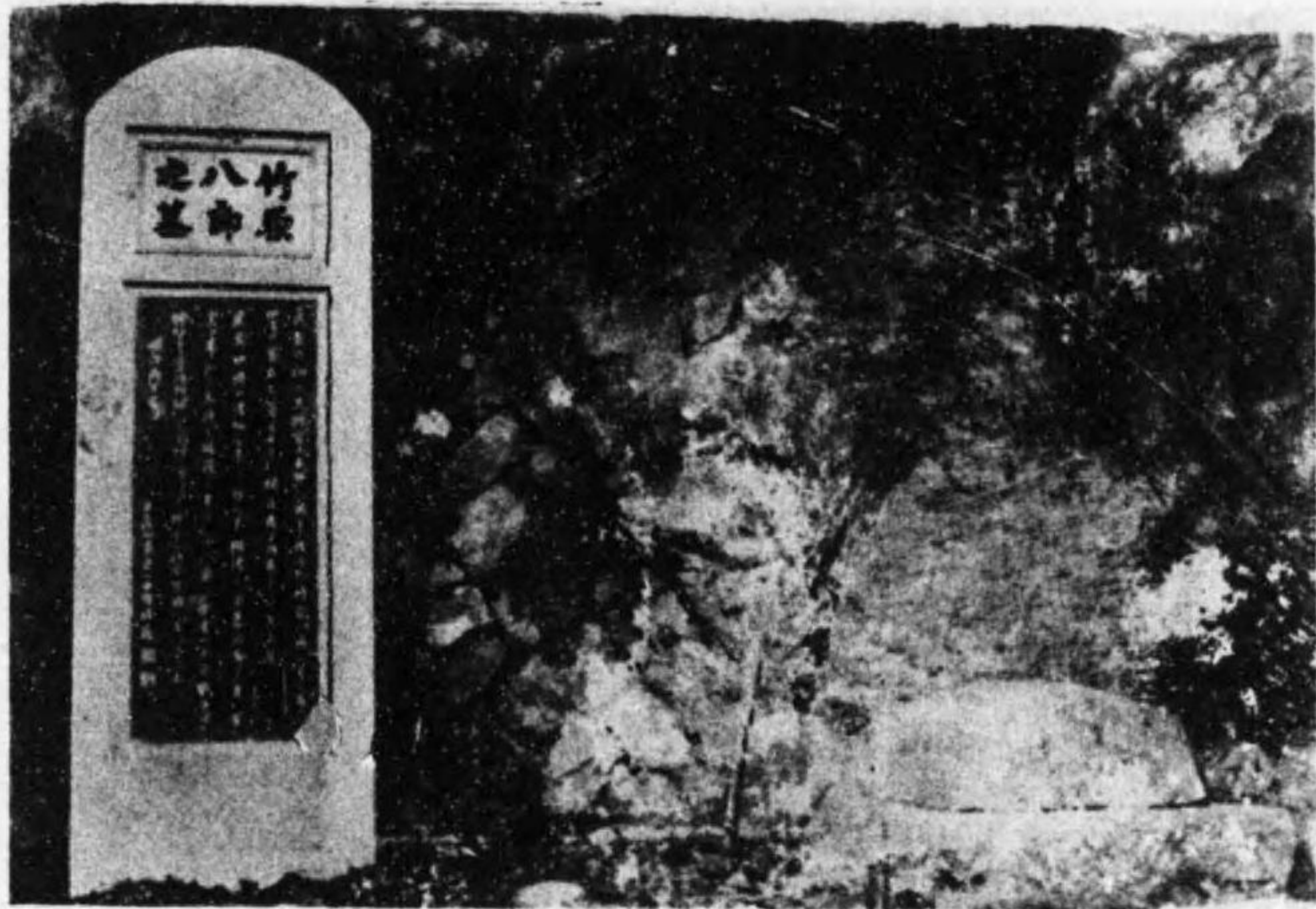
『這は、抑も何たる無禮ぞ、朝敵征伐の御門出を妨げ奉つること、奇怪至極の奴輩なれ』

と言ひさま、矢庭に、御旗持てる下人を捉へて、ドツと、投げ飛ばすこと四五丈。

庄司、其怪力に驚き恐れ、惘然として、敢て手出しをも爲さず、義光、御旗を肩に掛けて、一散に馳せ出し、忽ちに、宮に追ひ付き奉つり、御前に跪づいて、仔細を聞え奉つれば、宮、

『則祐の忠、三郎の智、義光の勇、與に並びなし、我れに此三傑あり、朝敵を亡ぼさんこと、何ぞ難からん』

竹原八郎の墓
大和國吉野郡大塔村大字辻堂に在り。



哀れ、山中の雲と伍し給ふ。
其翌くる日、小原へと志し給ひ、道の様を、樵夫に問はせ

と言はして、
痛く打喜ば
せ給ふ。

六
頓て、日も

暮るれば、
且ある樵夫
の庵に、宿

らせ給ふ、

風は、御牀
を侵して、

御膚冷かに、

月は、御枕

を照らして、

御夢白し、

雲上の御身、

給へば、

『これより、小原へ通ひ給はん道には、玉置庄司とて、
無二の武家方の候、此人を語らばせ給はでは、所詮、進
ませ給はんこと、叶ふまじ、先づ、一人、二人を遣はし
て、其所存を、聞こし召され候へ』

とぞ答へ奉つる、賤夫、敏くも、御身の上を推し奉つる、
宮、聞こし召されて、

『いしくも申しつるものかな、芻蕘の言も捨てずとは、
實に此事ぞ』

と言はし、片岡八郎、矢田彦七の二人を、玉置庄司の許へ、
遣はして、

『速かに、木戸を開き、逆茂木を、引き退けて、通せよ
かし』

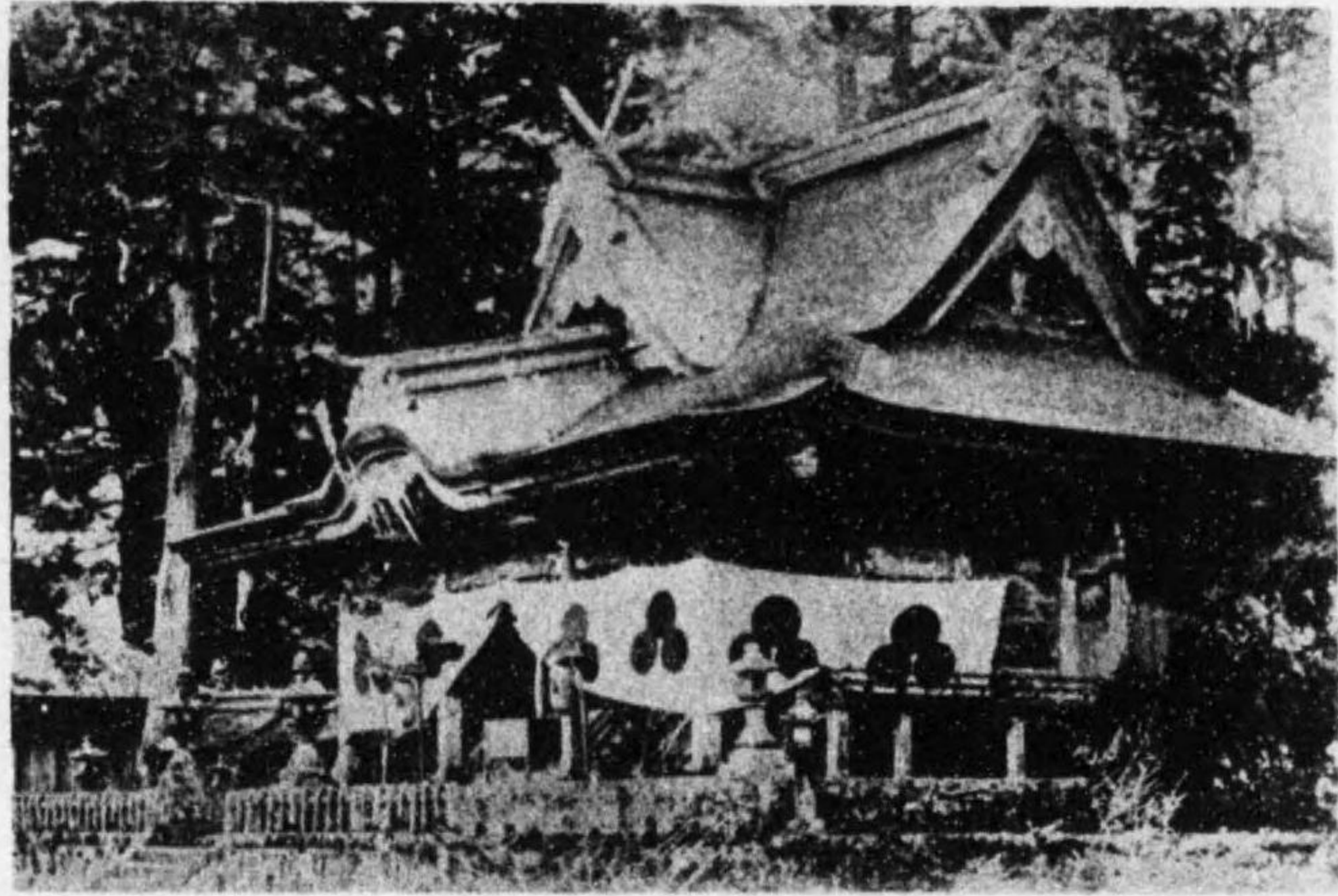
と仰せ下させ給ふ、鄙夫、臣道を知らず、庄司、何の答へ
をもなさて、内に入る、二人、怪しみて、密に容子を窺へ
ば、若黨、仲間の輩、太刀よ、甲よと、薙めき合ふ、二人、
大に驚き、

『扱は、手向ひ奉つらん心ぞ、急ぎ宮に告げ奉つらばや』

其儘、一散に、走り出づれば、庄司の従者五六十人、

玉置神社

玉置神社は大和國吉野郡十津川村大字玉置川區の玉置
山に在り國常立尊及び伊弉册の二尊を祀る古來祖神と
して郷民の尊信極めて篤し。



『ソレ追へ
や、逃がす
な』

と薙めきつ、
柄物々々を把
つて、追ひ駈
け来る。

二人、今は叶
はず、小松の
陰に、隠れ待
ち、矢庭に、

躍り出でて、

前に進める敵

二三人を、斬

り倒せば、衆

怖れて、敢て

迫らず、弓を

揃へて、遠矢に射る。

八郎、忽ち矢に中りて、傷つく、義士、などか、命を惜ま
ん、彦七に向ひて、

『我れは、手を負ひたれば、此處にこそ死なめ、御邊は、
急ぎ馳せ還へりて、宮に、此由を聞こえ給へ、疾く』
と促がし立つ、友を捨つるは、義にあらず、宮に報ぜざる
は、忠にあらず、去らんか、留まらんか、彦七、心、惑ひ
て、頓みに決せず、八郎、心悶かし、

『我れは、所詮、生くべき命にあらず、宮の御身の上こ
そ、大切なれ、こ、構はず、立ち去り給へ』

再三再四、促がし立つれば、彦七、今は、是非もなし、

『さらば、還り候はん』

と言ひ捨て、馳せ出だす。

稍、ありて、後方を顧みれば、敵の一人、八郎の首を、
太刀に貫ぬきて、捧げ持つ、彦七、

『無惨やな、早、討たれぬるか』

と嘆きつ、足を空にして、走り還へり、斯くと、宮に告
げ奉つれば、宮、早くも、

『扱は、運の盡くる所ぞ、今は、還へさん所もあらず、往ける所まで、往きて見ん』
と御覺悟を定め給ひ、三十餘人の従者を、前後左右に隨へて、山路、坂路を踰えつゝ、進ませ給ふ。

七

中津河の畔に、差し懸かり給へる時、忽然として、五六百の人数、現はれ出づ、ドツと、揚ぐる鯨波の聲、笏より、笏に響きて、四面八方、皆、敵あるかと思はるゝばかり、是れぞ、玉置庄司の手の者。
宮、忽ち莞爾と、ほゝ笑ませ給ひ、

『今は、遁れぬ所ぞ、矢種の有らん程は、防矢射よ、潔よく、死して、名を萬代に残せかし、遁け匿かれて、恥を、衆人に、な曝らしそ、されども、構へて、我れより、先きに死すべからず、我れ、自害せば、面皮を剥ぎて、誰の首とも、知れざる様にせよ』
と命じ給ひ、終りて、阪の央に、進ませ給ふ。
味方は、唯、三十二人、敵は、五百餘騎、所詮、勝つべき見込みもあらず、

『イデ〜、死して、君に報い奉つらん』
皆、死して、忠義の鬼とならんと、心に誓ふ。
斯かる所へ、三旒の赤旗、北方の峰より、現はれ出づ、
『敵か、味方か』

宮、怪んで、望み見させ給へば、全軍三千餘騎、ドツと、鯨波を揚ぐると均しく、猛然として、庄司の陣に、突いて懸かる、

『扱は、味方なりしか』
と喜ばせ給ひつゝ、勝負如何にと、尙も、御目を注がせ給ふ。

三千餘騎の兵は、皆、勇悍、見る間に、庄司の軍を、八方に撃ち退け、宮の御前に馳せ來りて、一齊に跪つき、恭しく、胃を脱して、

『是れは、紀伊國の住人野長瀬六郎、同く七郎、大塔宮此れへ渡らせ給ふと、承はり及び、斯くは、御味方に、馳せ参じ候なり』
と申せば、宮の御感、大方ならず、
『圖らざる援助を得て、萬死の中に、一生を得つること、

天運、尙、頼みあるに似たり、然るにても、如何にして、此場に参り合せたるぞ』
と問はせ給へば、六郎、

『老松とやらん申す、十四五ばかりの童子、昨日の晝程、郷中を馳せ廻り、大塔宮、明日、十津川を出でて、小原を御通りあらん、志を存せん輩は、急ぎ御迎ひに参れと、

犬吠檜

玉置神社の境内には古木老樹多し此れは犬吠檜にして地上目通り三丈、高さ十丈餘あり神代杉と相並びて境内中の最大樹なり。



申し觸れ候ひければ、御使ぞと存じて、参つて候』
と答へ奉つる、宮、

『これも、偏に佛神の御加護にこそ』
と最と頼母しくぞ、思し召す、今は、恐るゝ敵もあらず、宮、此人数を率ゐて、檜野城に入らせ給ひ、尋で、吉野の山に、立て籠らせ給ふ。

本文の記事は、太平記に據るものなりと雖も、之れを實際の地理に照して、考ふる時は、頗る錯亂を極むるものあり、因りて、此に真正の事實を究めんと欲す。

抑々大塔宮は、大和の般若寺より、紀伊に入らせ給ひ、由良の湊、藤白の松など眺めつゝ、日高郡の切目王子に到らせ給へること、なり居れば、此處より、南部町、田邊町に到り、道を東方に取りて、熊野の本宮に達し、其れより、大和の十津川郷に、踏み入らせ給へるものなるべし。

此熊野の本宮より、一步、十津川に入れば、直ぐ其東方は、玉置川にして、玉置庄司の本居なれば、宮は、先づ、庄司の許に往きて、御頼みありしも、彼れは、熊野別當

斷じて、疑ふべからず。

吉野城址

護良親王御籠城の地

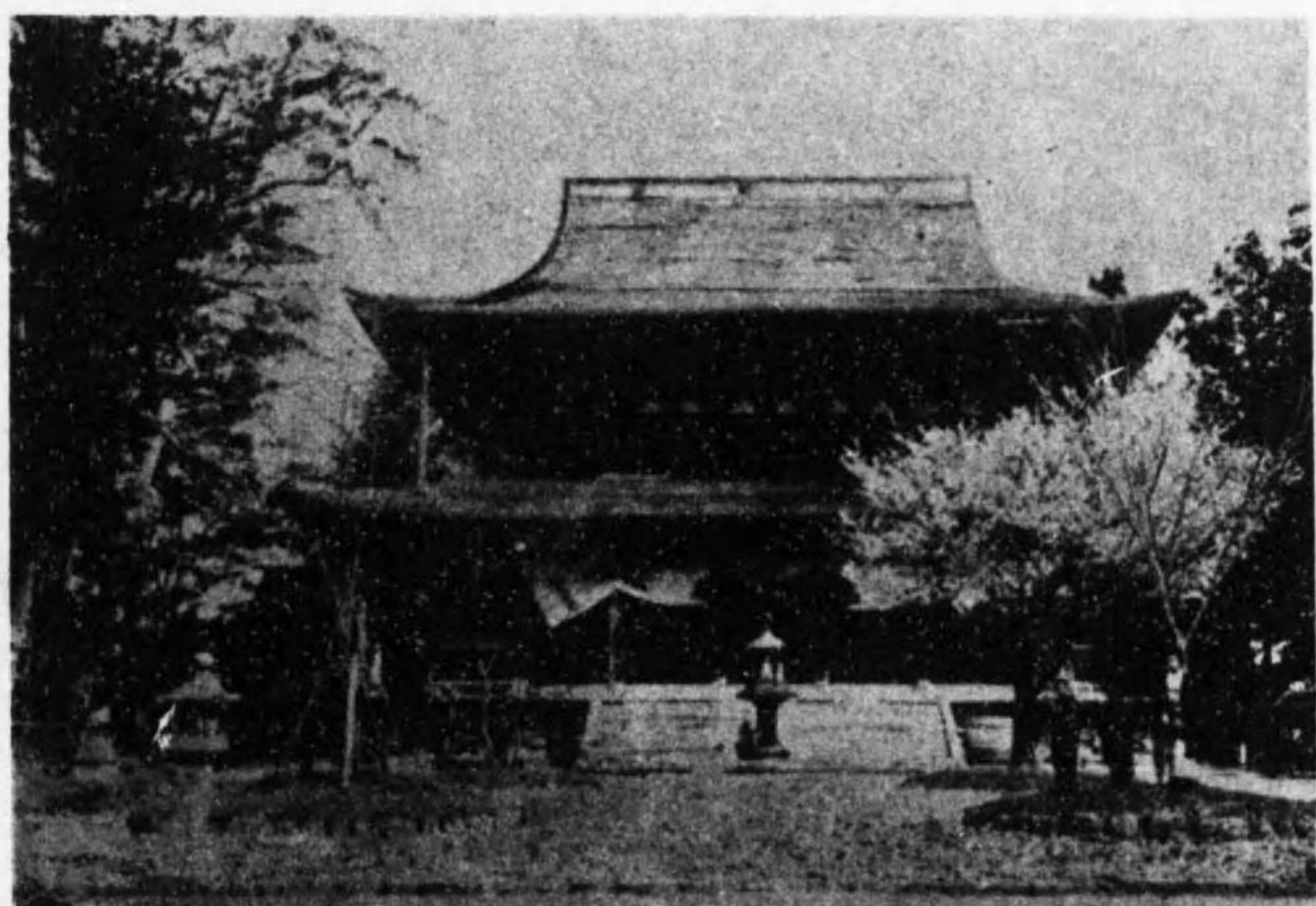
吉野山は、大和國吉野郡吉野村に在り、元弘二年、護良親王の十津川より、此地に來らせらるゝや、金峰山寺の本堂藏王堂を以て、陣所となし、守備を修して、吉野城と稱させ給ふ。

昔は、樓門、大塔、講堂、金堂、觀音堂、七十二間の廻廊、及び四十一區の坊舎ありしも、元弘、及び正平年間の兵燹に罹りて、燒失し、康正年間、更に、現今の寺院を建立す。

長峰藥師堂址の側に、村上義光の墓あり、内藤景文、其文を撰ぶ、山口神社の前を行くこと、五町ばかりの山腹に、村上義隆の墓あり、翠亭竺全、其文を撰ぶ。

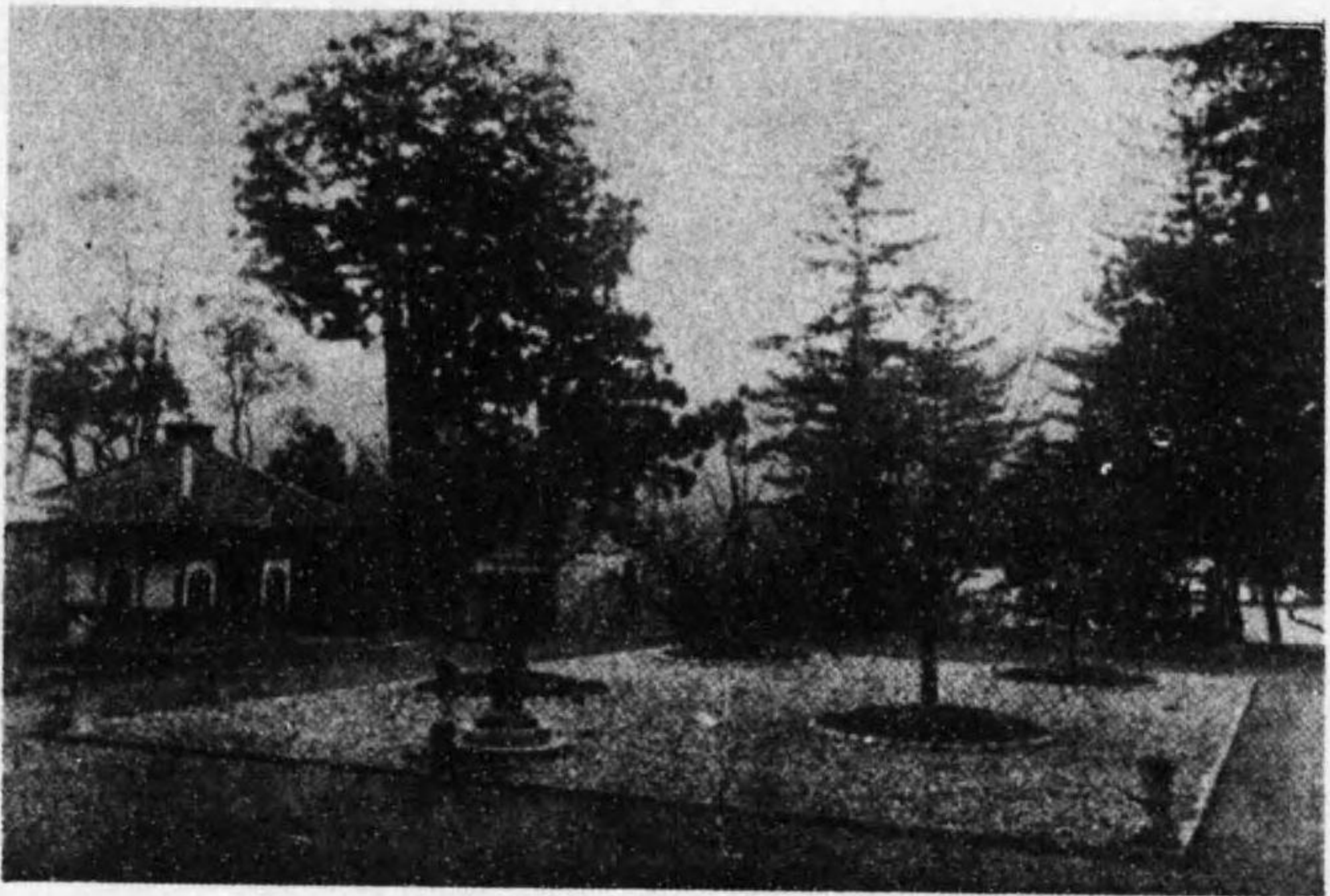
大塔宮、既に吉野に入らせ給ふ。

吉野の大衆、義に厚し、皆、心を傾むけて、宮を助け奉つる、宮、乃ち金峰山寺の本堂藏王堂を以て、本陣と定め給ひ、要所要所に、柵を建て、木戸を設けて、嚴重に、守らせ給ふ。



元弘三年正月、北條相模入道高時、數十萬の軍を發して、吉野、赤坂、

藏王堂の四本櫻
此れは藏王堂境内の四本櫻にして護良親王の奮闘あらせし處。



僧兵の鎧、日に輝きて、星に似たり。

千早の三城を攻む。

二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の兵を以て、三道より、吉野の城に向ふ。

道蘊、菜摘川の畔に立ちて、遙かに、山上を望めば、嶺には、赤旗、錦旗の影、風に翻へりて、雲の如く、麓には、官兵、

峰、高くして、老樹、雲に聳え、坂、峻はしくして、巨岩、途に横はる、實にや、天險無比の地、數十萬の兵を以て攻むるも、城、容易に、落つべくも見えず。

道蘊、形勢を見極むること二日、二月十八日卯の刻を以て、ヒタヒタと、山下に押し寄せす。

戦端、忽ちに開かれぬ。東兵、勇武を以て、夙に、天下に鳴る、千騎、二千騎、三千騎、入り代りく、勢ひ鋭く、攻め戦ふ。

山兵、地の理に精はし、此處の樹陰より出で、彼處の岩角より現はれ、神出鬼没、敵の前を衝き、後を襲ふ。

攻戦七晝夜、攻め登れば、追ひ降りし、追ひ降せば、又攻め登る。

寄せては返し、返へしては又寄せ、息を繼ぐべき邊もあらず。

吶喊の聲は、山風に捲かれて、遠い數里の村に落ち、劍戟の光は、天日に映じて、高く半空の雲に見ゆ。

接戦、日を経て、益々烈し、山兵の死するもの、三百餘人、東兵の死するもの、其三倍、矢石に傷つくもの、幾何と云

ふ敷を知らず。

二

吉野の執行岩菊丸、東軍の嚮導として、陣中に在り、密かに、部下の兵を召して、

『阿曾彈正殿には、既に赤坂の城を攻め落して、金剛山へ向はれたりと聞き及ぶ、我れ、當山の案内者として、一方を引き受けながら、數日の間、攻め落し得ざるこそ、遺憾なれ、熟々此城の形勢を察するに、追手より攻めな

村上義光の墓所
吉野山長峰藥師堂址の附近に在り。



ば、徒らに、味方を失ふばかり、所詮、落し得んこと、叶ふまじ、若かず、敵の虚を衝きて、其不意に出でんには』

と告げ、物馴れたる足輕、百五十人を選びて、

『城の後の金峰山には、嶮岨を憑みて、さまでの勢を、置くまじきぞ、汝等、夜に紛れて、金峰山に忍び入り、愛染寶塔の上にて、時刻を待ち合はせ、夜のほのくと、明け放れん時、一齊に、鬨と聲を揚げよ、敵の度を失はん機に乗じて、追手、搦手、三方より、攻め登らば、宮を生捕り奉つらんこと、必定ぞ』

と命ずれば、百五十人の足輕、皆、勇み立ち、

『さらば、今宵、忍び入り候はん』

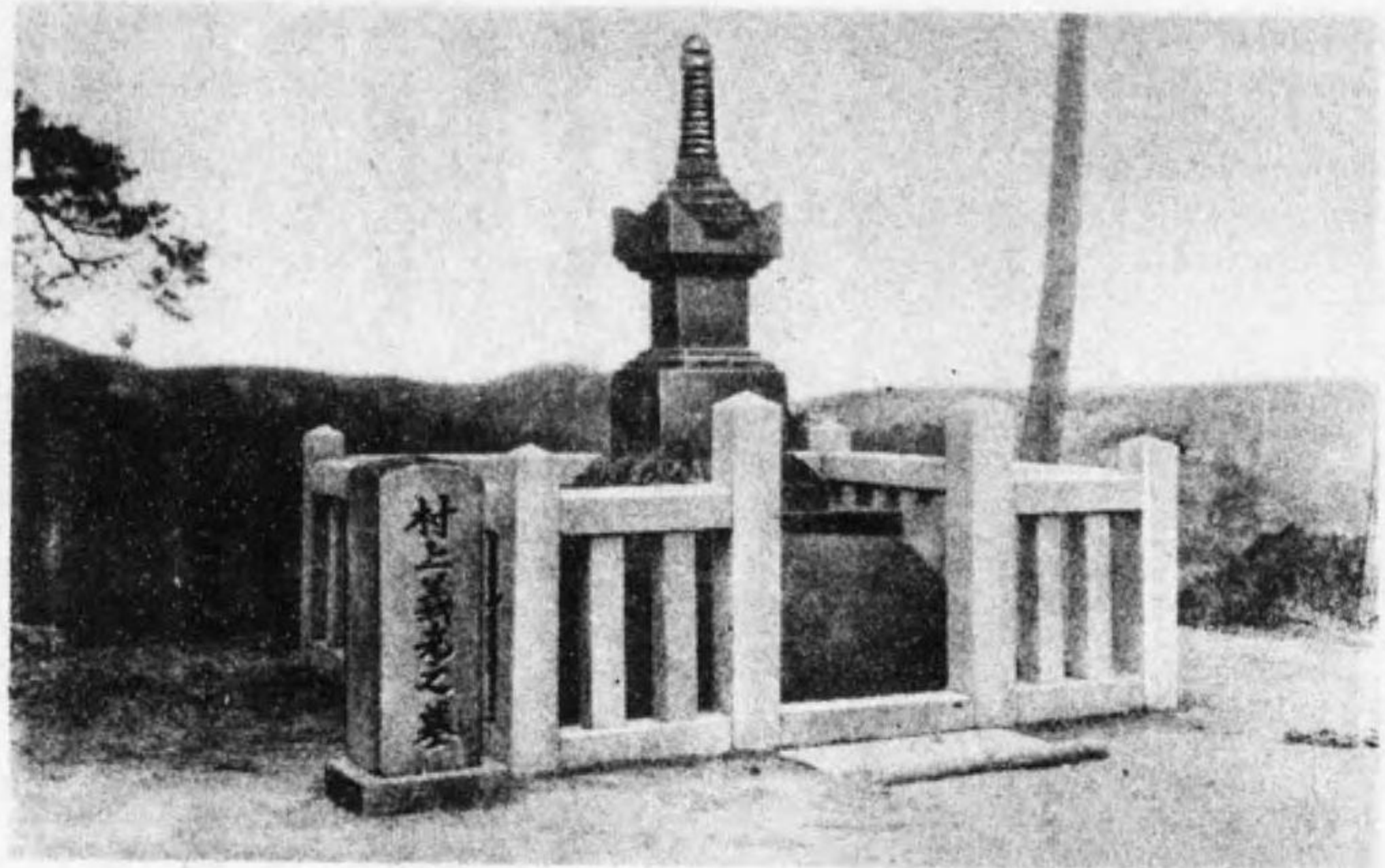
と答へ、日の昏るゝを待ちて、密かに、陣を出づ。

地理に精はしき面々、如法暗夜を、事ともせず、葛を攀ち、岩を傳うて、山上に登れば、果せるかな、唯、其處此處の梢々に、旗を建て、疑兵を張れるばかり、守備の兵とは、一人も在らず。

百五十人、思ひのまゝに、忍び入り、小陰に隠れて、時刻

を待つ。

村上義光の墓
大和國吉野郡吉野村長峰藥師堂址の側に村上義光の墓あり其側に碑を建て、内藤景文の撰文を刻す。



既にして、天漸く明く、東兵五萬餘騎、三方より、押し寄せて、勢ひ猛く攻め登る。

山兵、各々持場持場を固めて、防ぎ戦ふ、遠きものは、矢を放ち、近きものは、劍を把つて進む、敵、攻め登れば、追ひ落し、我れ、引き返へせば、敵、又攻め寄す。酣戰數刻、勝負、

何時果つべくも見えず。

斯かる折しも、ドツと、起る鬨と與に、火の手、諸所より、一時に揚がる、是れぞ、前夜、忍び入れる百五十人の放てるもの、

『素破や、裏切りぞ』

山兵、顧みて、慌てふためく、東兵、斯くと見て、皆、勇み、

『ソレ攻め登れや、此機を失ふべからず』

と呼はり、鋭を鼓し、勇を振うて、奮然、猛然、三道、一時に攻め寄せ、押し登る、城兵、前後に敵を受けて、今は、防ぎ戦けん術もあらず、

『今は、早、是れまでぞ』

皆、死を決して、敵を衝く。

既にして、追手の一の木戸、忽ち破る、東兵、勢ひに乗じて、山上に迫ること、益々急なり。

三

百五十人の足輕、右に出で、左に現はれて、山兵を惱ますこと暫し、機を見て、ドツと、藏王堂に、押し寄せ来る。

此處は、宮の御座所。

宮、少しも、騒がせ給はず、二十餘人の勇士を、前後左右に隨へ、三尺五寸の小長刀を、小脇に挟んで、悠然として、庭に下り立たせ給ひ、屹と、敵を望んで、

『多寡の知れたる歩卒共ぞ、イザ蹴散らさん』

と宣はしつゝ、サツと、敵中に蒐け入りて、縦横自在に、奮ひ戦ひ、逃げ惑ふ敵を、追ひ詰め、東西に切り離け、南北に薙ぎ拂ひ給へば、敵兵、度を失うて、皆、遠く遁れ

村上義光の碑文



走る、宮、

『長追ひは、無用ぞ』

と制して、藏王堂の大庭に、引き還へし給ひ、

『今は、遁れぬ所ぞ』

と思はして、早くも、御覺悟を定めさせ給ひ、酒を召して、最後の宴をぞ、開かせ給ふ。

敵矢、御鎧に立つもの七筋、御腕にも、御顔にも、各々二ヶ所の御傷あり、淋漓たる鮮血、泉の如し。

宮、矢をも、抜かせ給はず、血をも、拭はせ給はず、大盃を把つて、グツと、傾け給ふこと三度、御英氣、勃々、溢る、ばかり。

木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒尖に、敵首を差し貫き、宮の御前に出て、聲、高らかに、

『電火の閃き渡るは、劍戟の光、霰雨の飛び交ふは、矢石の影ぞ、天帝の御身奉くして、修羅ぞ、慘たる』

と諷ひ、且、舞ふ、節は沈痛、調は悲壯、一座、慨然として、皆、悲憤の涙を瀧ぐ。

四

村上彦四郎義光、追手に在り、鎧に、十六矢の立てる状は、蝟に似たり、此時、急ぎ宮の御前に馳せ來り、

『二の木戸は、言ひ甲斐なくも、攻め破られ、二の木戸へ引きて、防戦、數刻に及び候ひしに、御所の御酒宴の聲、聞こえ候へば、早、御最後にもやと存じて、馳せ還りてこそ候へ、味方は、疲れ果て、敵は、嵩に懸つて、攻め登りて候、所詮、支へ防がんこと、叶ひ候はず、敵の勢を、餘所へ廻し候はぬうち、疾く、一方を打ち破つて、落ちさせ給ふべし、但し、跡に残りて、戦ふものなくんば、敵は、其れと氣付きて、何處までも、追ひ駆け參らせん、恐れ多くは候へども、某、御諱を冒し奉つり、御命に代りて、此處に討死仕らん、疾く、錦の御直垂と、御物具とを、下し賜はるべし』

と請ひ奉つる、精忠無二の義光、今や、紀信の誠を盡さんと欲す、宮、聞こし召されて、御首を打ち掉らせ給ひ、
『争かて、然ることあるべきぞ、一所にこそ、兎も角もなるべけれ』

と答へ給ひて、股肱の臣を捨つべき御心とても、在はしまさず、義光、斯くては、果てじと思ひ、態と、言葉荒らかに、

『然る言ひ甲斐なき御心にて、能くも、天下の御大事を、思し召し立たせ給ふものかな、早、御物具を、脱がせ給へ』

と述べ、突と、進んで、御鎧の上帯を釋き奉つる、口にこそ怒れ、心には泣く。

宮の御感、淺からず、御涙ながらに、御物具、御直垂を、脱ぎ替へさせ給ひ、

『我が爲めに、斯かる忠臣を捨てんこそ、悲しけれ、幸ひに、生き残りたらば、厚く汝の後生を弔はん、若し、敵の手に掛からば、同じ冥途の衢に、伴はんずるぞ、さらばぞや義光』

と宣はし、御名殘惜しげに、見返り、落ちさせ給ひぬ、義光、

『今は、心安し』
と思ひ、宮の御直垂を着し、御鎧を纏ひ、急ぎ二の木戸へ

と、取つて返へす、折りしも、息喘いせせき馳せ來る若武者あり、
義光、誰ぞと見れば、これぞ一子義隆、

『汝、何とて、此處へは來つる』

義光、先づ、聲を懸く。

五

義隆、年十八、勇武、父に類す、此時、父の側に進みて、
『父上、宮の御身に代らせ給ふものを、某、争かて、一
人助かる心の候はん、父子與に、忠義の鬼とならんと、
存すればこそ、斯くは、御跡を慕うて参り候へ』
と答ふ、父は、主に代り、子は、父に殉ぜんとす、義光、
心に、

『流石は、我子ぞ』

と思へば、感涙、胸に迫りて、暫しは、聲も出でず、稍、
ありて、屹と、我子の方に向ひ、

『父子の義、重しと雖も、主従の義、更に重きぞ、宮、
此處を落ちさせ給へど、御先途、最と心元なし、暫く、
父に従はん命を存へて、宮の御爲めに捨て奉つらんこと、
是れ主への忠、父への孝ぞ、未だ遠くは落ちさせ給ふま

じ、疾く、追付き奉つれ』

と言葉靜かに、諭し聞かせば、義隆、實にもと、心に覺る、
『さらば』

とばかり、死に行く父に分れて、急ぎ宮の御跡を追ひ奉つ
る。

子を返すも、忠の爲め、父に分る、も、忠の爲め、忠こそ、
人の命なれ。

六

義光、急ぎ高たかやう櫓の上に、駈け上れば、敵は、雲霞の如く、
其前に迫る、目を擧げて、宮の御後姿を見送り奉つれば、
早、勝神明の前を、南へと落ちさせ給ふ、

『イデヤ、君に代り奉つらん』

義光、忽ち櫓の狭間の板を、切つて落して、グツと、身を
露はす、黄金造の鎧、錦の直垂、燦たる光彩、敵の眼を射
る、義光、屹と、櫓の下を、見降しつ、大音聲に、

『如何に、東夷ども、能く承はれ、今上天皇第三の皇子
一品護良、逆臣の爲めに、亡ぼされて、唯今、此處に自
害せんずるぞ、此有様を見置きて、汝等が武運盡きて、

腹切らん時の、手本にせよや』

と呼ばはり、鎧を脱して、櫓より下に、ドツと投げ下す、續
いて、錦の直垂を脱ぎて、腹はら寛ぐれば、白く清き膚の色、
雪の如し。

義光、刀を取つて、ツブリと、左の脇に、突き立て、キリ
キリと、右の脇まで、一文字に掻き切り、腸を掴み出だし
て、サツとはかりに、櫓の板に投げ付け、太刀を、口に啣
へて、打つ伏しに、打ち伏す。

追手、搦手の寄手、斯くと見るより、

『素破や、大塔宮の御自害ぞ、我れ、御首を賜はらん』
我れ先にと、二の木戸に、押し寄せ來り、四方の圍み、忽

村上義隆の墓
墓は吉野山南溪の山腹に在り、明治三年伊勢の人松井延基有志の人々と謀
りて之れを建つ。



ちに解く。

宮、此隙に、天の河の方へと、落ちさせ給ふ。

七

岩菊丸の部下五百餘騎、落口々々を塞ぎて、山兵の遁路を
絶つ、宮の落ちさせ給ふを見るより、

『ソレ落武者ぞ、搦め取れ』

と言ひつ、太刀を抜き連れて、追ひ掛け來る、義隆、既
に宮に追ひ付き奉つりて、御供の列に在り、

『素破や、一大事ぞ、イデ、一命を抛つて、無事に、
宮を落し奉つらん、父の我れを残し給へるも、斯からん
時の爲めにこそあれ』

と思へば、唯一人、跡に踏み止まり、憤然として、寄せ來
る敵に、立ち向ふ。

道は唯一線、幅狭くして、二人並び進むこと叶はず、敵、
乃ち一行となりて、迫り來る。

義隆、大刀を揮うて、道を塞ぎ、來る敵も、來る敵も、皆、
斫つて仆す、或は、首を刎ね、或は、足を拂ふ、死屍、道
に横はり、鮮血、草を染む、敵多しと雖も、唯一人の義隆

に、敵すること能はず。

義隆、敵を仆す毎に、勇氣、益々加はる、身を抛つて、奮闘すること、半時ばかり、氣節、鐵に似れども、身骨、石にあらず、矢傷、刀傷、全身に充ち満ちて、今は、戦はん力もあらず、

『我が忠義の身を、いかで、賊臣の刀に、穢がさるべきや』

義隆、忽ち躍つて、小笹の中に入り、自ら腹搔つさばいて仆る、宮、此隙に、虎口を遁れて、高野へと落ちさせ給ふ。父は、主に代りて死し、子は、主の爲めに殞る、父子の忠勇義烈、満山の櫻花と與に、千古に芳ばし。

渡部橋

楠木正成勝戦の地

渡邊橋は、今の大阪市東區八軒屋より、北區天満に架せられたるものにして、現時の天満、天神兩橋の中間にあり、一に大江橋とも曰ふ、此橋の南方一帯の地を、渡部

と呼ぶ、元弘三年五月、楠木正成の、賊軍を撃破したるは、即ち此處なり。

現今の大江橋、渡部橋は、堂島を築きし時に、附したる名稱にして、享保年間の架設なり。

今、東區に、北渡部町の名稱を存す。

湯淺定佛、赤坂城を守る事數月。

元弘二年四月、人夫三百人を遣はして、糧を、領邑阿瀬川より、搬び来る、一夕、喚呼の聲、劍戟の音、俄然として、城外に起る、

『素破や、事ぞ』

定佛、蹶然として、立ち上がり、急ぎ容子を見せしむれば、是れぞ、糧を運べる人夫の、敵に追はれくつて、遁げ來れるなる、定佛、焦つて、

『疾くく、助け入れよ』

と指揮すれば、城兵、聲に應じて、突出し、矢庭に、敵を追ひ拂ひ、追ひ斥けて、難なく、人夫を助け入る。須臾にして、呐喊の聲、忽ち起る、敵兵二百騎、早、城門近

く迫り來る、定佛、急に兵を指揮して、敵を拒がんとす。糧を運び來れる人夫、手にく、甲を俵中より、取つて着し、ドツと、鯨波を作つて、奮ひ戦ふ。

城外の敵兵、亦、忽ち門を破つて、亂れ入る、眞先に進める大將、大音聲に、

『湯淺入道は、何處に在るぞ、楠木正成、當城を取り還へさん爲めに、自ら罷り向へり、イザ來つて、勝負を決せよ』

と呼はること、二度、三度、定佛、聞いて打ち驚き、

『扱は、楠木殿にて候へるか、入道、今日より、御味方に附きて、忠戦を勵み候はん、あはれ、降參を許し給ふべし』

と述べ、急ぎ馬前に進み出でて、降を乞ふ、正成、智あり、仁あり、

『仁義の師は、妄りに、人を殺し候はず、以後、心を改めて、無二の御味方となり候へ』

と告げ、即座に、降を容るす。赤坂の城、復た正成の手に歸す。

初め、正成の遁れて、金剛山に入るや、時機を見て、復た起たんとす、定佛の、糧を阿瀬川より、搬び來る由を聞き、

『赤坂の城は、最早、我が手の物ぞ』

と喜び、四月三日、五百騎を率ゐて、山を出で、人夫を途に要して、悉く俵を奪ひ取り、部下の兵三百人をして、之れを運ばしめ、別に、二百人をして、伴はり追はしむ、然りとも知らぬ定佛、鈍くも、門を開きて、城中に、引き入れしなり。

正成の計略、忽ち其圖に中る。

二

正成、既に赤坂の城を復し、兵威、河泉兩國に振ふ、

『イデヤ、攝津に打つて出で、六波羅勢を、引き受けて、勝負を、一戦に決せん』

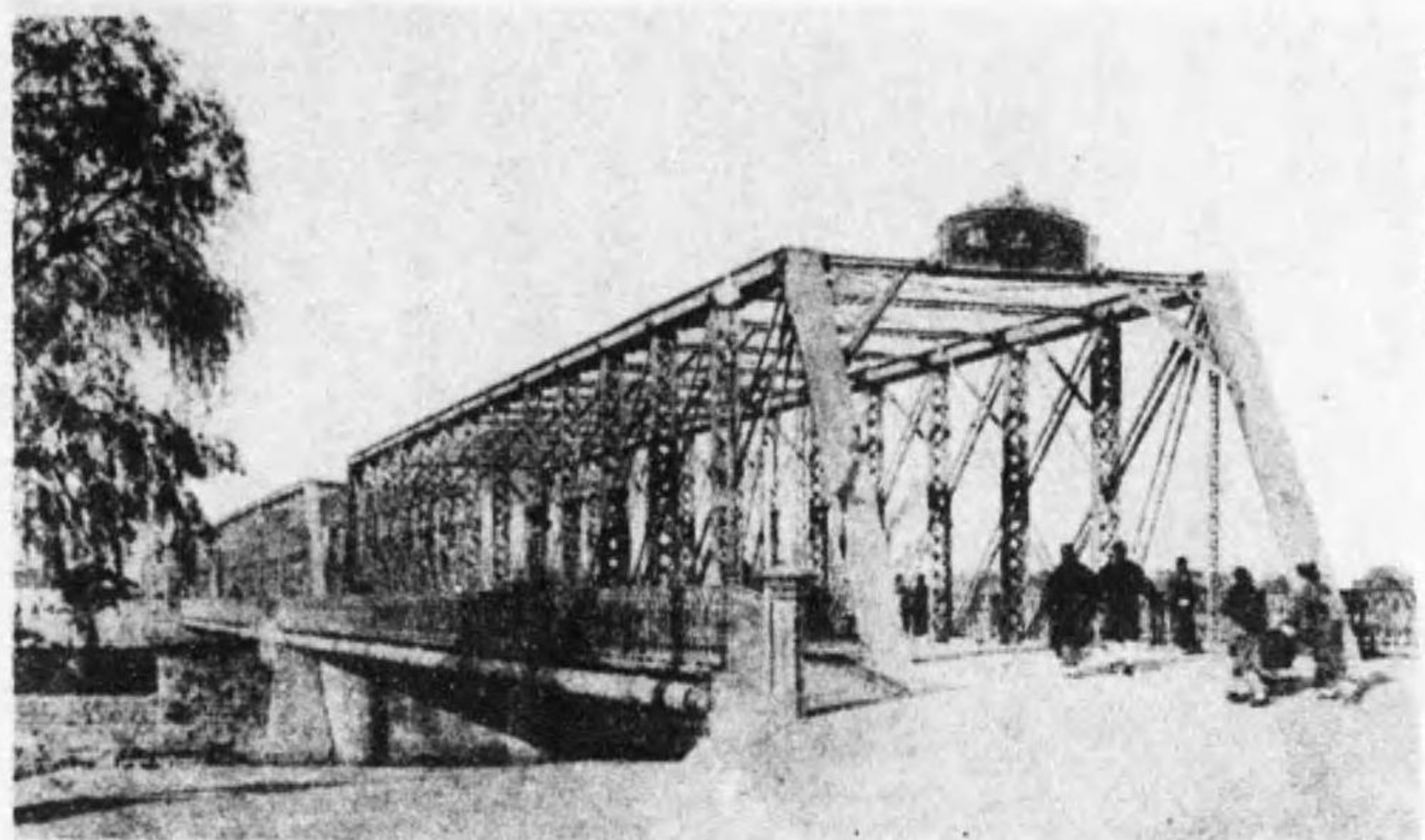
五月十七日、正成、三千騎を率ゐて、攝津に入り、住吉より、天王寺に、陣を構ふ、

『楠木正成、一舉して、赤坂城を陥れ、大軍を率ゐて、攝津に打つて出で候、定めて、京師へ攻め上り候べし、

疾く、防戦の御用意あらせ給へ』

天満橋

天満橋は大阪市東區谷町通りより北區天満に架せらる、淀川の橋梁なり往時の渡邊橋は此橋と天神橋との中間に當る。



との急報、京師に達すれば、六波羅の探題、大に驚き、急に、近畿の兵を徴して、京師を守る。

一日を経、二日を過ぐれども、正成、敢て來り迫らず、

「扱は、敵は、大軍にはあらざるぞ、此方より、押し寄せて、打ち散らせよ」

探題、乃ち隅田次郎左衛門通治、高橋刑部左衛門宗康

を將とし、兵五千を率ゐて、發せしむ、二將、二十日を以て、京師を發し、進んで、難波に向ふ、正成、聞いて、『我れは、探題を誘き寄せんとこそ、思ひつれ、隅田、高橋如きの來つること、鹿を待ちて、兎を獲るに似たらずや』

と笑ふ、奇計、早くも、胸中に浮ぶ、乃ち兵を分ちて、四隊となし、其三隊を、住吉、天王寺の南あたりに留め、羸兵三百騎を、渡部橋に出だして、敵を待つ。

三

二十一日、京兵、進んで、渡部橋の北岸に到る、前岸を望み見て、覺えず、失笑し、

『あれ見よ、敵は、二三百騎に過ぎざるぞ、瘦せたる馬に、繩の手綱を懸けしさまの、可笑しさよ、一々、召捕りて、六波羅殿の御感に預かれや』

と呼はりつ、通治、宗康の兩人、眞先きに進んで、橋の下流を渡れば、五千騎の兵、皆、勇み立ち、橋より、川より、思ひくくに、先きを争うて進む。

正成の兵、斯くと見るより、ひよろく矢、少し放ちて、

引き退く、京兵、益々勇み立ち、

「敵は、逃ぐるぞ、ソレ逐へや」

と言ふより早く、諸軍、備を亂して、追ひ駈けく、進んで、天王寺の北に到る。

疾驅一里餘り、人も疲れ、馬も疲る、忽然として、一隊の敵軍、天王寺の東より、現はれ出づ、凜々たる意氣、前の軍兵に似るべくもあらず、京兵、見て驚き、

「素破や、敵ぞ」

と叫べる途端、一隊の敵軍、又忽然として、天王寺の西門より、現はれ出づ、京兵、益々驚き、

「扱は、敵は二手ぞ」

と言ひつ、急に備を立て直さんとす、呐喊の聲、忽ち起りて、一隊の敵軍、又忽然として、住吉の方より、現はれ出づ、京兵、今は愈々驚き、

「扱こそ、敵の計略なれ、引けや、引けや、廣場へ引きて、掛け合へや」

と呼はりつ、急に、元來し方へと、引き退く。

斯くと見たる正成、何かは躊躇せん、ドツと、鯨波を作つ

て、猛然、三方より、追ひ迫り、呼吸を繼ぐべき隙さへあらせず。

京兵、足の留度もなく、走りく、終に渡邊橋まで、引き退く、通治、宗康の二人、急に馬を駐めて、大音に、

「止まれや、返へせや、此上、走らば、水に溺れん、敵は思ひの外の小勢ぞ、掛け合へや、返へし合はせや」

と呼はり、士卒を勵まし、拒ぎ戦はんとす、一たび、逃足つきては、誰か留まり戦ふ心の起らん、皆、我れ先きにと、橋を争ふ。

橋は狭く、人は多し、押し合ひ、へし合ひ、水に溺る、もの、數知れず。

正成の兵、早、陣後に迫れば、京兵の狼狽、言ふばかりなし、鎧を釋きて、泳ぐものあり、馬を驅つて、渉るものあり、逃ぐる手段にこそ、心を碎け、留まり戦はんとするもの、一人もあらず。

通治、宗康、今は奈何ともすべからず、亦、馬を飛ばして、走り退く。

五千騎の京兵、逃げ還れる時は、其半ばにも及ばず、誰に

やあらん、六條河原に、高札を建て、

渡部の水いかばかり早ければ

高橋落ちて隅田流るらん

との狂歌を記す、京童、語り傳へ、謠ひ合せて、嘲り笑ふ、
通治、宗康の二人、深く恥ぢ、病と稱して、敢て出でず。
天下、秋ならんとして、一葉、先づ落つ、六波羅の探題、
童謡を聞き、眉を擧め、

「承久以來、鎌倉に對して、指一つ指すものなかりし
に、今や、斯かる嘲りを受くるこそ、奇怪なれ、人心、
次第に、鎌倉を離れなば、由々しき大事ぞ、疾く、楠木
を滅ぼさばや」

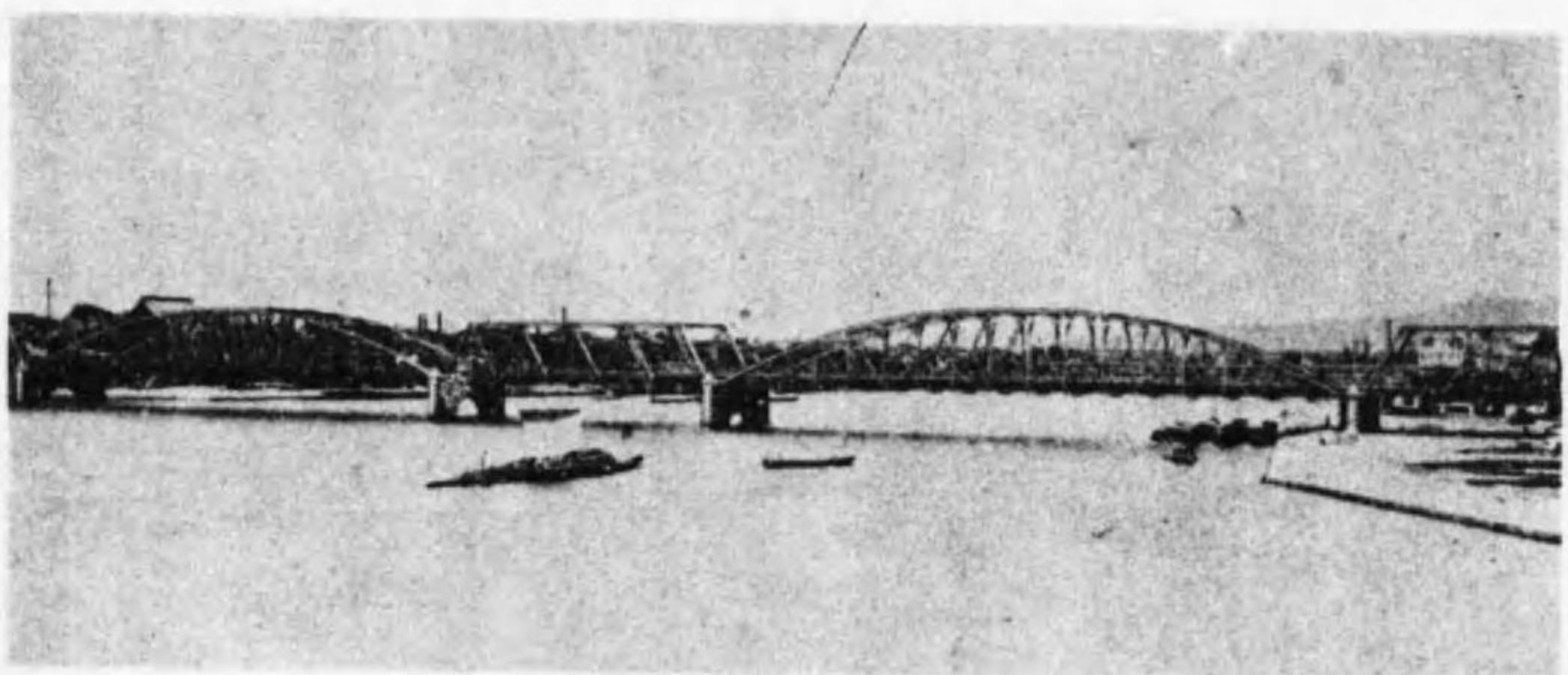
と謀る、會々宇都宮治部大輔公綱、鎌倉より、京に上る、
探題北條越後守仲時、召し見て、

「此度の敗軍は、大將に、謀なく、士卒に、勇氣なきに
由る、楠木、勢ひを得て、兇徒、四方に蜂起するに至ら
ば、容易ならぬ一大事に候なり、疾く馳せ向ひて、一戰
に退治せられ候へ」

と告ぐ、公綱、夙に、驍勇を以て、著はる、

天神橋

天神橋は大阪市東區上町松屋町通
より北區天満に架せるものにして
天満橋の下流に在り古の渡邊橋は
此明橋の中間に當る。



「大軍さへ、利を失ひ候
ものを、小勢にて向はん
こと、如何候べき、左れ
ども、公綱、關東を出づ
る時より、斯かる御大事
に會うて、命を棄てんと
こそ、存じて候へ、手勢
を以て、馳せ向ひ、合戦、
難儀に及び候はゞ、重ね
て御勢を乞ひ候はめ」
と答ふ、公綱、今は、生き
て還らん心もあらず、宿所
へも歸らず、六波羅より、
直に攝津へと、馳せ向ふ、
附き隨ふもの、僅かに十四
五騎。
四塚作り道に到る頃、馳せ
加ふるもの、四百騎に及ぶ、

途中、馬に逢へば、奪うて乗り、人に逢へば、捉へて、列
に加ふ、路人は、道を避け、商賈は、店を閉ざして潜む。
七月十九日の午時を以て、京師を發し、其夜、柱本に達す。

五

打てば、直ちに響く、和田孫三郎、早くも、公綱、出陣の
事を、諜ひ知り、急ぎ正成の前に出でて、

「宇都宮治部大輔、今夜、京より、柱本に着きて候、明
日は、押し寄せ候はん、隅田の大軍をさへ、唯一戰に打
ち破り給ひぬ、小勢の宇都宮、假令、武勇の將なりとて、
何程の事か候はん、今夜、逆寄せして、打ち散らし給ふ
べし」

と述べれば、正成、莞爾として、笑みつ、
「合戦の勝負は、人心の離合にこそ由れ、人數の多少に
は由るべからず、宇都宮の小勢を以て、大敵の敗れし後
を承くるもの、必定、必死の覺悟にこそあるべけれ、我
れ、撃つて、破らんは、易しと雖も、味方も、亦、大半
は傷つかん、天下の事は、今日の戦にのみ由るべからず、
多からぬ味方を、初度の戦に失はゞ、後日の戦に、誰か

力を合はすべき、我れ、態と、陣を引き、敵に花を持
たせ、更に、計略を以て、之れを脅かさん、面目ある時
を機として、退くは、阪東武者の習ひぞ、我が爲んやう
をこそ見候へ」

と告ぐ、正成の胸中、早くも、成竹あり、其夜、密かに、
陣を拂うて退く。

退く先は、何處ぞ。

六

決死の公綱、勝敗を、唯一舉に決せんと、思ひ極む、二十
日の拂曉、七百餘騎を率ゐて、忍びやかに、天王寺に向ふ
人馬、肅々として、音を立てず。

既に近づく、火を諸所の民家に放ち、炎焔、熾んに立ち騰
るを見て、猛然として、奮ひ立ち、

「ソレ押し寄せよ」

と言ひつゝ、忽ち颯と馳せて、敵陣を衝く、鐵蹄、地を蹴
つて、砂烟、天を捲く。

不思議やな、陣中、人の氣もなく、影もなし、奇麗に掃ひ
清めて、一點の塵だにも留めず、公綱、且、呆れ、且、訝

かり、

『楠木ほどの者が、一戦をもせて、退かん筈はあらず』
と言ひつゝ、士卒を提かさげて、天王寺の東門より、馳せ入り、西門に馳せ出づること、三回四回、終に一敵にも、出會はず、公綱、本堂の前にて、ヒラリと、馬より飛び下り、恭しく、上宮太子の廟を、伏し拜みて、

『強敵の、斯くも、安々と退くこと、偏に、佛陀の御加

天王寺

天王寺は大阪市天王寺區天王寺町に在り楠木正成の上宮太子の未來記を讀みたる處。



護にこそ』

と謝し奉つり、直に輕騎を飛ばして、捷かちを六波羅に報ずれば、探題以下、皆、喜ぶこと、限りなし。

七

公綱、代りて、天王寺に陣すること數日、一夜、篝火、諸所に起る。

『素破や、敵の夜討ちぞ』

公綱、躍り出でて、四方を望み見れば、東の山、西の浦、千百の篝火、點々として、星よりも繁し、公綱、

『扱おびも、夥多しき軍勢かな』

と驚きつゝ、急に備を立て、待つ。

天、明くれども、敵、來らず、日、昏るれども、敵、尙、來らず。

夜に入れば、篝火、更に加はりて、距離、更に近し、公綱、
『左れば、今宵こそ、押し寄せ來らめ』
と思ひ、又も、陣を堅めて待つ。

左れども、敵は、此夜も來らず、翌くる日も、亦、來らず、其夜に至れば、篝火、益々加はりて、距離、益々近づく、

公綱、

『扱は、愈々今宵にこそ』

と思ひ、又もや、隊を整へて、待つこと終宵。

人は、鎧を釋かず、馬は、鞍を卸さず、眠らず、憩ひはざる
こと、連日連夜、今は、心神疲れ、氣力衰へて、敵に當らん勇氣もなく、士卒、皆、早く還らんことを思ふ、公綱、

『左らば、當所の敵を、苦もなく、追ひ落せしを手柄に、陣を引き候はん』

と告げ、二十七日の夜半を以て、天王寺の陣を拂うて、京師に還る。

正成、聞いて、ほゝ笑み、

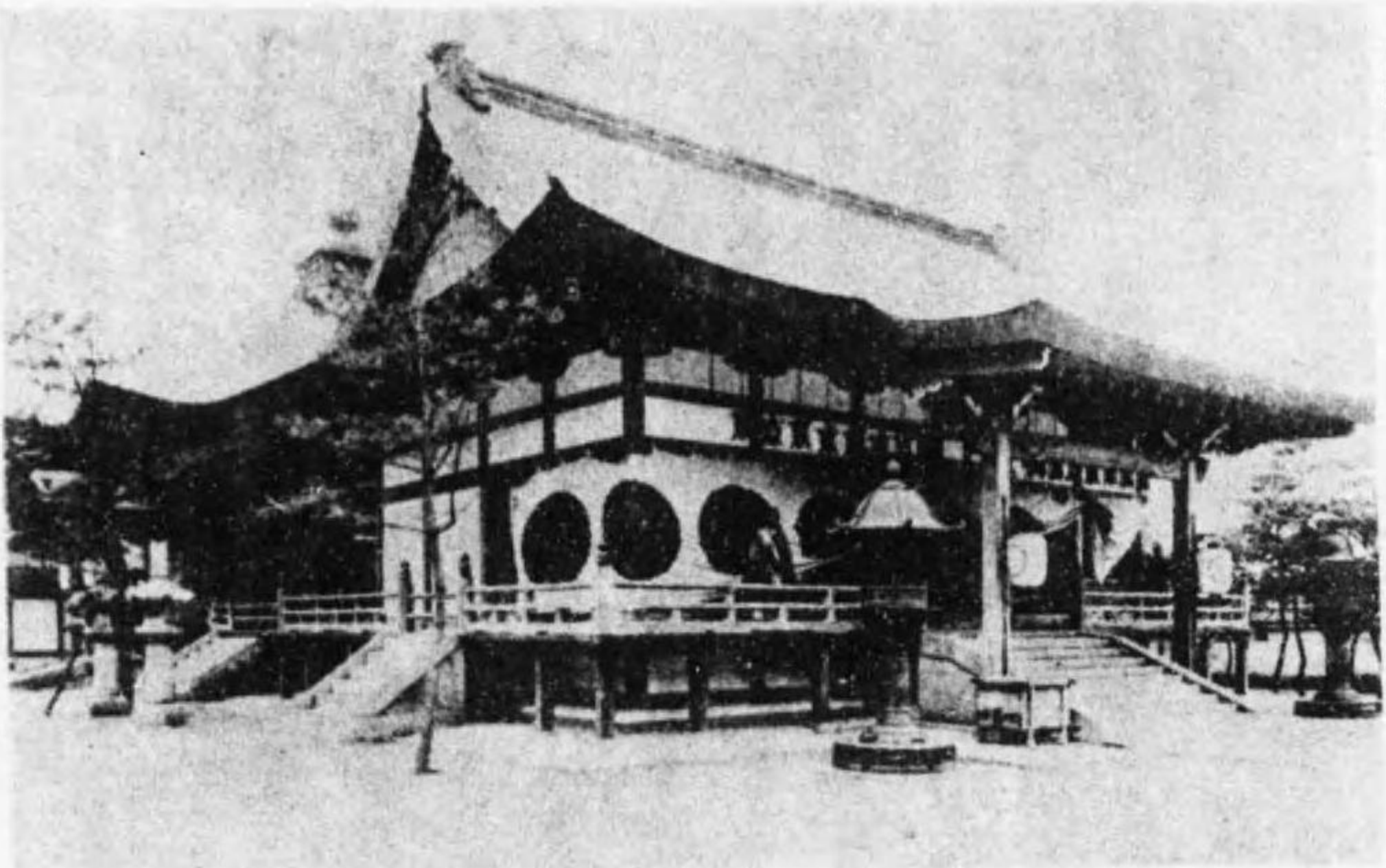
『扱こそ、我が手に乗りつれ』

其翌曉、復たも出でて、天王寺に陣す。

是ぞ、野武士を、狩り出して、篝火を、諸所に焚かしめ、數萬の大軍、夜々に押し寄せ、日々に來り加はる如くに、見せかけて、公綱を脅かせるもの。
正成の計略、又もや、其圖に中る。

八

聖德太子寶殿
此れは天王寺に於ける聖德太子の寶殿にして其尊靈を祀る。



正成の軍、號令、嚴明にして、秋毫も侵さず、民心、益々服し、士氣、益々振ふ。
八月三日、正成、士卒を率ゐて、住吉に詣で、神馬三頭を獻じて、王業の恢復を祈る。

刀一口、鎧一領を納む、正成、頓て、老僧に對面して、
鞍馬一頭、太

『上宮太子、天下の安危治亂を勘へて、日本一州の未來記を、書き置かせ給へるもの、當山に納め置かる、ぞ、傳へ承はる、苦しからずば、今の時に當り候はん卷ばかり、内覽を許させ給へ』
と請へば、老僧、威儀を正して、

『太子、神代より、持統天皇に至るまでの舊事本記三十卷を記し給ふ、其書、傳へて、卜部宿禰の許に在り、外に、一卷の祕書を留め給ふ、是れぞ、持統天皇以後に於ける天下治亂の識文に候なる、輒すく、人に示すべきものにあらずと雖も、御邊の忠義の心に免じ、別儀を以て、見參に入れ候べし』

と答へ、直に祕府の鎖鑰を開きて、恭しく、金軸の書を、捧げ出づ。

正成、手を清め、口を漱ぎて、披き覽れば、中に、不思議なる一段の記事こそあれ、其文に曰く、

『人王九十五代に當り、天下、一たび亂れて、主、安からず、此時、東魚來りて、四海を呑み、日、西天に没すること、三百七十餘ヶ日、西鳥來りて、東魚を食し、其

後、海内、一に歸すること三年、獼猴の如きもの、天下を掠むること、三十餘年、大凶、變じて、一元に歸す』
正成、讀み了りて、奇異の感、むら／＼と湧く、繰り返し、讀み來ること一再、忽ちハタと、小膝を拍ち、衆を顧みつゝ、徐ろに、

『扱て／＼、不思議なる識文かな、抑、當今は、正しく、人王の始めより、九十五代にこそ、當らせ給はめ、鎌倉の暴虐、無道に由りて、遠く隱岐へ遷幸あらせ給ひぬ、天下、一たび亂れて、主、安からずとは、此事にぞあらん、相摸入道の、主上を流し奉つりて、天下を、我物顔に振舞ふもの、東魚來りて、四海を呑むと云ふに當るべし、西鳥來りて、東魚を食すとあれば、或は、中國九州の豪傑、出でて、關東を滅ぼし候はんか、日、西天に没すること、三百七十餘ヶ日とあるより推せば、明年の春の頃には、主上、隱岐より、還御あらせて、再び御位に復し給ふべし、神示、此の如し、頼母しやな、天下の騒亂、頓て鎮まり候はんずるにこそ、面々、何れも、心惑はず、益々忠勤を勵み候へ』

と説き示す、明斷、神の如し、衆、聞いて、感奮止まず、士氣、是より、更に、益々振ふ、何ぞ知らん、是ぞ天下の人心を鼓舞せん爲めの正成の方便ならんとは。

高時、正成復た起りしと聞きて、大に怖れ、將さに大舉して、討滅せんとす、正成、早くも、傳へ聞きて、

『天王寺は、平場なり、大軍を引き受けて、戦ふべき地にはあらず、若かず、金剛山に、城を構へて、敵を拒がには』

と思ひ、直に天王寺を、引き拂うて、赤坂に還り、急に、千早城を築く。

公郷塚

藤原師賢埋骨の地

大納言藤原師賢の墓は、下總國香取郡小御門村名古屋區字小帝に在り、一堆の丘上、樹木、之れを蓋ふ、面積百八十三坪、繞らすに、木柵を以てす、里人、之れを公卿塚と稱して、其何人の塚たるを知らず、淀侯稻葉正邦、

此地を領す、其臣磯邊昌言、佐倉風土記を著はし、始めて、師賢の墓たることを表し、明治十一年三月、碑を墓前に建て、千葉縣令柴原和、其文を撰ぶ。
明治十二年、村民澤田惣右衛門等、官に請うて、祠を建つ、特旨を以て、小御門神社の號を賜ふ、此年、又碑を建て、三島毅、其文を撰ぶ、十五年六月二十九日、別格官幣社に列せらる。

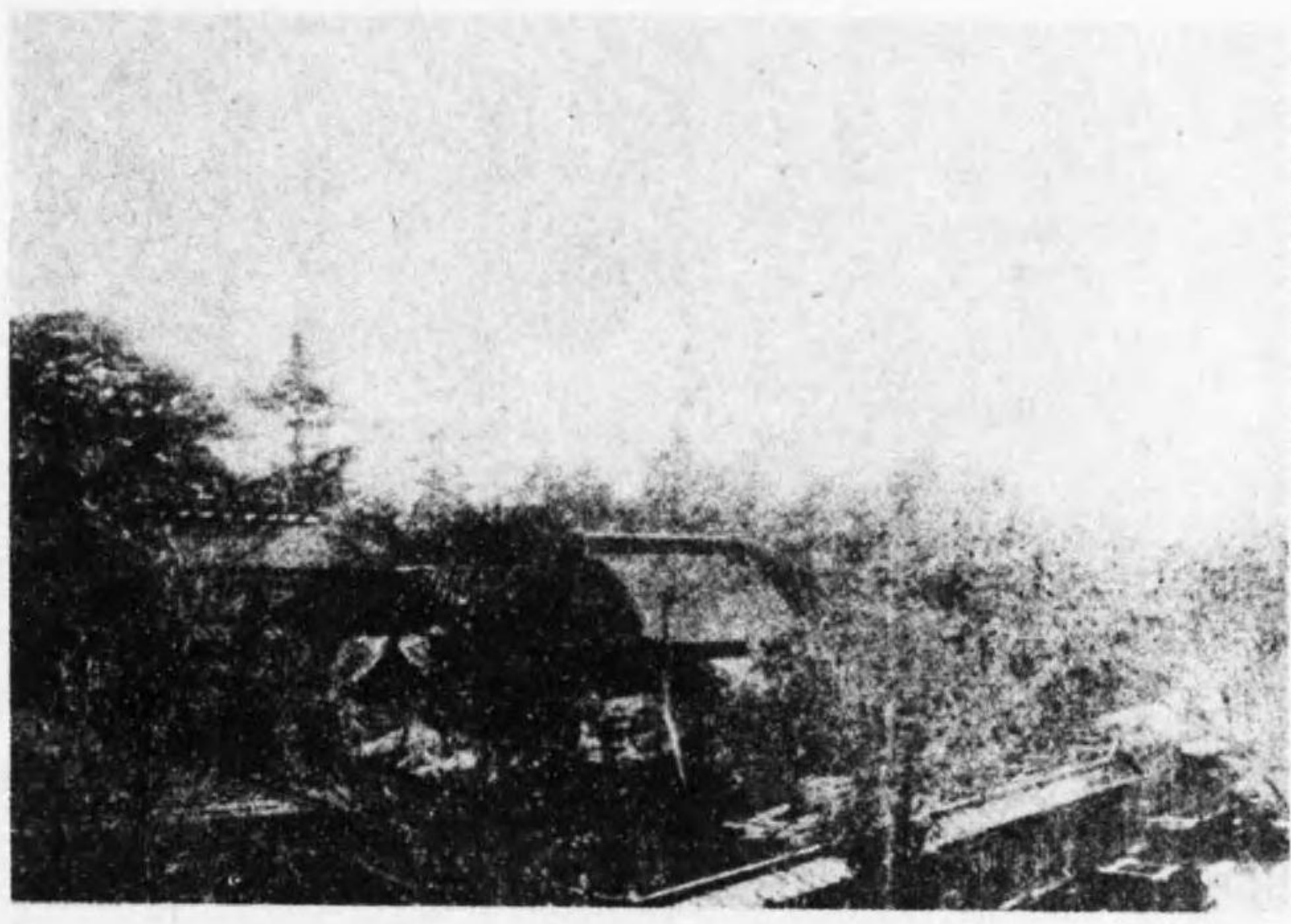
神社の南方、一町餘の地に、師賢の館址あり、西南の二方、今、尙、湟壘の形を存す、師賢の下總に流さる、や、領主千葉介貞胤、其族大須賀次郎胤時に命じ、館を此に設けて、師賢を幽せしむ、師賢、謫居五月、元弘二年十月二十九日、疾んで薨ず、年三十二、後、太政大臣を贈り、諡して、文貞公と曰ふ、内大臣師信の子、家を花山院と稱す、二子あり、曰く家賢、曰く信賢。

死して、君に代り奉つるも忠、生きて、君に代り奉つるも忠、忠に、生死の別はあらず。

尹大納言師賢の、乘輿に擬して、叡山に登れるもの、寔に

君命の止むを得ざる所、忠臣は、忠に厚きも、僞君の僞を
掩ひがたく、怪風、高く簾を捲きて、幻日、忽ち光を失ふ。

小御門神社
小御門神社は下總國香取郡小御門村大字名古屋の小帝に
在り藤原師賢を祭る今別格官幣社たり。



山徒散じぬ、
大事去りぬ、
師賢、倉皇、
叡山を下り
て、笠置に
遁れ還り、
復た眞皇に、
行宮に待す
ること、凡
三旬。
既にして、
王師敗れ、
笠置陥る、
師賢、主上
を扶け参ら
せて、忍び

て、山を下る、夜暗うして、風雨烈し、終に路を失して、
主上にはぐれ奉つる。

師賢、岩の蔭、樹の下に、休みくして、覺束なくも、山路
を辿り來り、計らずも、賊手に陥りて、楚囚の身となる。
翌くれば、元弘二年三月、主上は、隱岐に遷され給ひ、越
えて五月二十二日、師賢は、下總に流さる。

死生、命あり、窮達、亦、天のみ、世を觀じ、時を思へば、
悲むに足らず、我が憂ひは、憂ふるに足らず、人々、皆、
『花の都を、はるく』と、吾妻の末に、越えさせ給ふこ
との悲しさよ』

と打ち嘆けば、師賢、
別るとも何か嘆かん君すまで

うき故郷となれる都を
との一首を詠じて、涙一滴をも落さず、我が憂ふる所は、
我身の外に在り。

六月二日、下總に達し、千葉介貞胤の許に、預けらる、君
待橋に、何をか待ち、形見濱に、何をか思ひ出づる。
世は、濁りに濁れども、空は、高く澄み増さり、胸は、曇

りに曇れども、月は、清く牙え渡る、濁るは、世の姿、澄
むは、天の心か、

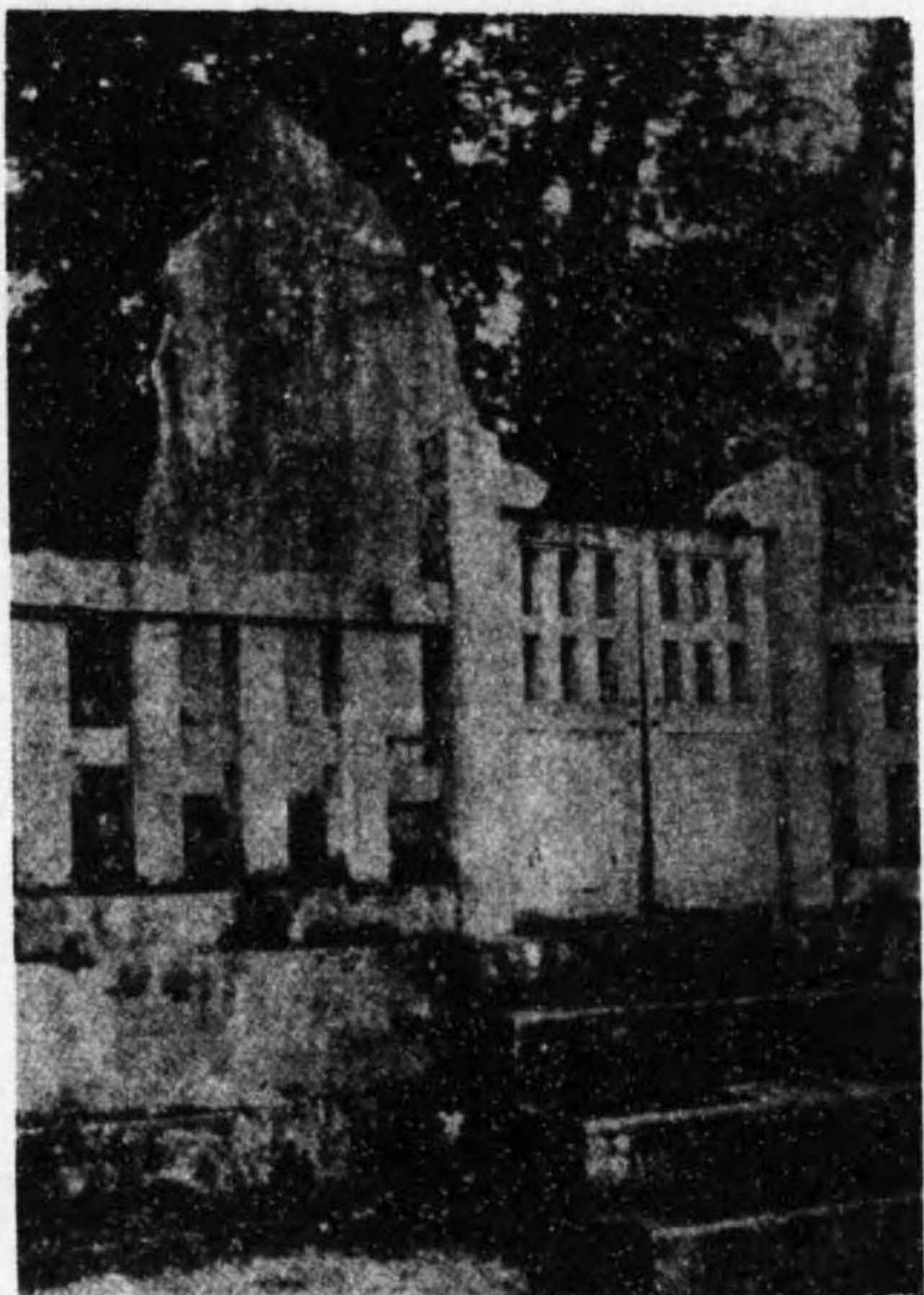
故郷と同じ空とは思ひ出し

かたみの月の曇りもぞする

梢に戦ぐ風は、轉た哀れを惹き、叢に啣く蟲は、最と寂
しさを添ふ、秋の情は、常の人さへ腸を斷つ、

藤原師賢の墓

藤原師賢の墓は下總國香取郡小御門村大字名古屋の小帝に在り初め公卿塚
と稱す後碑を建て、之れを標し三島毅其文を撰ぶ。



いにしへは露わけわびし蟲の音を

たづねぬ草の枕にぞ聞く

月を見ては、君を思ひ、秋に感じては、世を嘆く、世を嘆
き、君を思ひては、復た身を嘆き、家を思はん時とてもあ
らず、

『主、憂ふる時は、臣、辱かしめられ、主、辱かしめら
る、時は、臣死す、今や、萬乗の君さへ、遠島に在はし
ぬ、我等如きは、身を裂かれ、骨を刻まるればとて、何
の傷むことかは』

鼎鑊、甘きこと、飴の如く、辛酸、淡きこと、水の如し。
其後、遷されて、名古屋の里に居る、君に遠さかること一
歩、益々君の御上を思ひ、君に別る、こと一日、彌々君の
御身を案じ、憂悶、病をや醸せる、其年の十二月二十九日、
忽ち溘焉として逝く、實にや、人生如露亦如電。

純忠の士、竟に中興の世に値はず、尋ねぬ蟲の句、かたみ
の月の句を思へば、秋ならぬ日も、尙、人の哀れをぞ誘ふ。

妙宣寺

日野資朝埋骨の地

權中納言藤原資朝の墓は、佐渡國佐渡郡眞野村大字竹田村妙宣寺の境内に在り、小さき石を以て、五輪の形に作る、高さ三尺、方五寸ばかり、樓門の側、枯松殘株間に在り。

正中元年、後醍醐天皇、鎌倉の專横を怒りて、討し給はんとす、資朝、及び右少辨俊基、其議に與かり、事、露はれて、鎌倉に拘はる、後、俊基は、放ち還され、資朝は、佐渡に流され、守護本間山城入道の澤田の館中に、拘はる、こと七年、元弘元年五月二十九日、國府大城戸の西南、岩野に於て、本間三郎の爲めに、斬らる。

上

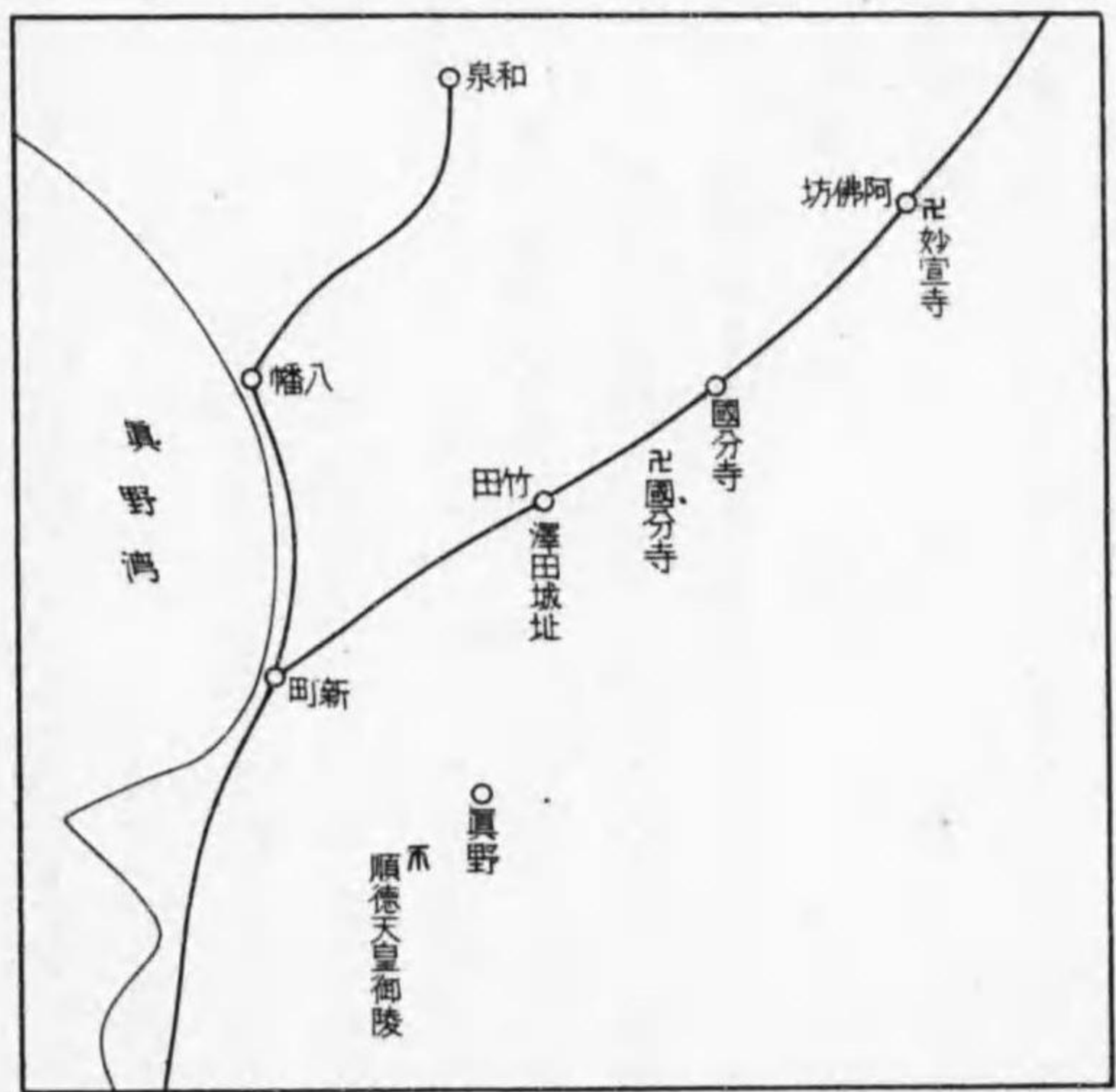
大事、一婦人の口より泄れて、密計、忽ち六波羅の耳に入る。

資朝、其謀主たるの故を以て、拘はれて、佐渡に流されぬ、

昨日までは、雲上の客、月の桂も攀づべきを、今日は、變はる遠流の身、瀬は淵となる浮世なりかし。

資朝、國府の地頭本間山城入道の館の中に、押し籠めらる、一叢、茂れる竹林の蔭に、膝を容る、ばかりの家を構へ、塀を設け、堀を繞らし、警固、おさく、嚴重なり。

日月、陰房の中を、照らさず、春さへ、涙に暮る、身の、佐渡澤田城址略圖



秋は、愈々心
哀し、
晝さへ、
憂に沈
む身の、
夜は、
益々愁
深し、
君を思
ひ、京
を思へ

ば、鐵の心も、裂けぬべく、國を憂ひ、世を憂ひては、石の腸も、斷ちぬべし。

雨に愁ひ、風に苦しむこと、七年が間、思はじと思ふ程、尙、思はる、は、實に、世の行末にこそあれ。

北條相摸入道高時、君を怨み奉つること、深きにつけ、資朝を憎む心も、彌や増さり、終に山城入道に命じて、其首を打たしめんとす。

二階堂出羽入道道蘊、切に諫むれども、相摸入道、更に、聽き入れず。

資朝の子阿新、年、甫めて十三、京師に在りて、斯くと、傳へ聞き、心の悲しみ、言ふばかりなし、

「切めて、今生に於て、今一度、御目に懸からばや」と思ひ極め、強て止むる母の許を受け、一僕を従へて、越前の敦賀に到り、身を商船に託して、風を凌ぎ、浪を冒しつ、遙々、佐渡の島へと、渡り着く、山城入道、阿新を、館の中に留めて、懇ろに劬はりぬ、左れども、

「今日明日にも、失ひ奉つらんものを、今、逢はせ参らせんこと、却々に、冥途の御妨げともなりなん、特には、

關東への聞えも、憚りあれば、隔て参らせんこそ、双方の爲めなるべけれ」

と思へば、今日は、明日はとて、父子の對面を、支へて、許さず。

資朝、何時しか、我子阿新の來りて、館に在りと聞き、一目、相見んと思ふ心、躍りて、抑へがたし、切めて、聲にても、聽かばやと思へど、間、隔たつて、咳、一つだにも、聞えず、

「京、北國と隔つれば、是非こそなけれ、同じ島、同じ館に在るものを、など、入道の逢はせざる、我れは、禁籠の身、子は、幼少の者、一つ所に置けばとて、何の仔細もなからんものを、入道の餘りに情なきぞ、恨みなる」日頃は、豪氣の性なれど、子を思ふ心の底ぞ、遣る瀬なき。五月二十九日の暮近き頃、時ならぬ人の足音の聞ゆるに、若しや、それかと起き直れば、逢はずもがなの本間三郎が手の者、

「水らく、御湯も召され候はねば、御行水を進らせん」と言ひつ、錠を開きて、門外に出だす、

「扱こそ、我れを失はんとするにぞあらめ、我れに逢はんばかりに、遙々、幼き者の來つるものを、一目、見ずして、果つることの、残り多さよ」

資朝、暫し、涙に咽びけるが、又忽ち驟然として、思ひ返しぬ、

「嗚呼、我れながら、愚痴なりき、最早、思はじ、思ふまじ」

塵心、忽ち此に斷ゆれば、胸裏の憂愁、晴れ去つて、跡もなし、頓て、昇き据ゆる輿に、打ち乗り、此處よりは、十町ばかりの河原へと送られぬ、資朝、泰然として、數皮の上に住直り、

「筆やある」

徐かに、紙筆を寛めて、書き残す辭世の一偈、

五蘊假成形。四大今歸空。

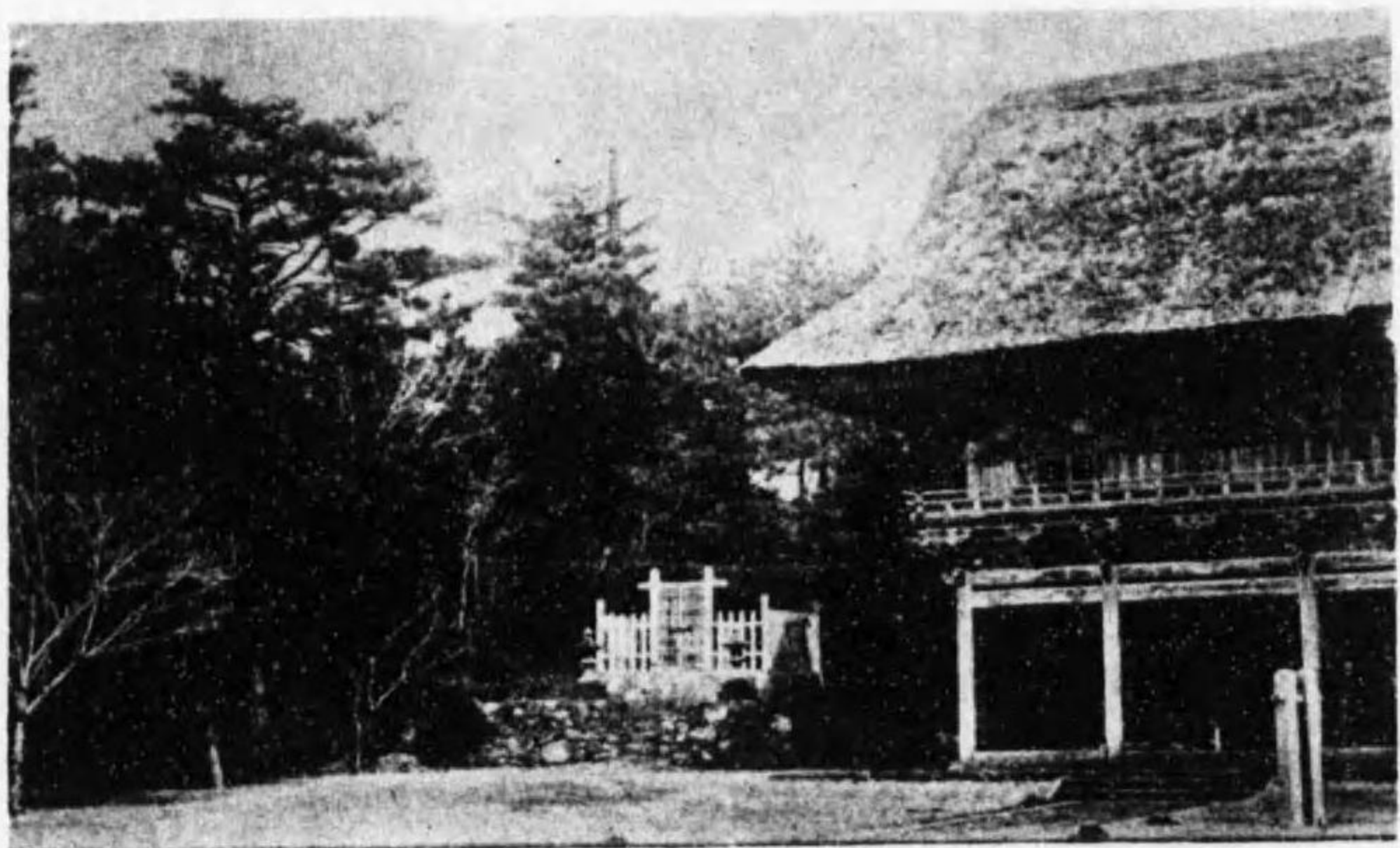
將首當白刃。截斷一陣風。

年月氏名を、記し了りて、筆を擱く。

ソレと、聲を掛くれば、首は、コロリと、前に落つれども、骸は、元の儘に坐りて、倒れず。

妙宣寺

佐渡國佐渡郡真野村大字阿佛坊に妙宣寺あり、日野中納言資朝の墓は其の境内に在り。



骨を見せしむるこそ、恨みなれ」

下

幽明、路を隔てぬ、今は、愈々相見るべからず。

老僧、資朝の屍を收めて、茶毘となし、骨を阿新の許に贈れば、一目見て、忽ち撞と、打ち倒れ、

「御存生の中に、來つるものを、空しく、白

と言ひつゝ、聲を放つて、嘆き悲しみ、宛がら、涙に袖も絞らんばかり、暫し正體ともあらず、頓て、憤然として、我れに返り、

「好しく、此上は、入道の首を討つて、父の仇を復すべきぞ」

と思ひ定め、

「我れ、暫し、此地に留まるべし、汝は、父上の御骨を、持ち歸りて、高野山に葬り呉れよ」

と告げて、僕を還へし、其身は、病と稱して、獨り後に留まり、晝は、夜着を被りて、態と、呻吟し、夜に入れば、密かに出でて、入道を覘ふ。

一日過ぎ、二日経れども、未だ機を得ず、心、漸く煩悶す、一夜、風烈しく、雨急なり、暗惨の色、天地を籠めて、物凄まじ、阿新、

「日頃の望を遂ぐるは、今宵ぞ」

と心に喜びつゝ、密かに、時刻の來るを待つ、夜、漸く深く、人、漸く靜まる、阿新、イザとて、本邸に忍び入り、徧ねく、部屋々々を、探し索む、如何にやしけん、入道の

姿、終に見當らず、唯、三郎をのみ見付け出だしぬ、三郎は、父の首を斬れるもの、阿新、

「入道を討ち得ざるこそ、口惜しけれ、左れども、三郎は、父に刃を加へまつれば、是も、亦、仇なり、彼奴を殺すも、聊か、恨を報ゆるに足るべけれ」

と思ひ定め、ソツと、隙間より窺へば、三郎、軒高く、燈下に眠りて、二本の刀、其枕に靠れかゝる、阿新、其刀を奪うて、刺さんと欲す、左れども、室内、燈火、甚だ明かし、若し、眼を覺まさば、大事ぞ、入らんと欲して、入り得ず、空しく、室外に、躊躇すること、少時。

會々群蛾、飛び來つて、障子に集まる、阿新、天の輿へと喜び、唾を付けて、ソツと、障子を破れば、群蛾、飛んで、室内に入り、燈火を回はりくゝて、飛ぶこと數回、忽ち火を撲ちて、フツと消す。

今は、心安し、阿新、突と、室内に入つて、刀を奪ひ、スラリと、抜き放ちて、三郎の胸に擬す、アワヤ、突かんとして、不圖、

「睡れるものは、死人に等し、之れを刺すは、卑怯の業

ぞ」

と心付き、足を擧げて、ハタと、枕を蹴れば、三郎、驚いて、跳ね起きんとす、阿新、早くも、ツブリと、突き刺せば、胸より背まで、抜け通る、頓て、止めを刺しつゝ、仕合せ好しと、此處を抜け出で、其儘、竹叢の中に、忍び入る、家人、變を知りて、上を下へと、騒ぎ立て、

「まだ、邸内に忍び居らん、探し出して、討ち取れや」と口々に犇めきつゝ、早、傍近く尋ね来る、阿新、今は、是迄ぞと、思ひ定め、將に刀を取つて、自殺せんとす、忽ち驟然として、

「イヤ、妄りに死すべからず、父の志を繼ぎて、君の爲めに盡し奉つらんこそ、正しく、忠孝兩全の道なるべけれ」

と思ひ返へし、緊かと、刀を握りて、運を天に任す、既にして、追手、此處を過ぎ行く、阿新、

「イデ、此隙に、遁れ去らばや」

ソツと、竹叢の中より、立ち出づ、左れども、周圍に濠あり、廣さ二丈ばかり、翼なき身の、踰え得べくもあらず、

れば、危し」

と思ひ、足に任せて、馳せ去る、既にして、天はほのぼのと明く、阿新、

「人に見られなば、一大事ぞ」

身を麻畑の中に、潜ませて、日の暮るゝを、待たんとす、追手數十人、行く、畑中を搜して、此處を過ぐ、阿新、ハツと驚きて、思はず、身を縮む、冷汗、背に決ねし。

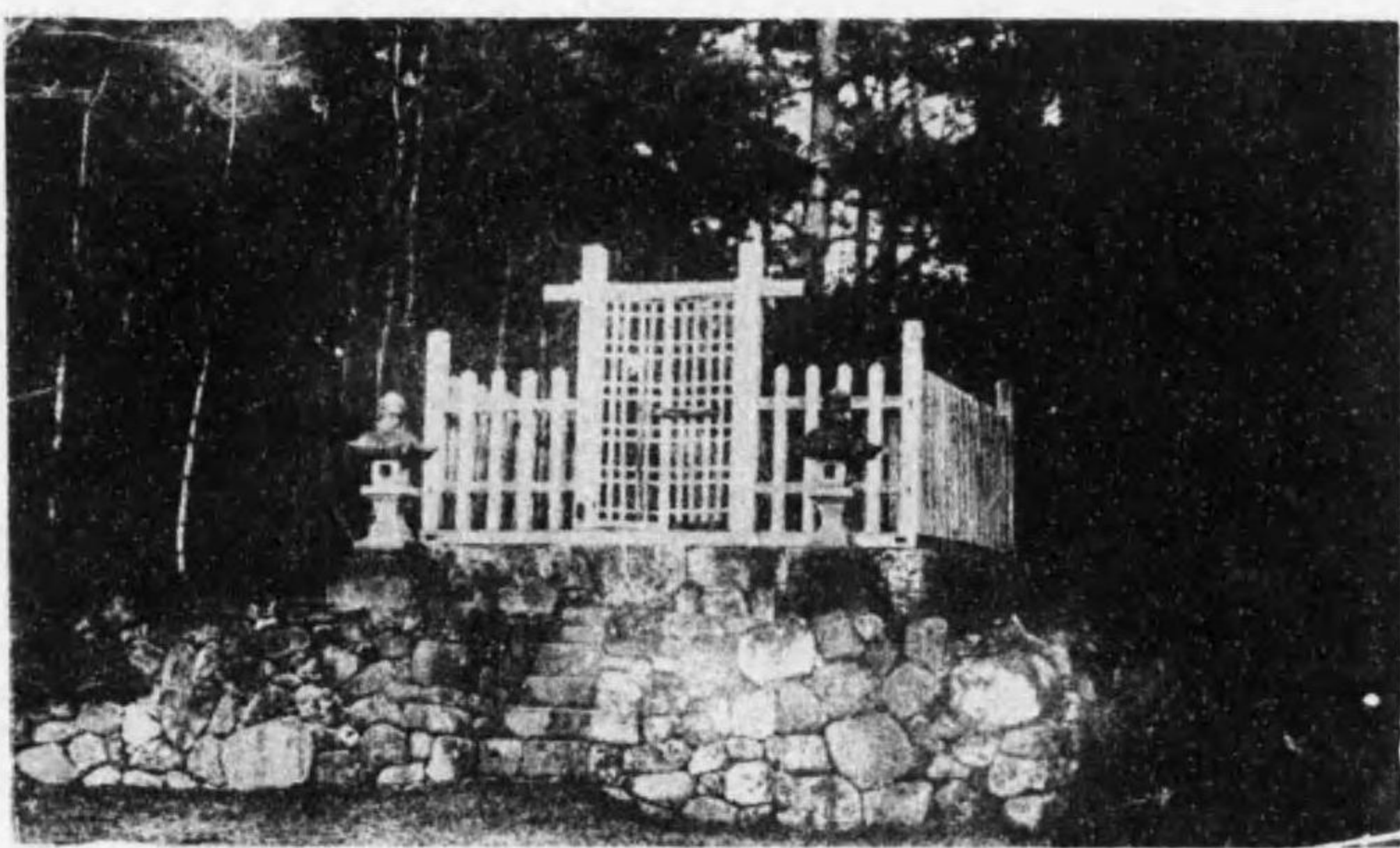
夜に及び、復た出でて行く、道にて、二人の修験者に會ふ、身は疲れ、腹は饑ゆ、今は、一步も行くべからず、阿新、跪いて、哀を乞へば、修験者、快く諾ひ、自ら脊負ひて、野浦に抵り、今や、錨を抜かんとするの船に託す、斯る所へ、追手、馳せ來れども、船は、既に岸を離る、阿新、虎口を免がれて、越前に着し、終に京師へと還る。

既にして、鎌倉陥り、高時滅ぶ、阿新、父の志を繼ぎて、王事に勤め、父の官を襲ぎて、中納言に陞る。

惨風悲雨五百年、殘碑、苔蝕して、今も、碧血の痕かと思はる。

阿新、如何にせばやと、獨り心を苦しめつゝ、屹と、四邊を見遣れば、濠の畔に、大なる竹多し、阿新、ニッコと、笑みつゝ、

日野資朝の墓
日野中納言資朝の墓は妙宣寺の樓門の側に在り。



「オ、好きものこそあれ」スルと、竹に攀ち登れば、竹幹曲りて、濠の彼方に偃す、阿新、突と、地上に降り立ち、難なく、館の外に、脱れ出づ、振り返りて、館内を見れば、燈火、縦横に馳せ違ふ、阿新、

「愚圖々々す

葛原岡

日野俊基刑死の地

相模國鎌倉扇ヶ谷より、化粧坂を登りて、頂上に達すれば、右手に、稍、平かなる高地あり、之れを葛原岡とす、源氏山の裏手の方に當る。

岡上に、一高碑あり、明治十七年十一月の建設に係り、題して「贈從三位日野公墓碑銘」と曰ふ、實に南朝の忠臣日野右少辨俊基の碑にして、柳原前光、其文を撰ぶ。一溪圃を隔て、一小祠あり、葛原岡神社と曰ふ、俊基の靈を祀る。

此地は、元弘二年五月二十日、俊基の斬に處せられたるところ。

上

日野右少辨俊基一たび、捕はれて、鎌倉に送られしも、詭辯、功を奏して、忽ち放ち還へさる。

左れども、事實は、永く掩ふべからず、圖らずも、僧正忠

圓の白白に依りて、俊基の秘密、盡く顯はれ、二たび、捕

はれて、

葛原岡
葛原岡は相模國鎌倉郡鎌倉町扇ヶ谷より假粧坂を登りたる處に在り古時藤澤方面に向ふ通路に當る。



鎌倉に送られ、直に諏訪左衛門尉の小町大路の邸に、幽せらる、口々は、嚴しく、蜘蛛を結ひ立て、一室の中も、鐵窓の下に、異ならず。俊基、今

は、何事も争はず、心、靜かに、法華經を誦じて、更に、生死を念とせず、前には、一應の訊問もありつれ、今は、何の沙汰とでもなく、

『右少辨は、謀反の張本、遠國に流すまでもあらず、疾く疾く、鎌倉中にて、首を斬るべし』

と言ふに決す、此事、何時しか、邸中に傳はれば、俊基、早くも、漏れ聞きて、

『我れ、聊か死を恐るゝにはあらず、唯、多年の心願として、法華經六百部を、讀誦し奉つらんとし、今、三の二を果たして、尙、二百部を餘せり、六百部に滿つる程の命を、待たれて、其後、兎も角もせられ候へ』

と請ふ、無道の入道にも、聊かの情けはありけり、

『其れ程の大願を、果たさせざらんも、罪なり、何か苦しからん』

と告げて、之れを許す、俊基の悦び、言ふべからず、是れより、日夜、法華經に、眼を曝らして、瞼目をも振らず。

一卷を讀み了れば、一卷だけの命は、縮まり、二卷を誦し去れば、二卷だけの死は、近づく、三卷、四卷、五卷、次

第に讀み行き、讀み進みて、残れる卷數こそ、此世に餘れる己のが命數なりけれ。

日野俊基の碑

相模國鎌倉町の葛原岡に在り日野俊基終焉の地なり。



兎角して、

跡二百部の

法華經を、

誦し終りぬ、

命は、今こ

そ盡くれ、

心は、何時

の世までも、

安からん、

『今は、

此世に思

ひ置くこ

となし、

疾く、首

を刎ねら

れ候へ』

と促がせば、諏訪左衛門尉、

『左らば、疾く、斬り奉つれ』

五月二十日、俊基を、張輿に乗せて、小町大路の邸より、昇き出づ、俊基の家臣後藤左衛門尉助光、北の方の文を携へて、忍びて、鎌倉に馳せ下り、近きほとりに、宿を求め、

『好き便もがな、事の仔細を、申し入れ參らせんに』

と只管、折りを窺へども、便を得ず、心ならずも、日を過

ごすうち、

『今日こそ、都よりの召人、斬られ給ふなれ、あな痛は

しや』

と沙汰するを聞きて、助光の驚き、言ふばかりなし、

『此上は、叶はぬまでも、願ひて見ん』

と思ひ定め、見え隠れに、其跡より、跟き行けば、俊基の輿は、小町より、扇ヶ谷に到りて、あふぐばかりの化粧坂に、分け登る。

羊腸たる路は、山の腰を回ぐりて通じ、蒼鬱たる樹は、人

の頭を掩うて暗し、左に折れ、右に曲り、うねりくくして、攀ち登る、後なる輿丁の頭は、前なる相棒の腰のあたりに在り、輿は、斜めに傾きて、中なる人は、仰向けに、後に凭れ掛かる。

頓て、坂盡きて、馬の脊の如き所に出づ、此れより、進むこと、一町ばかりにして、葛原岡に出づ、此處なん、今日の仕置の場所、周圍に、大幕を繞らして、中央に、敷皮を布く。

工藤二郎左衛門尉、俊基を請取りて、敷皮の上に置く、夏とは言へど、小草の風も、物淋し、助光、悲しさ、噓へんに、物もなし、我れを忘れて、左衛門尉の前に、走り出で、

『これは、右少辨殿の伺候の者にて候、最後の様、見奉つらん爲め、遙るくと参りて候、北の方の御文をも、見参に入れ候はんに、暫しの名残を、惜ませ給へ』

と言ひも敢へず、はらくくと、涙を垂る、左衛門とても、涙あり、

『仔細候まじ、早、暮の中へ御参り候へ』

とて許せば、助光、轉ぶばかりに、俊基の前に、滑り行き、

其寔れ果てたる姿を、見るより、言葉はなくて、只、涙のみ落つ、俊基、誰やらんと見れば、思掛けなき助光なるに、

葛原岡神社
相模國鎌倉町の葛原岡に在り日野俊基の靈を祀る。



『如何にや、左衛門』
と言ひしばかり、これも、涙に、言葉も出でず、助光、漸う、
『北の方の御文にて候』
と言ひつ、

前に置きて、又も、泣き伏す。

俊基、其人に逢ひたらん心地しつ、急ぎ取つて、披き見れども、舊き涙の痕、新らしき涙の雫、紙上に充ち満ちて、読みも分かず。

兎角して、漸うに、読み了り、矢立を借りて、返事を認め、鬢の毛を把つて、文の中に、巻き收め、イザとて、助光に渡せば、緊かと、懐の中に入れて、又も、泣き沈む。

名残は、惜しむ程、尙、盡きがたし、左衛門尉、暮の中に入りて、

『餘りに、時の移り候』

と申せば、俊基、疊紙を披きて、

秋をまたで葛原岡に消ゆる身の

露のうらみや世に残るらん

との一首の和歌を認め、其末に、

古來一句 無死無生 萬里雲盡 長江水清

との一首の辭世を記し、筆を擱きて、鬢の毛を、摩で上ぐれば、刀光一闪、首は、前にと落つ。

天、定まりて、人に勝ち、世、治まりて、譽、更に芳ばし、

葛原岡に消えし身の、露のうらみも、俱に消ぬらん。

赤松城址

赤松圓心據守の地

赤松城址は、攝津國武庫郡六甲村大字茶畑の山中に在り、廣表數町、石垣、城壕、井戸等の遺址、今、尙、整然として存す、明治四十一年、神戸史談會員の發見せる所。

城東の上り口に、七曲あり、屈曲七町ばかり、七曲の北に、二の尾、一の尾あり、城西の篠原村に、城下口あり、城の南麓に、戰場ヶ谷あり、而して、求女塚は、其南方に在り、赤松圓心の築けるが故に、赤松城と稱す。

赤松城を距ること一里、武庫郡西灘村大字上野村の山上に、一城址あり、廣表二町ばかり、之れを摩耶城址とす、元弘三年閏二月十一日、圓心の京兵を撃破せし摩耶城なるものは、此摩耶城にあらずして、全く、右の赤松城なること、地理の上に於て、争ふべからず、左れば、本項に掲ぐる摩耶城とは、總て六甲山の赤松城の事なりと知

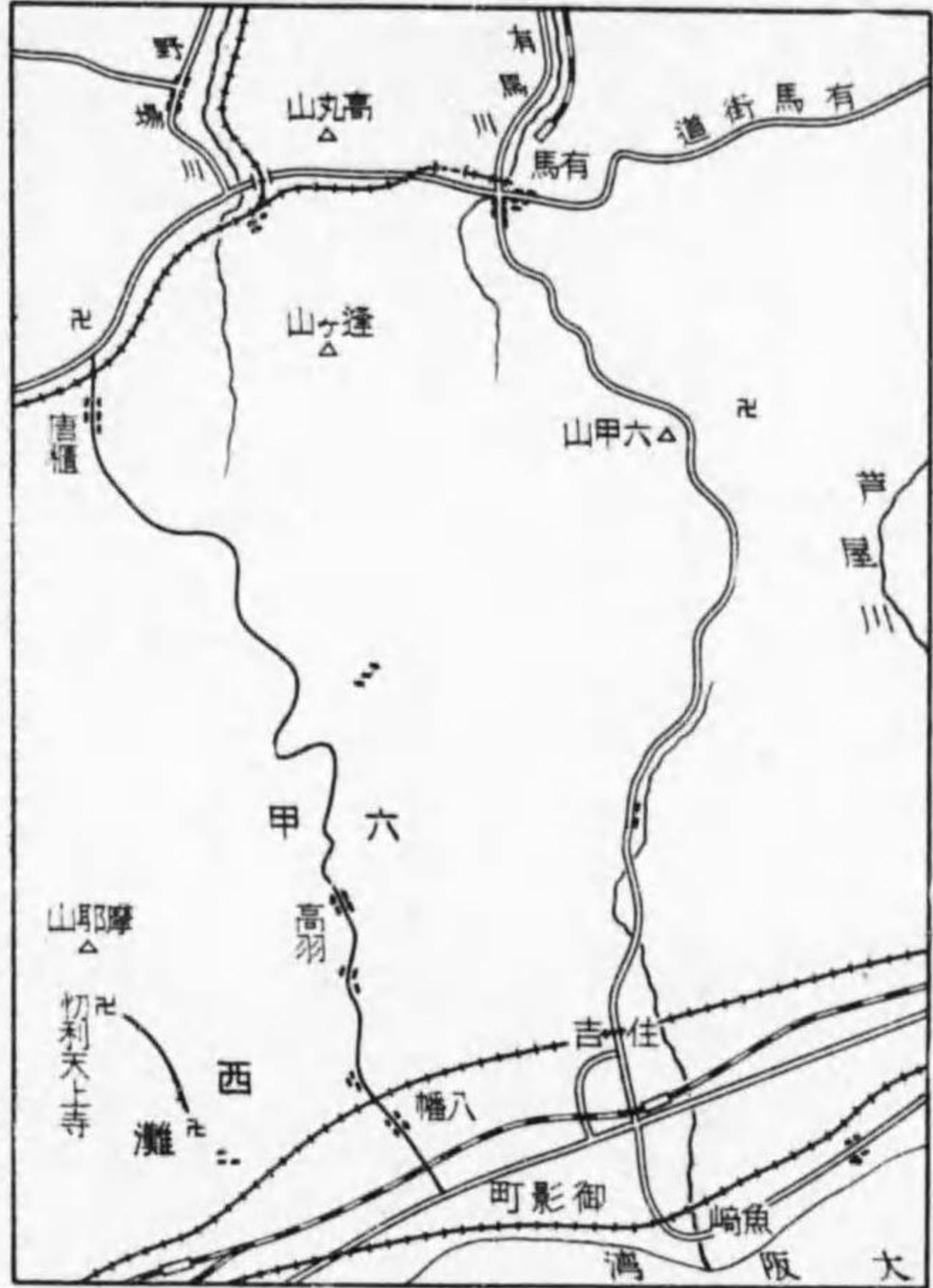
るべし。

赤松圓心入道則村、播磨の佐用庄に在り。
三子則祐、大塔宮の令旨を捧げて、吉野山より、馳せ来る、
圓心、欣然として、命を奉じ、諸臣を召して、

『家門の面目、何物か、此れに過ぎん』

と告げ、急ぎ、城を若繩山に構へて、勤王の義旗を翻へす、

赤松城址地圖



佐用、上月、小寺、頼宮の黨を始め、旬日の間に、來り屬するもの、一千餘人、則祐、乃ち衆に對して、

『一天萬乗の君に、頼まれ奉つること、武門の名譽、此上あるべからず、各々身を捨て、命を輕んじて、忠戦を勵み候へ』

と諭せば、衆、皆、踴躍して、これに従ふ。

圓心、杉坂、山里の二ヶ所に、關を設けて、山陰、山陽兩道の通路を塞ぐ、會々備前、備中、備後、安藝、周防の兵、上洛の途次、來つて、三石に在り、

『イデ、押し破つて、通るべし』

と犇めき、諸勢、力を合はせて、中里の關を、撃ち破らんとす、圓心の次子貞範、船坂山の險を扼し、撃つて、敵を卻く。

三石の豪族伊東大和次郎、忽ち鎌倉に叛きて、圓心に屬し、其居館の上なる三石山上に、城郭を構ふ、西國の通路、今や、益々塞がる、圓心、乃ち大和次郎に向ひ、

『御邊は、此處にて、西國の勢を支へ給へ、某は、京師へ攻め登りて、其空虚を衝き候べし』

赤松城戰場圖



と告げ、

元弘三年
二月、自ら兵を率ゐて、攝津に入り、城を、摩耶山上に構へて、
根據の地とす、附き隨ふ兵士、三千餘騎。
兵威、忽ち近畿に振ふ。

二

金剛山の敵、未だ滅びずして、摩耶山の敵、亦、起る、六波羅の兩探題北條越後守仲時、左近將監時益、聞いて、大に驚き、

『扱は、珍事出來に及べるぞ、京師近くに、敵の足をためさせては、叶ふまじ、疾く、摩耶城を攻め取つて、赤松を退治すべし』

と決し、急ぎ、命を佐々木判官時信、其弟常陸前司時知の二人に下す。

二人、乃ち京兵五千餘騎を率ゐて向ふ、三井寺の僧兵三百餘人、亦、隨ふ、閏二月二日を以て、京師を發し、進んで、攝州武庫の郡に達す。

軍を駐むること數日、十一日卯の刻を以て、兵を求女塚の八幡林より進む、圓心、山上より、望み見ること少時、

『扱は、敵は、西の方より、攻め寄せんぞ、イデ、難所に誘き寄せて、撃ち破らん』
と思ひ、急に、部署を定む。

三

京兵、將さに進んで、西郭に迫らんとす。
一隊の城兵、忽然として、南麓に現はれ、各々矢を放つ、
京兵、

『素破や、敵ぞ』

と言ひつゝ、屹と前面を見渡せば、其數、僅かに一二百人
に過ぎず。

『扱は、小勢ぞ、アレ、討ち取れや』

と勇み立ち、サツと、備を向け直して、奮ひ進む。

城兵、此勢ひに怖れけん、忽ち山上へ逃げ還れば、京兵、
望み見て、益々勇み立ち、

『敵は、逃げ還るぞ、追ひ駈けて、撃ち取れや』

と呼はりくゝ、何の思慮にも及ばず、採みに採んで、南
坂を、馳せ登る、人馬、與に呼吸をも、繼がず、進み進
で、七曲に到れば、險路、羊腸として、曲り曲る、

『迂濶に進まば、過ちあらん』

京兵、皆、躊躇して、進まず。

一隊の城兵、又忽然として、南の尾崎に、現はれ出づ、則

祐、及び飽間九郎左衛門尉光泰の二人、眞先に在り、

『ソレ射よ』

と嚴しく號令すれば、士卒、矢先きを揃へて、一齊に放つ。
京兵、忽ち弦音に應じて、斃る、者數十人、衆、皆、慌て
ふためき、人の後へくゝと、隠れ避く。

信濃守範資、筑前守貞範の二人、佐用、上月、小寺、頼宮
の黨五百餘人を率ゐて、二の尾に在り、斯くと見るより、
奮然として、

『時分は、好きぞ、ソレ蹴散らせや』

と呼はり、各々鋒を揃へて、猛然として、馳せ下る、勢ひ、
宛がら、風雨の如し、京兵、望み見て、恐れ愕く、

『叶はじ、引けや』

と言ひつゝ、忽ち踵を回らして、逃げ走り、復た留まり、
戦はん勇氣もあらず。

後陣の兵、返へせくゝと、呼はれども、耳にも入れず、ド
ツと、頼れ掛ければ、これも一つとなりて、崩れ立つ。

坂、急にして、路、險はし、走りくゝて、止度もなく、倒
る、人々を、飛び越えくゝて、武庫川の西まで、逃げ來る、

累々たる死屍、二三里の間に連

なる。

時信、時知、今は、再戦の勇氣
もあらず、殘兵一千餘騎を、引
き連れて、倉皇、京師に馳せ還
へる。

圓心の兵威、益々振ひ、備前の
諸豪、漸く心を傾く。

四

時信、時知の二人、敗れ還へれ
ば、六波羅の兩探題、大に驚き、

『勢ひの重ならぬ内に、疾く、
摩耶城を、攻め落せや』

と令し、閏二月二十八日、再び
一萬餘騎の兵を發して、攝津に
遣はす、圓心、斯くと聞きて、

『坐して、敵を待たんよりは、
其不意に出でて、氣勢を挫か

んこそ、好けれ』

と思ひ、自ら三千餘騎を率ゐ、城を出でて、久々知、酒部
に陣す。

待つこと兩三日、三月十日、京兵、進んで、瀬川に達す、
折しも、春雨、降り濺ぎて、天色、濛々たり、圓心、

『合戦は、明日にてぞあらん、暫し、物具の露を乾さば
や』

と思ひ、麾下の士五十餘騎と與に、民家に入りて、雨の晴
る、を待つ。

忽然として、三千餘騎の敵兵、來り圍む、是れぞ、尼ヶ崎
に上陸せる阿波の小笠原下總介實宗の兵。

圓心、敢て驚く色もあらず、五十餘騎を率して、敵中に突
入し、鋒を揃へて、奮然として、喚き戦ふ。

敵兵、十重二重に圍みて、撃てどもくゝ、怯まず、從兵、
見るく討たれて、死するもの、四十七騎、後に殘るもの、
圓心父子、唯六騎。

圓心、手早く、笠印を、かなぐり捨て、敵中に混じ入り、
難なく、昆陽野の西なる味方の軍中に還へる。



御影町
御影町は攝津國武庫郡に在り赤松城址は此地の北方六甲村の高羽に在り一に摩耶城と稱す今は神戸市に入る。

五

京兵前きに、一たび、敗れてより、敵を怖るゝこと、虎の如し、瀬川に留まりて、敢て陣を進めず、圓心、
『久しく戦はずんば、士氣倦まん、兎角は、速かに、勝負を決せんに若かず』
と思ひ、十一日、自ら三十餘騎を率ゐて、進んで、敵情を偵ふ。

京兵、瀬川の東西に屯す、家々の旌旗、東風に翻へる、圓心、馬を立て、敵數を計りつ、

『扱も、思ひの外なる多勢かな、戦はで、勝つべき道はあらず、此上は、死を決して、戦ふべし』

胸中の策、忽ちに決す、乃ち長子筑前守貞範、及び佐用兵庫助範家、宇野能登守國頼、中山五郎左衛門尉光能、飽間九郎左衛門尉光泰等七騎と與に、竹蔭に傍うて、南の山上に、馳せ登る、佐々木常陸前司時知の兵、望み見て、

『素破や、敵ぞ』

と奔めき、旗幟、忽ち動きて、止まらず、

懸かるかと思れば、懸からず、鎮まるかと思へば、鎮まら

ず、圓心、見て、

『扱は、怯氣つきしぞ』

と笑ひ、各々馬を下りて射る、矢々、虚發なし、東兵、瞬く間に、倒れ死するもの、二十五六騎、諸軍、忽ち色めき立ちて、人の後へくと、引き退く、平野伊勢前司、

『素破や、敵は、色めきて見ゆるぞ、アレ討ち取れや』と呼はりつ、眞先きに、進み出づれば、佐用、上月、田中、小寺、八木、衣笠の黨七百餘騎、亦、續いて、馳せ出で、鬮を作り、鬮を叩いて、猛然として、進み撃つ。

大軍、一たび、怯氣つきては、復た進み戦はん勇氣もあらず、先陣、留まらんとすれば、後陣、先づ走り、後陣、返へさんとすれば、先陣、忽ち崩れ掛かる、走りては、返へさんとし、返へさんとしては、又走る、圓心、斯くと見るより、奮然として、

『アレ逐へや、逃がすな』

と呼はり、兵を縱つて、嚴しく追ふ、士卒、勇を振うて、追ひ撃ち、忽ち敵を斃すこと大半。

京兵、益々慌て驚き、子を捨て、主を捨て、又も、京師

求女塚

求女塚は攝津國武庫郡御影町の東明に在り京軍は此地八幡林より高羽の赤松城に攻め寄せしなり。



に、逃げ還へる。

圓心、敵の傷者、捕虜の首を斬ること、三百有餘、命じて、河原に梟す、全軍、意氣益々振ひ、高く勝鬨を揚ぐる

こと三度、

『イザ歸らん』

其儘、軍を

摩耶に旋へさんとす、律師則祐、進み出でて、

『軍の利は、勝ちに乗り、北ぐるを追ふに、若くは候は

ず、今度の寄手は、京都勢の數を盡して、向ひ候なり、此勢共、コ、四五日は、長途の敗軍に疲れて、物の用に立ち候まじ、怯氣の退かぬ間に、疾く攻め給はゞ、一戦の下に、六波羅を攻め落さんこと、何の難くや候はん、是れより、直ぐさま、京師へ攻め上り給ふべし』
と説く、圓心、此れに従ひ、行く、火を沿道の民家に放つて、京師に押し寄す。

東兵、一意、官軍の城を攻むるの時、官兵、俄然、東軍の虚を衝かんと欲す、圓心の意氣、稜々として、菱よりも鋭。

赤松圓心、一度は、敵を赤松城に引受けて、防戦せしも、二度目には、敵を中途に邀撃せんと欲して、軍を進めたるものにして、其陣を駐めたる久々知、酒部は、攝津國川邊郡小田村に在り、即ち尼ヶ崎市の北方、伊丹町の南方に當る、酒部は、今の坂部なり。

毘陽は、稻野村の大字にして、伊丹町の南方に在り。

京軍の陣を駐めたる瀬川は、攝津國豊能郡に屬し、山崎より、西宮市に通ずる西國街道に當る、後年、新田義貞等の官軍、此處にて、足利直義等の賊軍を、撃破したる

事實あり、兵庫方面より、京師に往復するには、必ず通過すべき地點なり。

金剛山

楠木正成籠城の地

金剛山は、葛城山の一峰にして、河内、大和の國境に在り、其西腹なる南河内郡千早村より登ること、二十町にして、絶頂に達す、古刹あり、金剛山寺、又は轉法輪寺と曰ふ、河内、大和の國境は、此寺内に於て、劃せらる。千早城址は、南河内郡千早村の東に在り、一に千劍破城と書し、又金剛山城とも曰ふ、楠木正成の築きて、南河内郡十七所の根城となせる所、山嶮はしく、谷深く、東南の間に、一逕あり、眞に天險の地たり。

楠木兵衛正成、既に赤坂を復し、千早に城き、大塔宮も、吉野に據らせ給ふ。

今は、愈々捨て置くべからず、北條相模入道高時、其一族阿曾彈正少弼時治、陸奥右馬助高直、大佛陸奥前司貞直、名越遠江入道貞家以下、百三十二將に命じて、急に西上せ

しむ、附き隨ふ軍勢數萬騎、九月二十日を以て、鎌倉を發す。七道諸國の兵、亦、陸續、京師に來り集まる、總勢二十餘騎、洛中洛外、兵ならざるはなく、鴨東鴨西、人ならざるはなし。

元弘三年正月晦日、兵を三手に分ちて、京師を發す。二階堂出羽入道道蘊は、六萬餘騎の兵を率ゐて、吉野山に向ひ、阿曾彈正少弼時治は、八萬餘騎を率ゐて、赤坂に向ひ、陸奥右馬助高直は、六萬餘騎を率ゐて、搦手の奈良路より、長崎四郎左衛門尉高資は、手兵を率ゐて、追手の河内路より、俱に、千早城に向ふ。諸將、皆、争うて、功名を立てんと欲す。

阿曾彈正少弼時治、進んで、攝津の天王寺に陣すること二日。二月二日を以て、赤坂城を攻めんと欲し、固く、將士の抜け駆けを戒む、人見四郎入道恩阿、慨然として、本間九郎資貞に向ひ、

『相模入道殿の積惡、争かて、天罰を免れ候へき、我れ

金剛山
河内國南河内郡の東南に位し大和國河内の二國に跨り葛城山脈中の一峰たり河内に屬する山の半腹に千早城址あり。



は、武恩を蒙むること、淺からず、慙じ、長生して、武運の傾くを見んよりは、明日の合戦に、先きを駈けて、眞先に、討死せんところ、思ひ極めて候へ、和殿の所存、如何候ぞ』
と謀る、死なば俱にと思ふ心。資貞も、亦、自ら先登を期す、然り氣なき態にて、
『そろなることを、宣ふものかな、これ程の大軍を以て、攻むれば、城は、一堪りも候まじ、あたら、先駈けして、命を捨てんよりは、人並みに、振舞はんこそ、身の爲めに候なれ』
と答ふ、武士に似氣なき一言、

誰かは、聞いて呆れざらん、恩阿、餘りの事に、二の句も續かず、其儘、突と起ちて、本堂の方へと赴く、資貞、見て、
『仔細こそあらめ』
と怪み、密かに、跟き行きて、容子を窺へば、恩阿、腰なる矢立を、取り出でて、石の鳥居に、何やらん、書き認む、資貞、
『扱は、愈々明日の合戦に、先駈けせんと、心掛くるにこそ、我れ、何條、入道如きに、後れを取るべきや』
と思ひ、夜に入るを、待ち兼ねて、唯一騎、河内へ馳せ向ひ、石川河原に到りて、徐かに、天の明るるを待つ、川風、吹き荒みて、料峭たる春寒、宛がら、身に沁むばかり。
東天、漸やく白みて、星斗、影疎なり、折りしも、蹄聲、忽ち曉靄を破つて、赤坂の方に向ふ、資貞、聞いて、蹶起し、
『扱こそ、入道なれ』
と思ひ、急ぎ馬を驅つて、近づき見れば、果して、入道恩阿なり。
恩阿、資貞の追ひ來るを見て、カラ／＼と笑ひ、

『扱も、人の悪るさよ、昨夜、宣へることを、迂濶と、信じなば、孫ほどの人に、出し抜かれ候ところぞ』
と言ひつゝ、尙も、馬を驅り／＼進む、資貞、跡より、追ひ駈け、

『今は、互ひに先を争ふにも及び候まじ、一つ時、一つ處に討死して、冥土黄泉までも、同道致し候はん』
と言へば、恩阿、

『申すにや及ぶべき、イザ、急ぎ給へ』
と答へ、互ひに後になり、先きになりて進む。

頓て、赤坂の城に達す、兩人、濠端近く、押し寄せて、
『武藏國の住人見四郎入道恩阿、年積りて七十三、相模國の住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉を出づる始めより、屍を、戰場に曝らさんと、思ひ極めて、先陣に罷り向ひ候なり、我れと思はん人々は、出合ひ候へ』
と呼はり、馬を控へて、屹然として待つ。

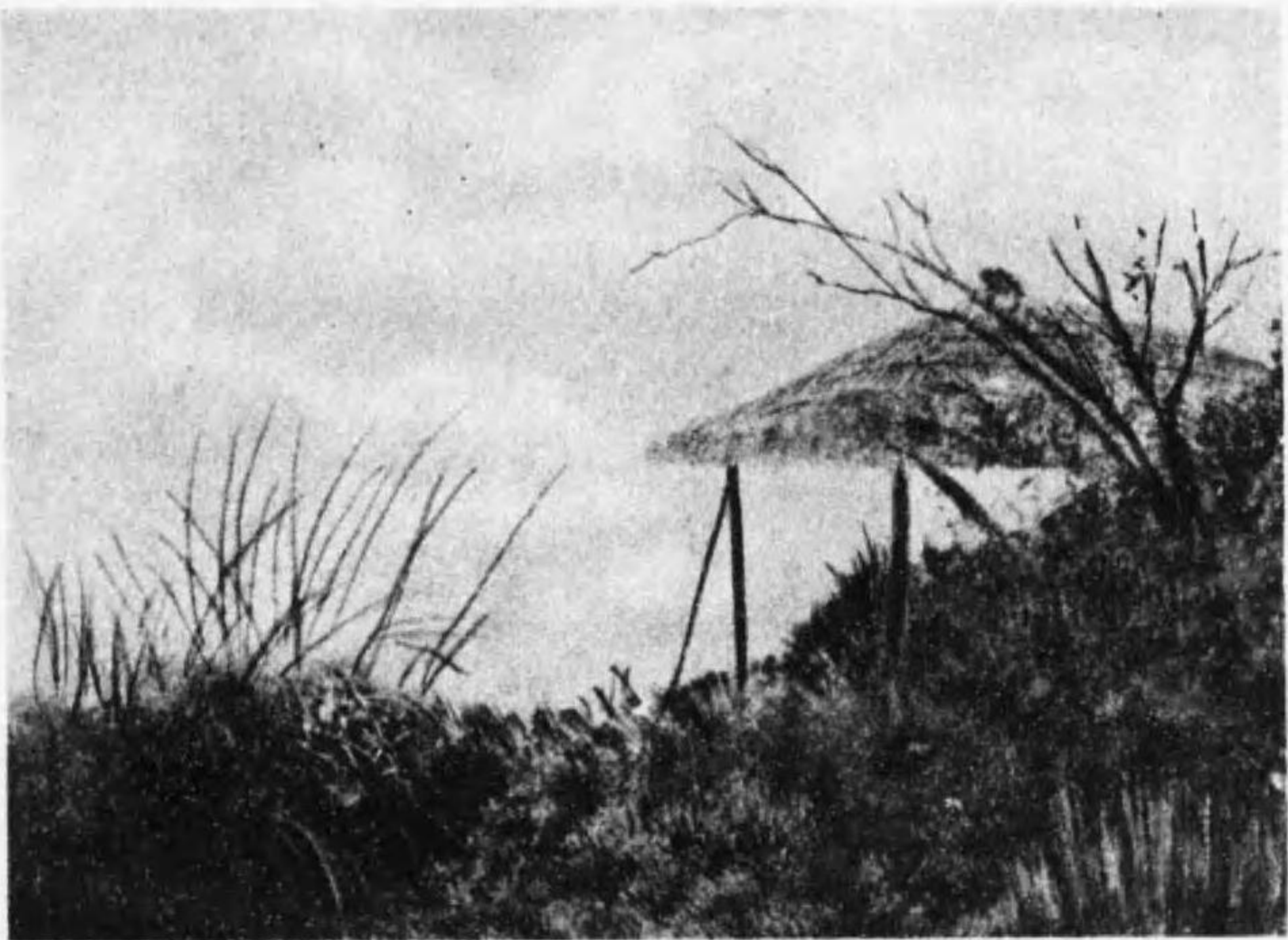
三

正成、千早城に在り、平野將監入道、代りて、城を守る、
『扱は、熊谷、平山の武勇を、學ばんと存するにこそ、

命を惜まぬは、阪東武者の習ひとこそ言へ、跡に續く勢もなきに、唯、二騎のみ進めるこそ、不敵なれ、斯る命知らずの者に、な取り合ひそ、捨て置きて、事の様を見よ』
と告げ、固く士卒を戒めて、返辭だにせず、兩人、心、焦ら立ち、
『我れを恐るゝにや、侮るにや、人に物言はせて、矢一つだに射ざるこそ、奇怪なれ、イデ／＼、我等が手並の程を、見せ候はん』
と言ひさま、ヒラリと、馬より飛び降り、一散に、濠に架せる細橋を、馳せ渡りて、無二無三に、木戸を押破らんとす、將監、呆れて、下知を傳へ、
『扱も、大膽不敵の者共かな、左らば、射て取れよ』
と命ずれば、城兵、聲に應じて、一齊に、矢を放つ、兩人、一步も退かず、尙も、木戸を破りて、入らんとす。
總身、矢の立つこと、蝟の如し、意氣、猛しと雖も、今は叶はず、憤然として、城を睨めつゝ、打ち殪る。
資貞の子源内兵衛資忠、年十八、獨り留まりて、天王寺の

陣に在り、父戰死せしと聞くより、憤然として立ち、
『さらば、我れも死せん』

忽ち馬を驅つて、馳せ出でんとす、寺僧、
金剛山の絶頂
此れは金剛山の絶頂にして國見臺と稱するもの。



『ヤレ待
ち給へ』
と言ひつゝ、
矢庭に、鎧
の袖を、引
き留め、
『死して
好き身を
らば、御
身の父こ
そ、伴ひ
給はぬ、
御身を後
に留めて、
其身獨り

討死し給へるもの、正しく、子孫の後榮を、思ひ給へば
こそ候なれ、父子俱に、命を捨て給はゞ、誰か、恩賞
に預かり給ふべき、斯くては、父御の志に、背き候はん、
枉げて、思ひ止まり給ふべし』

と言葉を盡して、説き諭せば、資貞、

『さらば、是非も候はず』

と答へ、涙を抑へて、悄々と、鞍より降る、寺僧、

『斯くてこそ、言ひ甲斐の候へ、必ず、血氣に逸り給ふ
べからず』

と尚も、呉れくも諫めて、其場を去る、資貞、暫し其後
姿を見送りつゝ、

『今は、止むる人もあらず、イデ、此間にこそ』

と咄き、急ぎ、上宮太子の廟前に詣りて、心、徐かに、父
子の冥福を祈り、終りて、石の鳥居の下を過ぐ、不圖、左
の柱を見れば、墨新らしき筆の痕あり、資忠、屹と、目を
注げば、

花咲かぬ老木の櫻朽ちぬとも

その名は苔の下にかくれし

との一首の和歌を記し、其側に、

『武藏國の住人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二
月二日、赤坂の城へ向ひて、武恩を報ぜん爲め、討死仕
り畢んぬ』

とぞ書き記されぬ、資忠、讀み了りて、ハラ／＼と、涙を
垂れ、

『扱は、我父と與に、討死したる人の筆の痕よな、之れ
を見るに就けても、最とゞ、父の事こそ偲ばるれ、イデ
ヤ、我れも、後の世の語り草に、一首留め置くべきぞ』
と獨語ち、ブツリと、右手の小指を、咬み切り、其血を以
て、右の柱に、書き記すは、

待てしはし子を思ふ暗に迷ふらん

六つのちまたの道しるべせん

との辭世の一首、尙、其傍に、

『相模國の住人本間九郎資貞の嫡子源内兵衛資忠、生年
十八歳、正慶二年仲春二日、父が死骸を枕にして、同じ
戦場に、命を止め畢んぬ』
と書き認め、

『今は、思ひ残すことあらず、さらば、急かん』

直ちに、馬を煽り／＼と、河内に向ふ、頓て、赤坂の城下
に達す、資忠、屹と、城上を見上げつゝ、大音聲に、

『如何に、城中の人々に、物申さん、我れは、今朝しも、

此城に向ひて、討死したる本間資貞の嫡男源内兵衛資忠
と申すものにて候なり、父と同じく、討死して、冥土ま
でも、孝養せばやと、思ひ立ち、唯一騎、罷り向ひてこ
そ候へ、疾く、木戸を開き給へ、父と同じ所に於て、一
命を捨て候はんずるぞ』

と呼はる、城兵、聞いて、深く感じ、

『扱も、健氣なる若武者かな、疾く／＼、門を開けや』

と言ひつゝ、忽ち内より、木戸を開き、逆茂木を引く、資
忠、見て勇み、サツと、馬を驅つて、躍り入れば、城兵五
十騎、迎へ戦ふ。

資忠は、血氣の少年、太刀を揮うて、縦横に、斫り躰け、
奮撃突戦すること數刻、忽ち父の戦死せる場所に到りて、
屹と、馬を停め、

『見よや、勇士の最期は、斯くするものぞ』

と言ひさま、太刀先きを啣みて、ドウと、馬上より、落ちて死す、城兵、見て、皆、
「扱も、勇々しき最期かな」
と褒め稱ふ。

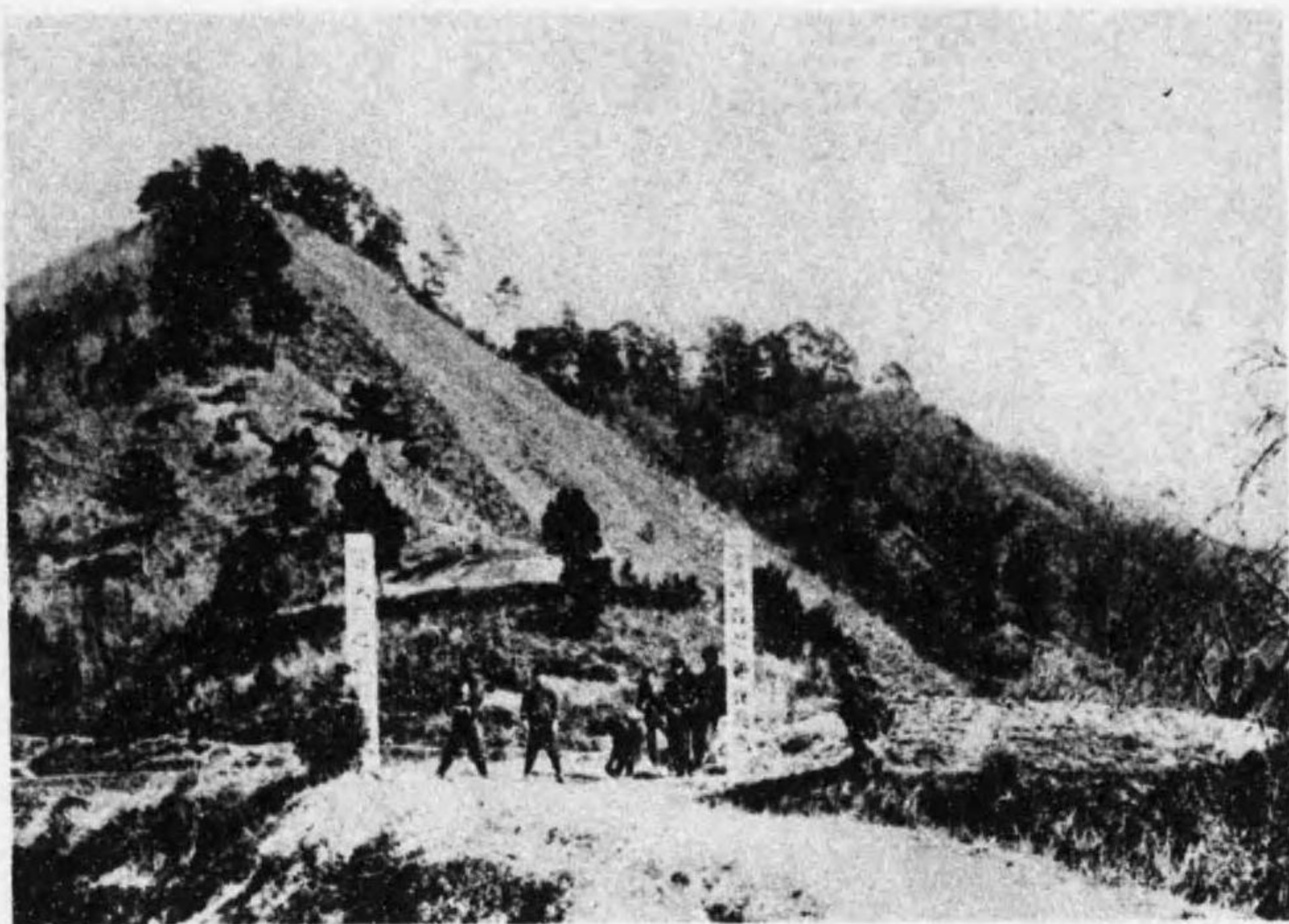
四

忽ち見る、漠々たる砂烟、地を捲きて起るを、
「扱も、夥多しき軍勢かな」
城兵、鳴りを静めて待つ、須臾にして、雲霞の如き東兵、ヒシ／＼と、城下に押し寄せ、ドツとはかりに、鯨波を作る、喊聲轟々、宛から、怒浪の響に似たり。
東兵、死を恐れず、皆、先きを争うて、濠端に迫る、城將平野將監、機を見て、令を下せば、待ち設けたる城兵、齊しく、起ちて射る、
距離は近く、的は多し、萬矢、皆、敵の兜に中り、鎧を貫ぬく、東兵、見る／＼、倒れ死するもの數百人。
東將阿曾彈正少弼時治、意氣、頗ぶる銳、兵を勵まし／＼、進み攻む。
城、小なりと雖も、士卒、皆、勇、大石巨木を、投げ降りし、

投げ降りして、拒ぎ戦ふ、東兵、撃てども／＼、抜くこと能はず。今日も攻め、明日も、亦、攻む、攻むること十二日、兵を損ずること數千人、流石の東兵も、今は、攻めあぐむ。播磨の人吉河八郎なるもの、時治の前に出て、
「此城、思ひの外に、要害堅固に候、力を以て攻むれば、唯々、御味方を損するばかり、何の甲斐とても候はず、熟々城の様を見候に、何處に、水あるべしとも覺え候はず、定めて、南の山の奥より、地の底に、樋を伏せて、水を引き候べし、掘り鑿ちて、水の手を断たせ給へ、存外、容易く落ち候はん」
と説く、時治、ハタと、鞍を拍ち、
「如何さま、妙計ぞ、疾く／＼計らへ」
と告げ、兵を配りて、城を押へ、人夫を役して、山の手の地を鑿つ。
鑿つこと二丈餘、樋、忽ち露はる、
「扱こそ、水路なれ」
樋を掘り起して、打ち毀てば、滾々たる清水、皆、谷間に、流れ落つ。

城中、水、立ちどころに涸れぬ、今は、米を炊かんやうもなく、馬に秣かはん術もなし。

千早城址
二基の石柱を建て、右に「審強弱之勢於機先」左に「決成敗之機於呼吸」の句を題す。



飢ゑて、生米を嚼ぢれば、咽喉、忽ち渴く。
咽喉、渴けども、飲みども、潤さん一滴の水だにもあらず、
「切めて、雨にても降れよかし」
天を仰げども、天に雲なし、皎々

たる月の光、見るも、心怨めし。
居ること二三日、城中、今は、悉く飢渴に苦しむ。
援けなきの孤城、何を待たん目途ともあらず、平野將監、獨り心を決し、使を東軍に遣はして、
「兵士の命を助け給はゞ、降人に出て候はん、若し、叶はずば、是非なく、一戦仕つり候べし」
と告ぐ、時治、扱こそと、打ち喜び、
「其は仔細なし、必ず、一命を助け得さすべし」
と答へ、直ちに降を容るす、將監以下、乃ち出でて降る。
軍監長崎四郎左衛門高資、悉く其武器を收めて、京師に送る、六波羅の探題、
「降參を許さんこと、然るべからず、今は、合戦の事始めなれば、軍神に祭りて、世の中の懲しめと爲さんこそ、然るべけれ」
と決し、六條河原に引き出して、悉く將監以下の首を刎ぬ、吉野、千早の將士、傳へ聞きて、切齒し、復た一人の降を思ふものなく、籠城の決志、愈々益々固し。
人、皆、探題の失計を嗤ふ。

五

赤坂、既に陥いる、三軍の東兵、皆、悉く千早城に聚まる。城上より、望み見れば、攝河の山野、見渡す限り、陣營、相接し、旗幟、相聯なる、總軍、凡三十萬騎、ドツと鯨波を作れば、山も崩れ、海も湧かんとす。正成、千騎にも足らぬ小勢を以て、城に嬰かる、胸中、何の秘計をか藏むる、平然として、眼中、敵なきが如し。東兵、衆を待みて、敵を侮り、濠端近く、犇々と、押し寄せ来る。

戦端、今や、開かれんとす。

城中、静まり返りて、矢、一つだに放たず、東兵、益々敵を侮り、先を争うて、木戸口に、攻め寄せ、手にく、柵を抜き、門を破りて、押し入り、躍り入らんと、犇めき合ふ。

陣員の聲、忽ち高く響き渡れば、静止せる城兵、俄然として、一時に、奮ひ起つ。

切つて落し、切つて落す大木は、雨よりも繁く、投げ下し、投げ下す巨石は、霰よりも急なり、東兵、頭を割られ、骨

を碎かれ、手足を折られて、矢庭に、死するもの數千人、

「扱は、敵に備あるぞ、ソレ引けや、疾く退けや」と呼はりつゝ、皆、慌て遯めきて、引き退かんとす。

無數の東兵、跡よりく、蟻の如くに、押し寄せ、詰め寄せ來りて、制すれども、叶はず、止むれども、及ばず。

退かんとするもの、進まんとするもの、押せば、却つて押され、寄すれば、却つて寄せられ、揺られく、唯一つ所に漂ふ。

城兵、益々鋭を鼓し、勇を勵まして、近き敵には、石を投じ、木を擲ち、遠き敵には、矢を放ち、弩を發す。

死者、傷者、百人、千人、時々刻々より、殖え増さり、積み嵩む、叫喚の聲、悲鳴の號、相和し、相應へて、慘たる光景、修羅の如し。

十二人の書記、各々死傷を記す、三晝夜の間、筆を闇く違もあらず、東軍の諸將士、皆、呆れ驚き、

「扱も、恐ろしき楠木の働きかな、近づかば、免かれまじきぞ」

百万、力を盡くして、諸軍を制し止め、復た敢て城に近寄

らず、軍監、

「若し、大將の命を待たずして、戦ふものは、嚴罰に處すべきぞ」

と固く、全軍に觸れ示す。

六

阿曾彈少弼時治、陸奥右馬助高直に向ひて、

「先きに、赤坂の城を落せしは、水の手を斷ちしに由り候なり、此城を見るに、僅かなる山の巔なれば、所詮、水あるべしとも覺えず、定めて、夜なく、東の溪水を汲み取るにてぞ候はん、宗徒の人々一兩人に命じて、谷を守らせ給ふべし」

と説く、高直、

「そは極めたる妙計にこそ候へ、さらば、越前殿の手を以て、守り候はん」

と答へ、命を名越越前守入道貞家に傳ふれば、
「委細、畏まりて候」

と答へ、直ちに手勢三千騎を率ゐて、東溪に赴き、柵を山麓に樹て、嚴しく守る、正成、豫め五條の泉水を、城中

に引き、別に數百の水槽を作りて、水を湛へ、又赤土を以て、池を作り、軒頭の槌を、此處に聚めて、雨水を蓄ふ、水多くして、復た溪を汲むことあらず。

千早城址の祠
千早城址に小祠あり楠公を祀る。



貞家、警戒すること數日、城兵の出で汲まさるを見て、漸く心怠る。正成、窺うて、之れを知り、一夜、兵數百人を遣はして、突然、其營を襲ふ、貞家、不意を撃たれて、

大に驚き、倉皇、走りて、本陣に退く。城兵、敵の委棄せる旗、及び幕を取りて、城中に旋れば、正成、

『好き物をこそ、得つれ』

と喜び、胸中、早くも、一計を案じ出づ。

七

翌朝、正成、命じて、旗、及び幕を、追手の城門に懸けしむ、城兵、聲を揃へて、

『是れこそ、名越殿より、賜はりて得へ、御紋所のつきて候へば、他人には、用ひがたし、イザ、返へし參らせん、御内の人々、これへ渡らせ候へ』

と呼はりつゝ、ドツと笑ふ。

東兵、屹と、目を注げば、旗にも、幕にも、三本傘の紋所あり、これぞ、疑ひもなき名越家の徽章、

『扱も、名越殿の不覺や』

東兵、亦、皆、冷笑ふ。

敵には、恥かしめられ、味方には、笑はる、貞家を始めて、名越一門の慚憤、一方ならず、

『假初めにも、北條殿の一族として、斯る耻辱を蒙むらんこと、唯、我が一門の名折れのみかは、延いては、北條殿の御顔にも、係かるべし、イデ、此上は、一門残らず、城に押し寄せて、討死せん、來れや面々』

手勢五千餘騎を率ゐて、奮進し、矢を冒し、石を冒して、城壁の下に迫り、

『進めや進め』

啞暗叱咤、勢ひに乗じて、一舉、城に入らんと欲す、城、高く、壁、峻うして、攀ち登るべからず、皆、城を睨んで、憤然として、突つ立つ、正成、望み見て、莞爾たり、

『時機こそ、好けれ、ソレ切れ』

と令すれば、城兵、刀を揮うて、サツと、繩を切る。

繩、切れて、壁上の大木、カラ／＼と、落ち下ること數十本、東兵、忽ちアツと叫んで、壓死するもの、四五百人、骨は折れ、肉は潰れて、目も當てられず、將士、こればかり、皆、慌てふためく、正成、又

『ソレ射て取れや』

と令すれば、城兵、弓を揃へて、一齊に射る、矢に死する

もの、亦三千餘人。兵、皆、怖れて、走り退く。

八

軍監長崎四郎左衛門高資、望み見て、大に驚き、

『力攻めに爲さんとすれば、唯々、兵を損するばかりぞ、遠く取り巻きて、兵糧攻めにせよ』

と令して、益々固く諸軍を戒む、陣々、是れより、皆、柵を樹て、土壘を築きて、長圍の策を施し、戦ひを休むこと數日、東軍の將士、皆、無聊に苦しむ。

高資、文事あり、同好の將士を會して、連歌を催ほす、折りしも、東風、暖を帯びて、花、漸やく開かんとす、高資、自から、

さきがかけてかつ色見せよ山櫻

との發句を作れば、工藤二郎右衛門祐清、受けて、默吟すること一二次、直に筆を把つて、

嵐や花のかたきなるらん

との脇句を附け、イザとて、出だせば、一座、傳へ看て、皆、名吟よ、絶唱よと感じ合ふ、高資、祐清の二人、俱に誇色あり、

『是れぞ、陣中の一樂事なる』

一詠一觸、互に歡を罄くす、心あるもの、此歌を聞いて、眉を擧め、

『此軍、勝利、覺束なし、味方を、花に擬へ、敵兵を、嵐に喩へたるこそ、此上なき不吉なれ』

と評して、密かに、前途を危ぶむ。

實にや、落花微塵の運命、早、既に、頭上に、落ち懸から

千早城址の碑

金剛山の半腹たる千早村大字千早の東方城山に在り。



んとす。

九

勇士、血を見ずんば、倦む。戦闘、暫らく、途絶えて、城兵の志氣、漸やく弛ばんとす、正成、早くも、其れと知り、

「さらば、一計を施して、敵味方の目を、覺まさせん」と思ひ、又も、何事をか、案じ附く。

居ること數日、蒼茫たる曉霧を破つて、呐喊の聲、近く麓の方に起る、東兵、聞いて、皆、起ち、

「素破や、城中より、打つて出でしぞ、是れこそ、敵の運の盡きなれ、一人も剩さず、打ち取れや」

と奔めきく、皆、先きを争うて、突進す、活氣、忽ち全軍に、充ち漲る。

城兵、又も、ドツと號びて、矢を放つ、東兵、更に、事もせず、

「今日こそ、思ふまゝに、高名すべけれ」

と勇み立ち、益々勇氣を奮うて、突進し、死者、傷者を躍り越えくゝて進む、

進むこと數十歩、鎧光兜色、忽ち目を射る、

「素破こそ、敵なれ」

屹と、彼方を見遣れば、城兵、儼然として、二三十間の前に在り、東兵、

「扱は、死物狂ひの兵ぞ、イデく、阪東武者の手並を見せん」

と呼はりつゝ、衆を待んで、躍り進む。

彼我相距ること十數間、城兵、尙も、自若として、突つ立つ。

東兵、今は、何をか躊はん、鋒を聯ねて、猛然として、切つて懸かる、刀身、鎧を撃つて、憂として聲あり。

城兵、敢て戦はず、尙も、平然として、立つて動かず、東兵、怪しみ見て、

「あな悔しや、又も敵に計られつるぞ、あれ見よ、城兵と見しは、甲冑を着けたる藁人形ぞ」

と呼ばれば、何れも、呆れに呆れて、二の句も、出でず。

忽然として、喚呼の聲、頭上より起る、東兵、大に驚き、

「ソレ引けや」

と言ひつゝ、慌て、退き去らんとす、大木巨石、早、落ち懸かりて、頭を碎かれ、手足を折らるゝもの、四五百人、

東兵、益々驚き怖れて、走り退く。

是れぞ、正成の、藁人形を、城外に立て置き、鬨を作り、矢を放ちて、東軍を、誘き寄せたるもの。

正成、計れば、必ず中る、東軍、是れより、益々堅く相戒めて、復た敢て城に迫らず。

十

戦闘、久しく絶えて、皆、無事に苦しむ。

東軍の諸將、江口、神崎より、妓を招きて、宴を催す、鐘鼓の聲、絶えて、絃歌の聲、湧く。

名越遠江入道貞家の陣、最も城に近し、一日、貞家、其姪兵庫助と、局を對して、双陸の戯を闘はす、佳妓、其側に在りて、觀る。

兩人、互に勝たんくゝと、力味合ひ、忽ち賽の目を諍ふ。

叔も譲らず、姪も屈せず、眼を怒らし、腕を扼して、罵り合ふこと少時、彼れ、刀を取れば、此れも劍を按じ、終に刺し違へて、其場に殞る。

騎虎の勢ひ、止むべからず、兩人の家臣、亦、互ひに刺し違へて、死するもの、二百餘人。

城兵、壁上より、此光景を看下して、笑壺に入り、

「君に背き奉つれる天罰、思ひ知れや」

と呼はりつゝ、皆、手を拍つて、囃し立つ。

十一

攻圍數旬、城、尙、陥いらず、東軍の士氣、益々弛びて、士卒、皆、還らんことを思ふ、三月四日、鎌倉より、急使來り、

「軍を休めて、空しく、日を送ること、以ての外に候、疾くく、城を攻め落し候へ」

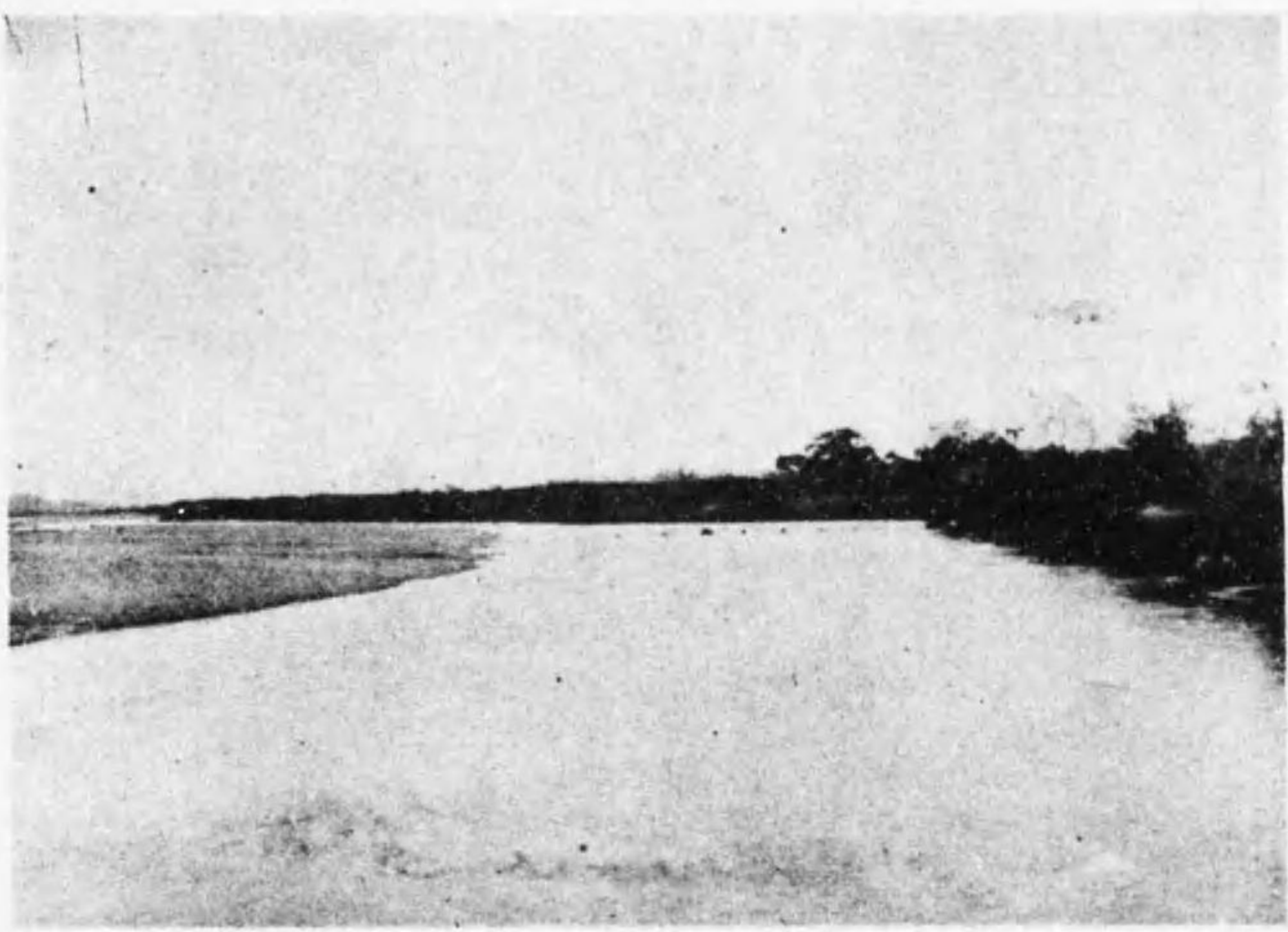
と告ぐ、命令、極めて嚴し、諸將、今は、是非に及ばず、復た議して、城を攻めんとす、一人、進み出でて、

「力攻めにすればとて、何の効なきことは、今更、申すまでもあらず、此上は、手段を以て、攻め落さんこそ、

然るべけれ、熟々城の形勢を觀るに、此方の崖と、敵の城との間、最も近き所は、僅か二十丈ばかりに過ぎ候はず、此間に、梯を架して、躍り入らば、城を攻め落さん

こと、何の雑作も候まじ』

石川
河山國南河内郡高向村の藏王嶺より源を發し金剛葛城諸山の溪水を集めて北流し道明寺村に至りて大和川に注ぐ實に千早城防禦の第一線たり。



と説けば、一座、實にもと、此れに同ず、乃ち木工數百人を、京師より、召し下して、晝夜、工を急げば、廣さ一丈二尺、長さ二十餘丈の雲梯、立ちどころに

成る、大繩を附くること、二三十條、轆轤を以て、巻き起し、巻き卸せば、何の苦もなく、城壁の上に、架け渡されぬ、

『ソレ、渡れや面々』

號令一下、數千の逸雄、我れ先きにと、競ひ進む、全軍、皆、勇み立ち、

『今日こそ、城を落すべけれ』

と犇めきつゝ、後よりく、群がり来るもの、雲の如く、覆の如し。

東兵、アワヤ、城に入らんとす、城兵、少しも慌てず、松明を取つて、投げ掛け、投げ掛くこと數百、雲梯の上、見るく、火山を築き立て、炎焰、熾んに、渦巻き騰る。

城兵、更に御筒を以て、油を注ぎ掛くれば、猛炎烈火、燃え立ち、燃え騰りて、面を向くべきやうもあらず、前なる兵士、驚き慌て、

『ソレ引けや、退けや』

と言ひつゝ、引き退かんとす、されども、數萬の東兵、續續、押し寄せ、詰め寄せて、退くこと叶はず、

進まんとするもの、退かんとするもの、雲梯の上に於て、揉み合ふこと霎時。

雲時、忽ち焼け切れて、ドツと、谷底に落つれば、梯上の士卒、亦、皆、轉び落ちて、岩に碎かれ、火に焼かる。

雲梯、既に落つれども、後より、押し寄せ来る勢ひ、容易に、退むべからず、次々に、崖に落ちて死するもの、亦、數千人、東軍、益々驚き、

『所詮、城を抜かんこと、叶ふべからず』

と思ひ、密かに、陣を抜きて、還るもの、漸やく多し。諸道の豪傑、正成の風を望みて、官軍に屬するもの、益々多し。

黒木御所

後醍醐天皇の行在所

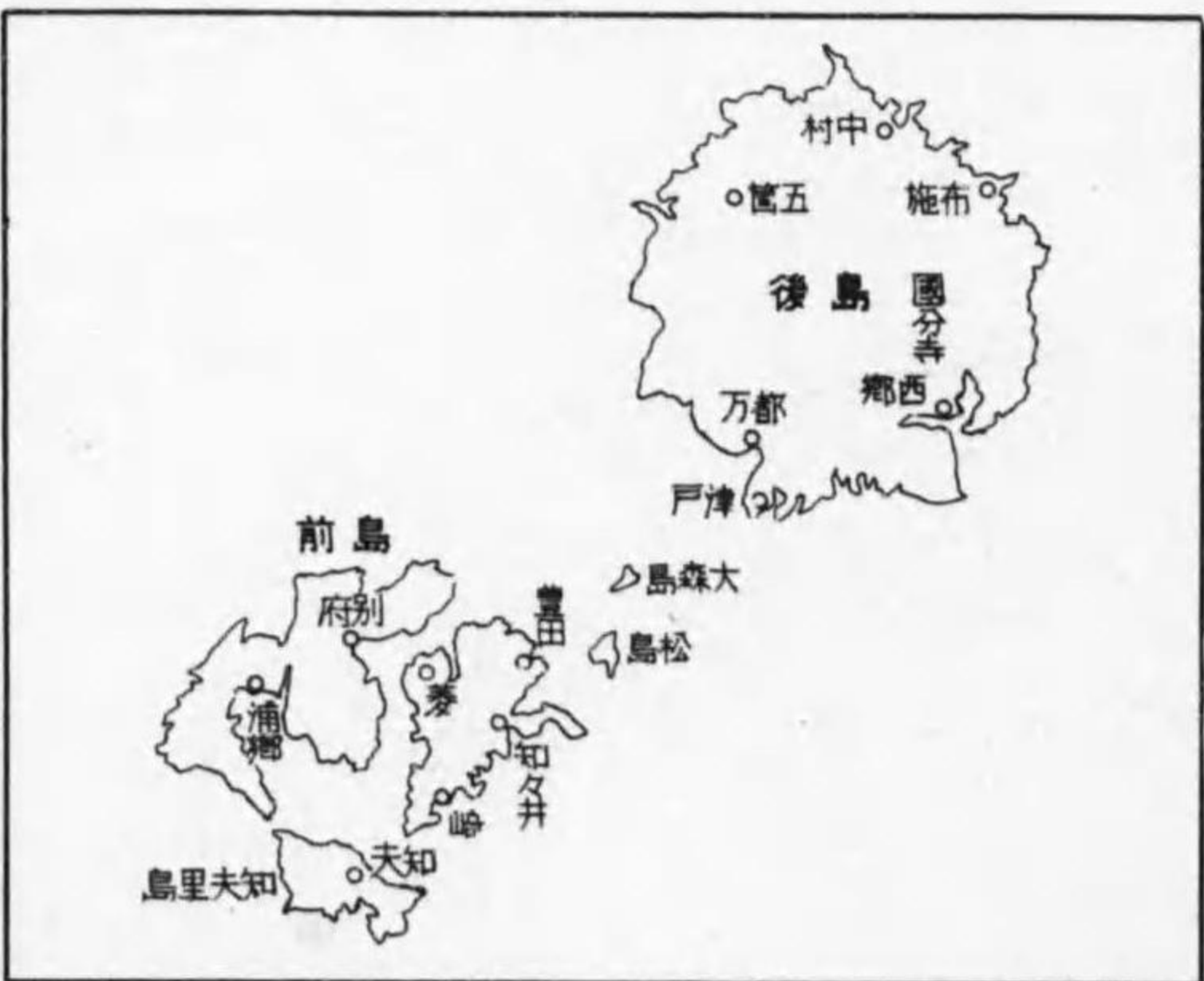
黒木御所は、隱岐國知夫郡黒木村の海岸に在り、元弘二年正月、後醍醐天皇の遷幸あらせ給ふや、守護佐々木清高の造りて、入れ奉つる所、今の黒木神社の在る所、即

黒木御所

ち是れなり、但、尙、此事に就いては、項末に於て、辯する所あるべし。

隱岐は、東西の二島より成る、黒木の御所は、西嶼の知夫郡別府に在り、前は、水に枕み、後は、山を負ふ。

隱岐地圖



山上、山あれども、雲ならでは、出づるに由なし、島中、島あるものを、鳥ならでは、誰か越ゆべき。

主上、黒木御所に在はします、水を隔て、東南を望ませ給へば、勝田の山、高く峙つ、是れ

ぞ、後鳥羽院の御廟所なりと聞し召されては、古の御恨、今の御憤り、御胸に充ちて、最とゞ、鎌倉を打ち滅ぼさばやと、思し召す。

此島に在はしますこと一年。

諸國勤王の兵、連りに起る、北條相模入道高時、主上を奪ひ取り奉つるものあらんことを虞れ、近國の武士を催ほして、日夜、嚴重に、御所を守る、何ぞ計らん、勤王の士、却つて、此警固の武士中に在らんとは。

富士名判官義綱、中門の警固を掌どる、あはれ、此君を奉じて、勤王の旗を揚げんと、思ひ立てども、其志を聞え奉つらん便宜もなく、心ならずも、日を過しぬ。

一夜、主上、官女を以て、御杯を、下し賜ふ。

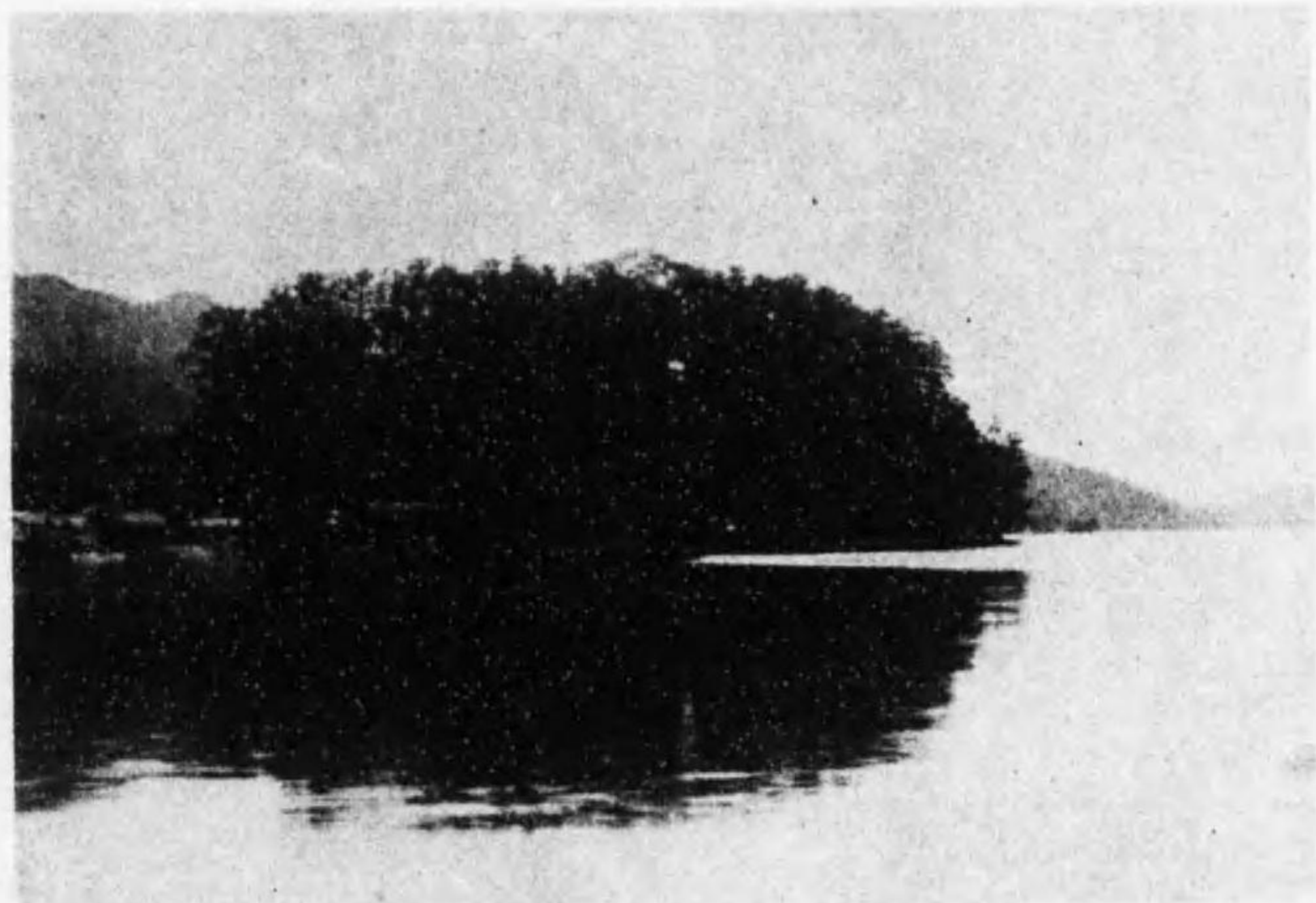
義綱、是れぞ、屈竟の便宜と、心に喜び、密かに、彼の官女を以て、

「上様には、未だ知ろし召され候はずや、楠木正成、金剛山に立て籠りて、旗を揚げ候ひしに、關東勢、百萬の大軍を以て、攻め寄せ候へども、城、固くして、中々、落ち候はず、備前には、伊東、播磨には、赤松、四國に

は、土居、得能の面々、一時に、旗揚げ致し候ひぬ、實

黒木御所址

隱岐國知夫郡別府村の黒木は後醍醐天皇の黒木御所址と稱せらる此圖是なり。



に、御運の
開かせ給ふ
べき時節と
こそ、存じ
奉つれ、義
綱が、當番
の間に、忍
びやかに、
御所を出て
させ給ひ、
千波の湊よ
り、御船に
召されて、
出雲、伯耆
の族を、頼
ませ給へ、
義綱、亦、

逐ひ奉つらん體にて、御味方に、馳せ參じ候べし、疾く疾く、思し召し立たせ給へ」

と奏し奉つる、主上、俄かに、信ぜさせ給はず、能く、其志を探り見んとて、件の官女を、義綱に賜ひぬ。

義綱、面目、身に餘りて、忠誠の心、是より、愈々厚し、主上、此體を御覽せられて、密かに、

「汝、先づ、出雲へ立ち越へ、同心のものを語らひて、御迎ひに參るべし」

と仰せ下し給へば、義綱、左らばと、出雲へ渡り、鹽冶判官高貞の館に行きて、説き勸む、高貞、従はず、其儘、義綱を取り籠めて、復た歸さず。

主上、今は、待ち遠しさに、堪へさせ給はず、
「此上は、運を天に任さばや」

唯、六條少將忠顯のみを、召し具して、一夜、密かに、黒木御所を出てさせ給ふ、是れぞ、元弘三年二月廿四日の事なりける。

後醍醐天皇の黒木御所を、隱岐國知夫郡別府村大字黒木の海岸に在りとするは、疑ふべし、増鏡には、

「海つらよりは、少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしき様に、とりはらひて、おはしまし所に、さだむ」とありて、明かに、國分寺となし、太平記にも、
「佐々木隱岐判官貞清、府ノ島と云所に、黒木の御所を作て、皇居とす」

と記せり、國分寺は、周吉郡池田村に在りて、當時、國府の所在地たりし下西村の東方凡一里、西郷港よりは、少しく北に入りたる處に在り。

府ノ島と云ふは、即ち國府の在る島にして、周吉郡の事なるや、論なかるべし。

此の如く、後醍醐天皇の黒木御所は、當時、國府の在りし周吉郡にして、爾かも、國分寺に設けられしものなること、疑ふべくもあらず。

左れば、後日、天皇の御所を出てまして、御乗船あらせ給へる處は、必ずや、西郷港ならざるべからず。

然るに、太平記には、之れを千波港となせるが故に、黒木の御所を、知夫郡に求め、且、太平記に、府ノ島とある所より、之れを別府村の事とし、今の黒木神社の在る

處を、御所址と認定して、地名をも、黒木と呼ぶに至れるものなるべし。

隠岐を、島前、島後に分つ、國府は、島後に在り、別府は、島前に在り、即ち國府の役人、來りて、島前の事務を掌るの廳を、別府と稱せしなり。

されば、單に府ノ島と云へば、國府の在る島ならざるべからず、之れを別府の島とするは、當らず、況や、増鏡には、明かに國分寺と記せるをや。

大阪湊

後醍醐天皇御着船の處

伯耆國西伯郡に、御來屋町と稱する所あり、往時は、名和村、庄内村と與に、奈和の郷と曰ふ、名和長年、此地に住す、村内の路傍に、碑石あり「元弘帝着船處」の六大字を題す、元弘三年閏二月廿八日、後醍醐天皇の、隠岐より、此地に、御着船あらせ給へる處。

御來屋町の東方に、逢阪と稱する驛小あり、上市、下市

後醍醐天皇御腰掛石

伯耆國西伯郡御來屋村の海岸に後醍醐天皇の御腰掛石と稱するものあり潮干れば全形を露はし潮満れば一部を現はす上に碑を立て、之れを表す。



の二に分ち、其海濱を、大阪湊と曰ふ、此地の大字鹽津を以て、御着船の所と稱す、伯耆之卷に、大阪の湊と云ふ所に、御船を、寄せせらるとあること、其證なり、太平記には、單に、名和湊とあれど、

梅松論には、奈和庄野津郷とあり、野津よりは、大阪の方、是なるが如し。

主上、六條少將忠顯を、具し給ひて、一夜、密かに、黒木の御所を、逃れ出でさせ給ふ、御憫はしやな、萬乗の御身を以て、玉趾を、草鞋の塵に汚がし、錦裳を、野路の露に沾ほし給ふ。

夜、暗けれども、御道を照らすの燈火もなく、途、遙かなれども、玉體を乗せ奉つる御輿もあらず、忠顯、或は、御手を引き、或は、御腰を推し奉つり、如何にもして、今宵の中に、千波の湊へ、出でばやと、道を急ぐ。

討手や來んと、御心のみこそ、焦らせ給へ、御道、更に、歩か行かず、

「今は、遙かに來ぬらん」

と宣はせ給へど、後なる山の瀧の音、尙、耳に響くは、遠く去らざる證なりかし。

忠顯、且ある民家を叩きて、千波の湊は、何方ぞと問ふ、怪しげなる男、立ち出で、主上の御有様を、つくろと見參

らせて、心なき身にも、由ある御方とや、推し奉つりけん、

「是れよりは、僅か五十町ばかりに候へども、道、南北に分れて、知れにくう候はん、御道しるべ仕つり候べし」

と答へ、甲斐　しく、主上を、負ひ參らせて、千波の湊に到り、そこごと、走せ廻りて、伯耆への便船を求め、

主上を、舟中へ、具し參らせて、辭し奉つる。

舟人、主上の御有様を、見奉つりて、思はず、御前に拜伏す、忠顯、實を告ぐれば、舟人、感激措かず、死力を盡して、君を落し奉つらんと、心に誓ふ。

暴風に遭うて、海上に漂はせ給ふこと四日、漸く伯耆の沖に達す、一の釣舟を見て、

「此處は、何處ぞ」

と問はせ給へば、

「片見と申す所にて候」

と答ふ、重ねて、

「奈和庄と申す所は、何處ぞ」

と仰せ給へば、

「それは、早、五里ばかりも、過ぎさせ給ひて候」

と答へ奉つる、

『さらば、奈和の湊へ、漕ぎ戻せよ』

と宣はせ給ふ、折節、追手の船數十隻、後より走せ来る、舟人、見て、心沮めは、主上、

『思召す由あれば、疾くく、戻せよかし』

と重ねて、仰せ給ふ、今は、力に及ばず、主上、及び忠顯を船底に隠し参らせ、上には、乾したる鯛の俵を、積み重

元弘帝着船處の碑
伯耆國西伯郡御來屋町の太坂湊は後醍醐天皇の御着船あらせ給へる處碑を建て、之れを標す。



ねて、漕ぎ戻す、忠顯、舟人に向ひて、

『少しも、怯める色を、な見せそ、追手の舟の中へ、漕ぎ入れよ』

と告ぐ、舟人、さらばと、追手の船と、摺れづくに、漕ぎ過ぐ、彼方の船、忽ち呼び止めて、

『若しや、怪しき船には、逢はざりしか』

と問ふ、舟人、頷づきつゝ、

『扱も、其船にてぞ候はん、京上藤かど覺しき方、二人乗せ参らせる船の候ひき、今は、早、五六里も先きに、参り候はん』

と言ひつゝ、遙かに、其方を指さし示せば、追手の船は、

『正しく、其れぞ、急げや急げ』

と言ひつゝ、飛ぶが如くに漕ぎ去りぬ、是れぞ、即ち佐々木判官清高なる。

主上、虎口を遁れさせ給ひて、御恙もなく、大阪の湊へと、着かせ給ふ。

船上山

名和長年擧兵の地

船上山は、伯耆國東伯郡の西南境に聳えて、大山の北尾に位す、奈和庄の南、約三里にして、山麓なる同郡以西村大字山川より、頂上まで、一里餘あり。

元弘三年閏二月、後醍醐天皇の、隱岐より、潛幸せさせ給ふや、名和長年、此處に奉迎して、義軍を擧ぐ、此年五月二十三日、天皇、此處を發して、還幸の途に就かせ給ふ。

山中の樹木、鬱蒼たる所に、船上神社あり、之れを行在所の遺跡とす、元、智積寺ありしも、明治初年、之れを廢す、以西村にも、土俗、天皇屋敷と稱する所あり、長年の妹婿高木三郎兵衛の宅にして、此處も、假行在所の址なりと言ひ傳ふ。

六條少將忠顯、唯一人、船より出でて、名和又太郎長高の

動靜を探る。

長高、家富み、族多くして、武勇の譽高し、長子大夫判官義高は、金剛山の寄手に加はり、長高以下一族、皆、留まりて、此地に在り。

忠顯、聞いて喜び、成田小太郎をして、聖旨を傳へしむ、小太郎、直に名和の邸に到りて、

『人傳には、申しがたき一大事の候、直に長高殿に、對面仕つらん』

と言ふ、時に、長高、一族を集めて、宴を催す、斯くと聞くより、心に訝かりつゝ、出で迎ふれば、小太郎、

『主上、隱岐前司の館を、遁れ出でさせ給ひて、唯今、此港に在はします、長高の武勇、豫て上聞に達し、深く御頼みあるべき旨、思召す、若し、頼まれ参らすこと、叶はずば、取り奉つりて、鎌倉の勳功にも預かるべし、隱岐前司の手には、掛からじとの勅諭に候なり』

と告ぐ、長高、聞くより、思はず、ハツと、飛び退り、袖かき合はせつゝ、ハラ〜と、涙を濺ぎて、

『辱けなくも、一天の君の勅諭を、蒙りながら、何どか、

遺背を申すべき、千たび、命を失ひ、萬たび、身を滅ぼし候とも、何か苦しがるらん、追つ付け、御迎ひに参り候べし』

と答へ、入りて、此由を告ぐれば、弟小太郎長重、小次郎長生、鬼五郎助高、子孫三郎基長、四郎高光、甥小六郎義氏、従弟小太郎信貞、婿彦次郎忠秀等、一族二十餘人、皆、踴躍し、

『不思議にも、斯る世に生まれ合せて、十善の君に、頼まれ申さんこと、生前の面目、死後の名譽、此上や候べき、君の御爲めに、生命を捨てんこと、何か惜しからん、彼の船上山こそ、屈竟の城廓に候へ、我等一族二



百人にて、拒ぎ候ひなば、日本國中の軍勢を以て、寄せ來るとも、左右なく、攻め落されんこと候はじ』

皆、一死、君國に報い奉つらんと欲す、長高、

『後れては、討手や來らん、急ぎ御迎ひに、参るべし』

急ぎ鎧を着して、駈け出づれば、一族の、面々、腹巻を取つて、投げ掛け、濱の津の海岸指して、馳せ参す。濱邊に到れば、御船と覺しきものも、見當らず、人々、呆れ惑ひつゝ、尋ねて、東に進めば、一隻の小船、大阪湊の岸に、横はる、長高、馬より、下りて、近く進み、

『六條少將殿や渡らせ候』

と二度三度繰り返す、主上、苦の下にて、聞かせ給へど、若しや、追手にもやと思し給へば、左右なくは、應ぜさせ給はず。

頓て、其物靜かなる様を御覽せられて、誠の御迎ひぞと思召し、御手づから、苦を押し除けて、出でまし給ふ。

御冠は傾ぶき、御袂は凋れて、御憫はしき、謂ふばかりなし、長高以下、皆、俯向きて、鎧の袖を絞る、主上、此體を御覽じ給ひて、龍顔に、御涙を浮べさせ給ふ、長高、兩

手を、地上に突きて、

『長高、御迎ひに参りて候』

と奏し奉つれば、主上、御涙、堰き敢させ給はず、

『隠岐が手の者共と、思召したれば』

と宣はせて、又もや、御袖を、御顔に押し當て給ふ、長高、

『供奉の人は候はぬやらん』

と訝かしみつゝ、四方を、見廻はす、折柄、御使ひに出て

たる忠顯、歸り來り、

『是は、名和又太郎か』

と尋ね問ふに、長高の従者、進み出でて、

『さん候』

と答ふれば、忠顯、思はず、雀躍しつゝ、

『あら嬉しや』

とばかり、後は、涙に打ち咽ぶ。

君も、泣かせ給へば、臣下も泣き、迎ふるもの、迎へらるるもの、皆、泣く、斯くては、果つべからず、長高、

『疾く、御幸あらせ給へ』

と奏しつゝ、二男基長を顧みて、

『など、今まで、御輿を参らせぬぞ』

と言へば、基長、

『此港とは存じ候はで、濱の津の方へ参りぬと覺え候、時刻移り候はんに、龍の御馬をや、参らせ候はん』

と答ふ、長重、力剛し、荒薦を、鎧の上に纏ひ、主上を負ひ奉つりて、船上山に登る。

船上山は、山の上の山なり、峰には、嵐烈しく、麓には、雲深し、残雪、諸所に横はりて、寒威、尙、強し、山上に、草の葉など藉きて、供御を奉つる。

二

長高、船上山より、使ひを、名和の館に遣はして、

『我れ、此度、勅諭を蒙りて、船上山に、立て籠り候ひぬ、日本國を、敵に受けて、萬に一つも、本望を遂げんこと、思ひも寄らず、何れは、腹を切らんこと、一定に候なり、土用松は、男子なれば、館に留め置きて、敵の手に掛けんこそ、口惜しけれ、急ぎ此方へ送られ候べし』と告ぐ、土用松は、基長の子なり、此時、生れて僅かに三歳、長高、唯、此幼兒のみを、呼び寄せて、其他を問はず、

大丈夫、家をも棄て、妻子をも棄て、一意、臣節を全うせんと欲す。

乳母少輔の局、土用松を抱きて、船上山に登らんとす、基長の妻、暫しとばかり、押し止め、

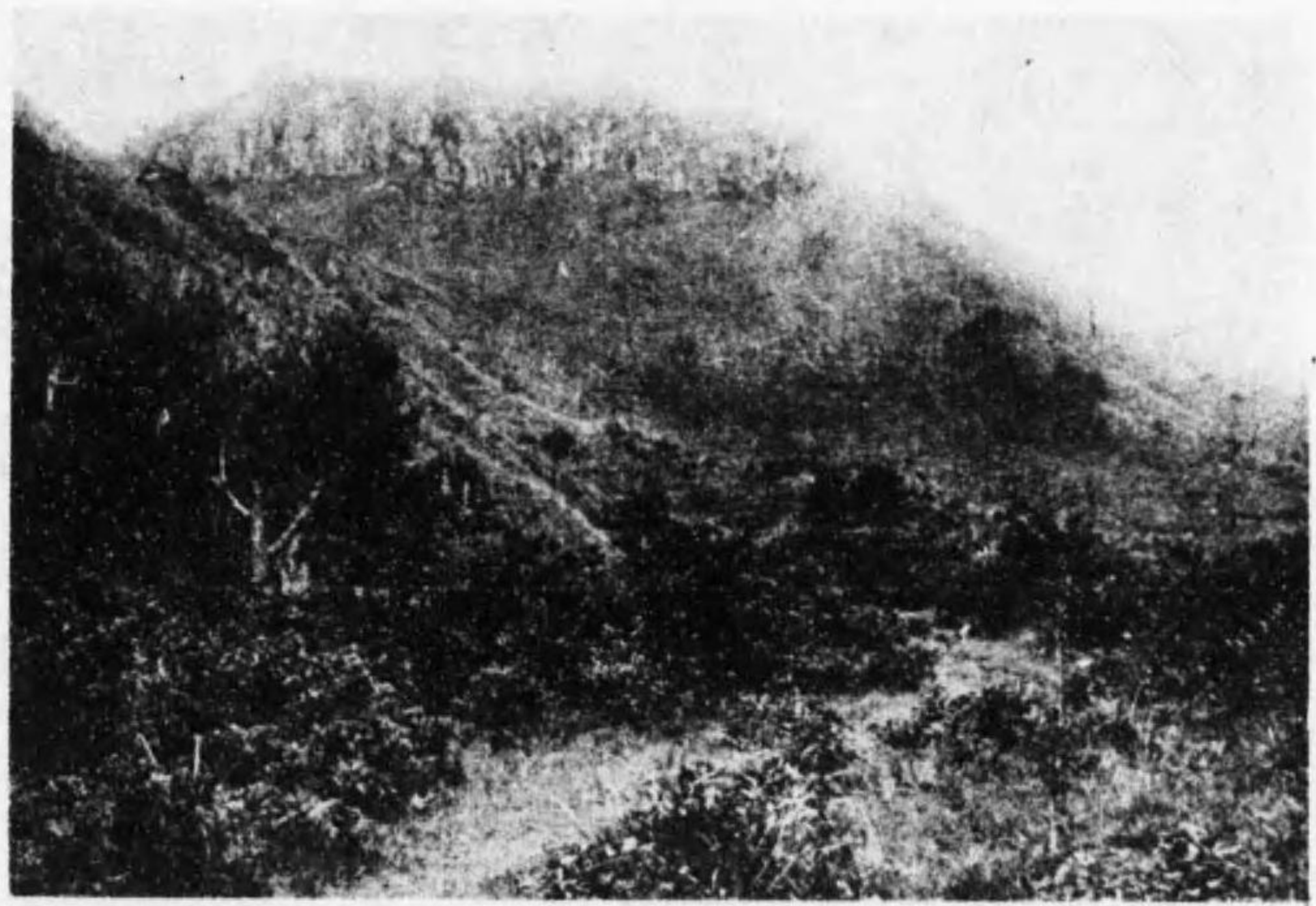
『大方殿、如何にもならせ給はゞ、わらはも、與にとこそ、思ひ定めて候へ、明日をも待たぬ命なれど、そなた一人を放して、山へ遣らんこと、實に、心元なうこそ、覚えて候へ』

と言ひつゝ、兩の袖を、顔に押し當て、よゝとばかりに、泣き倒る。大方殿とは、長高の妻なり。

斯かる所へ、基長、唯一人、山より歸り來り、直ちに母の前に出でて、事の仔細を告ぐれば、母は、早くも、覺悟を定め、屹と、容を改めつゝ、

『武人の妻たり、母たらん身の、など、命を惜み候へき、殿とも、和殿原とも、一所ならば、同じ死する身にも、如何にうれしう候はん、さばれ、今は言ふとも、其詮あらじ、早、館に、火を掛け給へ、飛び入りて、見苦しき狀をば、人に見せ候はじ』

船上山
船上山は伯耆國西伯郡の西南境に在りて大山の北の尾に位す標高六百八十米頂上は平坦にして此處に後醍醐天皇の行在所あり。



と告ぐ、涙こそ、瀧と流るれ、心も、操も、水より清し。義高の妻、基長の妻を始め、他の女房原も、皆、此室に集ひ來る、基長、一座を見廻しつゝ、

『此處に在らんは、心元なし、身を助か

り給へ』

と告ぐれば、何れも、首を掉りて、聞き入れず、

『あな、薄情きことを、宣ふものかな、みづから共を、

さほど、不覺の女と思し給ふか、大方殿と共に、露と消えなんこと、此身の本懐に候ぞや、疾く、撃たせ給へ』

と言ひさま、白き首を差し伸べて、手を合はす、覺悟せる身は、端然として、鬢のおくれ毛さへも、動かさず、基長、見て、ニツコと笑み、

『いしくも申され候ものかな、其御志を見候上は、何か苦しかるべき、山上に伴ひて、一所に、兎も角もなり候べし、イザ』

と促がし立つ。

敵、早、近づきぬと聞えければ、皆、徒歩にて、道を急ぐ、石に躓づき、棘に觸れ、手となく、足となく、血汐の滴り落つるさま、目も當てられず、基長、

『我が倉の米一荷を運ぶものには、錢五百づつを與ふべし』

と觸れ示せば、村内の老若男女、皆、争ひ出でて、米を運び、半日が間に、忽ち五千餘石を運び來る、基長、

『敵に獲られんは、愚なる業ぞ』

多くの家財を、村民に分ち與へ、館にも、倉にも、火を縱ちて、山上に還り來る。

山上には、樹に據りて、柵を植ゑ、寺を毀ちて、楯と爲し、防備、おさゝく怠らず。

長高の弟七郎氏高、奇智に富む、布旗數百を造り、近國諸豪族の徽章を描きて、山上に張る、軍容、頗る振ふ。

基長の當時焼き捨てたる焦米、今も、尙、其地より出づ、硬きものは、炭の塊の如く、軟かきものは、灰の塊の如し、今の名和神社の在るところは、長年の宅址にして、焦米は、其倉廩の跡なる同神社の裏手より出づ。

四

佐々木隠岐前司清高、二十九日の拂曉を以て、富永に押し寄す、奈和は、此を距ること、凡十町ばかり、

『彼處こそ、奈和なれ、それ急げや』
と言ひも畢らず、火焰、忽ち炎々として、立ち騰る、清高、

『オ、奈和は、早、引き拂ひしと覺ゆるぞ、さらば、船上山へ向ふべし』

船上山の頂上

伯耆國東伯郡に聳ゆる船上山の頂上は名和長年の後醍醐天皇を奉じて錦旗を翻へせる處にして此れは當時の遺蹟なり。



と呼はりつゝ、馬を早めて、山上に向ふ。萱見畑に到りて、兵を二手に分ち、清高は、二千餘騎を以て、東坂に向ひ、其弟能登守清秋は、一

千餘騎を以て、西坂に向ふ。

長高、早くも、之れを知り、亦、兵を分ちて、敵を防ぐ、次男基長、三男高光等三十餘人、東坂を守り、弟助高、源盛等二十七人、西坂を守る。

人數こそ、少なけれ、皆、勇士猛卒ばかり、忠を矛とし、義を楯とし、敵や來れと、手具脛引いて、待ち構ふ。

西坂の敵兵、先づ、鯨波を作つて、押し寄せ來る、助高等、見て勇み、

『敵兵、千騎萬騎、來ればとて、何程の事かあらん、イヤ、駈け入つて、手並の程を見せん』

馬を急坂に驅つて、驀地に突進し、大刀を振り翳して、四方八方に、斫り捲くる。

敵の部將若林父子、兵を勵まして、進まんとす、助高、猛然として、奮進し、忽ち二人を、馬上より斬つて落す、敵兵、恐れて、サツと、引き退く。

搦手の寄手、既に破れぬ。

清高、然りとも知らず、鯨波を、三度作つて、犇々と押寄せ、山上、ひつそりとして、音もなし、清高、

『扱は、敵に謀あらん』

と思へば、左右なくは、進まず。

忽ち山中鳴動すること三度、霧掩ひ、雨濺ぐ、須臾にして、天又晴る、靈鳩七八羽來りて、基長の陣を、飛び廻り、去つて、御座所の方へ向ふ、衆、見て、

『嬉れしや、此軍、勝利ぞ』

衆、皆、喜び勇む。

基長等、弓を執つて、敵を射る、敵、弦音に應じて、斃る、清高等、逡巡、敢て進まず。

主上、山上に在はしまして、軍の勝敗如何にと、氣遣はせ給ふ、折柄、一人の兵士、御座所に來れば、主上、人を以て、容子を問はせ給ふ、其者、跪きて、

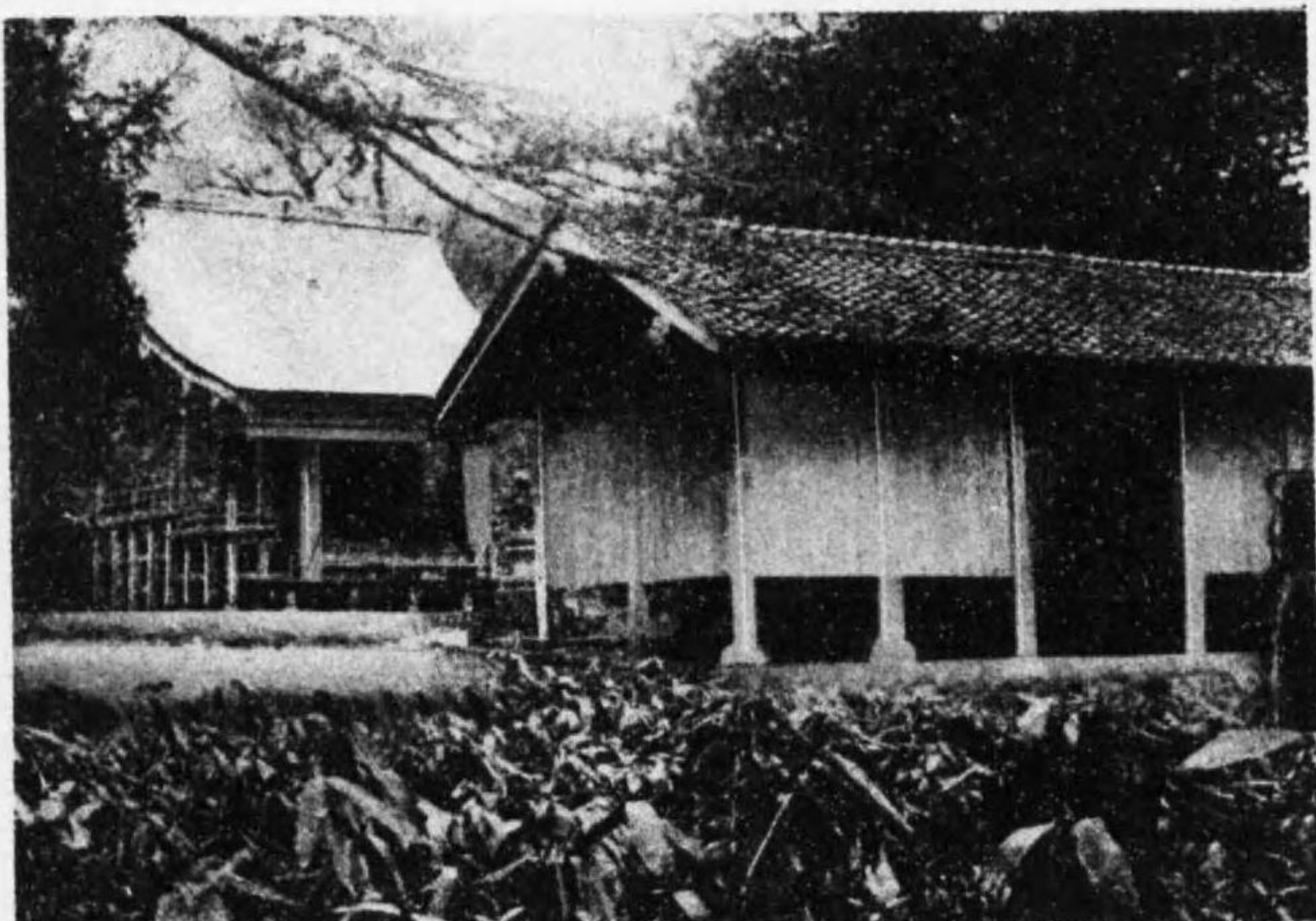
『搦手の敵は、既に追ひ退け候ひぬ、されども、追手の戦は、勝負、未だに決し候はず』

と答へ奉つれば、主上、御眉を擧めて、氣遣はせ給ふ、長高、御傍に在り、

『基長等が候ほどは、左右なく、破られ候ことあるべからず、御心安く、思召さるべし』

と事もなげに、奏し奉つれば、主上、始めて、御心を安んぜさせ給ひ、

船上山神社
船上山上に船上山神社あり是れ行在所智積寺の在りし地なり。



『暫らく、御暇を賜はるべし、長高も、立ち向ひて、一矢仕つり候べし』と宣はす、長高、御前を退りて、徐々と、立ち出づ、主上、後姿を、見送らせ給ひて、忠顯に向はせ、

『實に、頼母しげなる武夫かな』

と仰せ給へば、忠顯、ハツと、頭を下げ、

『斯るものを、御頼みあらせ給ふこと、再び御代を召されん瑞相にこそ候べけれ』

と奏し奉つるに、主上、實にもと、頷かせ給ふ。

長高、追手に到り、弓を杖つきて、悠然として、敵の容子を、打見遣る、時に、清高、諸兵を指揮して、奮進す、長高、

『さらば、我が手並を見せん』

弓を執つて、ヒヨウと放つ、長高、剛弓比なし、一矢に、敵將田所種直を射貫き、跡に續ける第六郎をも仆す。

種直の郎等源七、進んで、主人を扶け歸らんとす、長高、又射て、之れを貫き、更に、他の一人をも仆す。

長高、二矢をもて、四人を斃しぬ、敵兵、皆、驚いて、色めく、基長、此體を見るより、

『ソレ討ち取れ』

と指揮すれば、高光、眞先きに、馬を飛ばして、敵の陣中に突入す。

續いて、二十餘人、蹄を聯ねて、突進し、當るに任せて、縦横に、斫り捲くり、忽ち敵を斃すこと、百五十餘人、清高、驚き怖れて、遁れ去る。

主上、叡感斜めならず、長高に、左衛門尉を授け、伯耆守を兼ねしめ給ひ、

『長く、高きは、危き物の例ぞ、長高の名を改めて、長年と申さんこそ、好けれ』

と宣はして、親しく、名を賜へば、長高、面目、身に餘りて、感涙、留め敢へず、是れより、長年とこそ、名乗りけれ。

遠近、風を望みて、來り屬す、山上、山下、兵ならざるの地なし。

五

今は、攻守、勢を轉ず。

三月三日未の刻、主上、長年を、御前に召されて、

『國々の勢、何程参りたるぞ』

と問はせ給ふ、長年、謹みて、

『出雲、伯耆、因幡、美作の者共、二千餘騎は候はん』

と答へ奉つれば、主上、

『さらば、隱岐前司が館へ、討手を向けよ』

と命じ給ふ、長年、

『承はり候』

と答へ奉つり、其第六郎行氏、及び土屋彦五郎信貞に命じて、清高を討たしむ、清高は、船上山を距ること、三里ばかりの小波城に在り、行氏、信貞の二人、

『今日は、日暮れて候、夜に入りての合戦は、寄手の難儀なるべし、明朝、早く馳せ向ひ候はん』

と申せば、主上、

『思召す旨あり、唯、向へ』

と命じ給ふ、上意、重ねて、背くべからず、二人、ハツと答へて、御前を退き、急に士卒を率ゐて、小波城に馳せ向ふ。

人馬、飛ぶが如く、酉の刻を以て、三輪山下に達す、小波城は、山上に在り、行氏、信貞の二人、士卒を鼓舞して、仰ぎ攻む。

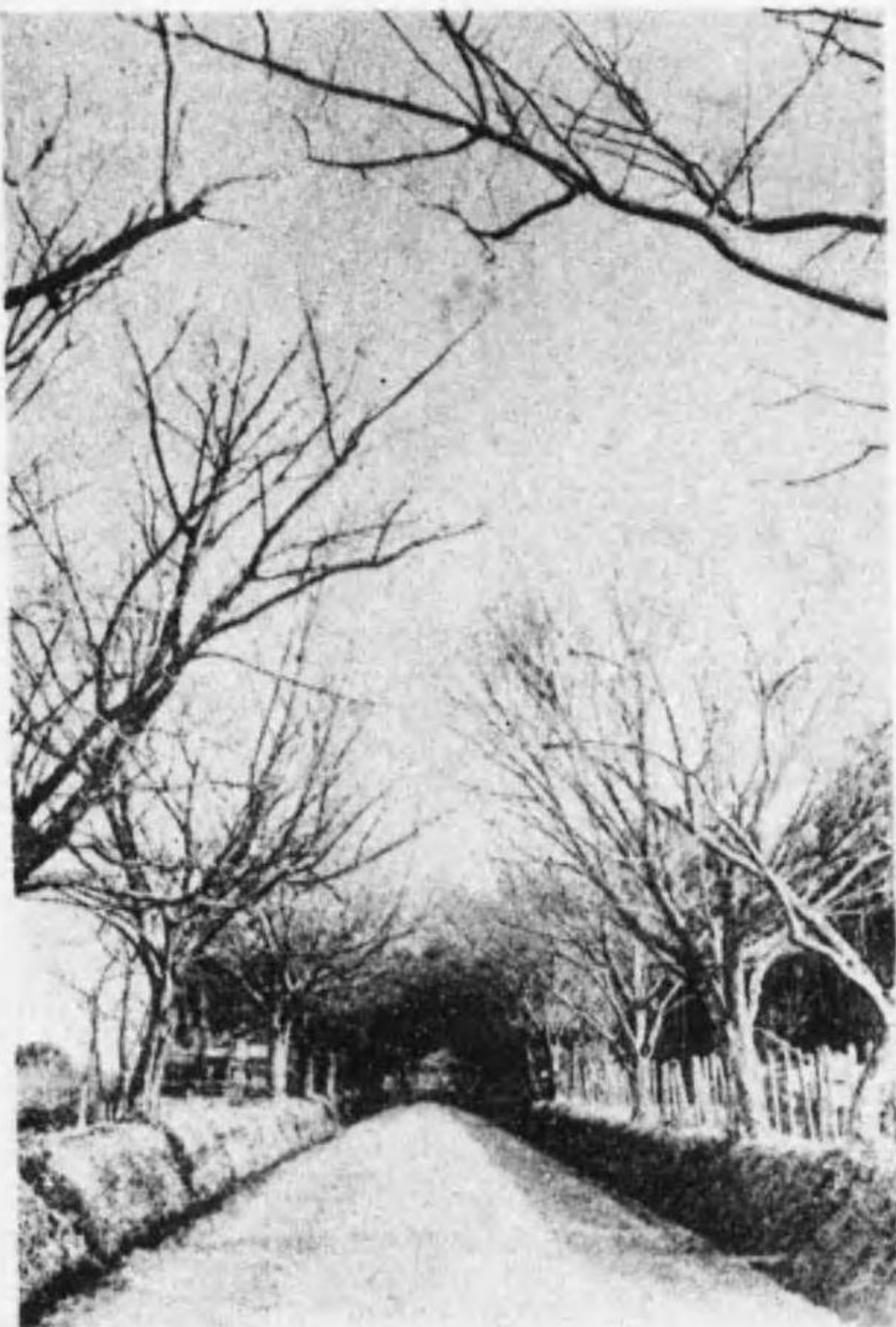
城中の士卒七百人、各々矢石を投じて、必死に、防ぎ戦ふ、

死者、傷者、累々として、山下に滿つ。

行氏、信貞の二人、少しも屈せず、暗啞叱咤、進んで、城壁に迫り、炬火を、投げ入れて、前より、後より、間斷なく、攻め立つれば、清高、勢、終に支へず、夜半の頃ほひ、城を棄て、遁れ走る。

行氏、信貞の二人、更に、伯耆の守護糟谷彌二郎入道元覺を、中山城に攻めて、之れを抜き、火を縱つて、城を焚く。

名和神社 其一
伯耆國西伯郡名和村は古の名和庄にして名和長年此に居る今の名和神社の在る處は其館址なり。



初め、行氏、信貞等の、船上山を發するや、主上、

『戦、捷たば、火を揚げよ』

と命じ給ふ、之れを久うして、火氣、少しも起らず、千種少將忠顯、心も心ならず、長年に向ひて、

『重ねて、勢を下され候へ、合戦、覺束なうこそ存ずれ』と言へば、長年、

『合戦の道は、我等にこそ任せ給へ、さな騒がせ給ひそ』と答ふ、既にして、炎烟、遙かに、天を焦がす、主上、聞召されて、初めて、御心を安んぜさせ給ふ。

遠近の將士、陸續、來り降れども、出雲の守護鹽冶判官高貞、獨り未だ屬せず、長年、乃ち其子孫三郎基長、弟鬼五郎助高をして、之れを討たしめんとす、高貞、聞いて、大に懼れ、倉皇、兵を率ゐて、來り降る。

山陰の諸國、乃ち定まる。

六

三月十三日、主上、忠顯を陞せて、中將となし、命じて、長年の子義高と與に、京師を恢復せしめ給はんとす。

忠顯等、未だ發せず、十五日の夜、主上、長年を、御前に

召させ給ひて、

『船は、水ありてこそ泛べ、君は、臣ありて立つなり、船ありとも、水なくんば、争でか、泛ばん、君ありとも、臣なくば、何とて、立つべきや、君は、是れ船、臣は、正しく、水ぞかし、朕、隱岐を出づるとも、船なくば、海を濟るべからず、汝なくんば、賊を破るべからず、朕の汝を得ること、船の水を得るにも似たらんかし、抑、此山を稱して、船上と曰ふもの、何の奇縁ぞ、今より、水に船を以て、汝の家紋とせよ』

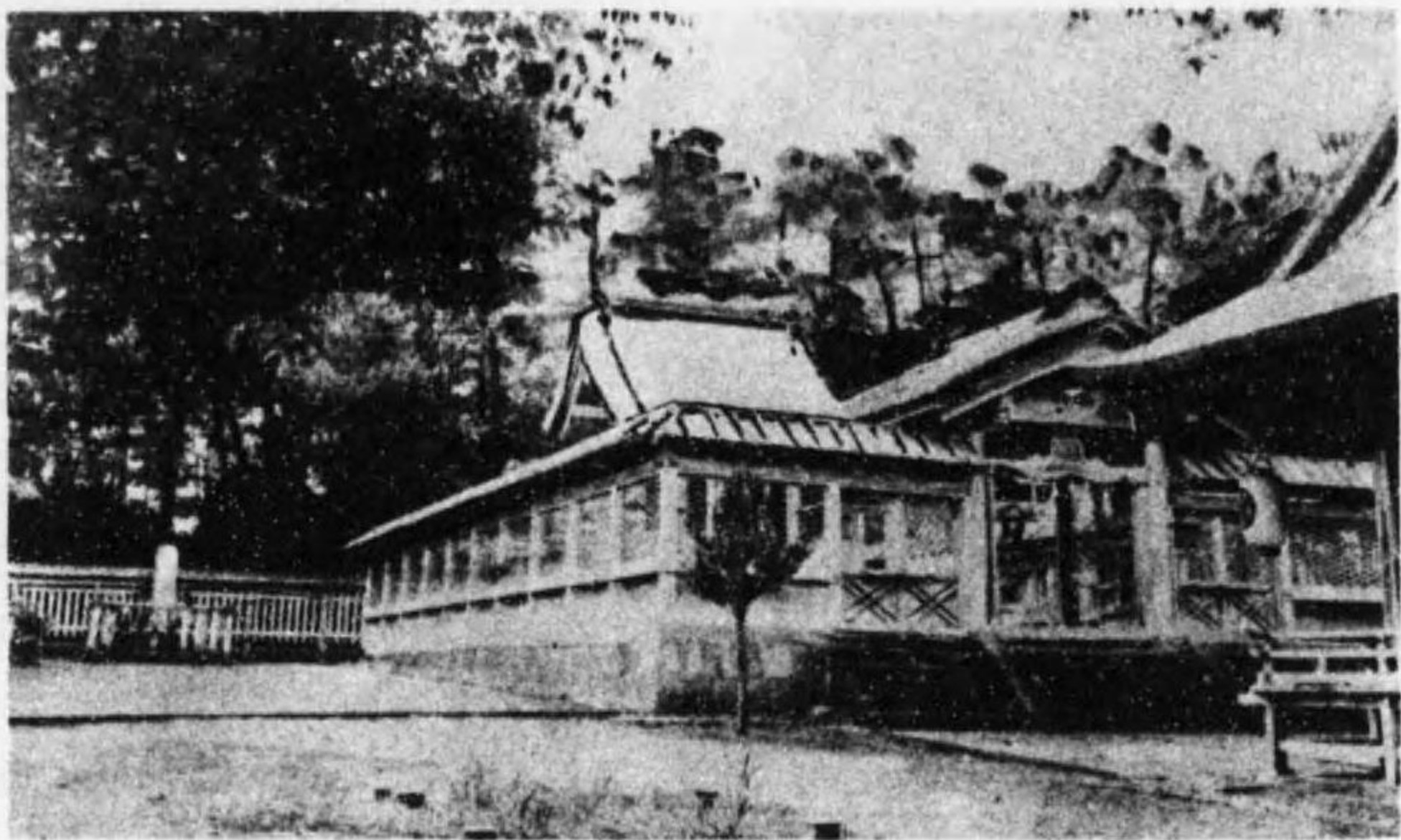
と宣はし、忠顯に、口授せさせ給ひ、帆掛船の圖案を、畫かしめて、長年に賜ひ、尙、此間、親しく、御筆を執らせ給ひて、書き綴らせ給ひたる、

漫々たる海上に、いづくともなく漂ひて、四日計りは過ぎぬ、二十七日の夕方にや、杵築浦にて、西風はげしく吹て、いかなるべきかと、心騒せしかども、風に任せしに、夜より波の上も靜にて、明ぬれば、此彼もみゆるに、伯耆の湊に着ぬ、楫取も、今は力盡ぬと云を、兎角して、大阪と云所に着ぬ、爰はあら磯にて、釣舟だにも稀なり、

此所の主と云者も、都に有ければ、よしあしにつけて、

名和神社 其二

名和神社は名和長年を祀る今別格官幣社に列せらる。



答ふべき者もなし、供なる人、一人二人は、猶、人求めにとて出ぬ、楫取も、逃失ぬれば、あやしき苦の下に、唯、獨りうづもれ居たる心の中、いはん方なし、直衣など引刷て、今は限と待居たるに、船のもとに、人ひとり來り、あら、敷もなきは、いかなるにやと怪きに、忠顯、を尋て、御迎の由を、奏す、

嬉しなどは、かゝるためしをぞ云べかめる、中々、其時は、心も詞も及ぶべき限にあらず、思出る度ごとに、其氣味、猶、むねにあり、忠を致す輩、いづれも疎なるべきにあらねども、指當て待出たりし心ちなん、たとふべき方ぞなかりし、

忘めやよるべもなみのあら磯を

御舟の上にとめしこゝろを

長年が忠功、後代の人にも知せんがために、しるし置なり、末々の君にも、是を見せ奉つらば、如何をろかならん、私の子孫までも、此忠を朽じと思へば、正直を以て、報國として、行末久敷つかへ奉るべし。

との御製を取り出だし給ひ、

『末代の龜鑑にせよ』

と宣はして、下し賜ひければ、長年の感激、言ふばかりなく、三たび、拜して、押し戴く、兩眼の涙、瀧の如し、主上、此有様を御覽じて、亦、御袖を絞らせ給ふ、長年一門の光榮、抑も如何ばかりぞ。

越えて十七日、忠顯、義高、一隊の兵を率ゐて、船上を發

し、丹波路を経て、京師に向ふ、錦旗、平安の天に懸へるは、何れの日ぞ。

星岡

土居通増奮戦の地

星岡は、伊豫國温泉郡石井村大字星岡に在る丘陵にして、高さ十丈、周回十八町餘あり、天山村の天山と與に、松山市の南方に併立す、天山よりは、稍々高く、且、大にして、彼れを、小孤山とすれば、此れは、大孤山とも稱すべし、元弘三年閏二月、土居、得能二氏、勤王の兵を擧げて、長門探題北條時直の兵を破りし處。石井村大字土居は、元寇の勇士河野六郎通有の故墟なり、其土壘あるに依りて、土居と稱す、通有の弟通成の子通増、亦、此處に居る、南朝勤王の義旗を擧げしは、此通増にして、世に、通治と稱するは、誤なり。

四國勤王の倡首を、土居、得能の二氏とす。楠木正成、千早に據りて、東軍を惱ませるの時、赤松圓心、亦、播磨に據りて、義兵を擧げ、進んで、攝津の摩耶城に

築く、六波羅の探題北條越後守仲時、北條左近將監時益、

『西國の兵は、三石、熊山に支へられて、上ること叶はず、此上は、四國の兵を徴して、摩耶城を攻めん』

と議る、恃む所は、伊豫の河野氏一族に在り、何ぞ圖らんと

土居、得能の二氏、早くも、勤王の義旗を、懸へさんとは。

元寇の役の勇士河野六郎通有の姪土居彦九郎通増、其族得能又太郎通綱の二人、相謀り、元弘三年二月、俄に、義兵

を擧げて、官軍に應じ、先づ、土佐を徇へんとす。

急報、長門探題に達すれば、北條上野介時直、大に驚き、

此月十二日、自ら兵船三百餘隻を率ゐて、伊豫に抵り、糧

食を、三津ヶ濱に揚げ置きて、星岡に迫り、火を沿道の民

家に放ちて、兵勢を助く、通増、唯一騎、城中より、打ち

出で、

『態々、此れに御向ひ候こと、悦び入つてこそ候へ、唯

の大將にも候はば、心地悪しう候はん處に、御一門にて

候上州殿の御渡り候こそ、本懐至極に候へ、斯く申す我

等も、河野の一族に候へば、御相手として、ヨモ御不足

は候まし、今日は、日も暮れ候、明日、復たこそ、見參

に入り候はめ』
 と大音聲に呼はり、色代終りて、其儘、城中に引き還へず、其後影を見送れる時直、
 『明日は、敵の勢も、集まるべし、今夜の中にこそ、攻め落すべけれ』
 と指揮して、直に兵を進む、總勢一千五百餘騎、要所々々に陣して、城に迫る、
 厚東彦太郎入道、亦、
 従うて、軍中に在り、
 會々

星岡城址地圖



『厚東以下、心變りして、後を射んとす』
 との流言あり、豊田某なるもの、聞きて、大に驚き、時直の前に出て、
 『疾く、御退

陣あらせ候へ、厚東入道、敵に内通して、内外より、挟み討たんと計略、今は紛れも候はじ、後れては、叶ひ候まじ』
 と促がすこと再三、時直、さらばとて、俄に退却すれば、全軍、大に驚き慌て、皆、刀剣弓矢を委棄して、走り退く。通増、斯くと見るより、兵を率ゐて、突出し、北ぐる逐うて、之れを撃つこと、甚だ急なり、鎌倉の兵士百餘騎、時直に従ひ、來りて、此處に在り、

『我等は、譜代の武士なり、上州に従うて落つれば、憶病未練の名を流さん、死ねや、唯、踏み留つて、討死せよや』
 と呼はり、一歩も引かず、固く陣地を守りて、奮ひ闘ひ、一騎も残らず、皆、同じ枕に斃る。
 時直、此間に、三津ヶ濱に、奔り退き、兵船に飛び乗りて、長門に逃げ還る。
 通増、逐うて、三津ヶ濱に到り、兵器、糧食を鹵獲して、城中に引き揚ぐ、兵威、忽ち四國に振ふ。
 閏二月四日、時直の敗報、京師に達す。

六波羅の兩探題北條仲時、北條時益、時、恰も、四國の兵を徵して、摩耶城を攻めんと謀れる處、是に至りて、二人の狼狽、言ふべからず、

『河野は、四國に隠れなき武士なり、誰をか遣はして、防ぐべき』
 徵して、我が用に充てんとせしもの、却つて、叛して、我が敵となる、一患、未だ去らず、一患、又新に加はる。

二

居ること數月。

四國の義徒、通増、通綱の風を聞き、來り屬するもの、陸續として、絶えず、忽ちにして、六千餘騎の多きに達す。

『さらば、此勢に乗じて、京師に攻め登らん』
 今治に、船を繕して、出發せんとす、會々官軍、六波羅を攻めて、之れを陥れ、主上、伯耆を發して、京師に向はせ給ふ。

通増、通綱の二人、乃ち急ぎ兵庫に抵りて、聖駕を迎へ奉つり、命を奉じて、扈して、京師に入る。

太平記には、唯、土居二郎とのみ記して、名を書せずと

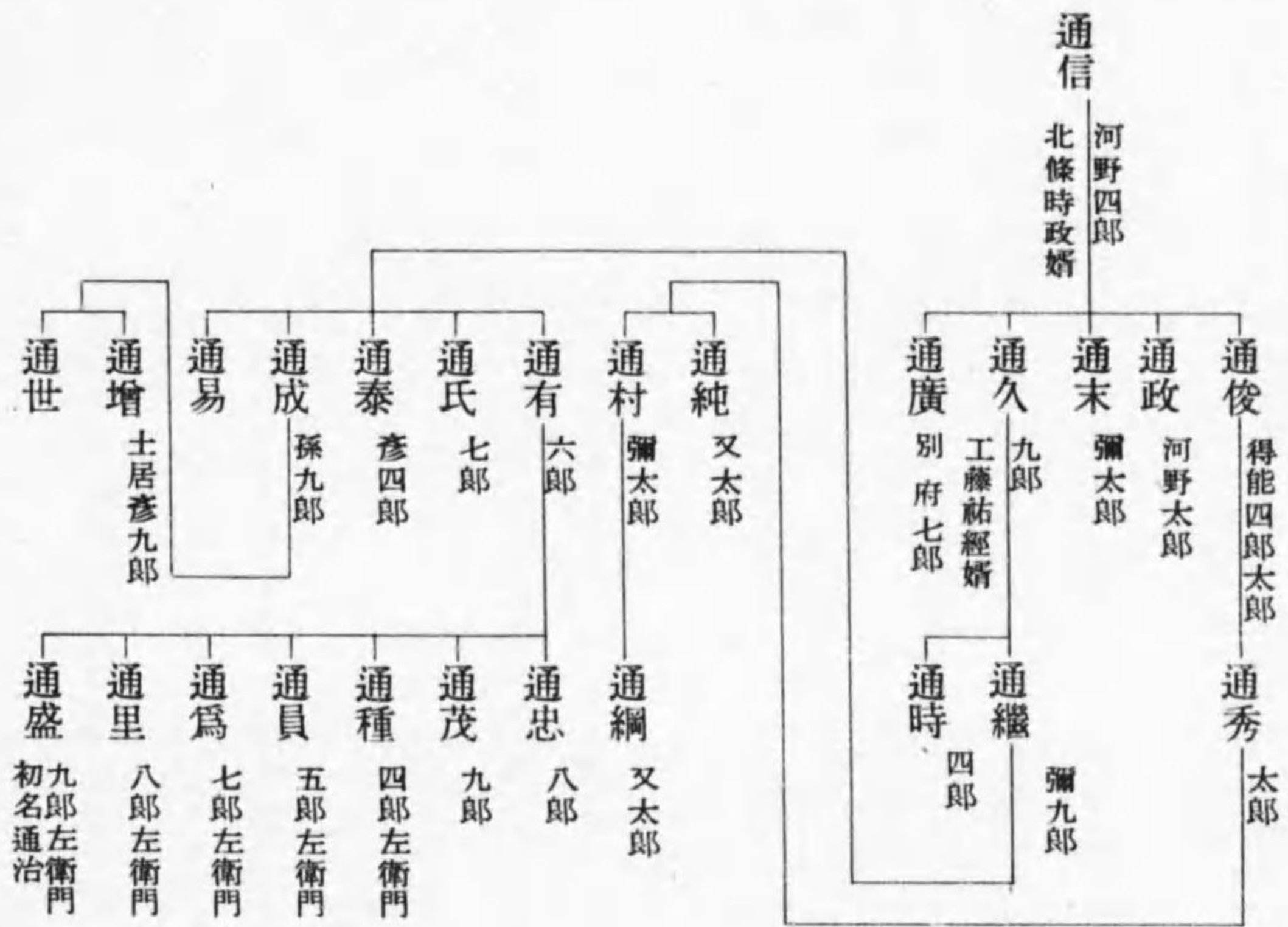
雖も、金勝院本には、之れを通治となせり、然れども、六波羅勢として、最も力戦せし河野九郎左衛門尉通盛の初名を、通治と曰ひしなり、同じ一族にして、同じ時代に、二人の通治あるべき筈なれば、此二郎を以て、通治とするは、首肯すべからず。
 博多日記には、之れを土居九郎通益となせり、通益は、即ち通増にして、之れを正となす。
 此通増の父は、名を通成と曰ひ、元寇の役の驍將河野通盛の叔父なり、さすれば、通盛と、



湯月城址
 湯月城址は星岡の東北方なる今の道後公園の地なり此れは六波羅の京軍に屬せし河野通盛の築く所にして土居通増とは其居城も同じからざるを知るべし。

太平記には、唯、土居二郎とのみ記して、名を書せずと

土居得能兩氏略譜



通増とは、從兄弟の間柄なり。
大日本史に、土居二郎通治とせしは、金勝院本に據れるものなるべく、日本外史も、亦、然るべし、明治維新後、土居通治として、贈位の恩典に浴せしも、是等の諸書に基づくものなるべし。

通綱、通増の二人は、明治十七年四月十日を以て、各々正四位を追贈せらる。

土居とは、蝦夷語のトイならん、トは沼、イは處にして、沼のある處と云ふの義なり、南土居の五丁目に、廢墟あり、故に、土居と稱せしと云ふの説あれども、如何あらん。

六波羅探題址

北條勢敗滅の地

六波羅探題は、平氏の故墟たる京都の六波羅に在り、鎌倉幕府の京師を守護し、政務を執行する職司にして、南北の二廳を置く、南廳は、今の方廣寺、博物館の附近にして、北廳は、建仁寺の西、五條松原通字北御所の附近

なるべしと云ふ。

源頼朝の平氏を滅すや、文治元年、北條時政、頼朝の命を奉じて、上洛し、公文所を、六波羅に置きて、洛中、及び近畿の政務を掌り、兼ねて、兵馬の權を管す、後、頼朝の上洛するや、第を六波羅に構ふ、爾來、京都守護の武士、此處に居る。

承久の役起るや、北條泰時、北條時房の二人、兵を率ゐて、上洛し、泰時は、北六波羅亭に居り、時房は、南六波羅亭に入る、事平らぐの後も、名を京都の守護に假り、二人を、六波羅に留めて、政務を取らしむ、之れを兩六波羅探題職の嚆矢となす。

爾來、探題は、必ず、二人を置き、皆、北條氏の一門を以て、此れに補す、元弘三年五月、北條仲時、北條時益の二人、官軍の爲めに、攻められて、戦死するに及び、六波羅探題は、終に、自然消滅に歸し去る、其間、實に、一百十二年。

當時、赤松圓心は、山城國乙訓郡山崎を、根據とし、源忠顯は、初、山城國葛野郡松尾村の峰堂を、陣地とし、

六波羅探題址

後、綴喜郡八幡に移り、足利高氏は、丹波國南桑田郡篠村を、足場として、京師に、攻め入りしなり、篠村は、老坂の西方に在りて、足利氏の領邑たりしなり。

兩六波羅の探題北條仲時、時益の二人、捷報に渴すること甚し、征討の諸軍、再下せしより以來、

『這度こそは、摩耶城を、攻め落して、赤松を、打ち滅ぼさんこと、必定ぞ、今に、吉左右あらん』

心に、捷報の到るを期して、今かくと、待ち設く、會、三月十二日、京軍敗北の説、傳はり來る、

『争かて、然ることあらん、有るべき事とも覺えず』

二人、口にこそ、打ち消せ、今は、心安からず。申の刻の比、淀、赤井、山崎、西岡、其他の諸所に、炎々たる火焰の起ること、三十餘ヶ所、

『這は、何事ぞ』

二人、驚き怪む折柄、從士、馳せ來りて、
『西國の兵、三方より、押し寄せしとて、京中、上を下へと、騒動するげにひぞ』

と報ず、今は、疑ふべくもあらず。

『扱は、大事ぞ』

桂川
桂川は嵐山の麓より京都の西を過ぎ南流して淀川に注ぐ。此れは京極村より桂村に架せる桂橋にして西七條の末に當る赤松軍の渡河したるは此稍々下流なり。



二人、愕然として、打ち驚き、俄に、地藏堂の鐘を、鳴らして、洛中の兵を集む。
斯かる所へ、摩耶城に向へる京兵、續々、逃げ還る。
人馬、西へ奔り、東へ走る、洛中

の混雜、宛がら、機上の梭に似たり。

『坐ながら、敵を待たんは、武略、足らざるに似たり、洛外に馳せ向ひて、敵を防がんこそ、然るべけれ』

仲時、急に隅田通治、高橋宗康の二人に命じ、二萬餘騎を率ゐて、今在家、作道、西朱雀、西八條の邊に向はしむ。時に、春雪、全く解けて、河水、方さに漲る、二人、乃ち桂河を隔て、敵を防がんと欲す。

二

赤松圓心、三千餘騎を、二手に分ち、久我暲、西七條より、押し寄せ来る。

追手の兵、早、進んで、桂川の西岸に達す、前岸を望めば、京兵、城南離宮の西門より、作道、四塚、羅城門の東西、西七條口までを支へて、其勢、雲霞の如く、諸家の旌旗、東風に翻へる、

『扱も、思ひの外なる多勢ぞ』

圓心、此狀を見て、敢て進まず。

京兵、亦、進まず。

兩軍、河を隔て、矢戦すること數刻、我れ進まんとする

ものもあらず、血氣の則祐、心、もどかし、

『矢軍のみにては、果てしもあらず、イデヤ、河を渡りて、進み攻めん』

俄に、胃の緒を締め、馬の腹帯を固めて、唯一騎、岸より下に降り立ち、今や、一鞭、馬を驅つて、水中に、乗り入らんとす。

斯くと見たる父の圓心、大に驚きて、馳せ来る、

『止まれ、佐々木三郎の藤戸を渡し、足利又太郎の宇治川を渡したるは、皆、豫ねて、藩印を立て、道筋を見おき、敵の無勢に乗じて、先駈せしものぞ、雪消え、水増さりて、淵瀬さへ見えざる大河を、案内をも知らず、渡さん法やある、假し、渡せばとて、敵は、目に餘る大勢なるに、唯一騎、駈け入らんは、暴虎馮河の勇ぞ、天下の安危は、今日の一戦に、限ることかは、止まれや、止まれ』

手を挙げ、聲を絞りて、制し止む、則祐、屹と、馬を立て直しつゝ、

『小勢を以て、多勢を破るは、唯、奇襲にこそ候へ、敵

に、我が無勢を見透かされなば、争かて、勝利を得られ候べき、躊躇は、敗北の基に候ぞや、唯、渡らせ給へ』
と言ふや否や、忽ちザンブと、河中に、乗り入る、馬は、無双の駿馬、人は、無比の達人、見る、流を斫つて、突き進めば、

『左らば、續けや』

鮑間九郎左衛門光泰、伊東民部大輔、河原林二郎、木寺相模、宇野國頼の五騎、亦、續いて、サツと、乗り入る。國頼の馬は、聞ゆる逸物、眞一文字に、流を衝き斫る、相模は、逆巻く水に、打たれて、鞍より、落ちしも、難なく、泗ぎて、岸に達す。

眞先に、躍り上れる則祐、猶豫もなく、敵中に、突入すれば、光泰、國頼等、亦、我れもくと、突き入り、突き進む、

『扱も、大膽不敵の者共かな、ヨモ、只者にはあらず』
敵兵、舌を巻きて、驚き怖れ、バツと、左右に披く。

此光景を、望み見たる範資、貞範の兩人、

『先駈の味方を、討たすな、續けや續け』

と呼ばり、一度に、サツと、乗り入るれば、佐用範家、上月家俊以下、我れ後れじと、乗り入れ、前岸に躍り上がる、と齊しく、無二無三に、敵中に、突き入る、決死の兵鋒、當るべからず。

圓心の全軍、悉く河を渡れば、京兵、楯を棄て、旗を巻き、作道を北へ、東寺に退くもあり、竹田河原を上りて、法性寺大踏に落つるもあり、三十餘町の間、兵器、道路に、充ち満ちて、馬を乗り入るべき餘地もあらず。

擲手に向へる高島左衛門佐忠俊、小寺政季、衣笠武則等の一隊は、其間に、西七條より、洛中に侵入して、大宮、猪熊、堀川、油小路を始め、諸所に、火を放つこと、五十餘ヶ所。

七條より、八條、九條に至るの間、戦争、諸所に起り、人馬、東西に、馳せ違ひて、吶喊の聲、其處にも、此處にも起る。

既にして、日、全く暮れぬ、天は曇り、夜は暗くして、人顔を辨せず、京兵、多くは、退きて、六條河原に控ゆ。

三

華洛の地も、忽ち兵塵の巷と化し去る。日野大納言資名、日野左大辨資明、急ぎ御所に参入すれば、四門は、空しく、開かれて、百官は、何れへか、落ち行き、廣き宮中も、寂として、人の影だに見えず。

光嚴天皇、南殿に出御ましく、親しく、

『誰か候』

と御聲を懸けさせ給へど、勾當内侍と、上童との二人の外には、御前に候するものもあらず。

斯かる所へ、資名、資明の二人、來りて、御前に跪つき、

『官軍、勢弱くして、逆徒、既に洛中に攻め入りて候、

或は、御所へ亂入せんも、測るべからず、急ぎ六波羅へ、

行幸あらせ給ふべくもや』

と奏しまつる、天皇、

『左らば、好きに計れ』

と宣らせ給ひ、神器を奉じ、瑤輿に召されて、御所を出てまし給ひ、二條河原より、六波羅へ、行幸あらせ給ふ。

堀河大納言、三條大納言、鷲尾中納言、坊城宰相以下、月

卿雲客二十餘人、路次に參着して、扈從し奉つる。

後伏見、花園兩上皇、中宮、東宮、及び梶井親王、亦、續いて、六

波羅へ入らせ給ふ。

兩六波羅探題の惶

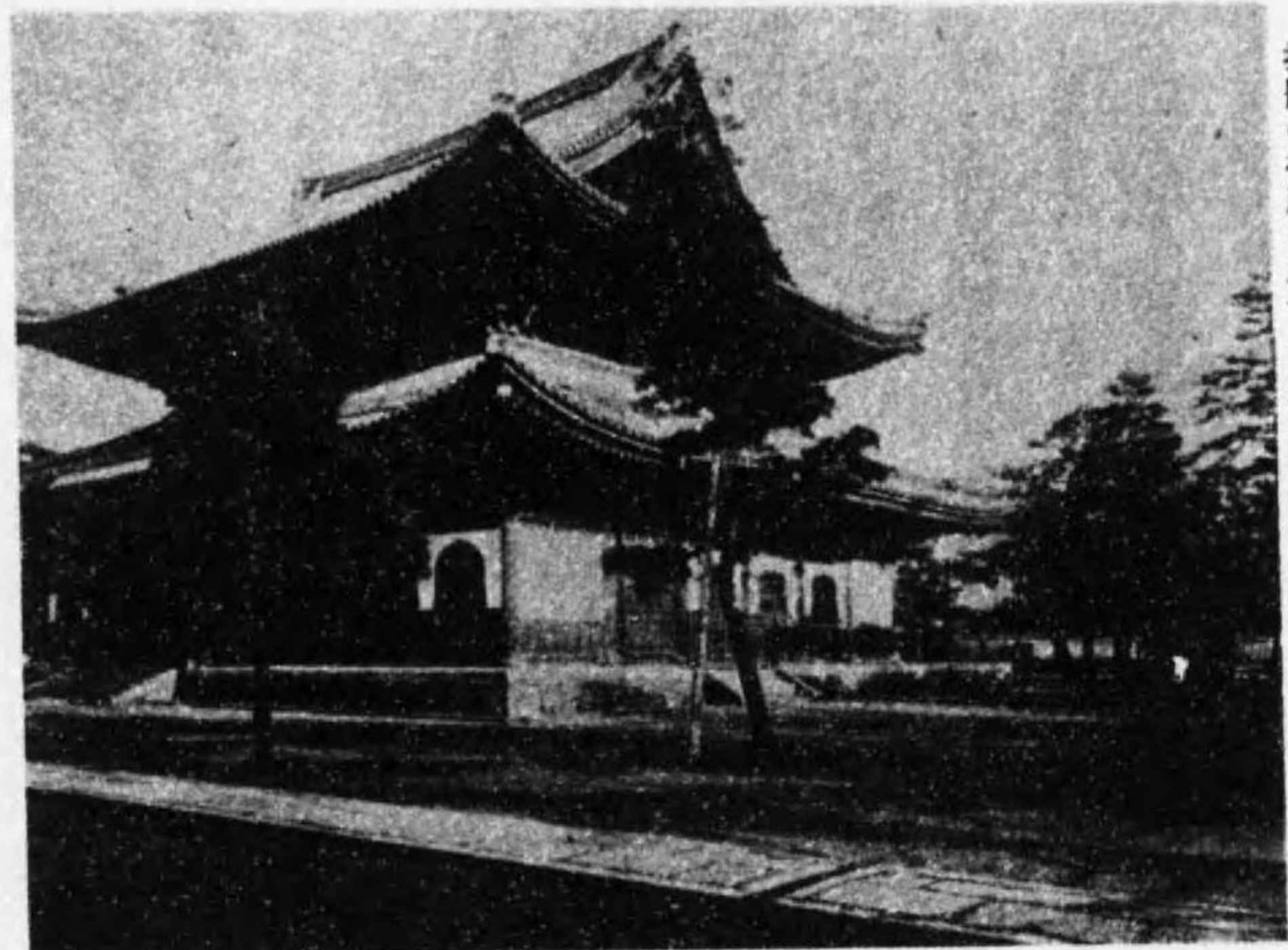
懼、言はん方なく、

俄に、北六波羅の

館を清めて、假りに、皇居

に充て奉つる。

四 雲上の臺



建仁寺
建仁寺は京都市東山区大和路四條下る處に在り六波羅探題の北廳は此寺の西方に當る。

は、兵馬の塵に、潰すべからず。

六波羅の兩探題仲時、時益、各、兵を率ゐ、七條河原に出で、近づき來る敵兵を、待ち設く。

圓心、京兵の多勢なるを見て、敢て進み戦はず、唯、火を諸所に縱ち、喊聲を發して、擬勢を張る、兩探題、

『扱は、敵は、小勢と覺ゆるぞ、行き向ひて、追ひ散らせ』

隅田通治、高橋宗康に、三千餘騎を附して、八條口に遣はし、河野通盛、陶山義高に、二千餘騎を附して、蓮華王院に遣はす。

通治、宗康の二人は、南より來るの敵を防ぎ、通盛、義高の二人は、北より來るの敵を防ぐに在り、義高、時に、通盛に向ひ、

『烏合の勢を率ゐて、戦は、却つて、足手纏となるばかり、進退駈引も、自在には候まじ、六波羅殿より、添へられたる兵は、河原に控へて、関の聲のみを、揚げさせ、我等の手勢のみを率して、蓮華王院の東より、敵中に馳せ入り、思ひさまに、戦ひ候はんは、如何に』

と謀れば、此方も、同じ心、

『其は、妙計にこそ候へ』

通盛、言下に、賛意を表す、左らばとばかり、六波羅より、附したる二千餘騎の兵は、鹽小路の道場前に、残し置き、通盛は、三百餘騎、義高は、百五十餘騎の手兵を、提さげ、蓮華王院の東に到る。

鹽小路の京兵、時分を測りて、哄と、鯨波を揚ぐれば、

『素破や、敵の寄するぞ』

圓心の兵、急に備を立て直し、皆、馬首を、西方に向けて、敵を待つ。

通盛、義高の二人、思ひも寄らぬ背後の方より、亦、哄と、鯨波を作つて、殺到すれば、圓心の兵、大に驚き、復た急に備を立て直して、拒ぎ戦ふ。

圓心の兵、長途に疲れて、進退自由ならず、討たるゝもの、傷つくもの、數を知らず、終に大に敗れて、走り退く。

通盛、義高の二人、一戦して、敵を破り、馬を西七條大宮に進めて、朱雀の方を見遣れば、隅田通治、高橋宗康の二人、今や、高島左衛門佐忠俊、小寺政季、衣笠武則等の兵

に、駈け立てられて、苦戦しつゝあり、通盛、

『捨て置かば、味方、敗れ候はん、イザヤ、往きて、援け候はん』

直に馬を驅つて、馳せ行かんとす、

『暫く、今、暫く』

と制し止むる義高、

『未だ雌雄の決せざる中に、力を合せて、敵を退け候はば、日頃、傲慢の隅田、高橋の兩人、必定、我が功名なりと、披露候はん、今、暫く、打ち棄て、事の様を、御覽候へ、勝ちに乗るとも、何程の事か候はん』

と語れば、通盛、大に笑つて、止まる。

既にして、通治、宗康の兵、大に敗れ、右往左往に、逃げ走る、斯くと見たる義高、

『イザヤ、懸合せ候はん』

通盛と合して、一手となり、哄と喚きて、突き進めば、小勢の忠俊、政季、武則等、忽ち敗れて、寺戸を、西へ走る。

五

貞範、則祐の兄弟、桂河を渡りて、京軍を撃破するや、從

士四騎と與に、北ぐるを追うて、敵を討ち取り、竹田を上りて、法性寺大路を、馳せ過ぎ、終に進んで、六條河原に到る、六波羅の館は、水の彼方に在り、乃ち馬を停めて、味方の來るを待つ。

待つこと多時。

東寺より進める味方の兵、敗れ退きて、今や、四面、皆、敵なり、

『左らば、暫く、敵に紛れて、味方を待たん』

貞範、則祐等、皆、笠印をかなぐり捨て、一所に控ゆ。通治、宗康の二人、敗れ走りて、此處に來り、忽ちフツと心付く、

『赤松の勢共、味方に紛れて、此中に在らんも、知れじ、河を渡せる敵なれば、馬具、物具も、皆、濡れ居らん、其を目印に、討ち取れや』

と呼ばれば、士卒の眼は、皆、一齊に、他の馬に、鑿に、注がる。

今は、敵に紛れんこと、叶ふべからず、貞範、則祐以下の六騎、屹と、心を決す、

『左らば、懸かれ』

蓮華王院
蓮華王院は京都市下京區大和大路に在り三十三間堂是れなり河野通盛陶山義高の陣を置きし處。



轡を並べ、鋒を揃へて、サツと、敵中に、突き入りさま、當るに任せて、斬り立て、薙ぎ立つ、事、不意に起れば、

『素破や、敵の勢ぞ』

通治、宗康の兵、俄に、狼狽して、策の出づる所を知らず、唯、抜き合せ、斬り合せて、同志討の戦鬪、其處にも、

此處にも起る。

貞範、則祐等、各々勇を奮うて、右を撃ち、左を撃つ、何時しか、敵に阻てられて、互に相失ぐる、

【軍も、此れまでぞ】

貞範、從士二騎と與に、西を指して、落ち行く。

則祐は、尙も、留まり戦ふこと少時、從士、一人討たれ、二人討たれて、今は、我身の外に、我身を助くる勢もあらず、

【左らば、落ちん】

則祐唯一騎、七條を西へ、大宮を下りに、落ち行く。

印具尾張守武任の從士八騎、其れと見るより、蹄を揃へて、追ひ来る。

【其れへ渡らせ給ふは、誰人ぞ、名乗り候へ、名乗らせ給へ】

と口々に、呼び懸くれば、則祐、

【名乗ればとて、ヨモ知られ候まじ、唯、首を取りて、

人に見せられ候へ】

と言ひつゝ、馬を走らし、敵、迫れば、返し戦ひ、敵、引

けば、又落ち行く、一騎と、八騎と、追つ、追はれつ、西八條の寺の前を、南の方へと、連れ行く。

羅城門の方を、見遣れば、三百餘騎の一隊、此方に向ひて控ゆ、其巴の旗章を見るより、則祐、忽ち諸鎧を合せて、サツとばかりに、其中に駈け入る、此れぞ、兄範資の一隊。

【あな無念や、好き敵をこそ、討ち漏らしけれ】

此處まで、追ひ来れる敵の八騎、口々に咬きつゝも、討たれざりける己のが首を、土産に、トットと、回り去る。

六

範資、尙、馬を駐めて、羅城門前に在り。

既にして、貞範も、還り来り、敗残の兵も、其處此處より、還り来りて、總勢、今は、一千餘騎に達す、

【此儘、引き還るも、勇氣なきに似たり、イデ、今一戦して、雌雄を決せん】

範資、貞範、各々其兵を率ゐて、東西の小路より、軍を進め、七條邊に到りて、哄と、鯨波を揚ぐ。

【素破や、敵ぞ】

此聲を聞きて、馳せ集まる京兵七千餘騎、六條院を、後に

充て、追ひつ、追はれつ、互に挑み戦ふこと、二時間ばかり。

勝敗、尙、未だ決せず。

斯かる折柄、四百餘騎の一隊、忽然として、大宮を下りに、打つて出づ、此れぞ、河野通盛、陶山義高の別軍。

其れと見たる範資、貞範、急に陣を廻らして、此れに備へんとす、京兵、此れに乗じて、來り迫れば、後陣の兵、忽ち亂る。

【軍も、早、此れまでぞ】

範資兄弟、俄に、兵を收めて、山崎に引き退く。

通盛、義高、追うて、作道の邊に到る、妻鹿長宗の返し戦はんとするを見るより、亦、兵を收めて還る。

此日、二人の獲る所、捕虜二十四人、斬首七十三級、各々敵首を、太刀に貫きて、六波羅に凱旋すれば、天皇、御簾を捲きて、御覽せさせ給ふ。

兩探題仲時、時益、各々敷皮に坐して、實檢を行ひ、

【兩人の振舞、例の事とは申せ、今日の合戦に、勝利を得たるもの、偏に各々の忠戦に由り候ぞ】

と陳べて、其功を賞すること再三。

此夜、臨時の除目あり、通盛は、對馬守に任ぜられて、御劍を賜はり、義高は、備中守に任ぜられて、寮の御馬を賜はる。

將士、皆、歎羨せざるはなし。

其翌日、通治、宗康の二人、洛中を馳せ廻はりて、傷者、死者の首を集め、町人、百姓の首をも斬りて、六條河原に梟せしもの、八百七十三級、中に、

【赤松入道圓心の首】

と記せし榜を附けしもの、五個あり、京童、見て、皆、これと驚く。

七

當の圓心は、敗れ還りて、山崎に陣す。

左近衛中將中院定平、亂を避けて、來りて、此地に在り、圓心、乃ち推して、主將となし、伴りて、聖護院と稱す。士卒、聞きて、來り屬するもの多し。

圓心、乃ち男山、山崎の間を扼して、西國の通路を斷つ、轉漕の道、全く絶えて、洛中の商賈、皆、窘む。

兩探題仲時、時益、聞きて、心、安からず、

『赤松一人の爲めに、洛中を悩まされ、士卒を苦むること、安からね、十二日の戦状を見るに、敵はさまで、多勢にもあらざるに、言ふ甲斐もなく、討ち漏らしぬること、末代までの耻辱なれ、軍勢を差し向けて、敵兵を攻め滅ぼし、賊徒の首を取つて、六條河原に梟し候はん』乃ち五千の兵を發して、之れを討ずるに決す、佐々木時信兄弟、請うて、軍に加はる。

其間、空しく、日を費やすこと三日。

三月十五日卯の刻、京軍、五條河原に集合し、八條より、桂河を渡り、河島の南を経て、物集女、大原野の前より進む。

圓心、乃ち三千の兵を、三手に分ちて、之れを防ぐ。

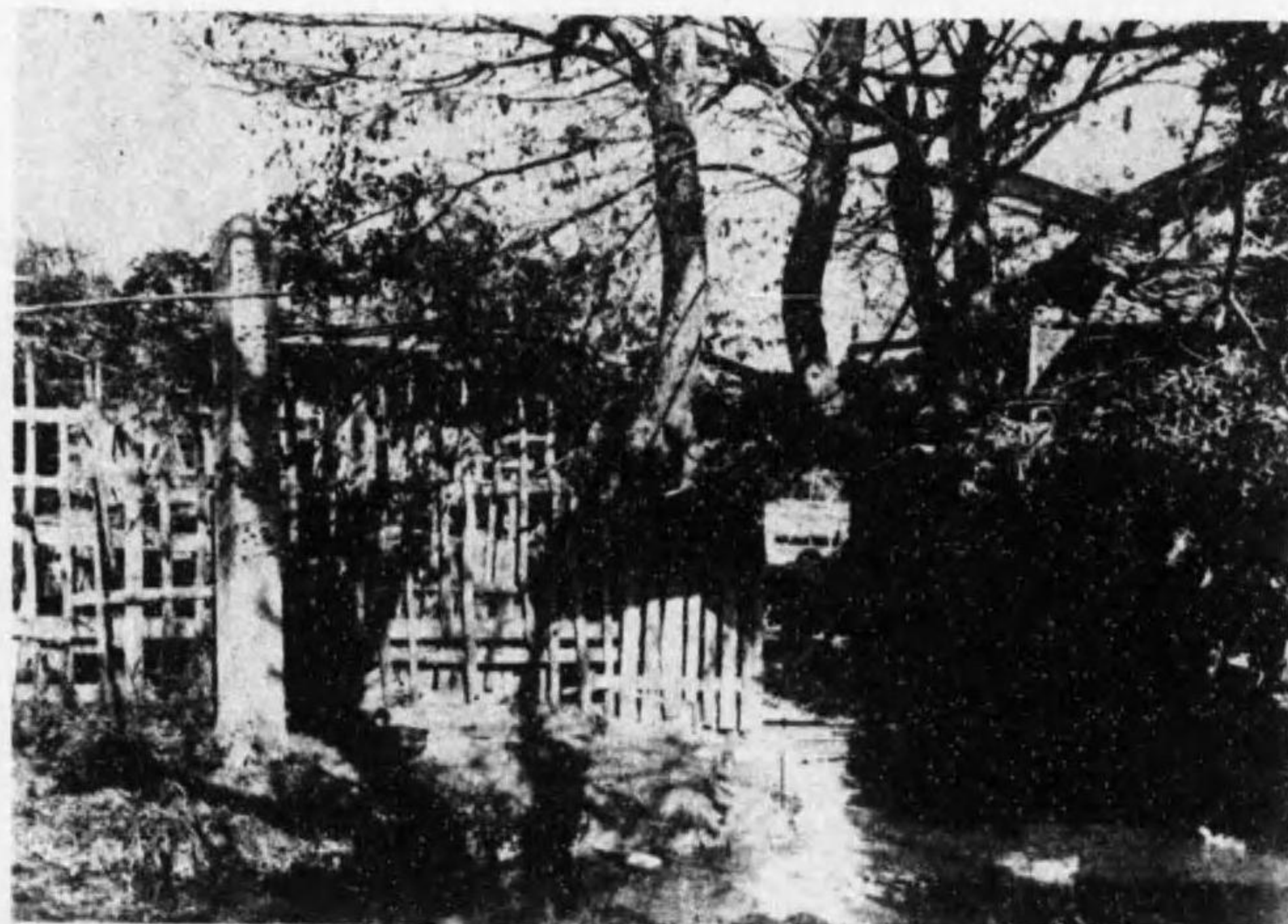
一手は、射手五百人を選つて、小鹽山に備ふ、宇野國頼、佐用範家、之れを率ゆ。

一手は、騎士、及び土兵一千人を以て、狐河の邊に配す、別所資家、別所貞泰、上月の面々、之れを統ぶ。

一手は、遠兵八百餘騎、向日明神の祠後の松原に伏す、妻鹿

長宗、武部輝國、田中重清、小寺政季、八木氏範、神澤利治等の

羅城門の舊址
羅城門は平安城外郭の南門にして朱雀大路の九條四ツ塚に在り。



勇士、此手に在り。京軍、之れを知らず、火を寺戸の民家に放ち、進んで、向日明神の祠前を過ぐ。一隊の射手、小鹽山の麓に在り、先づ、矢を放ちて、

之れを射る。

戦端、忽ち開く。

京軍の先鋒、馬を驅りて、之れを衝かんとす、山、險にして、登ること能はず、乃ち退きて、平地に誘き出さんとす。圓心の兵、敢て應ぜず、唯、矢を飛ばして、之れを射ること、初めの如し、

『多寡の知れたる野武士共ぞ、捨て置きて、山崎に進めよ』

京軍、敢て意に介せず、其儘、進んで、西岡を、南に過ぐ。機は、來れり。

妻鹿長宗、三百五十騎を提さげて、向日明神の松原より、躍り出で、驀地として、京軍を衝く。

京軍、其小勢を侮り、中に包んで、掩撃せんとす。武部輝國、田中重清、小寺政季、八木氏範、神澤利治等、各、五十騎、百騎を率ゐて、右より現はれ、左より起り、無二無三に、京軍を襲ふ。

京軍、衆を恃みて、事ともせず、兵を分ちて、防ぎ戦ふ。忽然として、狐河の邊より、躍り出でたる一隊の人馬、京

軍の後方を、目蒐けて、突貫せんとす。

『扱は、計られしぞ、ソレ引けや』

京軍、今は、戦はん勇氣もなく、先を争うて、走り退き、田に落ち、溝に陥り、人も、馬も、泥まみれとなりて、白晝の大道を、京師に逃げ還る、

『河野、陶山を、差し向けられなば、斯程穢なき負けは、仕まじきものを』

京童、遠慮もなく、指さしつゝ笑ふ。

通盛、義高の二人、其身、京師に残りて、其名、却つて、世上に謳はる。

八

嚮に、圓心の利を失ふや、大塔宮、其由を聞し召されて、御心を苦め給ひ、牒使を、叡山に發して、山門を頼ませ給ふ。

公家に従はんか、武家に屬かんか。

祐全、玄尊、祐覺以下、一山の大家、三月二十六日、大講堂の庭に、集まりて、向背を議る、今や、三千の心は、一人の心、皆、武家の積悪を憎んで、王法の擁護を、説かさ

るはなし、

『さらば、二十八日を以て、六波羅へ、攻め寄すべし』
事、立ちどころに、決定すれば、各々院々、谷々に還りて、
兵備を修む。

警報、翼なくして、四方に飛ぶ、遠近の末寺、末社より、
馳せ來り、馳せ集まるもの、一夜にして、十萬六千餘人に
上れば、

『六波羅は、早、手中に在り』

氣早の僧兵、皆、喜び勇む、山僧は、勇あれども、略を知
らず、

『二十八日卯の刻、法勝寺に集合すべし』

と觸れ示せば、僧兵、武器をも着けず、兵糧をも使はず、
今路より、西坂より、法勝寺を目指して、京師に馳せ向ふ
もの、陸續、踵を斷たず。

兩六波羅の探題、斯くと聞きて、俄に、軍議を開く、通盛、
義高の二人、

『山徒、大勢なりと雖も、騎馬の兵は、百に一もあるべ
からず、馬上の射手を揃へて、三條河原に、待ち受け、

懸け開きては、懸け合はせ、打ち寄せては、打ち返し、
左手右手に、射立てんに、山徒、心、猛しと雖も、鎧、
重く、氣、剛なりと雖も、脚、疲れて、忽ちに弱り候は
ん、之れを破らんこと、何の難くや候はん、是れ小を以
て、大を挫き、弱を以て、強を拉ぐの兵法に候』

と説けば、兩探題、大に喜びて、此れに従ひ、七千餘騎を、
七手に分ち、三條河原の東西に陣して、敵を待つ。

山徒の意氣、山より高し、皆、必勝を期して、山を下る、
先鋒は、既に法勝寺、眞如堂に着けども、後陣は、尙、山
を離れず。

先着の兵、六波羅を、下瞰して、意氣、既に敵を呑む、

『今に見よ、六波羅も、唯、一ひしきぞ』

後陣の勢を待ちて、進み撃たんとす。
俄然として、呐喊の聲、三方より、渦巻き起る、此れぞ、
七千餘騎の六波羅勢、機先を制して、逆寄せに寄せたるも
の、

『素破や、敵兵ござんなれ』

大衆、太刀よ、長刀よと、薙きつゝ、咄嗟に、陣を整へて、

法勝寺の西門に、打つて出づるもの、一千餘人。

六波羅勢、敵、懸かれれば、サツと引き退き、敵、引けば、
ドツと、押し寄せ、寄せては、返し、返しては、又寄する
こと、五六度。

此方は騎馬、彼方は徒歩。

騎馬の兵は、少しも、疲れず、徒歩の兵は、早、勞れて、
全身、皆、汗ばむ。

機は今ぞ、六波羅勢、馬を控へ、鐵を揃へて、射ては番へ、
番へては、又射る、大衆、弦音に應じて、バタリ〜と倒
る。

『平場の戦は、不利ぞ』

大衆、今は叶はず、皆、馳せて、法勝寺に、逃げ入らんと
す。

丹波の住人佐治孫五郎元辰、馬を控へて、西門に在り、五
尺三寸の大太刀を揮うて、逃げ來る僧兵を、斬り拂ふこと
三人。

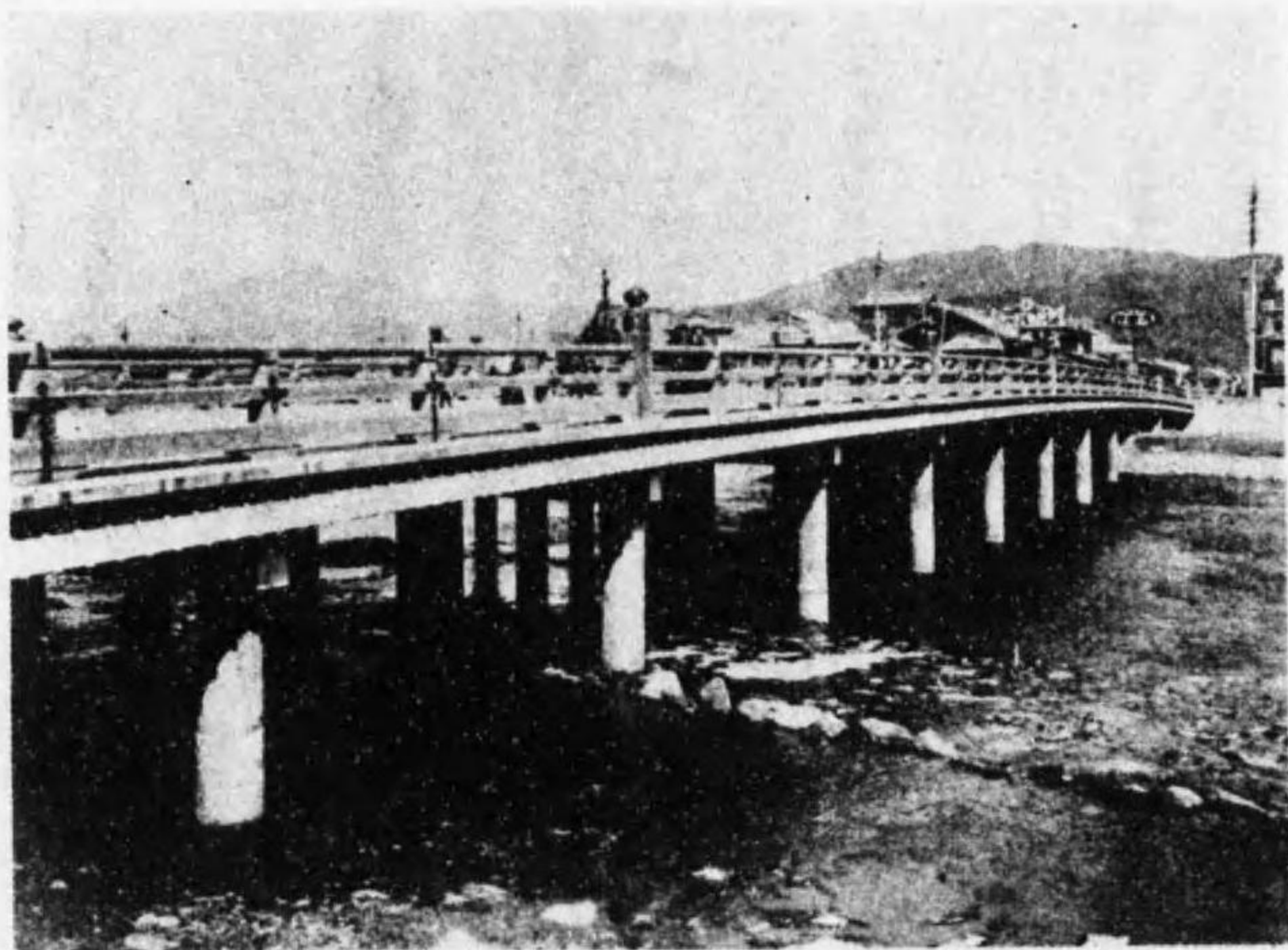
刀身、少しく、反れば、門扉に、押し當て、グツと、押
し直し、又も、逃げ還る僧徒を、待ち構ふ。

『扱は、寺内にも、敵ありと覺ゆるぞ』

大衆、今は、法勝寺にも、入り得ず、西門の前を、北へ馳

三條大橋

三條大橋は京都市三條通の賀茂川に架せらる京軍此橋の
東西に陣す。



せて、眞
如堂の前
と、神樂
岡の後と
を、二手
に分れて、
山門に逃
げ還る。
山僧豪鑑、
豪仙の二
人、夙に、
豪勇を以
て、著は
る、
『此儘、
逃げ還

らば、山門の耻辱ぞ、イザ、二人の命を捨て、三塔の耻を雪がん』

法勝寺の北門に、踏み止まり、四尺有餘の長刀を揮うて、逐ひ來る敵を、迎へ撃ち、當るに任せて、切り立て、薙ぎ立て、敵を倒すこと、算なく、身も、亦、各々十餘創を蒙る、

『戦ふだけは、戦へり、イザヤ、冥土までも、同道候はん』

鎧を脱ぎて、投げ捨て、腹十文字に、掻き切つて、同じ枕に倒る、

『天晴、日本一の剛の者かな』

六波羅勢、遠く望み見て、舌を巻く。

山徒の先陣、既に敗れて、走り還る、後陣の大勢、亦、皆、中途より、引き還へす。

九

大衆、一たび、敗るれども、尙、屈せず、重ねて、六波羅を、攻めんと欲し、大嶽には、篝を焚き、坂本には、兵を集む。

山徒、亦、悔るべきにあらず。

六波羅の探題、大庄十三ヶ所を、山門に寄進する外、二三の地を、宗徒の衆徒に與へて、其心を攪る。

是れより、衆徒の心、公家に向ふあり、武家に傾くあり、其統制、漸く亂る。

十

圓心、尙、山崎に在り。

四月三日卯の刻、兵を二手に分ちて、又京師を攻む。

一手は、中院定平、及び大塔宮の遣はし給へる殿良忠、之れを率ゐ、火を伏見、木幡に放ちて、鳥羽、竹田より、押し寄す、其勢三千餘騎。

一手は、圓心、之れを率ゐ、火を河島、桂の里に放ちて、西七條より、押し寄す、其勢三千五百餘騎。

警報、早くも、京師に達す。

六波羅勢、一たび、圓心の兵を破りてより、復た敵を恐る心もあらず、俄に、兵を六條河原に集めて、部署を定む。佐々木時信、其弟時知、長井宗衡等は、三千餘騎を以て、糺河原に陣して、山徒に備ふ。

河野通盛、陶山義高は、五千餘騎を以て、法性寺大路に陣す。

富樫高家、島津資久、小早川左衛門等は、六千餘騎を以て、八條東寺の邊に陣す。

厚東武實、隅田通治、高橋宗康、糟谷宗秋、小笠原義國等は、七千餘騎を以て、西七條口に陣す。

此外、留まりて、六波羅を守るもの、一千餘騎。

巳の刻に至りて、三方の戦、一時に開け、互に入れ替へ、入れ替へ、攻め戦ふ。

赤松勢は、騎馬少なくして、歩兵多く、小路々々を塞ぎて、類に矢を放つ。

六波羅勢は、騎馬の兵多し、懸け違ひ、敵を中に包みて、撃たんとす。

双方、各々勇を奮ひ、術を盡して、挑み戦ふこと終日。勝敗、未だ決せず、夕陽、早、沈まんとす。

河野通盛、陶山義高、手勢三百餘騎を率ゐ、進んで、木幡の敵を撃つ、二人の兵鋒、最も鋭し、寄手、終に敗れて、宇治路に退く。

二人、敢て追はず、竹田河原を、斜に過ぎて、鳥羽殿の北門を廻り、作道に、駈け出で、東寺前面の敵を拂はんとす。

作道十八町に、充滿せる寄手の兵、其れと見るより、意氣、俄に沮み、羅城門の西を、横切りて、寺戸の方に、引き退く。

島津資久、小早川左衛門、東寺の敵と、火花を散らして、奮ひ戦ふ、會々通盛、義高の爲めに、其敵を追ひ攘はれて、無念、言ふべからず、

『さらば、西七條の敵を撃たん』

西八條より、進んで、西朱雀に出づ。

此處は、厚東武實、隅田通治、高橋宗康等の圓心と戦へる處、斯くと見るより、意氣、忽ち奮ひ、三方より、兵を進めて、敵に迫る。

圓心、乃ち兵を三手に分ちて、此れに當る、武實等、益々進み撃たんとする時、忽ち圓心の陣より、現はれ出でたる四人の士あり、

『我等は、備中國の住人頼宮又次郎入道、子息孫三郎、

田口藤九郎盛兼、舍弟彌九郎盛泰と申すもの、六尺の軀を捨て、萬乗の君に報い奉つらん日頃の望みぞ、イデイデ、敵の中を打ち破つて、六波羅殿に見参せん、其處退かずや』

と呼はりつゝ、仁王立ちに、突ツ立つ、此れぞ、音に聞ゆる剛勇無双の士、衆、皆、これはと驚く。

『此れこそ、中國一の剛の者なれ、さらば、我れ、自ら手を下さん』

と思へる資久、屹と、士卒に向ひ、

『汝等は、自餘の敵を支へよ、我等父子三人は、彼等に向はん、彼等は、力こそ強けれ、矢の立たざることもある、脚は早くも、馬の及ばぬことはあらず、多年、稽古の大懸物も、斯からん時の用ぞ、さらば、懸からん』

其れと説き示すや、二子近慶、以保と與に、父子三人、馬を驅つて、トットと馳せ近づけば、

『イデ〜、我れ生捕つて、味方となし呉れん』

其れと見たる田口盛兼、八尺有餘の鐵棍を、打ち揮り〜、眞一文字に、馳せ来る。

我れも進み、彼れも来る、距離は、見る〜、縮まる。矢頃は、此處ぞ。

資久、視ひを定めて、丁と放てば、盛兼、右の頬より、兜の菱縫の板へ懸けて、ソブリと、射抜かれ、眼、眩んで、立ち竦みに、立ち竦む、弟盛泰、馳せ來りて、其矢を抜き捨て、兄の鐵棍を取るより早く、

『君の御敵は、六波羅なり、兄の敵は、御邊ぞ、其處、莫退きそ』

リウ〜、空を研つて、撃つて懸ければ、頓宮父子、亦、五尺二寸の大太刀を、振り被つて、馳せ来る。

資久は、矢繼早の名人、矢を取つては放ち、取つては放つ。盛泰、右に反はし、左に反はし、附け入り〜、隙間もなく、撃つて懸かる。

敵の鐵棍、未だ怯まず、我が矢種、早、既に盡く。今は、叶はじ、資久、忽ち馬を驅つて、サツと逃げ還る。

小早川左衛門の二百騎、朱雀の地藏堂の北に在り、斯くと見るより、

『アレ射よ』

一齊に、鏃を揃へて、兵と放ては、田口兄弟、頓宮父子、

各々矢を

負ふこと、

蝟の如く、

皆、同じ

狀に、立

ち竦む。

美作の住

人有元佐

弘、其二

弟佐光、

佐吉と與

に、三百

騎を率ゐ

て、四條

猪熊に攻

め入り、

武田氏顯、

糟谷宗秋、高橋宗康等の大兵と戦ひ、各々奮闘して死す。

福光佐長、植月重佐、原田佐秀、鷹取種佐等の勇士、斯くと見るより、亦、返し戦うて、皆、死す。

妻鹿長宗、臂力、群に絶す、部下十七人と與に、六條坊門大宮まで、攻め入り、東寺、竹田より、還り來れる三千餘

騎の敵に、圍まれて、苦戦し、部下、皆、討たれて死す、

『君の御大事は、今日のみかは、一人なりとも、生き残りて、後の御用に立たばや』

長宗、唯一人、西朱雀を指して、引き退く。

印具武任の兵五十餘騎、追ひ駈け來る、中なる一人の若武者、サツと馳せ寄りさま、長宗の鎧の袖を攫む。

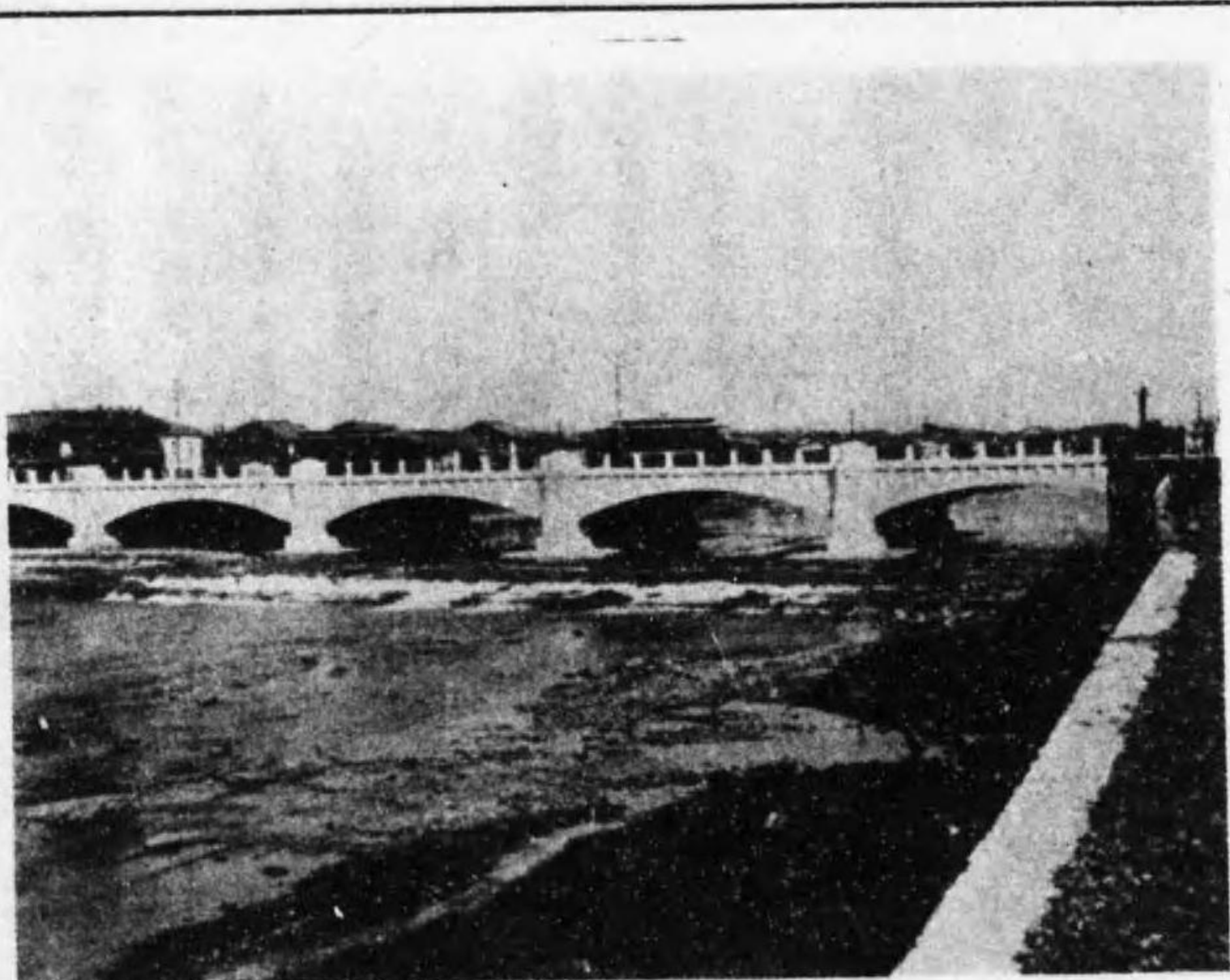
長宗、突と、其手を捉へ、宙に提さげつゝ、馳せ去る、五十餘騎、アツと驚き、

『ソレ捕はれては』

と一散に追つ駈け來る、長宗、後を振り返りて、赫と睨めつゝ、

『此者、欲しくば、取らせん、ソレ受け取れや』

左手より、右手に、持ち換ゆると齊しく、曳と叫びて、投



七條大橋
七條大橋は京都市下京區七條通の賀茂川に架せらる兒島高德の陣したる七條橋の西とは此處にあらずして西七條の末なる桂川の橋（前に掲げし桂橋のあたりの橋）なるべし。

げ飛ばせば、武者六騎を越えて、深田の中に落つ。敵兵、大に驚き恐れ、若武者を扶けて、其儘、引き還る。圓心、二たび、京師を攻めて、二たび、志を得ず、一族以下、股肱の士を討たる、こと、八百餘騎、氣疲れ、力落ちて、復た山崎に還る。

十一

後醍醐天皇、伯耆の船上山に坐します、圓心の兵、屢々敗る、を聞き召されて、靱慮安からず、

『疾く京師を恢復せばや』

と思させ給ひ、千種少將忠顯を陞せて、中將となし、兵を率ゐて、往きて、六波羅を攻めしめ給ふ。

忠顯、乃ち一千餘騎を率ゐて、伯耆を發し、行く、兵を募る、因幡、出雲、美作、但馬、丹後、丹波、若狹の兵士、風を聞きて、來り屬するもの、甚だ多し。

兒島高德、亦、一族を率ゐて、來り加はる。

忠顯、道を丹波路に取り、進んで、桑田郡の篠村に抵る。

但馬の守護太田守延、其地へ流され給へる第六の皇子恒良親王を奉じて、來り會す。

忠顯、大に悦び、親王を奉じて、上將軍と爲し、錦旗を樹て、兵を進め、山城國葛野郡松尾村の峰堂に陣す、目を放てば、京師は、脚下に在り。

時に、殿良忠は、男山に陣し、赤松圓心は、山崎に陣して、京師を窺ふ、忠顯の陣と、相距ること、五十餘町。

忠顯、功を貪りて、良忠にも謀らず、圓心にも通せず、四月八日を以て、進んで、六波羅を攻む、士卒、皆、白絹を截つて、鎧の袖に着け、此れに「風」の字を書して、符となす、是れぞ、君子の徳は風、小人の徳は草、草に風を向ふれば偃すとの意。

十二

六波羅の兩探題仲時、時益、敵を西に待つ。

三條より、九條まで、大宮面に、塀を塗り、櫓を建て、射手を配し、小路々々に、千騎、二千騎の兵を備ふ、寄手の大將は、源忠顯なりと聞くや、

『源こそ同じけれ、流は岐れぬ、風月の才を弄ぶ公卿の輩、何どか、弓馬の道を専らとする武家の鋒に當り得べき、勝算、我れに在り、唯、一戦に、蹴散らせや』

十三

兒島高德、名和高重の二人、數百騎を率ゐて、一條に突進す。

京軍の將河野通盛、陶山義高の二人、來りて、此處に在り。通盛は、高德の同族、義高は、高重の知人、雙方、互に名を惜み、恥を思つて、一步も退かず、踏ん込み、鋭を鼓して戦ふ。

勝敗、容易に決せず。

太田守延、手兵を提さげて、二條に進撃し、京軍の將隅田通治、佐々木時信等と戦ふこと數刻、兵敗れて、此れに死す。

荻野朝忠、足立三郎の二人、五百餘騎を率ゐて、四條油小路に進入し、備前の人薬師寺八郎、中吉十郎等の七百餘騎と戦ふ、二條の官軍敗れしと聞きて、亦、引き退く。

丹波國神池の衆徒八十餘騎、五條西洞院に奮進し、備前の人庄三郎高爲、眞壁四郎宗久等の爲めに、圍まれて、盡く死す。

金持家武、七百餘騎を率ゐて、七條東洞院に突入し、京兵

各々勇んで、大宮面に打つて出づるもの、七千餘騎。

忠顯、神祇官の前に、陣を進め、大舍人より、七條まで、小路毎に、一千餘騎づゝの兵を派して、迫り撃つ。

一陣、退けば、二陣、代りて進み、二陣、敗るれば、三陣、續いて、馳せ向ふ。

官軍、勢は多く、兵は餘る、入り代り、立ち代りて、押し寄せ、喚き叫んで、奮ひ戦ふ。

但馬、丹波の兵、密に、間諜を放つて、火を風上に縦つ。炎焰、其處にも起り、此處にも漲り、猛風、火氣を煽りて、面を向けがたし、一陣に備へし六波羅勢、皆、大宮面を引き拂うて、京中に控ゆ。

官軍、勢に乗じて、益々進む。

佐々木時信、隅田通治、高橋宗康、河野通盛、陶山義高等の五千餘騎、遊軍として、六波羅に在り、

『味方危ふし、疾く援けよ』

急に、兵を驅つて、一條、二條の口に向ふ。

兩軍の戦鬪、是れより、益々烈し。

と、鋒を接して闘ひ、終に、重傷を負うて、生擒せらる。諸方の官軍、悉く敗れて、皆、桂河の邊に、引き退く。獨り、高德、高重の一隊、頑として、退かず、通盛、義高の二人と、追ひつ、返しつ、兩々、火花を散らして戦ふ。忠顯、既に内野に退く、一條の兵、尙、退かずと聞きて、復た神祇官の前に引き返し、使を馳せて、高德、高重の二人を、召し還す。

二人、戦、正に酣なり、乃ち通盛、義高の二人に向ひて、『今日は、日も、既に暮れ候ひぬ、後日、重ねて、見参に入り候はん』

と述べ、馬上より、一禮して、引き還へず、夕陽、既に没して、蒼然たる暮色、山河を罩む。

十四

忠顯、峰堂に還りて、點檢すれば、守延、家武以下、將士の死するもの、數百人に上る、忠顯、今は、再戦の勇なく、高德を召して、

『敗軍の兵、力疲れて、再び戦ひがたし、京師近くに、陣を置かんは、危ふし、少しく、兵を退け、重ねて、近

國の勢を集めて、攻めんは、如何に』と語ふ、高德、屹と、色を正し、容を改め、

老坂
老坂は山城國乙訓郡大枝村大字香掛に在りて丹波國南桑田郡篠村に通ずる國境の地なり大枝山越とも云ふ今は隧道を鑿ちて交通に便す。



『合戦の勝負は、時の運にこそ由り候へ、負くればとて、必ずしも、恥辱には候はず、唯、引くまじき所を引き、懸くまじき所を懸くるこそ、

大將の不覺と申し候なれ、御覽候へ、赤松圓心入道は、

僅か千餘騎を以て、三度までも、京師に攻め入り、戦、叶はねば、引き退きて、尙も、山崎、八幡の陣を保ち候はずや、御味方、假令、過半討たる、とも、尙、六波羅の勢よりも、多かるべし、此御陣、後は深山、前は大河にして、屈竟の要害にこそ候へ、敵、若し寄せ來らば、唯一戦に、撃ち破り候はん、此陣を引かせ給はんこと、然るべからず、但、敵も、然るもの、味方の疲れたる弊に乗じて、今夜、夜討を懸くることもや候はん、一手の兵を、梅津法輪の渡に出だして、警固せしめ給へ、高德は、七條の橋詰に、陣を取りて、敵に備へ候はん』

と諫め、手兵三百餘騎を率ゐて、七條に馳せ向ふ。忠顯、高德の爲めに、言ひ恥かしめられて、心ならずも、峰堂に留まる、敵の夜討もやあらんと言はれて、氣味悪しきこと、言はん方なく、子の刻の比、終に、親王を奉じて、八幡に引き退く。

高德、七條の橋西に陣す、不圖、峰堂の方を見遣れば、星の如くに輝ける篝火、何時しか消えて、點々、點々、最と

心細げに、燃え残る、

『扱は、大將には、早、落ち給ひけん、兎も角も、事の様を見ればや』

急ぎ、葉室大路より、峰堂に馳せ上り、淨住寺の前に抵りて、ハタと荻野朝忠と、行き逢ふ、

『如何にや』

と聲を掛ければ、朝忠、馬を駐めて、

『大將既に落ちさせて候へば、是非なく、某も丹波の方へ下り候ところぞ、イザさせ給へ、連れ立ちて、退き候はん』

と誘ふ、高德、忽ち憤然として、色を作しつ、

『あら、言ひ甲斐もなや、斯る憶病者を、大將と頼みたるこそ、返すくも、口惜しけれ、然るにても、事の様を見ざらんは、心懸りに候、早、御通り候へ、高德は、一應、峰堂へ上りて、宮の御跡を見奉つり、頓て、後より、追つ付き候はん』

と答へ、部下の兵は、籠に留め置きて、高德唯一人、降り來る兵を、押し分けく、山上指して、馳せ登る。

頓て、本陣たりし本堂に抵れば、驚くべし、鎧もあり、直垂もあり、尊き錦の御旗さへ、捨て置かれんとは、
「扱も、不覺人や、何れの堀、崖へも、落ちて、死に給へかし」

目を瞠らし、牙を噛んで、椽上に、突つ立つこと多時、
「今は、手の者共も、待ち詫ぶらん、さらば、還らん」
高德、錦の御旗のみを収めて、急ぎ馳せ下り、部下の兵を従へて、朝忠の後を追ふ。

追分の驛に抵りて、朝忠と合し、丹波、丹後、出雲、伯耆の敗兵三千餘騎を収めて、丹波の高山寺城に入る。

十五

忠顯の軍、既に退く。

九日、六波羅勢、之れを知りて、谷堂、峰堂、淨住寺、松尾、萬石小路、葉室、衣笠等に亂入し、神社佛閣を破壊し、僧舎民屋を抄掠して、火を縱つ。

風勢、火勢を煽りて、炎塵、沙塵と與に飛ぶ、堂社の灰燼に化するもの、三百餘宇、民家の烏有に歸するもの、五千餘戸。

源忠顯の陣地を設けたる峰堂は、山城國葛野郡松尾村に在りし寺院にして、法花山寺と曰ひ、今、其舊跡を、峰山と謂ふ、京都七條の末にして、山城、丹波の國境に在り、地藏院と、淨住寺との間に、丹波國王子村に通ずる道路ありて、此地は、其通路に當る、麓より登ること、十町ばかりにして、法花山寺あり、兒島高德は、此山麓に於て、荻野朝忠に行き逢ひ、兵を此處に留めて、獨り法花山寺に登り、朝忠は、王子村の方に向ひしなり。

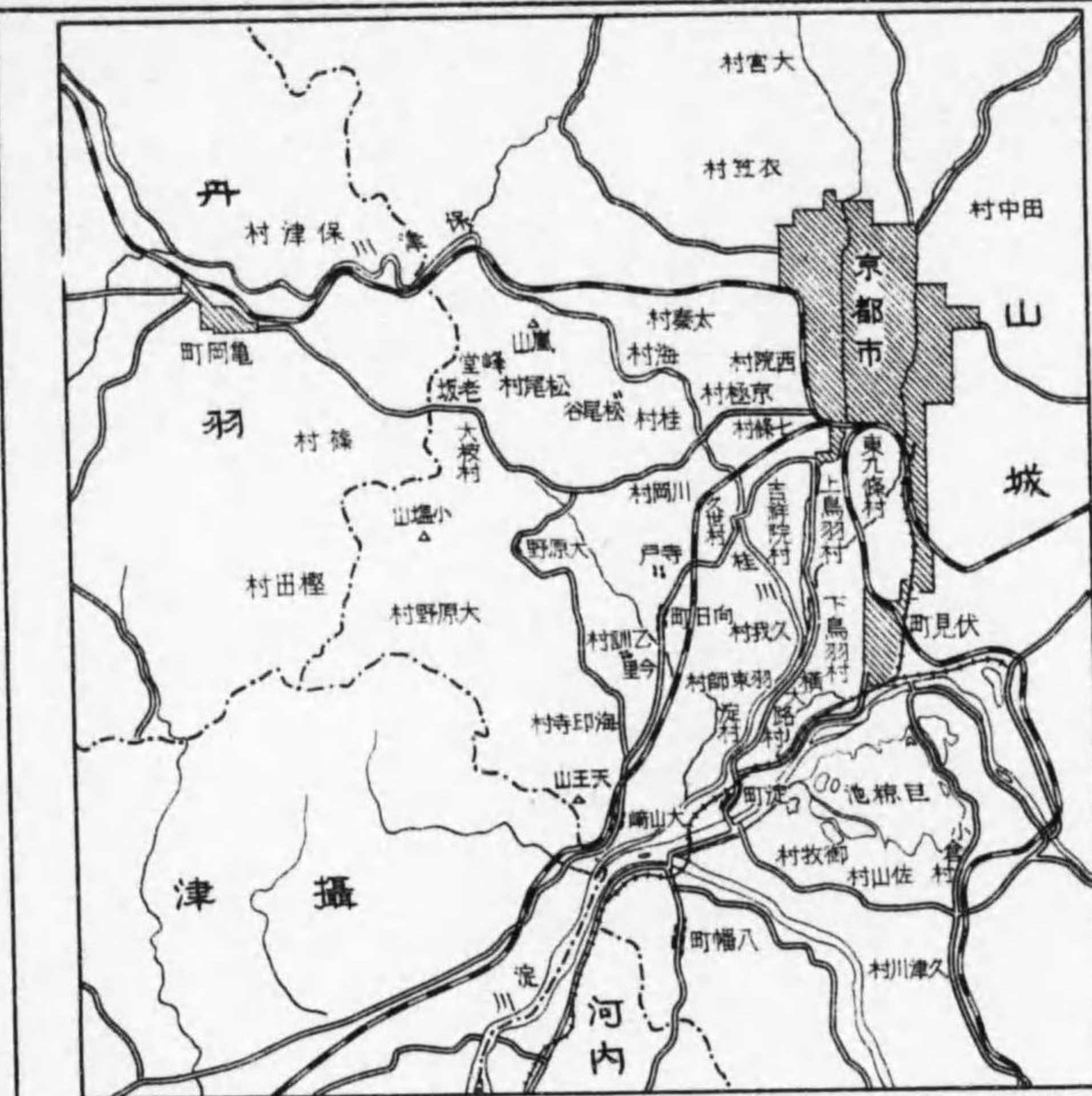
十六

金剛山、未だ陥らず、京師、亦屢々襲撃を蒙る、六波羅の兩探題、急使を、鎌倉に發して、援兵を請ふ、其書札に、
「先朝、隱岐を出で、船上山に渡らせ給ひ、大軍を催して、京師を攻めさせ給ふ、形勢、漸く難儀に候、急ぎ御加勢を賜はり候へ」

とあるを見れば、上國の形勢、今は、樂觀を許さざるものあり、高時入道、憂慮措かず、
「さらば、重ねて、大兵を派遣し、且は、京師を警固し、且は、船上山を攻め落さん」

一門の名越尾張守高家を以て、大將となし、外様の諸將二十人を派するに決す。
足利治部大輔高氏、亦、遺中に在り、時に、父の喪に丁り、

六波羅攻撃方面圖



六波羅探題址

其身、亦、病辱に臥す、高時、使を遣はして、出兵を促がすこと、再三に及べば、高氏、
「去々年は、父、死して、日浅く、悲嘆の涙、未だ乾かざるに、早くも、出征を命ぜられ、今は、身、病んで、日久しく、回春の時、未だ到らざるに、又出征を強いらる、斯くも、一身一家の不幸をも顧みず、強ちに遠征の任を課せらる、こそ、遺恨なれ、抑々我れは、源家の一門にして、北條は、其臣下なり、然るを、時運とは申せ、其驅使に従はんこと、無念、此上やある、重ねて、出陣の催促に及ばず、我れに、所存あり」
と悲む、其意、一家を擧げて、上洛し、官軍に屬して、六波羅を攻めんと欲するに在り、將士、今や、寢く睜離の心を懷く。
高時、其れとも知らず、工藤左衛門尉を遣はして、出兵を促がすこと、一日の中、二度に及べば、高氏、乃ち、
「不日に、上洛候はん」
と答へ、愈々、妻孥を始め、一門の數を盡して、西上せんとす。

其消息、寝く外に漏るれば、執事長崎圓喜、早くも、聞き
て、之れを怪み、急ぎ、高時の前に出で、

『君、聞し召さずや、足利殿には、北の方、公達をも、
引具して、上洛せらるゝ由、其聞えの候、事の體、最も
不審にこそ候へ、斯る時には、御一門の方だに、御心を
置かせ給ふべし、況してや、源家の貴族にして、久しく、
天下の權柄に離るゝ人には、或は、思召し立たるゝこと
もや候らん、北の方と、公達とは、鎌倉に留め置き、向、
一紙の起誓文を徴させ給はんこそ、然るべう候へ』

と説き勸むれば、高時、此れに従ひ、直に使者を遣はして、
『東國は、靜謐に候、幼少の子息達は、鎌倉へ残し置か
るゝとも、仔細あるべしとも存せず、赤橋相州、御縁に
繋がり候からは、聊か不審は、存せずと雖も、唯、諸人
の疑ひを散ぜん爲めに候、一紙の起誓文を留め置かれ
候はんこそ、公私に就きて、然るべう存ずれ』

と命ず、高氏、扱はと思へば、ハタと、答に窮す、
『此れより、御返辭申し候はん』

然り氣なく述べて、使者を返し、直に弟直義を召して、意

見を問へば、邪智に長けたる直義、首を傾けて、沈思する
こと久し、

『仔細候まじ、假令、起誓を入れ給ふとも、天に代りて、
無道を誅し給はんには、佛神も、皆、其忠義の志を守ら
せ給はんこと、必定に候、御臺は、赤橋殿の御妹なれば、
鎌倉に留め置き給ふとも、御心安かるべし、公達とても、
郎從、少々残し置き給はゞ、自然の事も候はん時、何方
へも、具し候べし、大事の前の小事に候、何れも、申さ
るゝ儘に任せて、相模入道殿の不審を霽らし給はんこそ、
然るべけれ』

と説けば、高氏、此れに従ひ、其室と、長子千壽王とを鎌
倉に留め置き、且、自筆の誓書を贈る、高氏の室は、赤橋
盛時の妹にして、北條氏の一門なり、

『今は、仔細あらじ』
高時、大に悦び、高氏を招きて、厚く款待し、

『右大將の御臺所二位禪尼より、當家に傳へられし白旗
あり、八幡殿より、代々の家督に傳へられたる希代の重
寶にこそは候へ、他家に在りては、其詮なし、今度の餞

別として、進じ候べし、陣頭に懸して、兇徒を退治候へ』
と言ひつゝ、錦囊に納めたる白旗を取り出で、與へ、且、
鞍馬十頭、鎧十領、及び黄金造の太刀一振を贈る。
今は、心安し。

高氏兄弟、乃ち吉良貞義、其子滿義、滿義の子滿貞、石塔
義房、其子頼房、上杉憲房、其子憲顯、仁木頼章、其弟義
長、細川和氏、今川範圍以下、一族三十二人、其勢三千餘
騎を率ゐ、三月二十七日を以て、鎌倉を發し、四月十六日
を以て、京師に着す。

其翌日、秘密の使者は、早くも、船上山に向つて駛す、此
れぞ、歸順の意を表し奉つるもの。

天下の形勢は、今や、早、動きつゝあり。

十七

高氏に後るゝこと三日、四月十九日を以て、名越高家も、
亦、京師に達す。

兩探題仲時、時益、大に喜びて、日々、軍議を凝らし、二
十七日を以て、八幡、山崎を攻むるに決す。

高家は、七千六百餘騎を率ゐ、追手の大將として、鳥羽の

作道より向ひ、高氏は、搦手の大將として、西岡より進ま
んとす。

八幡、山崎の官軍、斯くと聞くより、亦、諸軍の部署を定
む。

源忠顯は、五百餘騎を率ゐ、大渡の橋を渡りて、赤井河原
に控ゆ。

結城親光、新に官軍に屬し、三百餘騎を率ゐて、狐河の邊
に陣す。

赤松圓心は、三千餘騎を以て、淀、古川、久我畷の南北三
處に屯す。

堀川雅忠は、寺戸、西岡の土兵五六百人を集めて、岩倉の
邊に向ふ、高氏内應の約あれども、其心術、測るべからざ
るを以て、此れに備ふるもの。

兩軍の部署、皆、整ふ。

高氏、二十七日の味爽を以て、進發せんと聲言すれば、血
氣の高家、斯くと聞くより、

『さらば、彼れに、莫後れそ』

此れも、其日の曉氣を冒して發し、馬足も立たざる久我畷

の泥土を踏みて、我れ先きにと、競ひ進む。
高家の戎装、最も鮮麗、兜光、鎧色、燦然として、旭日に照り輝く、圓心の兵、望み見て、

「あれこそ、追手の大将ならぬ、イデヤ、討ち取りて、高名せん」

皆、争うて、矢を放つ、甲、堅くして、入らず、矢々、皆、憂然として、飛んで、地に落つ。

高家、意氣昂然、衆に先だつて進み、自ら大刀を揮うて、近づく敵を、斫つて落せば、士卒、亦、勇み進む。

圓心の兵、今は、支へず、早、潰え走らんとす。
佐用範家は、圓心の一族なり、剛弓を以て聞ゆ、且ある畦畔に立ちて、機を待つ。

高家、三方の敵を、追ひ捲くりて、意氣、益々振ひ、佩刀鬼丸の血を、押し拭ひて、室に收め、徐に戦況を見遣りつつ、扇を披きて、ハツタ〜と、打ち煽ぐ。

「時機は、今ぞ」

範家、弓を満月の如くに、引き絞りつつ、正鵠を定めて、兵と射れば、的は動かず、矢は狂はず、グサとばかりに、

高家の眉間に、突つ立ち、蓋を砕き、骨を破りて、ブツリと頭後に露出すること數寸。

急所の痛手に、何かは堪らん、高家、アツとも叫ばず、仰向けさまに、鞍より落つれば、

「佐用左衛門三郎範家、寄手の大将名越尾張守を、唯、一矢にて、射留めたるぞ、續けや人々」

範家、箆を叩きて、呼はり〜、部下を麾きて、奮ひ進む、今や、總崩れに崩れとしたる官軍、躍々として、一時に、勇み立ち、三方より、鯨波を作つて、撞と押し寄せ。

形勢、轉瞬にして變ず。

高家の兵、皆、轉動して、策の出づる所を知らず、留まり戦ふもあり、走り退くもあり、深田に陥りて、自殺するもあり、狐河より、今在家まで、五十餘町の間、死屍累々と

して、尺寸の地をも餘さず。

今、官賊兩軍の部署を考ふるに、賊軍の主將名越高家は、朱雀大路より、鳥羽の作道を経て、乙訓郡久我村に向ひ、

足利高氏は、西七條より、乙訓郡西岡、即ち向日町寺戸の邊に向ふことに定めしなり。

今在家まで、五十餘町の間累々たりしと云ふは、疑ふべし。

蓋、狐河の渡とは、古の山崎橋の邊を謂ふ、此あたりは、

木津、宇治、桂の三川の合流する處にして、其川瀬の屢、變化するより、此名あるものなるべし、此山崎橋の邊は、

今次の戦場にあらざれば、此あたりに、死屍の累々たらん筈あるべからず。

又今在家とは、何處の事なるにや、此れも、知りがたし。

按ふに、久我村の南に、鴨川と云ふ地あり、鴨川の西一里ばかりの處に、今里と云ふ地あり、道、丹波に通ず、

賊軍は、狼狽の餘、京都に走らずして、此方面に走りたるものなるべく、本文の狐河より、今在家までとあるは、

恐らく、鴨川より今里までの間と云ふの誤ならん。

十八
追手の京軍、既に敗る。
搦手の大将足利高氏、進んで、桂河の西端に到るや、ゆらりと、馬より下りて、宴を開けば、士卒、亦、各々糧を開く。



六波羅山殉死者の墓
近江國坂田郡南箕浦村大字番場の六波羅山に在り三尺の五輪塔三百餘基を列ぬ北條仲時の墓は其山上に移さる。

此れに對する官軍の部署は、赤松圓心、中軍として、久我、羽束師、淀の三村に控へ、堀川雅忠、左軍として、寺戸の邊に備へ、源忠顯、右軍として、紀伊郡横大路村の赤井河原に陣

し、結城親光は、後軍として、狐

河の渡、即ち乙訓郡大山崎村山

崎の渡の邊に控へしなり。

此兩軍の衝突せしは、久我駿に

して、専ら赤松圓心と、名越高

家との血戦に止まりしなり。

されば、賊軍の死屍、狐河より、

追手の方は、人馬、馳せ違ひ、剣戟、響き渡りて、呼聲、喊聲、野を撼かすの時、搦手の軍は、悠々閑々、花もなき野を眺めて、興もなき杯を傾く。

既にして、高家戦死の報、忽ち来る、

「然らば、往かん」

高氏、蹶起して、馬に跨り、其儘、兵を率ゐて發す、馬首の向ふ所、南にあらざして、西に在り。

敵は、南の山崎、八幡にこそあれ、西の丹波に、何の用かはある、衆、皆、心々に怪む。

進んで、大枝山の麓に到る比、備前の人中吉十郎、攝津の人奴可四郎を招きつ、

「やよ奴可殿、如何にか思す、追手の合戦は、辰の刻より、始まれるに、搦手にては、悠々として、酒盛を始め給ひ、名越殿、討たれ給ひぬと聞ゆれば、俄に、丹波路を指して、馬を進め給ふ、一定、此人、野心を挟み給ふ

ところ覺ゆれ、我等、何處までか、従ふべき、イザヤ、引き還して、六波羅殿に注進候はん」と叫ば、四郎、

「それよ、我等も、事の體、怪しとは存しながらも、又如何なる手立かあるらんと思ひつる間に、早、今日の合戦の期を失ひぬること、無念なれ、但、此人、敵になり給ひぬと見ながら、唯、空しく、引き返さんも、言ふ甲斐なし、イザ、一矢、射で、還り候はん」と言ひさま、中差を取つて、弓に番へんとす、アナヤと驚く十郎、

「ヤレ逸り給ふな奴可殿、我等二三十騎を以て、あの大勢に懸け合せばとて、唯、大死するのみにて、何の効か候はん、此處は、無事に引き還して、後日の合戦の爲めに、一命を全うせんこそ、然るべけれ」

固く押し止めて、俱に、京師に馳せ還り、六波羅の館に往きて、斯くと注進すれば、

「這はく如何に、干とも持み、城とも持める尾張守は、討たれ、治部大輔は、敵となりつるか」

ヒタと、呆れに呆れし兩探題、唯、惘然として、暫し言葉もあらず。

十九

老坂、西に下れば、丹波の地。

高氏、一路、馬を進めて、篠村に到れば、州人久下時重、二百五十騎を率ゐて、いの一に、馳せ到る、旗章も、笠印も、皆「一番」と云へる文字を書す、高氏、怪みて、執事高師直に向ひ、

「久下の兵共、其袖印に「一番」と云ふ字を書するは、在來の家の紋所か、それとも、今日、此れへ、一番に参りたりと云ふ印か」

と問へば、師直、

「此れは、由緒ある事にこそ候へ、彼れの先祖久下二郎重光と申すは、武藏國の住人に候、右大將殿の土肥の杉山に於て、御旗を揚げ給へる時、第一番に馳せ参じて候ひければ、右大將殿、御感候て、我れ、天下を取らば、一番に、恩賞を行ふべしと宣ひ、自ら「一番」と云ふ文字を書きて、賜ひ候ひけるを、即て、其家の紋所と仕りてこそ候へ」

と答ふ、高氏、

「扱は、此者の最初に参りたるこそ、當家の吉例なれ、あな悦ばしや」

快然として、喜色、忽ち面に溢る、續いて、當國、近國の兵士、來り屬するもの、陸續、踵を接す、總勢二萬三千餘騎。

今は、一戦すべし、乃ち期を刻して、六波羅を攻めんとす。兒島高德、荻野朝忠等の高山寺城に在るもの、高氏の下風に立つを欲せず、別に丹波より、若狭に入り、北陸道より、京師に向ふに決す。

廿

六波羅の探題仲時、時益、今や、高氏の戈を倒にして、來り攻めんとするを聞き、大に驚きて、戦備を議す、

「今度と云ふ今度こそ、天下安危の繫かる所、覺悟なくては、叶ふまじ、若し、味方の軍、打ち負けなば、主上、上皇を奉じて、關東に下り、鎌倉を以て、皇居の地と定め、重ねて、大軍を催ほして、兇徒を撃ち攘ふべし」

最後の策、此に決して、悲愴の氣、館に満つ。

天皇、上皇は、三月以來、北六波羅の館に坐します、乃ち

三台、九卿、以下、百司の官を促がして、悉く六波羅に入る。

洛中、今は、車馬の影をも見ず、喝道の聲をも聞かず、間寂として、宛がら、主なき家の如し。

官軍、五月七日を期して、京師を攻撃せんとす、西は、梅津、桂の里、南は、竹田、伏見に掛けて、篝火、夜毎に、天を焦がす、

既にして、高山寺城の一軍、若狭路より、來り迫らんとするの噂高く、東方の守備、亦、忽諸すべからず、

「河内の敵兵、未だ亡滅せざるに、脚下の敵兵、俄に、蜂起せしこそ、由々しき大事なれ、大軍、四方より、寄せ來らば、平場の合戦にては、叶ふまじ、要害を構へて、兵馬の足を休め、敵兵近づかば、駈け出で〜て、戦はんこそ、好けれ」

六波羅の館を、中心として、河原の一面には、濠を撃ち、水を湛へ、他の三面には、塼を築きて、櫓を建て、逆茂木を設く、守備、忽ちにして、成れば、

「然らば、來れ」

京軍、面には、勇めども、心には、畏る。

廿一

戦氣、秋の如く、西より來る。

五月七日寅の刻、足利高氏、二萬五千餘騎の大軍を率ゐて、丹波の篠村を發す、其向ふ所は、東天、日の出づるの方。

驛の南に、森あり、森の中に、祠あり、燈火の光、閃く處、振鈴の音、琳玲として、響き渡る、高氏、馬を停めて、

「何の祠ぞ」

と問へば、左右、

「新八幡の祠に候」

と答ふ、高氏、

「扱は、當家尊崇の靈神にて在はします、イデ〜、一紙の願文を獻つらん」

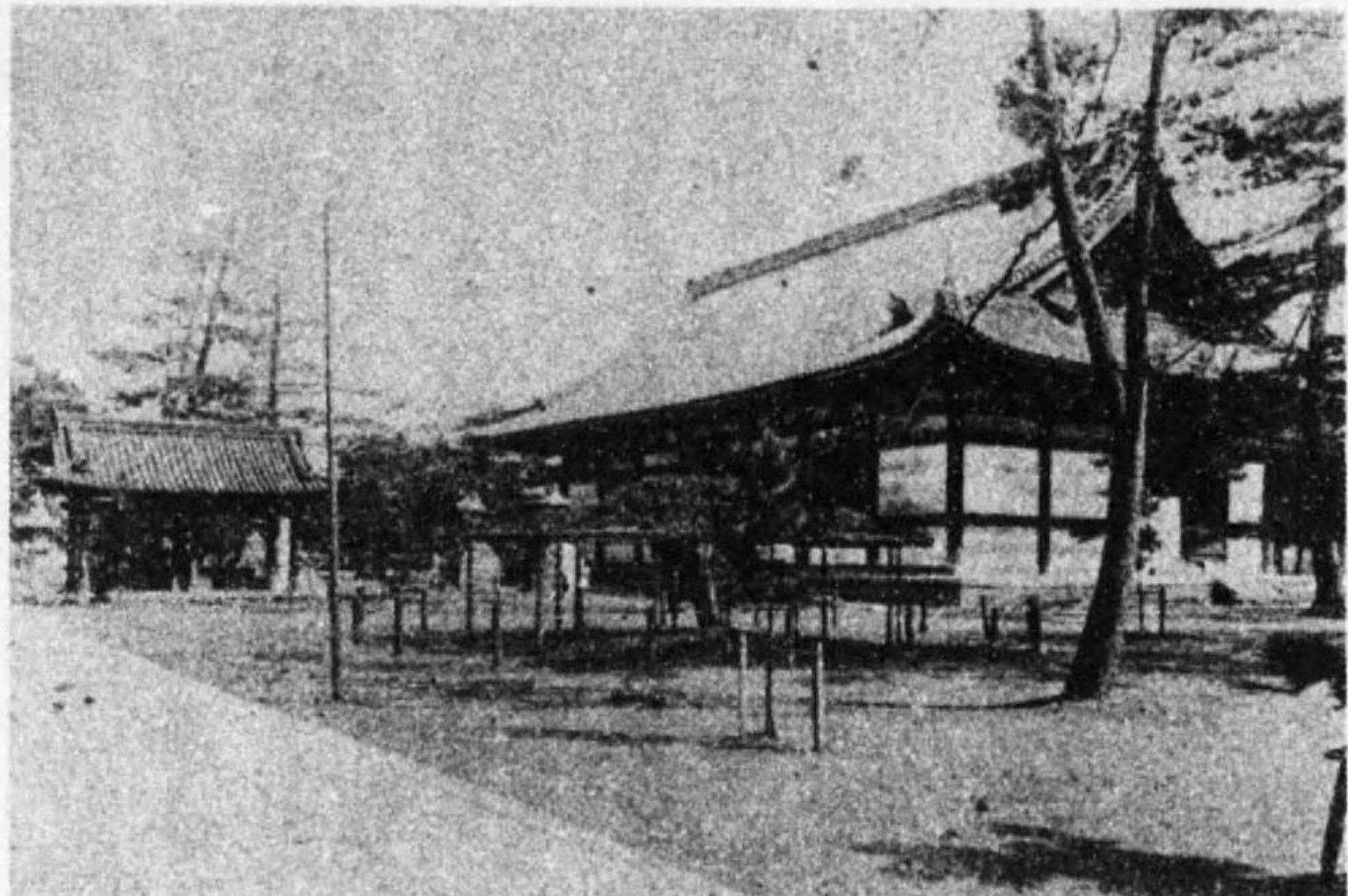
ソレと命を傳ふれば、史筆蟾田妙玄、矢立の筆を取りて、一篇の願文を草す、高氏、自ら判を据ゑ、一筋の鐮矢を添へて、恭しく、寶殿に納むれば、直義以下の諸將、亦、皆、各々上矢を獻つる。

蒼茫の天は、雞聲の中より、明け行く。

高氏、進んで、大枝山の峠を越えんとす、一雙の山鳩、何

東寺

東寺は京都市下京區九條町に在り後醍醐天皇の船上山より還幸の途大御駐蹕あらせ給へる處。



處よりか、

飛び來りて、白旗の上を舞ふ、高氏、

「あら有

り難たや、八幡大菩薩、御加

護を垂れさせ給ふ

と覺ゆるぞ、此鳩

の飛び行かんずる

に任せて、向ふべし」

と命ずれば、

旗手、馬を早めて、鳩の飛び去る後を追ふ。山鳩、飛んで、大内の舊跡、神祇官の前なる栲の樹に留まる。

全軍、皆、勇みて、内野に向ふ、途中、士卒の來り屬くもの、續々相接し、右近馬場を過ぐる頃には、五萬餘騎に達す。

廿二

六波羅の探題、敵軍、既に近づきしと聞くより、六萬餘騎の勢を、三手に分つて防ぐ。

一手は、神祇官の前に控へて、高氏を拒ぎ、一手は、東寺に進んで、圓心を拒ぎ、一手は、竹田、伏見に向つて、忠顯を拒ぐ。

戦機、刻々に迫り、巳の刻に至りて、追手、搦手の戦局、一時に動く、砂烟、天地を掩うて、喊聲、山岳に震ふ。

内野に向へるは、京軍の精銳二萬餘騎、河野通盛、陶山義高の二人、之れを率ゆ、官軍、其陣容を望み見て、輕々しく、進み撃たず、唯、互に矢を放ちて、挑み戦ふ。

彼れも、懸からず、我れも、進まず、唯、矢と、矢とを、交換すること少時、忽ち官軍の中より、躍り出でたる武者

一騎、

「我れこそは、足利殿の御内に、設樂五郎左衛門尉と申すもの、我れと思はん人は、來つて、勝負を決せよ」と呼はりつ、三尺五寸の大刀を、眞向に、差し懸しつ、矢所、少しく控へて、馬を立つれば、京軍の中より、五十ばかりの老武者一騎、悠然として、馬を打たせつ、現はれ出づ、

「天下の安危、今日の一戦に繋かるからは、何どか、一命を惜むべき、生き残りたらん人は、我が忠戦の程を語りて、子孫に傳へ候へ、斯く申すは、齋藤伊豫房玄基と申すものにて候ぞ」

と高く名乗りて、馳せ來る、五郎左衛門、其れと見るより、亦、馳せ進み、忽ちムンツと、引つ組んで、曳やくと、揉み合ひ、捻ぢ合ひ、ドウとばかりに、馬より落つ。

五郎左衛門は、力逞し、玄基を組み伏せて、首を掻かんとすれば、氣早き玄基は、刀を抜きて、五郎左衛門を刺さんとす。

彼れの掻く時は、我れの刺す時、各、敵を仕留めて、身も、

亦、死す。

續いて、官軍の中より、又躍り出でたる武者一騎、五尺有餘の大刀を、肩に懸けつ、

「これは、足利殿の御内に、大高二郎重成と申すものこそ候へ、先日來、度々の合戦に、高名し給へりと聞ゆる陶山備中守は、在はさぬか、河野對馬守は、何れに候ぞ、來らせ給へ、來つて、勝負を決し給へ」

と呼はりつ、馬を控へて、待ち構ゆ。

義高は、東寺の敵強しと聞きて、俄に、八條に向ひ、通盛、獨り留まりて、此處に在り、敵に、聲を懸けられて、何かは遲疑せん、

「通盛、此れに在り」

奮然として、疾呼しつ、矢庭に、馬を叱して、駈け出でんとす、

「ヤレ、待たせ給へ」

突と、馬前に立ち塞りたる一少年、

「大將たるもの、輕々しく、一騎打ちし給ふことや候、此處は、七郎に、任せ給へ」

と言ひも敢へず、馬を馳せて、ムツと重政に引つ組む、此れぞ、通盛の姪通遠とて、當年十六歳の若武者。

猛氣の重成、グツと通遠の總角を攫んで、宙に提さく、

「己れ如き小兒と組んで、勝負は、すまじきぞ」

矢庭に、取つて投げんとする時、不圖、目に着けるは、傍折敷に、三の字の紋所を畫ける笠印、

「扱は、河野の子か、姪にやあらん、さらば斯うぞ」

刀を抜きさま、サツと斬り付け、ドウと投げ飛ばすこと二三間。

「今は、許すまじ」

忽ち憤然として、怒り立ちたる通盛、重成を目蒐けて、サツと突進すれば、

「續けやく、主を討たせまじきぞ」

通盛の臣下三百餘騎、哄と喚きて、一齊に、馳せ進む、

「大高討たすな、二郎を援へよ」

高氏の從兵一千餘騎、其れと見るより、亦、ドウと駈け來り、各々突き入り、突き進み、鎬を削つて、奮ひ戦ふ。通盛の兵は、寡少なりと雖も、皆、戰場往來の勇兵、踏ん

込みく、斫り立つれば、高氏の勢は、見るく、撃ち崩されて、サツと内野の方に、走り退く。

高氏、更に、新手の兵を送りて、攻め戦ふ、通盛、尙も、士卒を勵まして、奮ひ戦ふこと數刻、終に疲れて、サツと河原に退く。

高氏、意氣、益々振ひ、更に、新手の兵を、入れ替へ、攻め戦ふ。

京軍、少しも怯まず、亦、新手を派して、此處を先途と、拒ぎ戦ふ。

一條、二條を、東へ、西へ、追ひつ、返しつ、攻め寄せ、寄り返すこと七八度、死屍、山の如く、流血、海の如し。京軍、衆寡敵せず、終に敗れて、六波羅に、引き退く。

一陣、此に敗る。

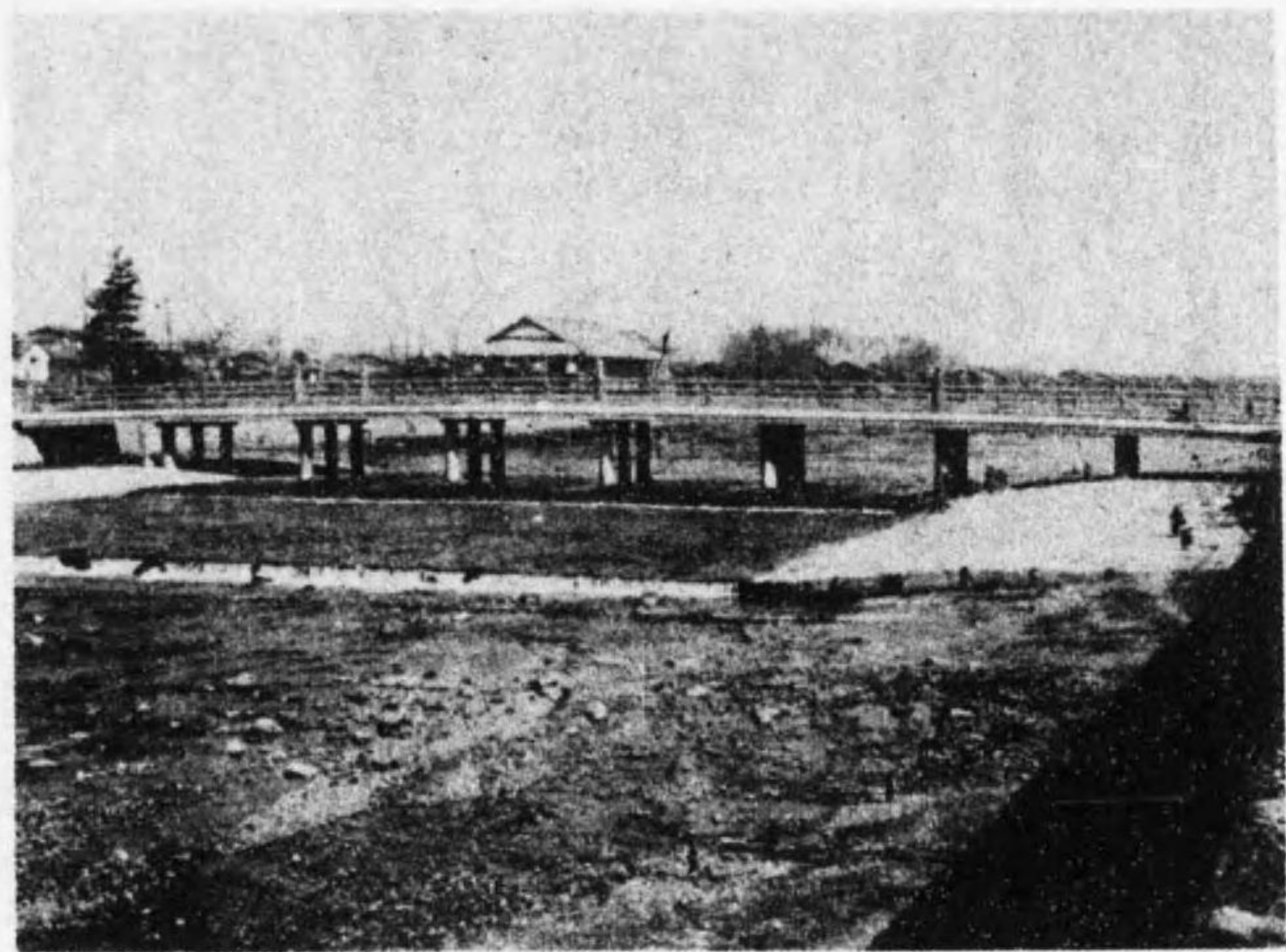
廿三

赤松圓心、三千餘騎を率ゐて、東寺に向ふ、樓門、既に近づく。

前面を見れば、築地あり、逆茂木あり、敵の防備、嚴重にして、輒すく、進むべからず、範資、鎧、踏ん張りつ、

『誰かある、あの木戸、逆茂木を、引き破つて、取り捨
てよ』

五條大橋
京都市内五條の賀茂川に架せらる榎井宮門徒上林房勝行房
等の打つて出でたる處。



と呼ばれ
ば、宇野
國頼、佐
用範家、
柏原、眞
島の面々
三百餘騎、
馬より飛
び降り、
く皆、
一齊に、
馳せ寄る。
見渡せば、
西は、羅
城門の礎
より、東

は、八條河原のあたりまで、土塀を築き、亂杭、逆茂木を
樹て、前には、幅三丈餘の濠を鑿つ。
濠を越えんには、橋を引けり、水を濟らんには、深さを知
らず、衆、これはと躊躇らふ、妻鹿長宗、弓を入れて、底を
探れば、弓弾、纒に残る、

『扱は、我が丈は、立つべきぞ』

五尺三寸の大太刀を抜きて、肩に掛けつ、サツと濠中に
飛び込めば、水は、胸板の上を越えず。

武部輝國は、矮軀五尺ばかり、續いて、飛び入れば、ズブ
リと没して、水は、甲の上を流る、長宗、後を見返りて、

『我が總角に、取り付きて、上れよ』

と言へば、蹶捷の輝國、長宗の鎧の上帯を踏んで、肩に上
りつ、一跳ね跳ねて、サツと、向ふの岸に、跳ね上る、
長宗、カラ〜と笑ひ、

『和殿は、我れを橋にして、渡したるぞ、イデ〜、其
塀を押し破れ』

と言ひさま、續いて、躍り上り、塀の柱に、手を懸けて、
曳や〜と、押し遣り、引き戻せば、塀の揚土、ドツと崩

れて、濠、忽ち埋まる。

京軍、其れと見るより、一齊に、驚き立ち、三百餘ヶ所の
櫓々の上より、矢を射ること、雨より繁し。

長宗、輝國、各々數矢を浴びつ、憤然として、高櫓の下
に、馳せ入る。

木戸口の合戦、危しと聞くより、東寺、西八條、針、唐橋
に控へたる京軍一萬餘騎、皆、一團となりて、東寺の東門
の脇より、渦巻き来る。

長宗、輝國の勢、今や、危し。

佐用範家、別所資家、別所貞泰、得平隆頼等、奮然として
進めば、圓心、範資、貞範、則祐の父子、三千餘騎を率ゐ、
亦、猛然として、疾風の如くに、突き進む。

『前日の恥辱を雪ぐは、今日の一戦に在り』

と思へば、意氣、愈々烈しく、兵鋒、益々鋭く、目に餘る
京軍を、突き立て〜、忽ち四分五裂に突き破れば、京軍、
今は走へず、ドツと、七條河原に潰え走る。

一陣、既に敗れて、諸陣、意氣、頓に沮み、竹田の兵も敗
れ、木幡、伏見の軍も敗れて、皆、六波羅に遁れ還る。

官軍、勝に乗じて、三方並び進み、五條の橋詰より、七條
河原に至るまで、犇々と、六波羅を取り圍み、態と、東の
一角を開きて、敵の通路を設く、千種頭中将忠顯、

『交戦、數日に互らば、千早の敵兵、彼れを捨て、此
れに向はん、斯くては、大事ぞ、諸軍、心を一にし、力
を合せて、唯、一時の間に、攻め落せや』

と號令すれば、全軍の士氣、彌やが上に奮うて、皆、一氣
に、撃滅せんとす。

出雲、伯耆の兵、雜軍二百輛を集め來り、家を毀ち、屋を
壞はして、其上に積み載せ、敵の櫓の下に、押し並べて、
此れに、火を放つ。

火は、風を呼び、風は、火を煽る、炎焰、一時に、燃え揚
がりて、ドツと襲ひ懸ければ、一方の木戸、忽ち焼け落つ。
榎井宮の門徒、上林房、勝行房の二人、三百餘騎を率ゐて、
地藏堂の北の門より、五條の橋詰に、打つて出づ。

堀川雅忠、三千餘騎を以て、此處に備ふ、忽ち撃ち崩され
て、遁げ走る、門徒、亦、兵少なきを以て、其儘、引き還
る。

是時に當り、京軍、尙、五萬餘騎あり、若し一致して、撃つて出づれば、敵を攘はんこと、難きにあらざ、されども、一敗の餘、皆、鬪志なく、兩探題、亦、惘然として、策の施すべき所を知らず。

今は、防備の手も緩み、警戒の眼も弛ぶ。

夜に入れば、士卒、塀を越え、柵を踰えて、遁れ去るもの、續々絶えず、残り留まるもの、纒に一千騎ばかり。

廿四

大事、今は、去りぬ。

糟谷宗秋、兩探題仲時、時益の前に出で、手を突き、首を下ぐ、

「敵勢は、刻々に加はり得へるに、味方は、刻々に落ちて、今は、千騎にも、足り候まじ、此小勢を以て、大敵を拒がんこと、所詮、叶ふべくも候はず、東の一方は、敵も、未だ圍み候はず、主上、上皇を奉じて、一先づ、關東に下らせ給ひ、重ねて、大勢を催ほして、京師を攻めさせ給ふべし、佐々木判官、勢多の橋を固めて候へば其を召具せられ候べし、判官だに御供仕つらば、近江國

にては、手指すものとても候まじ、美濃、尾張、參河、遠江には、御敵ありとも承はり候はねば、路次は、定めて、無事にぞ候はん」

と説き勸むれば、兩探題、

「さらば、先づ女院、中宮を始め奉つり、北政所以下、面々の女性を、忍びやかに、落し參らせ、心靜かに、一方を打ち破りて、落ち行かん」

と告げ、急ぎ聖慮の程を、伺ひ奉つれば、

「宜しく武家の心に任すべし」

と宣らし給ふ、續いて、小串五郎兵衛を以て、女院、中宮を始め奉つり、後宮の方々に、其由を申しければ、一時も早く、重圍の中を通れんと思させ給ひ、皆、思ひくの方に出でまし給ふ。

北の探題仲時、此間に、先づ其妻を落さんと思ひ定め、我が前に、召し寄せて、

「今は、籠城も叶ふべからず、主上、上皇の御供申して、關東に下らんとこそ思へ、敵兵、四方に充滿すれば、路次の程も、心元なし、御事は女性、松壽は幼稚なれば、

仔細候まじ、今の内に、疾く忍び出で、何れの里にも、身を隠し給ふべし、事なく、關東に着きなば、迎ひの人を參らせん、若し、又道にて討たれしと聞き給はゞ、如何なる人にも配ひて、松壽を守り育て、成長の上は、出家となして、我が後世を弔はせ給へ、さらばぞ」

と告げて、早、座を起たんとす、暫しとばかり、慌て、其鎧の袖を控へし妻、

「此處を通れ出づればとて、何處の里か、安からん、頼て、搜し出されて、我身の恥を見るばかりか、我子の命をも失はれ候はんは、一定にこそ侍れ、途次にて、若しもの事も起らば、其處にて、兎も角もなり候はぬ、唯、此儘に具し給へ」

左手は、我が顔に當てつ、右手は、夫の袖を捉みて、放さず、止度もなき涙に、過ごすともなく、時は、過ぎ行く。

廿五

南の探題時益、前衛を承はる、馬に跨りて、北の探題仲時の中門の際まで、進み近づき、

「主上、早、寮の御馬に召され候へるに、何ど、何時ま

でも、起たせ候はぬぞ」

と呼はりつ、其儘、馬を進む。

今は、猶豫すべからず、仲時、泣き入る妻子を、振り捨て、縁の上より、馬に打ち跨り、北の門を、東へ向へば、妻子は、泣くく、東の門より、迷ひ出づ。

哀別の聲、離苦の叫は、其處此處に、漏れ聞えて、落武者の腸、幾重にや燃れなん。

行幸とは申せど、常の行幸に似るべくもあらず、夜を籠め、暗を冒して、覺束なげに、東、近江路へと進ませ給ふ。

十町ばかりも行きたる比、後の方を見回れば、官軍、早、込み入りけん、六波羅の館よりは、炎焔、熾んに立ち騰る。關東の覇業、早、灰となりて、消えなんとす。

番場峠

北條仲時滅亡の地

番場峠は、近江國坂田郡南箕浦村番場に在り、鳥居本村より、醒ヶ井町に通ずる山道、磨針嶺の山續きにして、番場は、其中間の一驛なり、山南の鳥居本村にも一里、山北の醒ヶ井町にも一里の地點に在りて、美濃國不破の關に到る要路に當る、驛中に、八葉山蓮華寺と稱する寺院あり、辻堂に於て、自殺せし北條仲時以下四百三十四人の名を記せる過去牒を藏す、執筆糟谷十郎とありて、壯烈なる鎌倉武士の最期を偲ばしむ、今、國寶となる、辻堂とは、當時、米山の西に在りし一向堂を謂ふ、寺の彼方に、六波羅山と云ふあり、其死骸を埋めし塚、此處に在り。

伊吹山の西麓、伊吹村に、大平護國寺あり、伊吹山四院の隨一なり、守良親王の薙髮して、覺靜と號し、伊吹寺に屏居せられしと云ふも、此寺なるべし。

苦集滅道は、京都清水寺の南、阿彌陀峰の北を通ずる山科街道澁谷越にして、歌の中山清閑寺の前あたりを謂ふ、元、久々目路と曰ひしを、佛法四諦の法たる苦諦集諦滅諦道諦に取りて、佛家、之れを苦集滅道と稱するに到りしなり。

山城國宇治郡山科村安朱の東に接する地を、四宮と曰ふ、仁明天皇第四の皇子人康親王の館址なるを以て、此名あり、溪水、北方の藤尾より來りて、村内を過ぐる處を、四宮河原と曰ふ。

光嚴天皇は、六波羅より、苦集滅道を、山科に出で、勢多を過ぎて、野路の篠原に、御一泊の上、番場に到らせ給へるなり。

一步、館外に踏み出づれば、既に敵あり。

六波羅の兩探題北條仲時、北條時益、天皇、兩上皇を奉じて、關東に向ふ、時益は、前衛たり、仲時は、後從たり。

五月七日の夜半、六波羅を出で、阿彌陀峰の北を、苦集滅道に差し懸ければ、士兵、道を塞ぎて、盛んに矢を放つ。

一矢、飛び來りて、時益の首に中れば、骨を折られて、眞逆さまに、馬より落つ、糟谷七郎時廣、馳せ寄りて、矢を抜き棄つれば、息、忽ちに絶ゆ。

時廣、泣くく、其首を斬りて、錦の直垂の袖に裹み、路傍の田中に埋めて、元の所に還り來り、腹、掻き切りて、時益の屍に重なりつゝ、斃る。

四面、暗黒にして、知るものなく、鹵簿は、其儘、進みて、山科の四宮河原に到る、此處にも、亦、士兵あり、

「落人の過ぐるぞ、打ち留めて、物具、剥げや」

と呼はる聲々、暗を劈きて、前後に聞え、矢の飛び來ること、雨より繁し。

東宮を始め奉つり、供奉の卿相、皆、散りくゞに分れて、唯、日野大納言資名、勸修寺中納言經顯、綾小路中納言重資、禪林寺宰相有光の諸卿のみ、車駕の前後に従ひ奉つる。天皇、上皇、御涙、堰き敢へず、夜路、矢路を冒させ給ひ、且ある杉の樹陰に、御駒を駐めて、暫し休息あらせ給ふ。此處も、安全の地にあらず、何處よりか、流矢、飛び來りて、天皇の左の御脇に突つ立つ、陶山義高、大に驚き、急

ぎ馬より、飛び降り、矢を抜き、御血を吸ひ奉つる、雪の御膚は、紅の色に染りて、御痛々しき御有様、拜し奉つるだに、畏れ多かり。

兎角する内、東天、漸く白みて、曉霧、寝く霽れ渡る。

北方の山を見渡せば、五六百人の士兵、楯を突き、鏃を揃へて、待ち構ふ、士卒、見て、皆、アツと驚く。

備前國の住人中吉彌八幸規、先登に在り、敵前近く、馬を乗り進めて、

「萬乘の天子、關東へ行幸させ給ふ處に、何奴なれば、斯くも狼藉を仕つるぞ、心あるものならば、弓を伏せ、甲を脱ぎて、通し奉つれ、禮儀を知らざる奴原なれば、一々、召捕つて、梟木に懸くべきぞ」

と呼はれば、士兵、眞實とは思はざりけん、忽ちカラ／＼と笑ひ、

「御運盡きて、落ちさせ給へるものを、其儘、通せとは、仰すまじ、容易く通らんと思さば、御供の武士の物具を捨て、通らせ給へ」

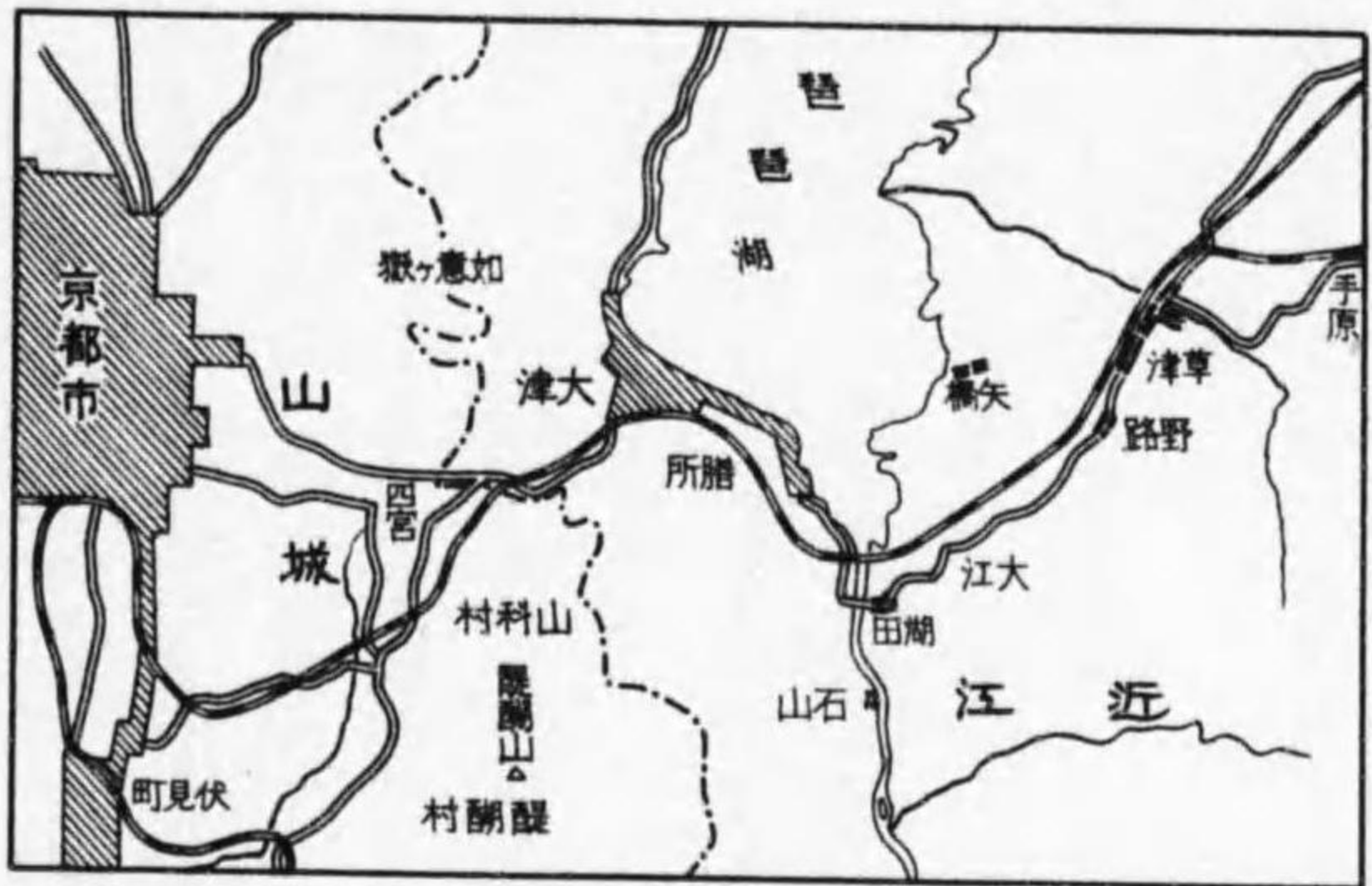
と呼はり返し、哄とばかりに、鯨波を作る、幸規、勃然と

して憤り、

「憎き者共の振舞かな、左程、欲しくば、イデ〜、我等が物具を取らせん」

と言ふや否や、從兵六騎と與に、一鞭、馬を驅つて、驚地に、突き進む、士兵、此勢に恐れて、パツと散亂すれば、

四宮河原地圖



幸規等、六方に分れて、逐ひ行く。

車駕、此間に、其處を、過ぎ行き給ふ。

二

幸規、勢に乗じて、餘りに敵を追究すれば、士兵二十人ばかり、急に取つて返して、四方より、包み撃つ。幸規、少しも、恐れず、多勢を相手に、奮ひ闘ひ、矢庭に、巨魁と引

つ組んで、馬より落ち、組み合ひ、重なり合ひて、四五丈の崖下に、控と轉がり落つ。

幸規、下に在り、跳ね返して、刺さんとすれども、刀身、既に脱け落ちて、唯、鞆のみ、腰に在り。

敵、幸規の胸板の上に、乗り懸り、髪を掴んで、首を掻かんとすれば、幸規、緊かと、其小腕を攫みて、動かさず、

「やよ待ち給へ、我れは、六波羅殿の雜式なれば、此首を取りたればとて、何の手柄にもなり候まじ、六波羅の館には、六千貫の錢を埋めたる處あり、我れを助け給はば、御邊を手引して、其場所を教へ參らせんに」

と給けば、敵は、急に色を和らげ、幸規を扶け起して、土を掃ひ、我家に連れ歸りて、酒を饗し、打ち連れて、京師に上る。

幸規、頓て、六波羅の燒跡に、誘ひ行き、且ある場所に到りて、忽ちヤ〜と驚く、

「這は如何に、正しく、此處に埋めありしに、早、人に取られたるか、今は、力なし」

さも失望らしげに告げて、體よく、立ち別かる。

三

天皇、上皇、危き場所を脱れ給ひ、御駒を早めて、近江路に入らせ給へば、今は、遮る敵もなく、粟津を過ぎ、勢多をも過ぎて、野路の篠原に着かせ給ふ。

天台座主梶井二品親王、苦集滅道に於て、流矢に傷つき給ひながらも、尙、車駕に扈して、此處まで來らせ給ふ、

「行末とても、道の程、安けく、過ぐべしとも覺えず、何處にも、暫し立ち忍ばざや」

と思し給ひ、門徒の中、唯二人のみ残れる慶超、淨勝を從へ給ひ、伊勢路を過ぎて、宇治の神宮に隠れ給ふ。

一難、穽に過ぐれば、又一難あり。

次の日、仲時、乘輿を奉じて、篠原を發す。

糟谷宗秋、先陣に在り、佐々木時信、後陣に在り、進んで、鳥居本より、番場の峠を越えんとす。

勢多より東は、一路平安なりと思ひきや、此處にも敵あり、道を挟み、楯を列ねて、待ち構ふ、此れぞ、當國の諸兵、六波羅の敗報を聞くと齊しく、俄に伊吹山麓に屏居あらせし龜山天皇の皇子守良親王を奉じて、其歸路を扼せんとす

るもの。

其れとも知らぬ宗秋、屹と、前方を見遣れば、其人數、數百に過ぎず、

「扱は、落人の物具を刳がんとする惡黨共の群ならん、手痛く攻むれば、皆、遁げ走らん、ソレ懸かれや」

從兵三十六騎を提さげて、ドツとばかりに、突貫すれば、一陣の士兵五百人ばかり、一支へも支へず、サツと遁げ走りて二陣に加はる。

折りしも、山霧、霽れ渡りて、日光、赫と照り輝く、宗秋、

「最早、手に立つものもあるまじ」

と思ひつ、馬首を立て直して、前方を見遣れば、五六千の兵士、一旛の錦旗を擁して、要所を塞ぐ

「扱は、尋常の士兵にはあらざりけるか、矢を放たんに

は、箆の中、既に空し、駈けて破らんには、馬の脚、亦、疲る、今は、叶ふまじ」

宗秋、今は、奈何ともすべからず、山麓の辻堂に馳せ入りて、後陣の來るを待つ。

言經顯、宰相有光の二人のみ、御側に仕ふまつる。天皇、兩上皇、此處に在はしますこと、十八日、其月の二十八日、怪しげなる綱代輿に召させ給ひ、見馴れぬ軍兵に、前後を圍まれて、京師に還幸あらせ給ひぬ。先帝の西遷あらせ給ひてより三年、世局、復た一變し來らんとす。

番場には、往古、關所ありて、番衛の人、此處に居りしが故に、此名ありと稱すれども、不破にこそ、關はありつれ、此地に、關ありしことは、聞きも及ばず。

按ふに、番場とは、蝦夷語のバンバウルなるべし、バンとは、パンケと同じく、下の義なり、バとは、頭、又は上の義、ウルとは、フルと同じく、丘の義にして、パウルとは、高き丘、若くは、峠と云ふの義を有す、即ちバンバウルとは、下の峠と譯すべし。

然らば、此れに對する上の峠ありやと云はゞ、磨針峠こそ、正しく、其れなれと答ふるに躊躇せず。

磨針とは、必ず、シリパウルの轉訛ならん、シとは高、リとは高にして、シリも、亦、高の義なり、パウルは、

即ち峠にして、シリパウルとは、高き峠と譯すべし。

鳥居本より、醒ヶ井に至る二里の山道中、第一の峠を、シリパウルと曰ひ、第二の峠を、バンバウルと曰ひしに、シリパウル、轉じて、磨針嶺となりしものなること、疑ひなし。

蝦夷語の牛濁音は、大抵、邦語の濁音に轉ず、バンバのバンバとされるが如き、即ち是れなり。

九州探題址

菊池武時攻撃の地

九州探題は、筑紫探題とも云ひ、筑前國筑紫郡博多社家町に在り、今、福岡市に屬す、建治元年、元寇に備へん爲め、北條實政を派遣したるに始まり、爾來、北條氏の一門を常置して、探題となす。

楠田神社は、九州探題の館の西北に當る、菊池武時の其前を過ぎんとする時、二矢を放ちて、巨蛇を斃せし處。

武時の首塚は、福岡市の西南に接する早良郡鳥飼村大字

谷の馬場頭に在り。

武時の居城菊の城は、肥後國菊池郡菊池村大字北宮の西方に在り、本、深川と曰ふ、田隴の小高き處に、一小碑あり「菊之城址」の四字を刻す。

西國勤王の倡首は、菊池氏を推す。

元弘三年閏二月、後醍醐天皇、隱岐より、脱れて、伯耆に幸し、檄を下して、四方勤王の師を募らせ給ふ。

肥後の人菊池二郎武時、入道して、寂阿と號す、慷慨にして、義を好む、

「あ、天子、賊臣の爲めに、苦められ給ふ、何ぞ、救ひ奉つらざるべきや」

筑前の少貳貞經、豊後の大友貞宗と謀りて、義兵を擧げんと欲し、密に使を行在所に遣はして、奏聞すれば、天皇、深く嘉納あらせ給ひ、錦旗を賜ひて、忠戦を勵まし給ふ。筑紫の探題北條英時、早くも、其謀を聞きて、大に驚き、先づ其眞否を糺さんと欲して、武時を、博多に召せば、

「扱は、計畧、早、漏れしと覺ゆるぞ、先んずれば、人

を制す、イデヤ、進んで、探題の館をこそ、攻むべけれ」

武時、急ぎ使を遣はして、貞經、貞宗の二人を促がす。

時に、王師、屢々京師に敗る、貞經は、之れを聞きて、躊躇し、貞宗は、使者八幡彌四郎宗安の首を斬りて、探題に送る。

鄙夫、俱に天下の大事を謀るに足らず、武時、聞いて、勃然として憤る、

「扱て、斯る鼠輩とも知らで、事を與にせるこそ、不覺なりけれ、イデ、此上は、少貳、大友と、刺し違へて、死すべきぞ」

怒髪、冠を衝き、決誓、朱を濺ぐ。

武時の妻、才學あり、智慮あり、徐に夫の方に向ひて、

「忠の爲めに、身を忘れ、義の爲めに、命を捨てんこそ、武夫たるもの、本分に候へ、一たび、勤王の志を起し、主上、辱けなくも、錦旗を賜ひて、忠義の志を勵まし給ひぬるものを、中途より、忽ち其志を變じたる少貳、大友等こそ、人非人の痴漢に候なれ、斯る輩に向つて、御命を捨て給はん程ならば、寧ろ探題の館を攻めて、討死

菊池武時肖像



し給ふべし、天定まれば、人に勝つとやらん承はりて候、少貳、大友等、一旦、勝を得候とも、頓て勢を失うて、滅び

候はん、何の惑はせ給ふことかは候』
義を説き、道を論じて、諫め勵ませば、武時、忽ち決然として、

『扱も、女に似氣なき志操かな、然らば、探題を討つて、死すべきぞ、成るも、敗るも、何の物かは』

と言ひ放ち、諸子と與に、手勢百五十騎を提さげて、筑前の博多に向ふ、此處ぞ、筑紫探題府の在るところ。

二

忠義の爲めには、人も奮ひ、馬も勇む。

武時、肥筑の山野を馳驅し、早、進んで、博多に入る、今や、楠田の祠前を過ぎんとする時、馬、俄に畏縮して、進まず、武時、憤然として、祠宇を見遣りつゝ、

『我れ、今、君の御爲めに、賊を討たんとす、神前を乗り打ちすればとて、何か苦しかるべき』

鏑矢を抜きて、扉を射ること、二たび、

武夫のうは矢のかぶら一筋に

思ひ切るとは神は知らずや

一首の和歌を、高く誦すれば、不思議や、馬、復たいきり進む、後、里人、祠壇の中を見れば、一頭の大蛇、二矢を負うて、斃れ居たりぬ。

武時、直に進んで、探題の館を攻む。

士卒、皆、殊死して戦ふ、一呼して、外郭を奪ひ、猛然として、更に、内城に迫る、勢、宛がら破竹の如し。

英時、防がんに力なし、將に刀を引ききて、自殺せんとす。忽ち見る、數千の人馬、砂烟を蹴立て、駈け來るを、此れぞ、少貳、大友等の來り援けんとするものなりける。武時、勇と雖も、兵、寡なし、争かて、此大軍に抗し得べきや、其子武重を顧みつゝ、

『我が死すべき時節、今ぞ來れる、汝、是より、肥後に還り、兵を集め、城を固めて、賊を滅ぼし候へ、父への孝、君への忠、何物か此れに若くべき』

と諭し、士卒五十騎を分ちて、其手に附せんとすれば、武重、

『誰か、父を捨て、獨り還るもの、候べき、武重こそ、眞先に、討死致し候べけれ』

と答へて、聽かず、早、毅然として、死を決す、武時、聲を荒らげ、

『汝の申す所は、親子の私情ぞ、我れは、君の御爲め、天下の爲めに、汝を残さんとこそ思ふなれ、死すべき時は、今日のみかは、疾く往け、何を遅々することやある』と叱すれば、武重、今は、争はん力なし、

『左らば、仰せに隨ひ奉つらん、一身一家を捧げて、君の御爲めに、盡し候べし』

慨然として、言ひ放てば、武時、打ち頷ぎつゝ、笠印を抓り取つて、何事をか認む、

『左らば笠ぞ、還つて、母に渡せよ』

イザとて、渡せば、武重、是非もなく、辭して、故郷に向ふ。

武時、其後姿を目送すること少時、

『イザヤ、死せん』

其子頼隆、隆舜等と與に、殘兵百騎を率ゐて、敵中に突進し、奮闘激戦、身も死し、子も死し、士卒、亦、皆、死す、武時、時に四十二。

三

父の命、是非に及ばず、武重、菊の城に還り來りて、仔細を、母に語る、

『此れぞ、父上の御笠に候』

父の渡せる笠印を取つて、前に差し置く、母、手に取つて見れば、一首の和歌あり、

故郷に今宵ばかりの命とも

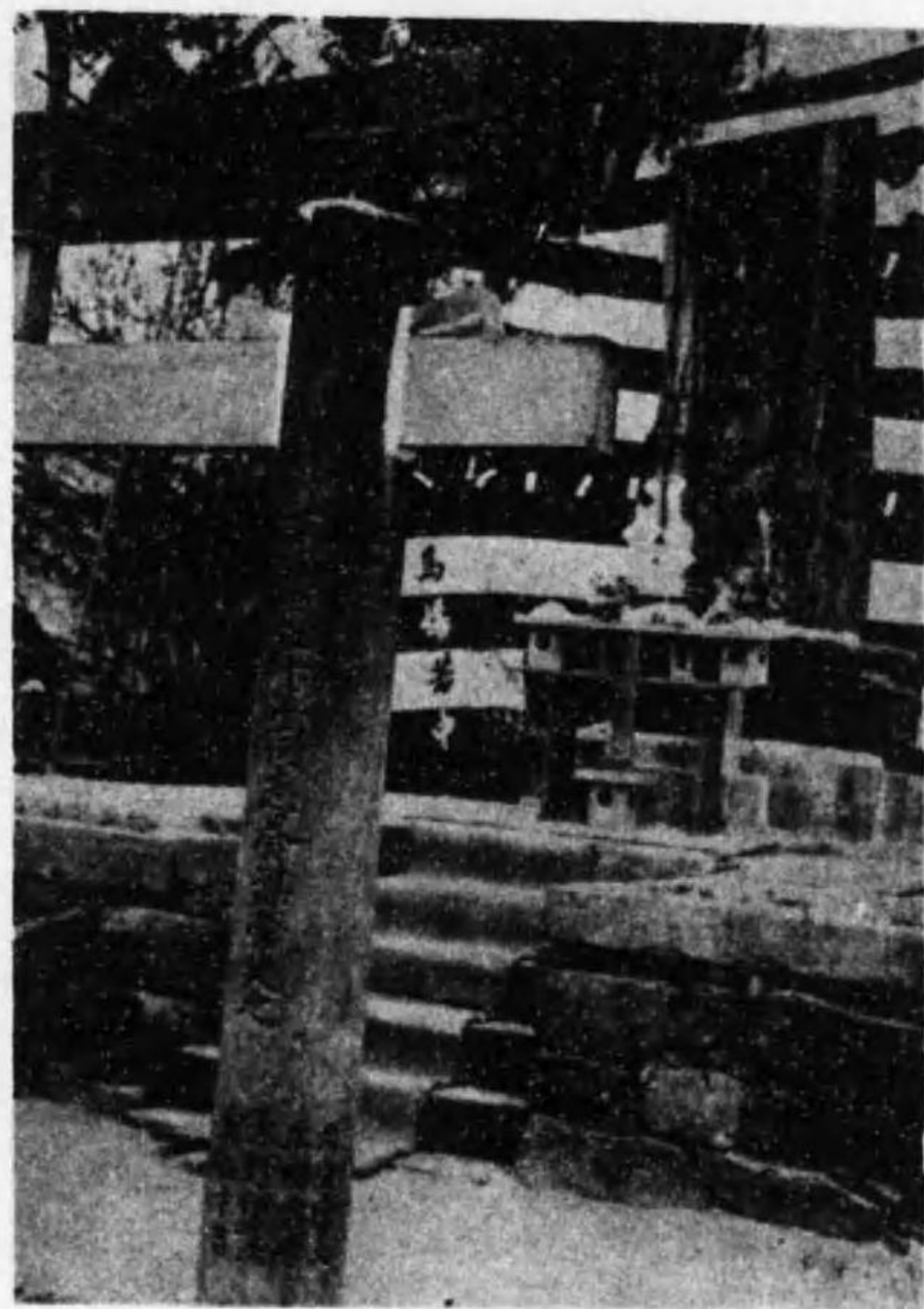
知らでや人の我れを待つらん

母は、繰り返しく、打ち誦ずること、二たび、三たび、
忽ちハラ／＼と、涙を垂れつゝ、

「父上の汝を還し給ひつること、世にも、いみじき御計
ひなれ、身は、君の御爲めに死し、子は、國の爲めに残
す、武臣たるもの、心懸、誰しも、斯くこそ、あるべし

菊池武時の首塚

塚は福岡市の西南に接する筑前國早良郡鳥飼村大字谷の馬場頭に在り。



れ、汝、時を待ち、機を窺ひ、朝廷の御爲めに、賊を撃
ち滅ぼさんこそ、父上の御志、且は、我身の願ひなれ、
吳々も、義を忘れ、利に迷ひて、我が家名を、莫汚がし
そ」
と諭すも、亦、遺誠の心、

故郷も今宵ばかりの命ぞと

知りてや君の我れを待つらん

筆を走らして、書き記すは、一首の返歌、

「入道殿にも、嗚な待ち詫び給ふらん、左らばぞ」

懐剣を抜くより早く、忽ちグサと、咽喉を突き貫く。

武重、見るより、轉た慨然たり、

「父は、王事に殫れ給ひ、母は、父に殉じ給ふ、北條は、
君の御仇ぞ、家の敵ぞ、争かて、此儘に置くべきや」

悲憤の涙、双眼より迸しる。

天は墜ち、地は裂くるとも、一門一家、争かて、君に背き

奉つらんや、

「イデヤ、骨となりて、君に捧げまつらん」

武重、諸弟を勵まして、孤城を守る。

筑紫の正氣、獨り此一門の上に在り。

四

天定まりて、人に勝つ時は、早くも、來りぬ。

武重兄弟、菊の城に據りて、敵を待つこと、二ヶ月ばかり、

天運循環、六波羅、先づ陥り、鎌倉、亦、尋いで滅ぶ。

少貳貞經、聞いて、愕然として驚く、

「素破や、我身の一大事ぞ、イデ／＼、探題を討ちて、

罪を購はさや」

反覆常なき小人、早くも、一身の爲めに、志を變じ、大友

貞宗と、兵を合して、五月二十五日、博多の探題を攻む。

英時の士卒、多くは、遁け失せて、残り留まるもの、唯、

一族郎從三百四十人に過ぎず、英時、事の成すべからざる

を知りて、自殺すれば、其士卒、亦、悉く自殺す。

九州探題、此に陥る。

貞經、貞宗の二人、使者を、菊の城に遣はして、怨を釋か

んことを請へば、武重、忽ち勃然として怒る、

「先には、我が父を欺きながら、今又、來つて、我れを

騙からんと欲するか」

命じて、使者の首を斬らしむ。

笠懸野

新田義貞舉兵の地

笠懸野は、上野國新田郡に在り、一名を大原と曰ふ、生品村の市野井、綿打村の權右衛門、上中、溜池、藪坂本町の本町、山ノ神、六千石、大久保、笠懸村の久宮、及び強戸村の寺井の一部に跨れる曠原なり。

生品神社は、生品村市野井の生品の森に在り。

旗の渡は、新田郡尾島町の武藏島より、武藏國大里郡新會村の高島に通ずる利根川の渡船場を曰ふ、新田義貞の渡れるに依りて、此名あり。

元弘三年五月八日、新田義貞、新田郡世良田より、笠懸野に到り、義旗を、生品祠前に建て、兵を集め、翌九日、旗の渡より、利根川を越えて、武藏に入り、小手指原の合戦となり、分陪河原の合戦となり、更に、鎌倉の討入、北條氏の滅亡となる。

一

北條相模入道高時、天下の兵を擧げて、金剛山の城を圍む。攻圍三月、尙、抜くこと能はず、人は倦み、馬は疲る。新田太郎義貞、亦、遣中に在り、密かに、心を朝廷に屬す、一日、執事船田入道義昌を、側近く召して、

「義貞、不肖と雖も、統を源氏に承く、争かて、北條の驅使を甘んずべきや、熟く相模入道の行跡を見るに、狂暴、言語に絶す、其滅亡、遠きにあらず、我れ、本國に歸りて、義兵を擧げ、鎌倉を覆へして、叔慮を安んじ奉つらんと思ふなり、勅命を蒙むらずんば、大事、遂げが

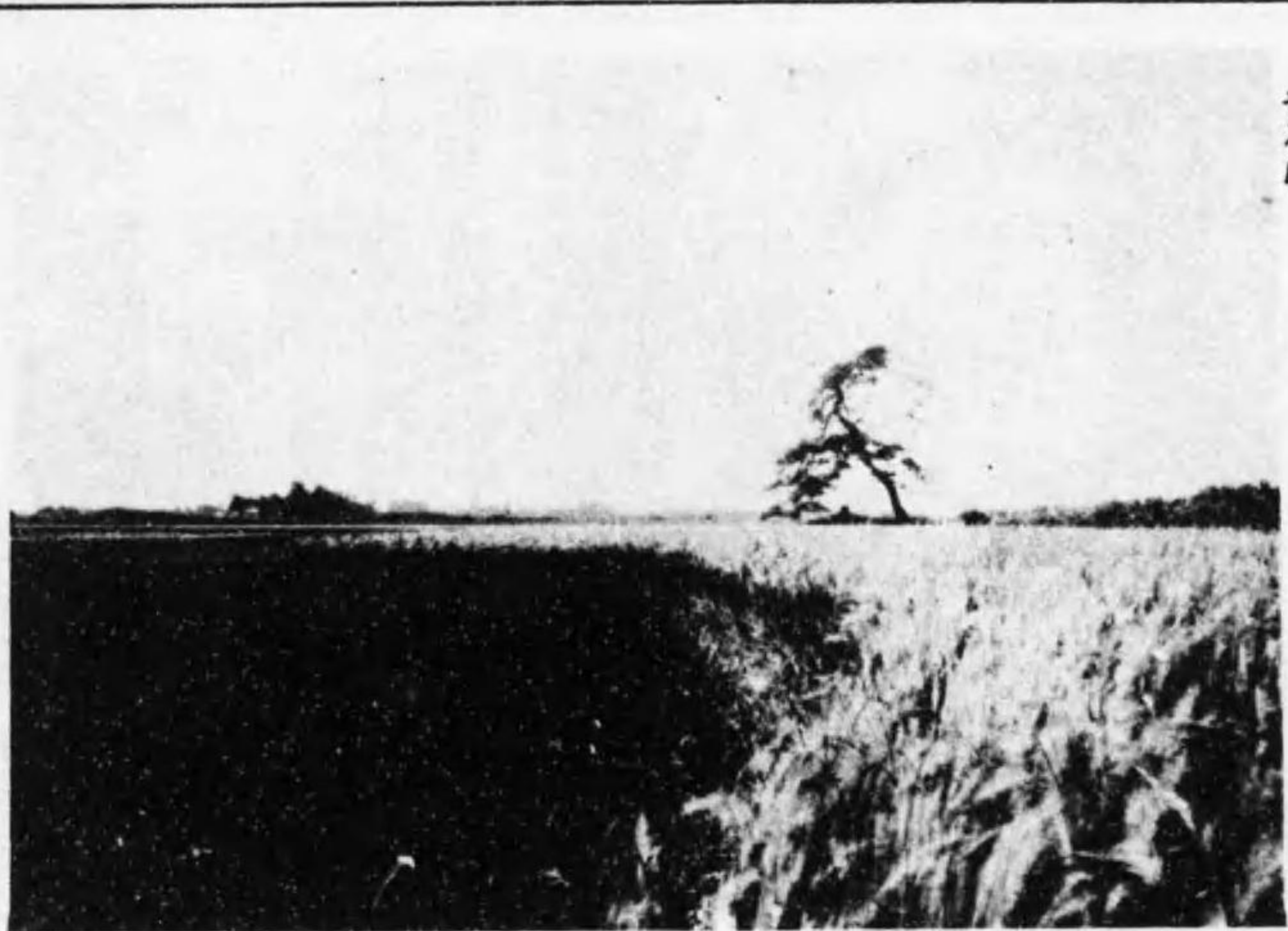
笠懸野地圖



たし、如何に、大塔宮の令旨を、申し受くべき手段やある

と問ふ、義昌、沈思すること、稍久し、

「大塔宮は、此あたりの山中に隠れ在はしますとぞ承はる、義昌、方便を運らして、令旨を申し乞ひ候べし、御心安く、思し召せ」と答へ、直に辭して、己れの陣に還り、其夜、部下三十餘人を率ゐて、密かに、葛城の山下に



笠懸野

抵る。

天、明けて、曉霧、稍、霽る、義昌、部下と、鋒を接して、逐ひつ、返しつ、伴はり戦ふこと、半時ばかり、呼聲、山谷に響く、山上の野武士、遙かに、此體を見遣りて、

「アノ多勢なるは、味方にこそあらめ、ソレ力を戮はせよ」

と言ひつ、山を下りて、近づき來るもの十一人、義昌、急に、

「ソレ捕へよ」

と下知すれば、部下、忽ち戦を止めて、野武士を、取り圍む、

「扱は、計略なりしか」

野武士、慌て、遁れ去らんとするを、忽ち寄つて、集つて、搦め取る、義昌、進み出で、繩を解き縦ち、

「我れ、汝等を欺きて、搦め取れるは、敢て誅戮を加へん爲めにあらず、我が主君新田殿、大塔宮の令旨を、乞ひ奉つりて、御旗を揚げ給はんとす、依りて、大塔宮の

御座所を、尋ね問はんが爲めに、召捕りしものぞ、イザ、我が使を案内せよ』

と言へば、野武士、聞いて、打ち喜びつゝ、

『そは、最と安きことにこそ候へ、此中の一人に暫しの暇を賜はり候べし、令旨を申し受けて、進らせ候はん』と述べ、十人を人質として、留め置き、中なる一人、忽ち去つて、山中の雲に分け入る。

待つこと一日、令旨、乃ち至る。

義昌、恭しく、捧げ還りて、義貞に上つる、義貞、押し戴きて、披き見れば、令旨にはあらで、詔辭なり、義貞、

『一家一門の譽、此上やあるべき』

と言ひつゝ、感、極つて泣く。

其翌日、病と稱し、軍を抜きて、本國上野に還る、時に、三月十二日。

二

金剛山、尙、陥いらず。

高時、其弟左近大夫泰家に、十萬餘騎を附して、西下せしめんとし、軍資を、近國に徴す、鎌倉の吏出雲介親連、黒

沼彦四郎の二人、世良田に來りて、

『今より、五日以内に、六萬貫を差し上げ候べし、遲怠せば、重き御咎めあるべきぞ』

と告げ、里正の宅に、陣を構へ、下卒を放つて、村民を誅ること、甚だ急なり、税は重く、期は短かし、村民、皆、苦しむ。

義貞、既に還りて、世良田に在り、斯くと聞きて、勃然として怒る、

『雜人原の爲めに、我が館の邊を、踏み荒されんこと、無念至極ぞ、疾く、搦め來よや』

士卒を遣はして、兩吏を捕へしめ、其首を斬つて、村端に梟くれば、下卒、大に怖れて、鎌倉に還り報す。

關西の動亂、尙、治まらず、坂東の戦機、亦、動かんとす、高時、聞きて、忽ち烈火の如くに憤る、

『近年、遠き西國に於て、我が武命を用ひざるものあるさへ、奇怪の事なるに、近き東國に於て、我が使節を戮するものあらんとは、不届至極ぞ、若し緩急の沙汰を致さば、當家の武威、是れより衰へん、疾く、武藏、

生品神社

上野國新田郡生品村大字市野井の笠懸野に在り新田義貞の詔書を拜讀して義旗を建たる處。



上野の兵を發して、義貞兄弟を誅伐せよ』

嚴命、吼ゆるが如く、意色、極めて厲し。

三

高時、今や、意を決して、義貞を滅絶せんと欲す。

鎌倉の羽檄、早くも、上野に達すれば、義貞、今は、躊躇すべからず、俄に一族を集めて、軍事を議す、

『如何に面々、鎌倉の軍勢、此れに寄せ來らば、如何にしてか、之れを防ぐべき、所存あらば、包まず申せ』

と告げつゝ、屹と一座を見廻はす、事、急にして、策、未だ浮はず、諸人、唯、顔を見合はすばかり、敢て一語をも發せず。

稍、ありて、一人、先づ口を開く、

『此地は、攻守、俱に宜しからず、沼田の庄に據り、利根川の流を控へて、敵を防がんは、如何に』

と陳ずれば、又一人、

『越後には、當家の一族、甚だ多し、一先づ、彼の地に下りて、旗を揚げ給はんこそ、然るべけれ』

と述べ、義貞、未だ可否を言はず、忽ち膝を促がして、進み出でしは、義貞の弟脇屋次郎義助、

『凡、命を輕んじて、名を重んずること、弓矢の道に候へ、今日は、一死、國に殉ずるの時に候ぞや、坐して、

此地を守らば、士氣は沮喪し、去つて、他國に避くるは、家門の耻辱に候ぞ、アレ見よ、義貞こそ、北條の使を斬つて、逃げたりと語はれんは、末代までの名折れに候は

ずや、令旨は、何の爲めにか、申し受け給へる、宜しく、大命を額に押し當て、唯一騎なりとも、國中に打つて出で、義旗を挙げ、勢付きなば、直ちに進んで、鎌倉を攻め落し給ふべし、今更、何の惑はせ給ふ所かある』と説く、生氣凛々、四邊を拂ふ、一座三十餘人、皆、實にもと同じ、事、乃ち決す、義貞、

『さらば、事の漏れざる先きに、打ち立たん』

五月八日、世良田を出で、笠懸野に抵る、附き従ふもの、義助を始めとして、大館次郎宗氏、其子孫次郎幸氏、彌次郎氏明、彦二郎氏兼、堀口三郎貞満、其弟四郎行義、岩松三郎經家、里見五郎義胤、江田三郎光義、桃井次郎尚義等百五十騎。

義貞、詔書を拜讀すること、三たび、義旗を、生品祠前に建つ。

四

兵、未だ集まらず、勢、未だ張らず、進んでは、敵を攻むるに足らず、退いては、境を守るに足らず、義貞、既に事を起せども、尙、軍を勸めて、動かす。

面々なり、義貞、大に悦び、

『オ、く、越後の方々にて候ひしか』

と言ひつゝ、馬を進むること五六歩、

『豫ねてよりの企てにはありながら、昨日今日、俄かに思ひ立つことの候て、告げ参らせん暇だになかりしを、如何なれば、斯くも、速かに馳せ付け給へる』

と問へば、大井田遠江守氏經、馬を進ませて出で、

『扱ても、不思議の事の候ものかな、去ぬる五日、一人の山伏、君の御使として、越後の國中を、一日に觸れ廻はり、勅諭に依りて、大義を思召し立たるゝの條、速かに、馳せ参せよとのことにて候ひき、それ故にこそ、夜を日に繼いで、是れまで、馳せ付け候なれ、境を隔て候ものも、明日は、皆、参着致し候はん、暫し、彼の勢を待たせ給ふべし』

と言ひつゝ、馬より下りて、色代すれば、他の諸將も、亦、馬より、飛び下りて、對面す。

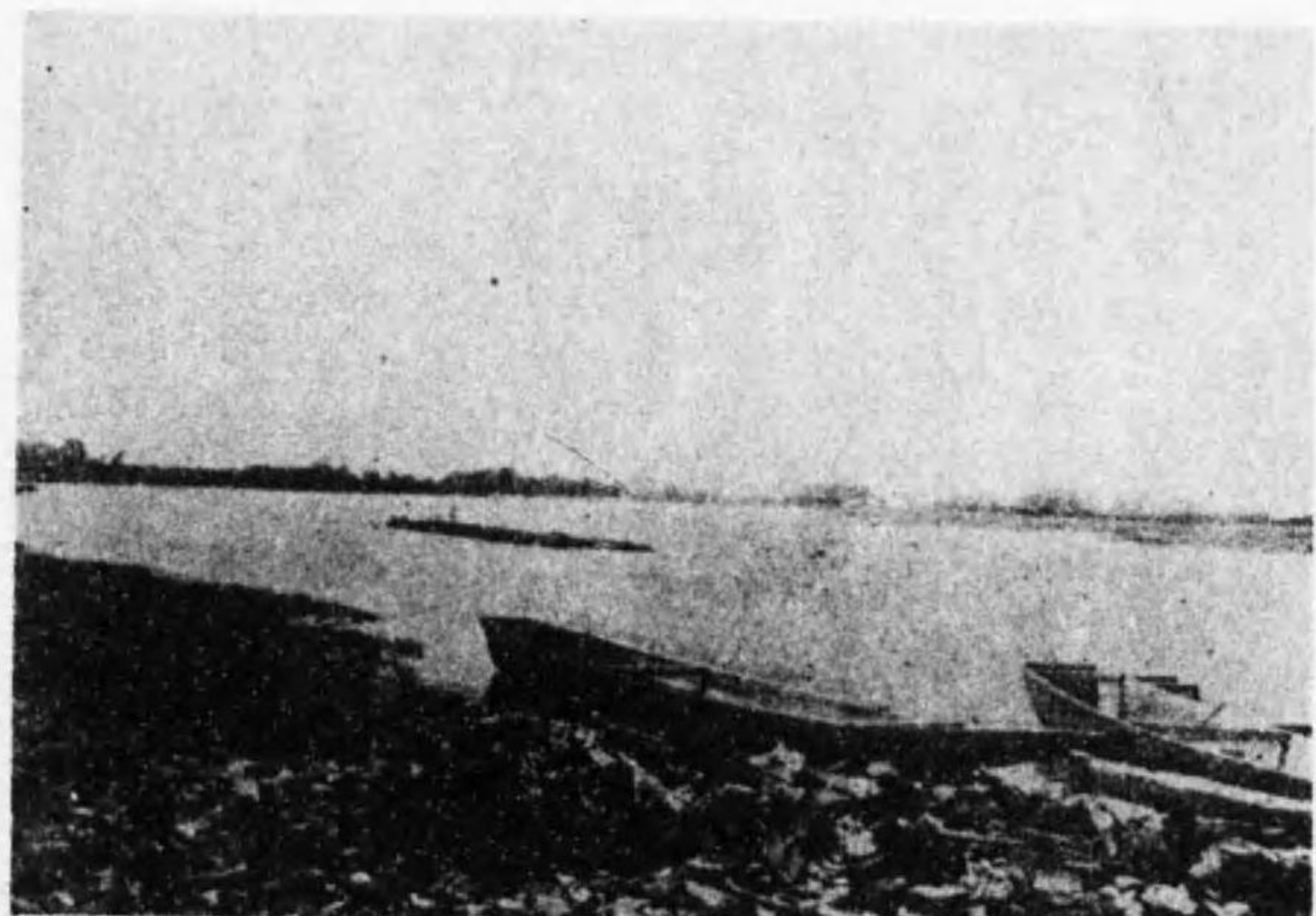
斯かる所へ、越後、甲斐、信濃の諸源氏、亦、五千餘騎を率ゐて、馳せ來り、兵勢、益々振ふ、

小手指原

日、將さに哺なんとす、忽ち見る二千騎ばかりの人馬、塵を蹴立て、利根川の方より、馳せ來るを、

旗の渡

上野國新田郡尾島町大字武藏島より武藏國大里郡新會村大字高島に通ずる利根川の渡を旗の渡と云ふ新田義貞軍を渡せし故に此名あり。



『素破や、敵ぞ』

皆、弓矢を把つて起つ、既にして、人馬、見るゝ、近づき來る、口々に、

『それに在はし候は、新田小太郎殿にこそ候べけれ』

と呼はりゝ、進み來たるは、思ひも寄らぬ里見、鳥山、田中、大井田、羽川の

義貞兄弟、悦ぶこと、限りなし、

『これ偏に八幡大菩薩の御阿護なるぞ、今や、暫くも、遅々すべからず、イザヤ、進んで、鎌倉を衝かん』

と告げ、捷を生品の祠に祈ること、稍々久し。

九日の早天、軍を帥ゐて、武藏島村に抵り、旗の渡より、利根川の流を越えて、武州高島の里に渡る。

上野、下野、上總、常陸、武藏の兵、期せずして、來り集まるもの、二十萬七千餘騎。

紀五左衛門、亦、二百餘騎を率ゐ、足利治部大輔高氏の子千壽丸を具して、來り會す。

義貞、乃ち馬を進めて、南下し、十日の夕刻を以て、入間川に着す、茫々たる武藏野の荒原、見渡す限り、兵ならぬはなく、旗ならぬはなし。

小手指原

新田義貞捷戦の地

小手指原は武藏國入間郡小手指村、所澤町附近より、北

多摩郡府中町に亘る原野にして、鎌倉街道に當る。入間川は、入間郡に在りて、入間川の流に臨む、上州、信州より、北多摩郡府中町に通ずる鎌倉街道なり。久米川は、北多摩郡東村山村の大字なり。分倍河原は、府中町の附近多摩川沿岸の地を曰ふ、北越、奥羽、兩毛より、鎌倉に通ずる街道なり。堀兼は、入間郡に在り、入間川町の東南に位す。關戸河原は、南多摩郡多摩村大字關戸附近にして、多摩川の南岸に在り、鎌倉に通ずる道筋にして、本、關所を設く。

新田小太郎義貞、既に義兵を擧ぐ。

警報頻々、鎌倉に達す、北條相模入道高時、敢て驚かず、五月九日、將士を集めて、

『多寡の知れたる烏合の衆ぞ、何程の事かあるべき、疾くく、馬蹄に懸けて、蹴散らし候へ』と命じ、軍を二手に分つて、進み討たしむ。

翌十日、金澤武藏守貞將は、五萬餘騎を率ゐて、下道より、下河邊に向ひ、櫻田治部大輔貞國は、長崎二郎高重、長崎

小手指原

武藏國入間郡小手指村大字北野に小手指明神の祠あり此附近二里ばかり野を小手指原と云ふ新田義貞の櫻田貞國を撃破せし處。



十一日辰の刻、貞國の軍、小手指原に達す、遙に前方を見

孫四郎左衛門、加藤二郎左衛門入道と與に、六萬餘騎を將ゐて、上道より、入間川に馳せ向ふ。鎌倉勢、夙に武を以て、天下に鳴る、皆、勇氣凜然として發す。

新光寺

武藏國入間郡所澤町大字新井一番地野老山新光寺は新田義貞の戦勝を祈れるところ其常用せる鞍轡等を納む。天保八年五月十三日出火の爲焼失す。



麾を執つて、揮ふこと、二たび、三たび。

れば、源氏の兵、雲霞の如く、劍戟、日に閃き、旌旗、天に連なる、貞國、見て、色、俄に沮む。義貞、敵の止まるを見て、蹶然として、奮ひ起つ、『さらば、此方より、押し寄せよ』

全軍、忽ち入間川の流を渡りて、潮の如くに、小手指原に押し寄す、

鎧稻荷

武藏國入間郡吾妻村大字久米鳩ノ峰八幡宮境内に新田義貞の鎧稻荷及び兜掛松あり義貞の久米川進軍の途中通過せし處。

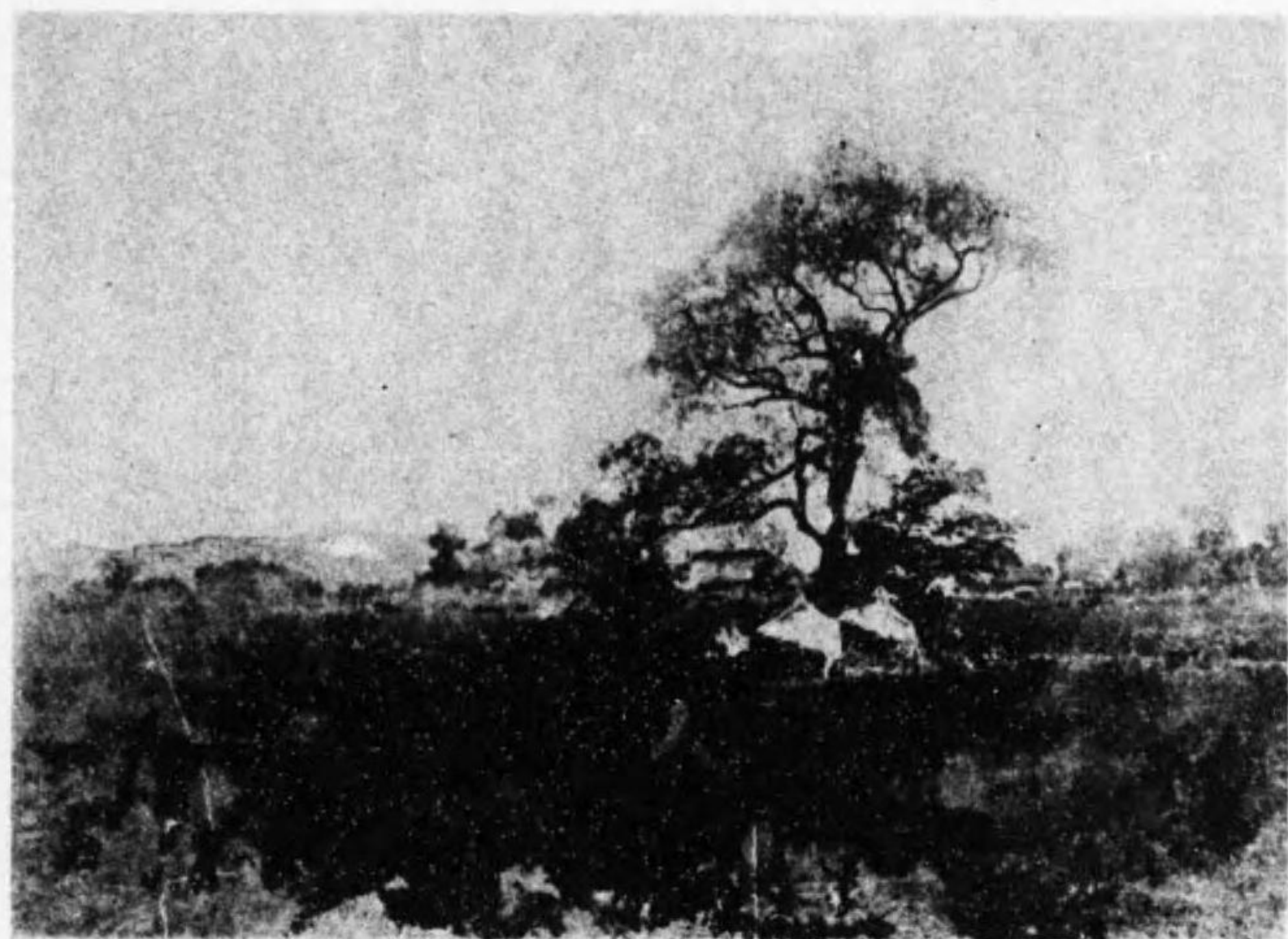


ドツと揚ぐる鯨波の聲は、端より、端に傳はりて、宛がら、怒濤の響くに似たり。矢戦、既に始まりぬ。義貞、馬を新光寺の前に立て、捷を祈り、頓て、『懸かれや、懸か

發つ。

矢の飛ぶこと、蝗の如し、源軍の先鋒、忽ち算を亂して倒

分陪河原
分陪河原は武藏國北多摩郡多摩村大字是政府附近に於ける多摩川の
河原を云ふなり新田義貞の北條泰と激戦せる處。



る、
「扱は、
敵には
新手の
加はり
しぞ」
皆、躊躇
して、敢
て進まず、
泰家、機
を見て、
突進す、
勢、疾風
の野を捲
くが如し、
義貞、退

兵を提さけて、此れに當る、兩々、相撃ち、相戦ひ、虎嘯
き、龍躍る。

兩軍、或は進み、或は退き、銳を鼓し、勇を勵まし、酣戦
數刻、呼聲、天地に震ふ、泰家、一舉、會稽の耻を雪がんと欲す、

「進んで、死せよ、退いて、生くべからず、鎌倉武士の
耻を雪ぐは、今日ぞ」

馬を縦横に驅つて、士卒を振り勵ます、士氣、振ふこと百
倍、槍を振り、刀を把つて、奮然、敵中に突進し、前後左
右に、切り靡け、打ち拂ふ。

新來の銳氣、當るべからず、義貞、終に大に敗れて、堀兼
に退く、泰家、戰捷ちて、心、忽ち驕る、

「鼠輩、何をか爲し得べき」
復た敢て追はず。

四

義貞、兵敗れて、意氣、頗ぶる沮む。

「進んで、戦はんか、退いて、守らんか」

左思右考、心、未だ決せず、會、三浦平六左衛門義勝、六

千餘騎を率ゐて、相模より、馳せ來る。

義貞、大に喜び、席を拂うて、延見し、

「我れ、今日、戦敗れて、士卒、皆、疲れ候ひぬ、今、
御邊の合力を得ること、百萬の援兵を得るに優り候ぞや
抑々今後の軍略如何、包まず、語り候へかし」
禮を厚うして、意見を問へば、義勝、膝を進めて、

「天下分目の合戦に候、雌雄を決せんこと、十度も、二
十度も候べし、されども、天命の歸する所、最後の勝を
得給はんこと、何の疑ひか候はん、今や、敵は、戰捷ち
て、心驕り候べし、此勢ひに乗じて、撃ち給はゞ、御勝
利、疑ひあるべからず、義勝は、新手に候、先陣を承は
り候べし」

と答ふ、義貞、大に喜びて、

「さらば、明日未明を以て、敵陣に押し寄せ候はん」
と告げ、義勝を以て、先鋒とし、戦備を整へて、天の明く
るを待つ。

烟月、影淡く、腥氣、原草を罩めて、物凄し。

五

明け易き夏の天は、何時しか、明けて、早、十六日の寅の
刻に近し。

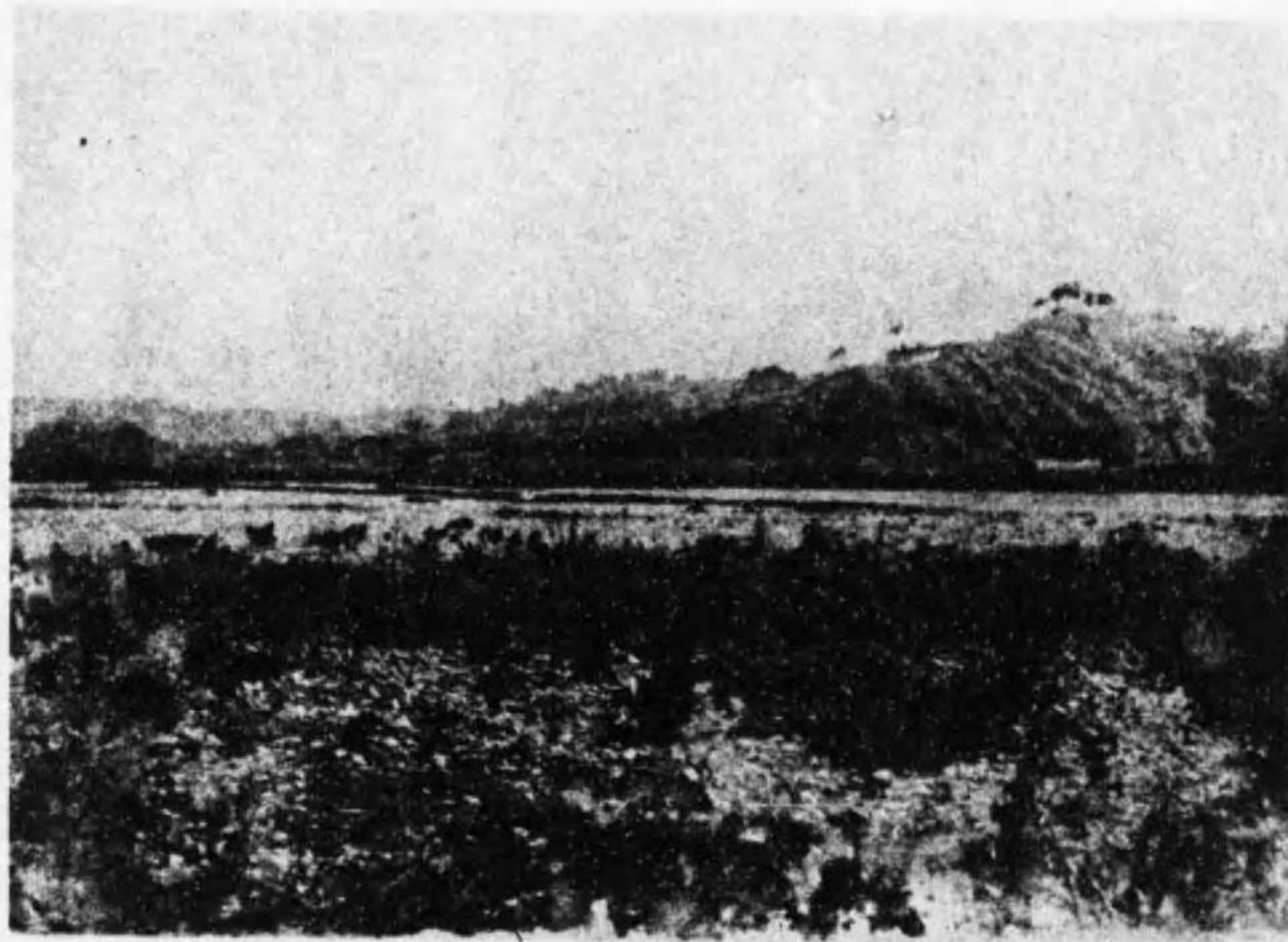
多摩川
此れは武藏國北多摩郡多摩村に於ける多摩川にして手前
は分陪河原前面に見ゆるは關戸河原なり。



義勝、精兵
四萬餘騎を
率ゐ、進ん
で、分陪河
原に迫る、
旗をも揚げ
ず、関をも
發せず、人
馬、皆、肅
々として進
む。
泰家、戰捷
ちて、敵を
悔り、復た
敢て備を設
けず、將士、

關戸河原

武藏國南多摩郡多摩村大字關戸は多摩川の南岸に在り府中より鎌倉に通ずる要路に當る。



旗を巻きて、來り候ひぬ、敵にてや候はん、疾く、御用意あらせ給ふべし』

皆、甲を脱し、鎧を釋きて、雜然

として臥す。

既にして、

義勝の軍、

漸やく、進

み近づく、

河原に陣せ

るもの、見

て驚き、急

ぎ泰家の本

營に、馳せ

往きて、

『夥多し

き人馬、

と報ず、泰家、酔うて、妓を擁して、臥す、

『其は、三浦勢の、味方に馳せ參するにてぞあらん、何とて、敵の寄せ來るべき氣勢あらん』

と告げ、復た敢て意となさず。

義勝、思ふさまに、敵に近づく、

『敵は、油斷せるぞ、素破や、懸かれく』

と呼はりつ、サツと、旗を翻へして、ドツと、鯨波を作り、意氣猛然として、敵陣を衝く。

鎌倉勢、不意を撃たれて、皆、愕然として、驚き起つ、

『扱は、敵の不意打ちぞ、太刀やある、馬は何處ぞ』

何れも、慌て惑ひて、唯、うろくくと、うろづく。

胃を被て、鎧を着ざるもの、弓を把りて、矢を佩かざるもの、素手のもの、素跣のもの、飛び出で、走り出で、敵を防ぐ。

義勝、此體を見て、益々勇み、

『敵は、備へなきぞ、討ち取りて、功名せよや』

と呼はり、士卒を勵まし、奮ひ戦ふ。

義貞、義助、亦、進み來り、兵を三手に分ちて、三方より

包み撃ち、當るに任せて、敵を屠る、死屍、累々として、算なし。

泰家、士卒を叱咤して、防ぎ戦はんとす、士卒、先を争うて潰へ、全軍、忽ち土崩して、今は奈何ともすべからず、

泰家、乃ち馬を驅つて遁る。

義貞の兵、捷に乗じて、追ひ撃つこと、甚だ急なり。

泰家、馳せて、關戸に到りし頃、敵兵、早、近く追ひ迫る。

其勢、今や、危ふし。

泰家の家臣横溝八郎、斯くと見て、忽ち取つて返し、

『疾く、落ちさせ給へ、某、防ぎ矢仕つり候べし』

と促がし、弓を把つて、敵を射仆すこと、二十三騎、敵兵、潮の如くに迫り來れば、八郎、從兵二人と與に、奮ひ闘う

て殪る。

泰家、又危ふし、安保左衛門入道、部下百餘人と與に、留

まり戦ひ、亦、亂刃の下に倒る。

義貞の兵、捷に乗じて、益々追ひ迫る、泰家の部下三百餘

人、引き返して、遮ぎり戦ふ、亦、皆、倒る。

泰家、間を得て、又馬を驅つて走る、長崎二郎高重、矢を

負ふこと、蝟の如し、亦、馬を飛ばして、走り退く。

義貞、逐うて、關戸河原に到る、伏屍、野に滿ち、途に載

つ。

十七日、旗を多摩川の水清き畔に立て、兵を集む、近郷

近國の兵、風を望んで、來り屬するもの、六十萬七千餘騎、

兵勢、大に振ふ、

『イデ、此勢に乗じて、鎌倉を攻め滅ぼさん』

北ぐるを追ひ、長驅して、藤澤に達す、宛から、無人

の郷を行くが如し。

鎌倉此處を距ること、僅かに一里餘、義貞、直に進んで、

敵の根據を突かんとす、人馬、湘南に充ち滿ちて、草木、

皆、靡く。

葛西ヶ谷

北條高時の館は、相模國鎌倉小町大路に在り、今、寶戒寺の在る所、即ち是れなり。

寶戒寺より、小町の通を、南に到ること、一町あまり、一條の小徑を、左折して、東に進めば、小流あり、之れを滑川となす、其橋を渡れば、屏風山あり、其窪地は即ち葛西ヶ谷にして、此地に、東勝寺と稱する一禪寺あり、北條の邸後より、橋を架して、來り得られたるものにして、高時終焉の地は、實に此寺なり、左方の岩窟を以て、高時の腹切矢食と稱するは、非なり。

巨福呂坂、化粧坂、極樂寺坂は、俱に、鎌倉の入口なり。

勝は、機に乗するに在り。

新田太郎義貞、新附の衆を提さけ、新捷の銳を鼓して、一擧、鎌倉を抜かんと欲し、軍を分ちて、三道より進む。

堀口三郎貞満、大讚岐守守之は、左軍を率ゐて、巨福呂坂に向ふ、其兵十餘萬騎。

大館次郎宗氏、江田三郎光義は、右軍を率ゐて、極樂寺切通に向ふ、亦、十餘萬騎。

義貞、弟義助と與に、親から中軍を率ゐて、化粧坂に向ふ、堀口四郎行義、桃井次郎尚義、岩松三郎經家、里見五郎義胤以下の一族、此れに屬す、其兵四十萬七千餘騎。

五月十八日卯の刻を以て發し、火を藤澤、村岡、片瀬、腰越、十間坂、其他五十餘ヶ所に縱つて、兵勢を助く。

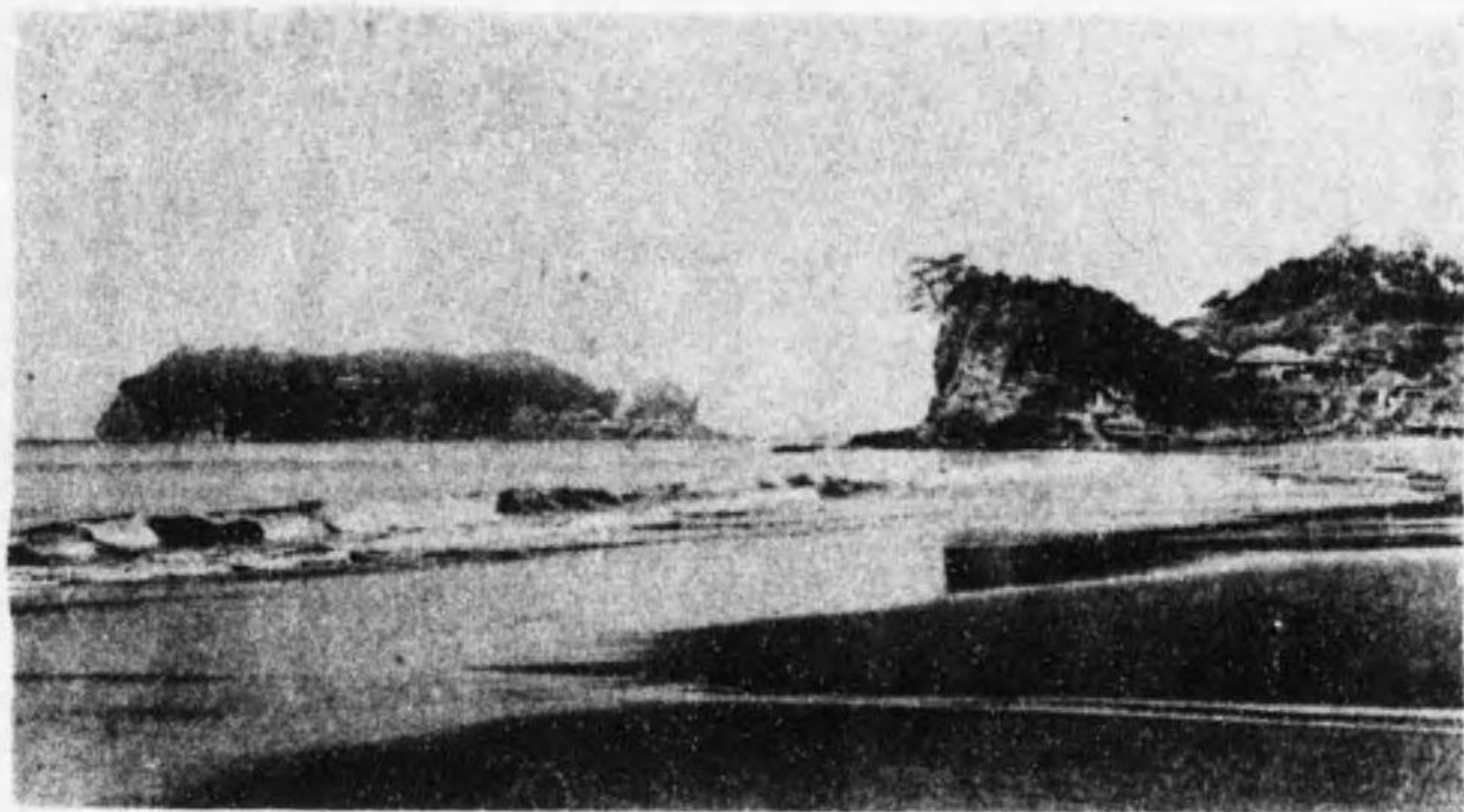
繰り出す大軍、續々として斷えず、天を掩ふの旗幟は、岫を出づるの雲の如く、野に滿つるの人馬は、堤を決するの水に似たり。

烽火、相連りて、警を鎌倉に報ずること、時々刻々より急なり。

昨日は、泰家、上道より、敗れ歸り、今日は、金澤武藏守貞將、下道より、敗れ還る、今や、義貞の大軍、亦、又來り迫る、北條相模入々高時、聞いて、始めて恐れ、

七里ヶ濱

此處は相模國鎌倉郡腰越津村の海岸七里ヶ濱にして新田義貞の深瀬村より稻村ヶ崎方面に突出したるは此あたり。



の道に備ふ。

葛西ヶ谷

『素破や、一大事ぞ、疾くく、防禦の手段を運らし候へ』

と令し、相模左馬助高成、城式部大輔景氏、丹波左近大夫將監時守を擇びて、大將とし、亦、兵を三手に分ちて防ぐ。赤橋相模前司盛時は、武、相、奥、羽の兵六萬餘騎を以て、下の道を防ぐ。大佛陸奥守貞直は、甲、信、豆、駿の兵五萬餘騎を以て、上

金澤武藏守貞將は、房、總の兵三萬餘騎を以て、中の道を守る。

外に、遊軍として、鎌倉に留まれる諸國の兵十萬餘騎。敵は、兵多しと雖も、我れは、地の利を占む、鎌倉勢、口の險隘を扼して、一步も、敵を入れじと、勇み立つ。

上の道は、極樂寺坂、中の道は、化粧坂、下の道は、巨福呂坂を曰ふ、當時、大佛坂は、尙、開かれさりしものと覺し。

源軍、早、迫り近づく。

巳の刻に至れば、三方の戦闘、一時に開く、射ち出し、投げ出す矢石は、雨の如く、蔽に似たり、曳々と唱へ、應々と答ふる鯨波は、天に震ひ、地を撼かす。

寄手は、野に充ち、畑に滿つ、一軍退けば、一軍代りて進み、一隊引けば、一隊代りて來る、撃てども、射れども、事ともせず。

義を泰山より重んじて、命を鴻毛より輕んじ、子、倒るれば、父、其屍を越えて進み、兄、討たるれば、弟、其骸を

跳りて馳す。

交戦五時、接戦六十度、息を繼ぐべき暇もなく、他を向くべき餘裕もあらず、身は、疲るれども、心神、益々勇み、腹は、空けども、意氣、益々振ふ。

義貞、命を三軍に下すこと益々急、一呼して、突入せんと欲す、されども、山重なり、谷廻り、途折れ、坂急にして、一步は一步より艱、將士、皆、喘ぎ々進む。

上の道に備ふる大佛貞直、驍勇にして、能く戦ひ、堅守して屈せず、中の道を守る金澤貞將、亦、能く拒ぐ、

『昨日の耻辱を雪ぐは、今日ぞ、退くものは、斬つて捨てよ』

と令し、士卒を叱り勵まして、コ、を先途と、防ぎ戦ふ。

下の道に向へる赤橋盛時、進んで、洲崎を守る、亦、

『若し此手を破られなば、何の顔ありて、入道殿に見ゆべきぞ、死すとも、後に、な引きそ』

と呼はり、懇ふものは、勵まし、退くものは、策うち、死を決して、防ぎ戦ふ、されども、寄手、勇猛にして、士卒、討たる、もの大半、士氣、頓に衰ふ。

既にして、日、將さに暮れなんとす、士卒、一人逃げ、二人落ちて、残り留まるもの、僅かに三百餘騎。

坂下を蹴下せば、寄手の大將堀口貞満、士卒を勵まし、蒼然たる暮色を破つて、攻め登る。

危機、既に、眼前に迫る、盛時、憤然、敵を見詰めて、切齒すること少時。

四

盛時は、足利活部大輔高氏の妻の兄なり、部下の將南條左衛門高直を召して、慨然として、

『我れ、足利殿の縁に繋がる爲め、相模入道殿を始めとして、一門の人々、皆、心を置き給ひぬ、我れ、若し、

此處を敗れて、退かんか、アレ見よ、相模守は、敵に内通して、態と引きしよと申されん、これ勇士の耻づる所ぞ、兎ても、角ても、此處に果つるの外あらじ』

と告げ、忽ち鎧を釋きて、投げ棄て、腹十文字に、掻つさばいて、打ち伏す、

『ア、憫はしき御最後かな』

高直、思はず、涙を垂れつ……

稻村ヶ崎 其一

之は相模國鎌倉町坂ノ下より海中に突出する岬角にして其沿岸は往時の京街道なり此れは七里ヶ濱の方面より望めるものにして新田義貞の太刀を投じたりと云ふは此あたり。



『大将、既に

果て給ふ、今

は、生命を存

ふべき要あら

ず、イデく、

御供致し候べ

し』

又腹を掻き切つ

て伏す、それと

見たる従士九十

餘人、

『今は、是ま

でぞ、疾く冥

土に追付き奉

つらん』

亦、ツブリく

と、刀を突き立

て、死す、鮮血、

流れて、川の如し、貞満、

『敵の勢は、怯みて見ゆるぞ、進めや進め』

猛然、士卒を鼓舞して、突貫し來り、洲崎を破りて、山の内に侵入り、白旗、忽ち鎌倉の北西に懸へる。

されども、鎌倉勢、尙、屈せず、巨福呂坂の隘を扼して防ぐ。

化粧坂、極樂寺切通の二口、亦、未だ破れず、各々鎬を削つて戦ふ。

五

攻戦、夜に入れども、勝敗、尙、決せず、相持して、天の明くるを待つ。

十九日の早旦、復た戦ふ、極樂寺切通の口、將に破れんとす、大佛貞直の家臣本間山城左衛門、勘氣を受けて、自邸に在り、斯く聞いて、憤然として起ち、

『我れ、御不興を蒙むると雖も、争かて、君の御大事を、餘所に見過し得べき、罪を重ぬれば、重ねん、イデく、

君の御難儀を救ひ参らすべし』

仲間、若黨百餘人を隨へて、極樂寺口に馳せ向ふ。

寄手の大将大館次郎宗氏、切所々の敵を、逐ひ詰めく
て、突進し來り、將に坂上に攻め登らんとす。
味方の形勢、頗る危ふし、折柄、山城左衛門、部下を率
て來り、驀地に進んで、敵に當り、

『死すべき時は今ぞ、進めや者共』

自ら眞先に立ちて、敵の軍中に突入し、縦横自在に、奮
戦ふ、一方は山、一方は谷、寄手、多しと雖も、並び進む
こと能はず、重なり合うて、進み來る。

山城左衛門、益々奮進し、一揮、二敵を屠り、再揮、四敵
を斃す、三揮、四揮、五揮、敵を斫ること、大根の如し。

宗氏の軍、逡巡して、進まず、終に、先きを争うて、卻
走れば、山城左衛門、高所より、嵩に懸つて、追ひ迫る。

宗氏の兵、頰れを打つて、腰越の方に退く、宗氏見て憤然
たり、

『這は、言ひ甲斐なき者共かな、敵は小勢ぞ、ソレ追ひ
散らせよ』

と疾呼しつゝ、馬首を廻して、返り戦ふ、山城左衛門、部
下の一士、突と、進んで、引つ組み、忽ちドウと、馬より

落ち、上になり、下になり、揉み合ひ、捻ぢ合ふこと數刻、
終に刺し違へて死す。

山城左衛門、見て喜び、ヒラリと、馬より飛び下り、宗氏
の頭を斫つて、鋒に差し貫ぬき、馳せ還りて、貞直の陣に
到り、

『多年の御恩、今日ぞ報ひ奉つる、御不興を蒙り候某、

これにて、御免蒙り候べし』

と述べつゝ、忽ち腹を切つて死す、貞直、見て憮然たり、
一軍、皆、涙を垂る。

六

大館次郎宗氏、陣歿の報、中軍に達す、義貞、聞いて、大
に驚き、弟義助に向ひて、

『此手は、次郎攻め候へ、我れは、上の道へ向ひ候はん』
と告げ、精兵二萬餘騎を提さけて、馳せて、極樂寺切通に
向ふ、深澤を経て、進んで、腰越津に抵れば、鎌倉勢、復
た道を塞ぐ。

義貞銳を鼓して遮ぎる敵を撃破し、北ぐるを逐ひ撃ちく、
坂路を登りくくつて、極樂寺近く進む。

稻村ヶ崎 其二
此れは稻村ヶ崎より江の島を望めるものにして新田
義貞の渡渉したるは此あたりの海上なり。



ぞ、次郎の敗れしこそ、道理なれ』

北の方を、見上
ぐれば、山、嶮
はしく、谷、深
き所、柵を結び、
木戸を設けて、
堅く守る、顧み
て、南の方を見
渡せば、山に傍
ひ、崖に沿うて、
稻村ヶ崎の波打
つ岸まで、逆茂
木を樹つること
數重、鳥ならで
は、越ゆべきや
うもあらず、
『扱てく、
天險無比の地

義貞、敢て前まず、只、矢を放ちて、敵の陣を射る、敵も、
亦、敢て出で戦はず。

此日、中の道、下の道、亦、皆、敗れず、對戦、日を終ふ。

七

三方の源軍、二十日も攻め、二十一日も、亦、戦ふ、戦局、
依然として、進まず、義貞、

『若し、攻戦數日に亘らば、兵は捲み、勢は阻まん、今
日は、是非とも、鎌倉に突き入るべし』

と決意し、兵を極樂寺口に留むること若干、自ら一萬餘騎
を率ゐて退き、海岸より、迂回して、鎌倉に向ふ。

一方は、小高き丘、一方は海、砂、白くして、水、青し、
義貞、海風に、馬の鬣を煽られく、士卒に先き立つて進
む。

稻村ヶ崎に抵れば、海水、斷崖を拍つて、碎けて、雪の如
し、船なくては、進むべからず、海上には、敵の兵船數百、
數丁の間に、充ち渡る。

義貞、馬を岸頭に立て、敵を見詰むること、稍々久し、
頓て、馬を下りて、徐々と、波打つ際に進み、

『龍神、靈あらば、聴き給へ、義貞、膺懲ようちやうの師を作し候もの、只、義に仗つて、元兇を誅し、忠を勵んで、逆賊を滅ぼし、上は、先朝の宸襟を安んじ奉つり、下は、蒼生の塗炭を救はんと欲するに外ならず、敢て一身の功名を貪り、子孫の後榮を願ふの心には候はず、願はくは、我が一心の赤誠を察して、萬頃の波濤を退け給へ』
誠心を籠めて、黙禱すること少時、其佩ける黄金作の太刀を捧げて、ザンプと、海中に投ず。
須臾にして、海濤、退くこと二十餘丁、敵の兵船、遠く海上に漂ひ去る、義貞、見て喜び勇み、麾を揮りつゝ、

『辱けなや、龍神、我が願ひを納受まませしぞ、我軍の勝利、疑ひなし、進めや者ども』
と呼はる、士氣、忽ち振ふこと百倍。
義貞、先頭に立ちて、進めば、全軍、轟然、砂を蹴立て、鎌倉に突入す、怒濤、遠く去るところ、人馬、怒濤の如し。一直線に、疾驅して、由比ヶ濱を過ぎ、稻瀬川に到りて、火を兩岸の民舎に縦つ、炎焰、天を焦かして、爆聲、山岳に震ふ、

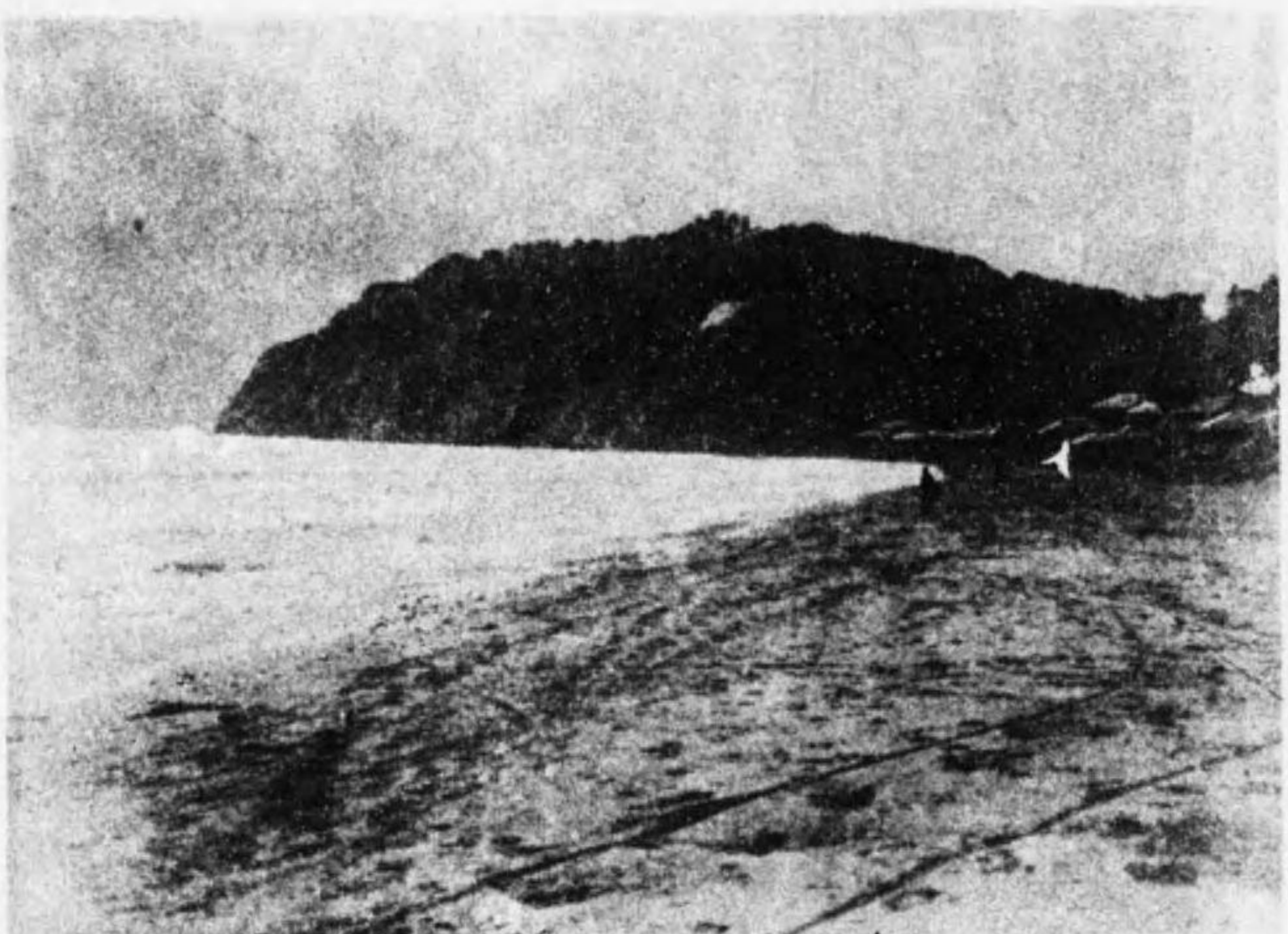
『素破や、敵兵、攻め入りしぞ、防げや防げ』
鎌倉勢、驚き慌て、防ぎ戦はんとす、義貞の兵、長蛇の勢を以て、奮進し、前軍、後軍、首尾相呼應して、敵を討つ。
敵兵、度を失して、右往左往に、逃げ迷ふ。
海岸の備、既に破る、源軍數萬、續いて、突進し來り、白旗、忽ち海邊に滿つ。
市民、負擔して、奔り竄る、市内の騒動、鼎の沸くに異ならず。

八

高時、館中に在り、一族、門葉、來り守る者、三百餘人。
三道の防禦、五日に亘れども、敵、未だ退かず、兩軍の喊聲、山に響き、谷に應へて、凄まじとも、凄まじ。
高時、大杯を把つて、酒を被むる、時々刻々、諸方より、報じ來れる戦況を聞きて、或は喜び、或は憂ふ、折柄、一人、馳せ來りて、
『一大事に候、敵兵、海岸より、市内に攻め入りて候なり、疾く、防戦の御用意あらせ給ふべし』

と報ず、高時、聞いて、色を變じ、

靈仙ヶ崎
此れは鎌倉由比ヶ濱にして右手に聳ゆるは靈仙ヶ崎なり新田義貞は稻村ヶ崎より此鼻を越えて由比ヶ濱に達せしなり。



『扱てこそ、大事とはなりつれ、入道、入道、疾く防戦の用意せよや』
と告げ、
執事長崎入道圓喜に命じて、敵兵を防がんとす、

敵は、火を各所に縦ち、鯨波を作つて、迫り來る。

海風、火勢を煽りて、炎焰、高く天を衝き、火の子、雨の如くに飛んで、高時の館上に、降り濺ぐ、婦人小兒、アレよくと、泣き叫びて、上を下へと、騒ぎ惑ふ。
高時、勇士島津四郎を招きて、

『汝ならでは、防がんものなし、疾く往きて、敵を逐ひ散らせよ、イザ、杯を取らせん』
と言ひつゝ、大杯を、四郎に屬して、自ら酌を取る。

四郎、押し戴きて、續けさまに、傾むくこと三度、意氣、益々昂がる、高時、左右を顧みて、

『白浪を牽け、鞍置けよ』
と命ずれば、左右、唯と答へて起ち、駿馬白浪を、厩より曳き出して、白の鞍を置く、高時、

『四郎、汝に取らするぞ、蹄に掛けて、敵を蹴散らせよ』
と告げて、愛馬白浪を賜へば、四郎、小躍りしつゝ、起ち上がり、

『さらば、敵を逐ひ散らし候はん』
門前より、ヒラリと、馬に跨がり、一隊の兵を率ゐて、奮

地に、馳せ出づ、人は、關東無双の勇士、馬は、關東無双の駿足、威風堂々、四邊を拂ふ。

四郎、馬を進めて、敵陣近く、乗り付ければ、義貞の兵、望み見て、

『天晴れなる武者振りかな』

と驚き、皆、逡巡して、敢て進まず、義貞、亦、見て感歎し、左右を顧みて、

『實にく、無双の勇士と覺ゆるぞ、誰かある、アレ討ち取り候へ』

と命ずれば、麾下の勇士粟生左衛門顯友、篠塚伊賀、畑六郎左衛門時能、由良新左衛門具滋、亘理新左衛門忠景等、我れもくと躍り出で、

『イデく、手取りに致し候はん』

と言ひつゝ、皆、奮然として、馳せ出づ、戦闘、今や、始まらんとす、

『勝負や如何に』

敵も、味方も、皆、片唾を吞む。

トット、馳せ來れる四郎、忽ちキツと馬を駐むれば顯友等、

『素破や懸かれ』

と呼はりく、猛然として、馳せ進む、相距ること十數歩、四郎、突と、馬より飛び降りさま、甲を脱すれば義貞の兵、

『扱ても、變れる戦の作法かな』

と思ひつゝ、皆、怪しみて、目を注ぐ、四郎忽ち大音聲に、

『某こそは、北條殿の御内島津四郎と申すものに候なれ』

と呼ばれば、義貞の兵、

『扱ては、吾に聞ゆる勇士ぞ』

と驚き、尙も、鳴りを静めて跡の言葉を聞く、四郎、又

『新田殿に、一矢參らせんとて、罷向ひて候』

と呼ばれば、義貞の兵、扱てこそと、皆、身構ふ、四郎、續いて、

『去りながら、武士には、義兵に向くべき弓の候はず、尋常に降參仕つり候なり』

と言ひつゝ、刀を脱して、降を乞へば、義貞の兵、皆、呆れて、言葉なし。

斯くと見たる鎌倉勢、皆、我れもくと、出でて降る。

源軍の勢、益々振ふ、乃ち進んで、高時の館に迫る。

九

敵兵、益々迫り、火勢、亦、益々迫る、高時、

『今は、此處に居るべくもあらず』

妻子、一族を率ゐ、避けて、葛西ヶ谷の菩提所東勝寺に入る。

須臾にして、火氣、高時の館に、燃え移る、炎烟、高く天を衝きて、八方に開く、鎌倉の全市、哀れ、焦土と化し去らんとす。

十

名に負ふ鎌倉、土地は險要、武士は勇猛、俱に天下に、其比を見ず、

『何條、此手を破らるべきや』

三道の將士、刀折れ、矢盡くるも、コ、一步も引かじと、拒ぎ守る、計らざりき、炎焰、忽ち高く背後の天を烘ふらんとは、

『扱ては、敵は、早、市内に攻め入りしぞ』

皆、惘然として、呆れ惑ふ、長崎左衛門入道思元、其子勘解由左衛門爲基と與に、極樂寺口を守る、斯くと見るより、

打ち驚き、

『下の道や破れし、中の道や負けぬる、イデく、馳せ還りて、君の御先途を、見届け參らせん』

手兵六百餘騎を率ゐて、急ぎ馳せ還る、長谷を過ぎて、小町口に抵れば、源軍、既に充滿す、長崎父子を見るより、

『あれ討ち取れよ、餘すな』

と呼はりつゝ、四方より、押つ取り囲みて、斫つて懸かる、長崎父子、事ともせず、

『ソレ蹴散らして通れ』

蹄を揃へて、サツと突進し、當るに任せて、斬り立て、薙ぎ立て、見るく、敵を倒すこと數百人、

『疾く一方を切り開けよ』

益々勇を奮うて闘ふ、されども、敵の大軍、雲霞の如し、行けどもく、更に、圍みを出でず。

前方を見渡せば、漠々たる砂烟、天狗堂の方にも起り、扇ヶ谷の方にも起る、

『扱ては、敵は、早、市内に充つると覺ゆるぞ、汝は、彼方より進めよ、我れは、此方より向はん』

稻瀬川

稻瀬川は鎌倉長谷大佛附近の丘陵より源を發し由比ヶ濱に到りて海に注ぐ新田義貞の火を民家に放ちし處。



父子、左
右に分か
れて、北
條の館の
方に、向
はんとす、
付き隨ふ
もの、多
く討たれ
て、残る
もの、百
騎にも足
らず、爲
基、
『これ
ぞ今生
の御別
れにこ

そ候へ』
と言ひつゝ、泣然として、涙を垂るれば、思元、忽ち聲を勵ましつゝ、

『一人死して、一人残ればこそ、名残も惜まるれ、我れも、汝も、今日の中には、皆、果つべき命ぞ、明日は、冥土に於て、逢はれんものを、何とて、女々しう、泣くことやある、疾く往き候へ、さらばぞ』

と叱し、一鞭、緊しく加ふれば、駿馬、高く躍りて、敵中に入る、爲基、

『實にさこそ候なれ、さらば、死途の山路に、待ち參らせん』

と言ひも給はず、亦、從兵二十餘騎と與に、猛然、敵の大軍中に突入し、

『我れこそは、長崎勘解由左衛門爲基なれ、討ち取つて、功名せよや』

と呼はり、面影と名づくる三尺三寸の太刀を、打ち揮り打ち揮り、四角八面に、斫り捲くる、

猛虎、高く吼つて、群獸、皆、慄れ伏す、源軍、忽ちバツ

と四方に披けば、爲基、一聲、

『ソレ往け』

と合して、疾驅、馳せ去らんとす、源軍、遠く圍んで、亂射すれば、從兵、皆、殪れ、爲基の乘馬、亦、七矢を負ひ、馳せて、由比ヶ濱の大鳥居前に到つて、忽ち立ちすくむ。

爲基、ヒラリと、馬より飛び降り、太刀を杖つきて、ホツと、息を吐く、源軍、進み近づかず、尙も、矢を射ること、甚だ急なり。

爲基、突と、小膝を折りて、カツバと、佯はり伏す、遙かに此體を見たる敵の一士、

『好き首ぞ、アレ取れ』

と言ひつゝ、從兵五十餘騎と與に、馳せ近づき、爲基、忽ちガバと、刎ね起き、

『何奴なれば、我が晝寢の夢を、驚かすぞ』

と言ひさま、サツと、血刀を拂へば、敵騎、膽を潰して、駭き走る、爲基、大喝一聲、

『汚なし、還へせ』

と叱して、起つて、追はんとすれば、皆、首をすくめて、

遠く遁がる、爲基、

『父の生死、君の存亡、未だ知るべからず、何條、空しく、命を棄つべきや』

單身孤劍、勇を鼓して、奮闘すること數刻、忽ち去つて、之く所を知らず。

十一

大佛陸奥守貞直、極樂寺切通を守る、敵將大館次郎宗氏を斫つてより、兵勢、大に振ふ、既にして、敵兵、市内に込み入りしと聞き、

『前後に、敵を受けては、叶ふまじ、前なる敵をや衝かん、後の敵をや攘はん、如何にせばや』

と思ひ惑ひて、思案、未だ決せず、忽ちにして、

『相模入道殿には、御館を開かれて候』

との注進あり、貞直、聞いて、

『扱ては、由々しき大事ぞ』

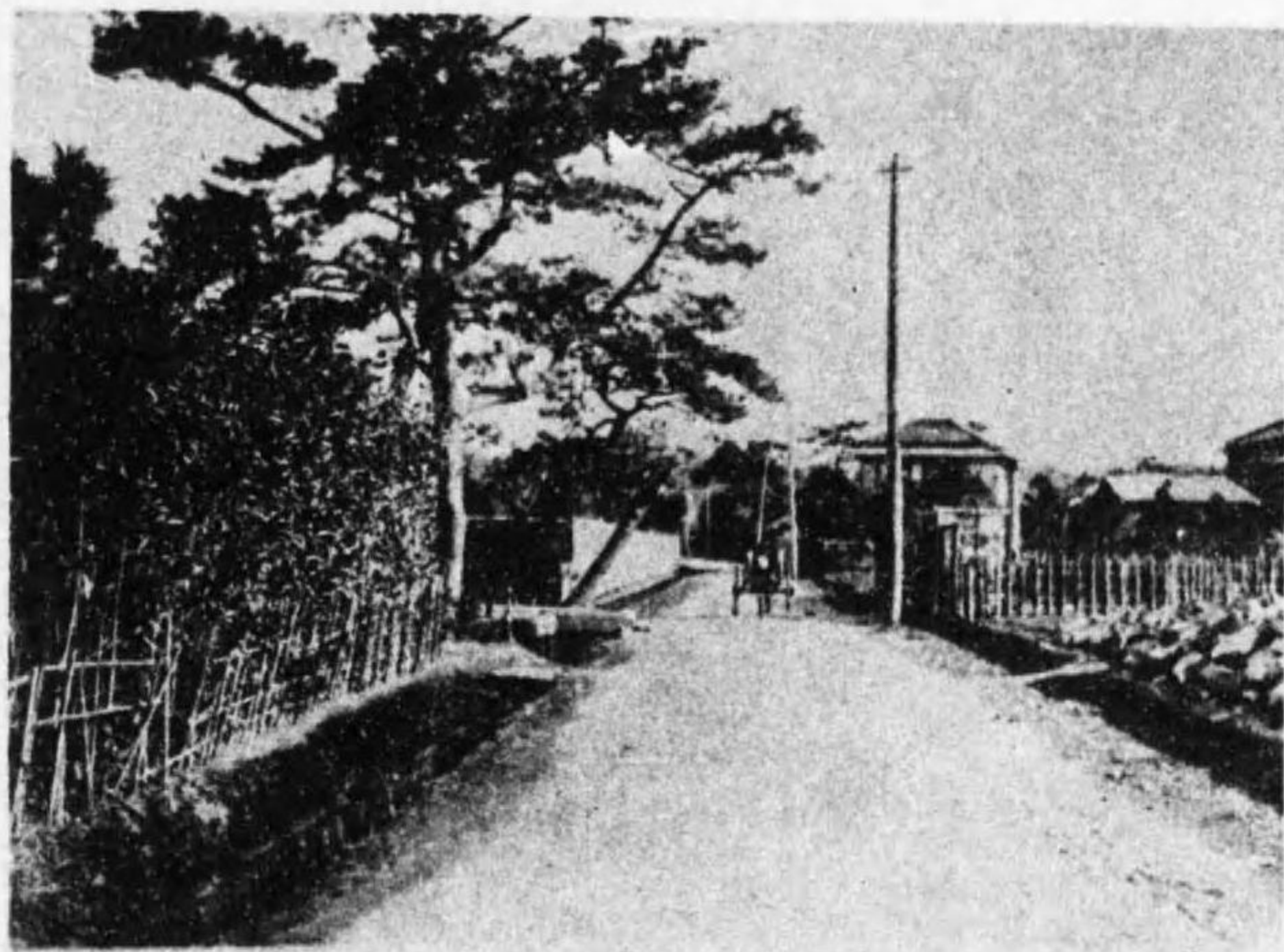
と驚く折柄、又々、

『御館に、火の掛かりて候、敵は、市内に充ち満ち候』との注進季、貞直、

一門の榮譽、此上やある、貞將、

『實に〜、一身一家の面目に候なり、これを土産に、冥

小町大路
此れは鎌倉の小町にして北の北方北條の邸址寶戒寺の方を望むもの。



途に赴き候べし』

と言ひつゝ、
教書を取つて、押し戴き、筆を把つて、其裏に棄我百年命報公一日恩と書し、鎧の引合せに入れつゝ、『さらばに候』と言ふより

早く、ヒラリと、馬に跨がりて、群がる敵軍の中に、躍り入り、勇戦奮闘、多くの敵を倒して、身も、亦、殲る。

十三

化粧坂に續いて、巨福呂坂も、亦、破る。

源軍、三道より、潮の如くに、亂れ入る、町々谷々、兵ならぬはなし。

高時、東勝寺に在り、今は、遁れ出づべきやうもなく、遁れ出づべき心もあらず、世に時めける北條氏滅亡の期、今や來る。

長崎次郎高重、分陪河原より、敗れ還りて以來、敵を擇ばず、場所を定めず、東奔西馳、日夜、防禦に、力を盡くす。敵と戦ふこと五日、鋒を接すること、八十餘回、刀折るれば、他の刀を取つて戦ひ、馬斃るれば、他の馬に乗つて闘ふ、自ら敵を斬つて落すこと、三十二人、敵の圍を突き破ること八回、還つて、東勝寺に抵り、中門の前に畏まりて、泣然として、涙を流しつゝ、

『我君、それに在はし候か、高重、數ヶ所の敵を撃ち破り、追ひ散らし候へども、諸方の口々、皆、攻め破られ

て、今は、敵兵、鎌倉に充滿致し候ひぬ、御運も、最早、

是までにて候、此上は、敵の手に懸らざるやう、思召し定めさせ給へ、但し、高重、今一度、敵の中に、駈け入り、快よく、最後の戦をなして、冥土の御供の語草に仕つり候はん、二たび立ち歸りて、勸め奉つるまでは、左右なく、御自害あらせ給ふべからず』

と述べ、又も馬に跨がり、殘卒百五十餘騎を提さけて、馳せ出づ、勇士の風采堂々、見るからに凜々し。

高時、其後姿を見送りつゝ、黯然として、涙を吞む、

『これぞ、今生の名残ならん』

と思へば、暫しば、目をも離さず。

時は、皐月の二十あまり二日、炎熱、焼くが如き日も、こばかりは、秋風、座に滿つる心地しぬ。

十四

安東左衛門入道聖秀は、新田義貞の妻の伯父なり、三千餘騎を以て、出で、稻瀬川に陣す。

義貞の、稻村ヶ崎より、侵入するに及び、由良新左衛門具滋等と戦うて、敗れ退く、士卒、生き残るもの、僅かに百

餘騎、身も、亦、薄手を負ふこと數ヶ所。

還りて、我が館に抵れば、早、焼け失せて、跡もあらず、妻子は、何處にや落ちけん、尋ね問ふべき人もあらず。

妻子は、兎まれ、角まれ、心元なきは、主君高時の先途、折柄、落ち後れし一卒の來るを見て、

『相模入道殿には、何處へ渡らせ給ふぞ』

と問へば、其者、跪いて、

『御館は、早、焼け失せて、葛西ヶ谷の東勝寺へ入らせ給ひぬ』

と答ふ、聖秀、聞いて、慨然たり、

『シテ〜、腹を切つて、失せたるもの、幾人ばかりぞ』

と問へば、又

『一人も候はず』

と答ふ、聖秀、覺えず、齒を切ひしはり、

『扱ても、口惜しきことかな、天下の執權北條殿の御館を、敵の蹄に懸けさせつゝ、一人も、討死せしものなし

とは、何事ぞ、後の世の人に笑はれなは、北條殿の耻辱、此上もなし、イデ〜、御館の跡にて、心徐かに、生害

し、入道殿の御内にも、此義士あることを示し候はん、
來れや者共』

と言ひつゝ、殘兵を引き連れて、馳せて、小町口に向ふ。
平時の如く、塔辻より、馬を下り、館の跡に、進み見れば、
巍々たる高樓傑閣、跡なく消えて、只烟のみ蒸す、

『盛なるものは衰へ、興るものは亡ぶ、實に世の有様こ
そ、呆敢なけれ』

聖秀、惘然として、イめる處へ、姪なる義貞の妻よりの使
者來り、

『世良田殿の北の方の御文にて候、イザ、受取らせ給へ』
と言ひつゝ、跪いて捧ぐ、聖秀、取つて披き見れば、

『如何にもして、此方へ御出で候へ、身に替へても、申
し宥め候はん』

と勸むるも、伯父を思ふ姪の心、聖秀、見るより、忽ち色
を變して、

『武士の妻ならば、武士の作法をも知るべきに、義に背
き、耻を忘れて、降人に出てよとは、何たる事ぞ、姪も
姪なれば、義貞も、義貞ぞ』

と怒り、文を以て、刀を握り、腹掻き切つて、カッパと、
使者の面前に俯伏す。

從兵、亦、皆、後れじと、自殺す、義士の下には、義人あ
り。

十五

君、辱かしめらるれば、臣、死す。

主家、今や、亡びんとす、臣として、誰かは、生くるの心
あらん、譜代恩顧の勇士、我れもくくと、最期を急ぐ。

鹽田民部大輔俊時、戦ひ敗れて、急ぎ我が館に馳せ還り、

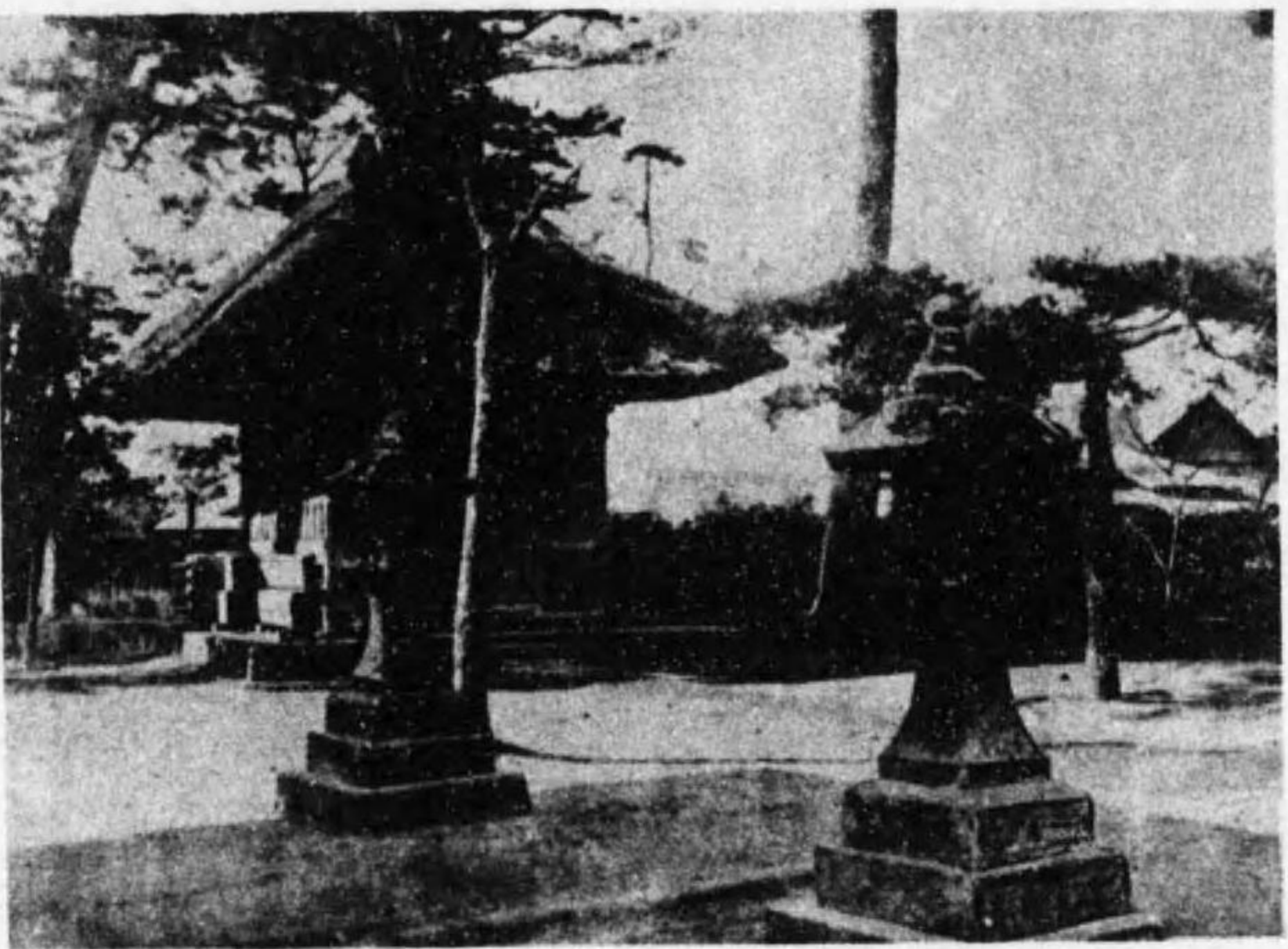
『無念に候父上、北條九代の御家も、今日ぞ亡び候はん、
イザ、御生害あらせ給へ、某、冥土の御案内仕つり候べ
し』

と言ひつゝ、肌押し脱ぎ、父、陸奥入道祐の面前に於て、
自殺す、最愛の一子を先き立て、誰か斷腸の想ひなから
ん、道祐、我が子の死骸を、ヂツと見遣りて、ホロリと、
涙を落し、

『ム、能くぞ死せる、我れも、跡より、逐ひ付くべき
ぞ、誰かある、五郎は、居らずや』

北條館址 其一

此れは北條館址たる鎌倉小町實戒寺の一部にして江馬邸
址なり山門を入りて右の方に在り。



分けして、暫しが程、防矢仕つれ、我れ死せば、館に火
を掛けよ、敵に首を、な渡せそ』

と呼ばれば、

家臣狩野五

郎重光、ハ

ツと答へて、

入り來る、

道祐、

『我れ、

民部太輔

|| 俊時 ||

の菩提を

弔ひ、我

が冥福を

も修して、

自害すべ

し、家來

共を、手

と告ぐ、重光は、宗徒の中の宗徒、

『さらば、御心徐かに、御生害あらせ給へ、某れ、跡よ
り、御供仕つり候べし』

と潔よく答へて、其場を立ち去り、生き残れる士卒二百餘
人を、三方に配りて、寄せ來る敵を拒がしめ、重光、只一
人、來つて、道祐の傍に待す。

道祐、我子の死骸に向つて、愁然として、法華經を打ち誦
ずること少時、頓て、五の卷の提婆品の、將さに終らんと
する時、重光、門外に馳せ出で、又忽ちに馳せ還り、

『防矢仕つり候ものは、早、皆、討たれて、敵、近く押
し寄せ候、疾く、御生害あらせ給へ』

と促せば、道祐、さらばと、經を左手に握り、刀を右手に
取つて、サツと、腹十文字に、掻き切り、我子の屍骸に、
重なり合うて倒れ伏す、重光、其息の絶ゆるを見澄まし、
四方を見廻はして、ニツと笑ふ、

『我れ、何條、命を棄つべきや』

父子の刀を取つて、手早く、我が腰に帶し、重代の家寶を、
掻き集めつゝ、

『來よ、疾く來よ』
と呼へば、小蔭に忍べる仲間、下部、バラ〜と、駈け來る、重光、

『ソレ、これ持て』
と告げ、家寶を負はせて、馳せて、圓覺寺に隠る。

愆に迷うて、恩を忘る、悪人、争かて、永く天爵を免かるべき、義貞の執事舟田入道義昌、聞いて、深く憎み、重光を捕へて、斬つて、其首を由比ヶ濱に梟く。

十六

鹽飽新左近入道聖遠、亦、自殺せんとし、其長子三郎左衛門忠頼を、膝近く召して、

『我れは、相模入道殿に、先き立ちて、忠義の心を、示し奉つらんと思ふなり、汝は、未だ御奉公をも仕つらざる身分、命を棄てざればとて、誰か、義を知らじと申すべき、身を存へて、我が後生を弔はんこそ、此上なき孝養なれ』

父子恩愛の切なる、涙と與に、説き示せば、義心鐵石の忠頼、イヤ〜と、首を掉り、

『我が一家、無事に命を繋ぎ候もの、孰れか、君の御恩に候はざらん、忠頼、苟くも、弓矢の家に生れながら、傾むく君の御運を、餘所に見て、一命を存へ候はんか、一身一家の耻辱、此上や候べき、イザ、御腹召され候へし、忠頼、冥土の御供致し候はん』

と答へ、袖の下より、刀を抜きて、窃かに、腹を掻き切り、ドツと、流る、鮮血と與に、前に倒る。

忠頼の弟四郎、亦、後れじと、腹を切らんとするを、聖遠、手を舉げて、暫しと押し止め、

『先づ我れの死するを待つて、自害せよ』

と告げ、徐かに、筆を執つて、辭世の頌を、書き認め、首を差し延べて、

『ソレ討て』

と下知すれば、四郎、ハツと答へて、起ち上り、丁とばかりに、父の首を打ち落す。

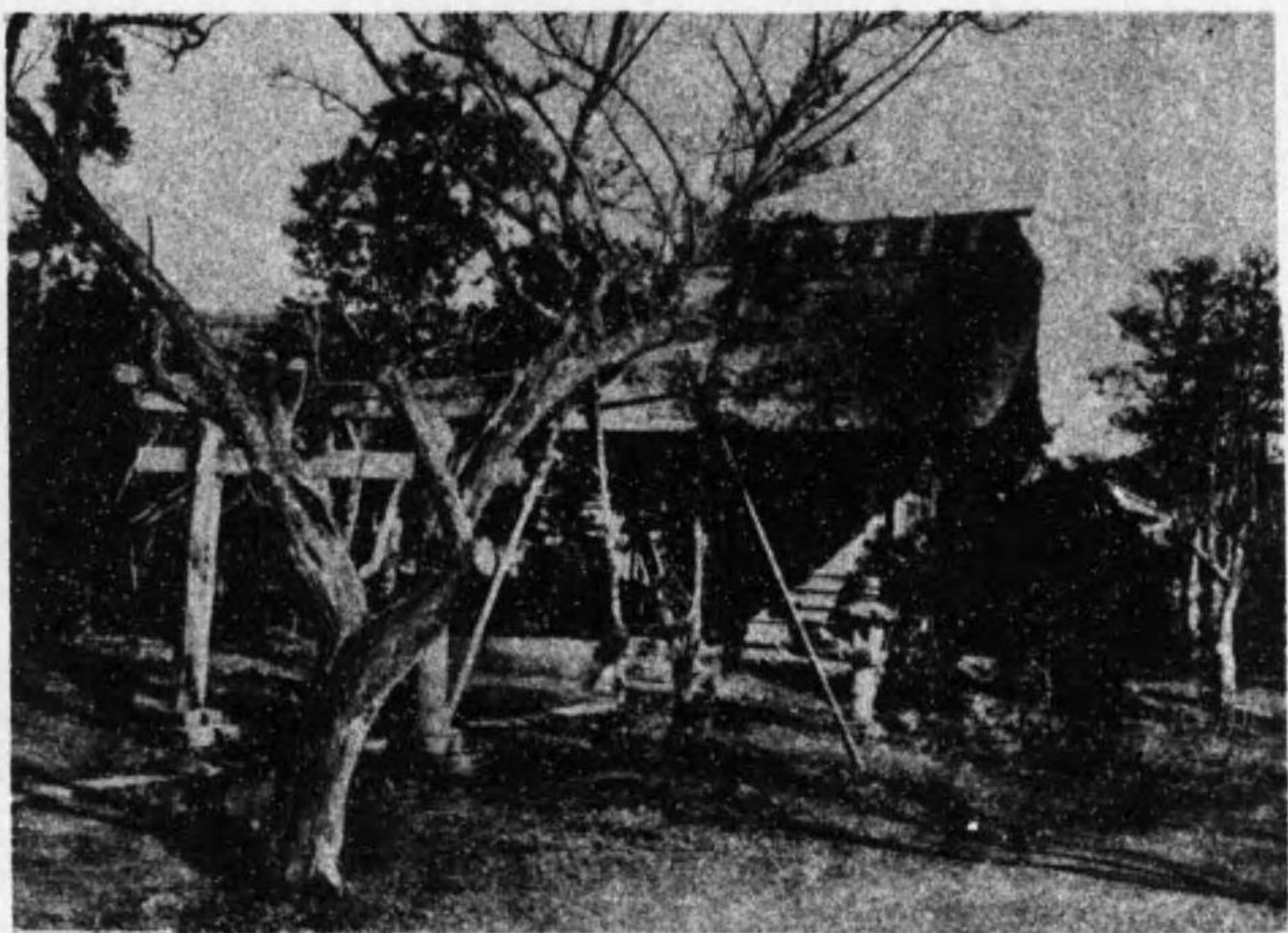
頓て、太刀を取り直して、ツブリと、腹に突き立つ、刀身、鑢元まで入つて、背中に突き貫くこと、二尺餘り。

郎等三人、斯くと見るより、突と、馳せ寄り、同じ太刀先

きに、貫かれて、死す。

壯烈、又壯烈、悽慘、又悽慘。

北條館址 其二
此れは北條館址たる寶戒寺の徳宗神社にして北條氏累代の靈を祀る。



十七
今は、回復の望みあらず。

高時、家臣五大院右衛門宗繁を召して、

『我れは、此に亡ぶるとも、力の及ばん限り、我家を存するこそ、祖先に對

する孝養の道なるべけれ、嫡子萬壽をば、汝に預け置くべし、如何なる方便をも運らして、隠し置き、時節を待つて、我家の再興を計り候へ、汝は、我れの股肱なり、萬壽の伯父なり、呉れ〜も、力を添へ候へ』
と囁す、宗繁は、龍姫二位局の兄なり、ハツと、手を突き

『若君は、主にて候、甥にも當らせ候、義に於いても、親に於ても、必ず、盛り立て、御家の再興を計り候はん、御心安く、思し召され候べし』
と答へ、萬壽を具して、立ち出で、

『今は、何處に遁れんとて、遁るべくもあらず、伴はりて、敵に降らんこそ、寧ろ安全の道なるべけれ』
と思ひ、萬壽を、我が子の如くに装うて、降人に出づ。

十八

諏訪三郎盛高は、高時の弟左近大夫泰家に仕ふ、諸方の戦に敗れて、盡く士卒を失ひ、主従唯二騎となりて、急ぎ還り來り、

『君、御運も、是れまでに候なり、盛時、最後の御供仕

つり候はん爲め、惜しからぬ命を存へて、立ち歸り候、疾く、御生害あらせ給ふべし』

と述べ、決心、色に形はる、泰家、手を舉げて、傍近く魔ねき、

『死は易く、生は難しとかや、汝は、易きを欲するか、我れは、難きを望むものぞ、我が兄相模入道殿、神慮に悖り、民心に背きて、今日の非運を招き給ひたりと雖も、積善の餘慶、尙、盡きずば、我が子孫の中、何どか、絶えたるを繼ぎ、廢れたるを興すものなからんや、甥なる萬壽は、既に五大院右衛門尉に預け給へり、汝は、如何にもして、其弟の龜壽を助け候へ、我も、左右なくは、自害致すまじ』

と告げ、窃かに、遁れ出で、再舉を計らんと欲す、盛高、聞きて、首を下げ、

『今までは、一圖に、自害仕つらんと存じて、斯くは、馳せ歸りて候、實にや、死は易く、生は難し、盛高、如何にもして、若君を匿まひ奉つり、必ず、御家の再興を計り候べし、君も、亦、呉れくも、輕々しく御生害あ

らせ給ふべからず、御縁、盡きずば、又重ねて、御目に懸かり候べし』

と答へつ、突と、起ち上り、馬を馳せて、扇ヶ谷なる二位局の許に到れば、局、轉ぶばかりに、走り出で、

『オ、三郎殿か、此世の中は、如何に成り行き候やらん、君には、御恙なう在はし候か、萬壽君は、兄なる右衛門尉、先きの程、何れへか、具足致し候ひぬ、龜壽君をば、如何に爲すべき、我等は、女なれば、身を遁がる、道もあらん、如何にもして、此和子を匿まひ給へかし』

と涙ながらに、掻き口説く、盛高、

『實は、其義に就て、馳せ參じ候なり』
と言はんと欲して、俄かに、口を噤む、
女の口のはしたなき、實を語れば、漏れもやせん、若かじ、隠さる、丈けは、隠し置かんには、盛高、早くも、心の中に思ひ定めて、何氣なく、

『御一門、大方は、失せさせ給へども、我君ばかりは、尙、葛西ヶ谷に在はしまし候、今一度、公達を御覽して、御腹召されんとの御詔に依り、盛高、斯くは、御迎ひに

參りて候なり』

と語れば、局、愁然として、

『萬壽君は、右衛門尉に預けつれば、心安し、此和子をも、能く、隠し給はれ、努め、敵の手に、な渡し給ひそ』

と告げ、チツと、龜壽の顔を、見遣りつ、ホロリと落す

北條館址 共三

此れは北條館址たる寶戒寺の大銀杏にして山門を入りて正面よりは稍々右手の方に在りしなり。



葛西ヶ谷

一滴の涙。

十九

親子恩愛の情、さこそと思へば、盛高、覺えず、涙さしぐむ、されども、一家浮沈の境、心弱くては、叶ふまじと、我れと、我が心を、鬼にして、誠しやかに、

『斯くなりては、所詮、御命を助け參らせんやうも候はず、まだ聞し召されずや候ひけん、五大院右衛門尉殿、萬壽君を具足して、參り候を、敵兵に圍まれて、遁れ去らんやうもなく、小町口の在家に、去り入りて、若君を刺し殺し奉つり、其身も、腹掻き切つて、相果て候ぞや、此和子とても、今を限りの御名残とこそ、思し諦め給ふべけれ』

と語る、千丈の堤も、蟻の一垤より、崩る、を見ては、生みの母なればとて、迂濶に、實を明かされず、二位局は、聞く事毎に、腸を斷たる、想、

『扱ては、若君にも失せ給ひ、我が兄にも、果て給ひけるか、斯くと知りなば、我が側をば、離し參らせざるものを、此上は、此和子とても、得こそ渡し候まじ、妾と、

生死を與にせんこそ、中々に、心安けれ』
と言ひつゝ、今は遣らじと、龜壽を背後うしろに困ふ、盛高、由なきことを、言ひ出でしと、心に悔やめど、今更、打ち消さんやうもあらず、

『さ思し給ふも、道理にこそ候へ、されども、此處に在はして、敵の手に落ち給はんか、御一門の恥辱、此上も候まじ、それよりは、大殿の御手に、懸かりて、冥途までも、御供あらせ給はんこそ、此上なき孝道に候へけれ、時刻移りては、叶ふまじ、疾くく、渡し給へかし』
と言葉徐かに、宥なだめすかせど、局、首を打ち掉りて、聞き入れん模様もなし、

『イヤく遣らじ、遣り候まじ、強いて、和子を連れ行かんとならば、先づ妾を殺し候へ、生きて、憂目を見んよりは、其方の手に懸からんこそ、中々に優しならめ』
と言ひつゝ、聲を限りに、嘆き悲しむ、盛高、此有様を見るより、目も眩れ、心も消えんばかり、

『寧そ、仔細を明かさばや』
と一たびは、心に思ひけれども、又

『イヤく、心弱くては、叶ふまじ』

と又思ひ直し、態と局の方を、キツと、打ち見遣り、
『武士の家に生れ給へる御身の、斯かることあるべしとは、豫てより、思ひ定めさせ給ふべきに、然りとは、御心弱きも、程にこそ候へ、大殿も、嗚なな待ち託たくび給ふらん、早、渡し給ふべし』

と言ひさま、突と、駈け寄りて、龜壽を抱き取り、

『さらば』

とばかり、門外に走り出づ、

『のう待ち給へ』

ワツと泣きつゝ、走り出づる局、忽ち石に躓つづきて、ガバと倒る、盛高、其隙に、ヒラリと、馬に跨がり、鎧よろいを煽りて、トットと、馳せ去る。

續いて、駈け出でし乳母、

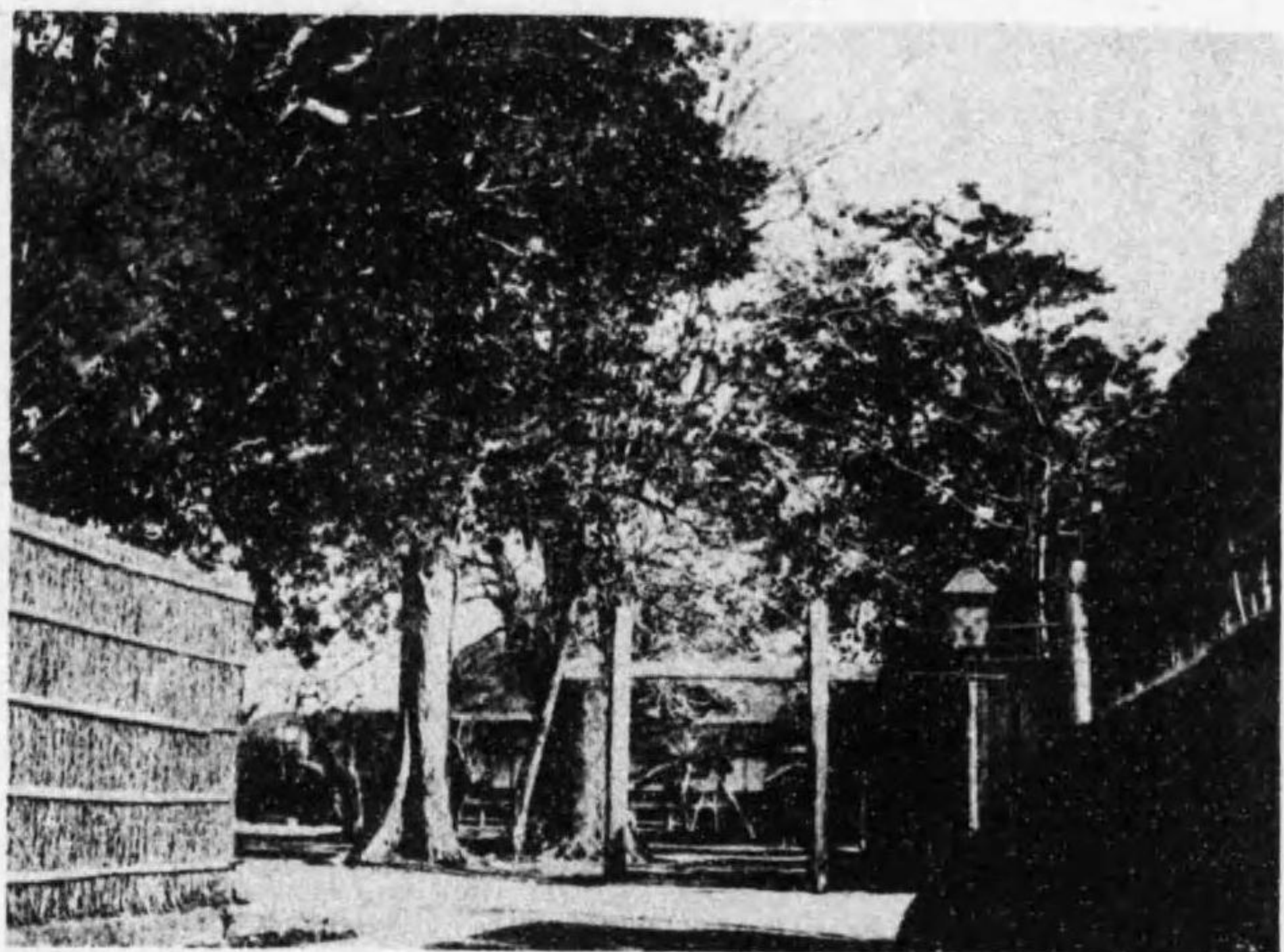
『三郎殿、三郎殿、和子を返し給ふべし』

と叫びつゝ、倒けつ、轉びつ、跡追ひ駈け來ること四五町、其遠く馳せ去る後姿を、望み見て、サメくと、泣き悲しみ、

『今は、ナニ樂みに、世に存へん』

洵然まこととばかり、近傍の井戸へ、身を投げて、失せぬ。

北條館址 共四
此れは北條館址たる寶戒寺の南門にして山門を入りて右の方に在り。



盛高、敵の目を忍びて、遠く信濃路に遁れ去る、

建武元年の春、大軍を起して、此鎌倉に押し寄せし相模二郎時行とは、實に、此龜壽の事なりける。

廿
泰家、既に、龜壽を、盛

高に託す、

『兄入道殿には、此處にて失せ給ふらん、我家の再興を計らんもの、我れならでは、外にあらじ、死すべきのみが、武士の道かは』

と思へば、腹心の郎等を招きて、

『我れは、是れより、奥州の方へ、落ち行き、再び回復の道を計らんと思ふぞかし、太郎、六郎の二人は、道案みちあん内うちせよ、其他のものは、館に火を掛けて、自害し、我の腹切りて、焼け失せし體に、見せ掛けよ、能くせよ、敵に、な覺られそ』

と告げ、奥州の地理に委はしき南部太郎、伊達六郎の二人を具足し、新田の笠印を付けて、館を遁れ出づ、跡に残れる郎等二十餘人、躍つて、中庭に出で、

『殿には、早、御生害あらせ給へるぞ、心ある面々は、冥途の御供せよ』

と呼はりつゝ、館に火を縦ちて、一度に腹を切る、館の四方を守れる三百餘人の兵士、
『さらば、御供仕つらん』

我れもくと、腹掻き切り、炎々たる猛火の中に、飛び入り、飛び込みて死す。
腥氣、四邊に満ちて、悽然たり。

廿一

長崎次郎高重、猛勇、雙ぶものなし、

『イデく、義貞兄弟と引つ組んで、勝負を決せん』

生残れる部下百五十餘騎を率して、東勝寺を出づ、崇壽寺の長老南山和尚は、日頃、高重の尊崇せる清僧、

『イデヤ、今生の暇を告げ参らせん』

と思ひ、馳せて、辨ヶ谷に到り、馬を門前に繋ぎて、中に入れば、長く、白き眉を垂れたる南山長老、衆僧に具せられて、徐々と出て来る。

甲冑を佩びたる身の、堂には、昇らず、高重、庭に立てるまゝ、恭しく、一揖しつゝ、

『如何なる是れ勇士恁麼の事』

と問へば、南山長老、言下に、

『吹毛急に用ひて、前まんに若かじ』

と道破す、高重豁然、一拜して、又忽ちに馳せ出づ、

『今は、思ひ置くことなし』

門前より、ヒラリと、馬に打ち跨がり、笠印をかなぐり捨て、徐かに、馬を打たす、敵兵、道に満てども、怪しまず、皆、中を開きて通す。

高重、仕澄ましたりと、心に喜び、進みくく、義貞兄弟を索む、遙かに、前方を望み見れば、中黒の旌旗、中空に翻翻たり、

『あれこそ、目指せる義貞なれ、イデく、雌雄を決せん』

群がる敵中を、通り抜けつゝ、進み近づく、今や、相距ること、僅かに半町、

『素破や懸かれ』

高重、急に部下を指揮して、突進せんとす。

由良新左衛門具滋、義貞の馬前に在り、早くも、見て怪しみ、

『あれ見よ、旗をも揚げで、近づくものあり、必定、敵ぞ、油断、なせそ』

と言ひつゝ、キツと、打ち見遣り、

『笠印さへなきは、益々怪し、一人餘さず、討ち取れや』

と鏗踏ん張りく、大音聲に呼はれば、武藏の七黨三千餘騎、眞先に進み出で、

『イザ、討ち取つて、功名せん』

と奮りつゝ、四方より、轟々と、押つ取り圍みて、打つて懸かる、高重、見て齒ぎりを切み、

滑川

滑川は鎌倉の市中を流れて由比ヶ濱に注ぐ北條の館は其岸に在り葛西ヶ谷は其東方に在り。



『扱ては、早、敵に覺られたるか、此上は、敵を斫り捲くつて、鎌倉武士の手並を見せん』

百五十餘騎を、前後左右に備へ、ドツと、鯨波を作つて、群がる敵の軍中に、突入す。

將も勇み、士も勇む、憤然、猛然、右を撃ち、左を突き、前に潛み、後に現はれ、一進一退、一圍一開、自由自在に、斫り捲くり、突き捲くる。

サツと、進むときは、旋風の野を捲くが如く、ドツと、引くときは、怒濤の岸を退くに似たり、源軍、追へども、及ばず、向へども、敵せず、忽ちバツと、四方に披く、高重、勇氣、益々加はり、

『生命は、固より、無きものぞ、義貞兄弟を討取るまでは、コ、一步も、引くまじきぞ』

と呼はり、又もドツと喚いて、敵中に突き入り、西に、東に、敵を追ひ詰め、追ひ廻はす。

勇み勇んで、戦ふこと數刻、今や、隊伍、漸やく亂れて、部下、三々五々、離れくく、敵中に混じ入る。

我れは、敵を知れども、敵は、我れを知らず、高重の部下、

此處に現はれ、彼處に現はれ、當るに任せて、敵を斫る。敵かと思へば味方、味方かと思へば敵、源軍、手を下さんやうもなく、これはくくと、皆、呆れ惑ふ。

廿二

義貞の家臣長濱六郎左衛門、此體を見て憤り、馬を八方に驅つて、

『敵は、皆、笠印を取つて、棄て居るぞ、印なきものは、容赦なく、打ち取れや』

と下知すれば、源軍始めて、それと心付く、實にや、印なきこそ印とはなりけれ、

『あれなるは敵ぞ、それなるも敵ぞ』

源軍、それと見れば、前後左右より、引つ包んで、斫り倒し、突き倒す。

勝敗、忽ちに地を易ふ、高重の部下、次第々に討たれて、残れるは、唯、其左右に在るもの、僅かに七騎。

高重、尙も、屈せず、義貞兄弟を索めて、引つ組まんと、近づく敵を、斫つては捨て、斫つては捨て、勇を振うて、進み戦ふ、刀身、鋸の如く、甲冑、血に浴びて殷し。

不圖、氣付けば、身は何時しか來つて、山の内に在り、目指せる義貞兄弟は、早、遠く隔たりて、見れども、見當らず。

斯かる所へ、敵一騎、馳せ來る、高重、馬を立て、打ち見遣れば、是れぞ、武藏國の住人横山太郎重眞、

『それなるを、長崎次郎と見たは、僻目か、イザ、勝負を決せん』

と呼はりつ、突と、馬を乗り出だせば、高重、敢て組まんともせず、

『扱ても、要なき端武者かな』

と言ひさま、大刀を揮うて、サツと、斫り付ければ、哀れ、重眞、眞つ二つとなつて、挫と馬より落つ、折柄、敵の一騎、又駈け來り、

『天晴、好き敵かな、イザヤ組まん』

と大手を廣げて、立ち向ふ、高重、見て、呵々と笑ふ、

『扱ても、可笑しき敵の振舞ひかな、イデ、目に物見せん』

と言ひさま、矢庭に、猿臂を伸ばして、グツと、引つ攫み、

目より高く、差し上げて、曳とばかりに、投げ飛ばすこと五六間、敵の騎馬武者二人、此人礫に觸れて、眞逆様に、馬より落つれば、高重、

東勝寺
東勝寺は鎌倉の葛西ヶ谷に在り北條氏の菩提寺にして高時入道の自刃せし處。



『今は、早、敵に知られたるぞ、汚なき軍振りは、後の代までの恥辱なり』
と思ひ極め、キツと、敵軍を見渡し

て、大音聲に、

『名乗らずとも、知りつらん、北條殿の御内に、其人ありと知られたる長崎入道圓喜の嫡孫同苗次郎高重とは、我事なるぞ、我れと思はんものは、來つて、組めよかし』

と呼はり、忽ち大手を廣げて、敵中に駈け入り、右に逐ひ、左に逐ひ、手當り次第に、捉つては投げ、捉つては投ぐ。

勇士、殊死して、戦へば、誰かは、其面に立つべきものぞ、敵兵、ワツと叫びて、右往左往に、逃げ惑ふを、高重、尙も、何處までも、追ひ廻はす。

高重の從兵、斯くと見るより、馳せ來つて、シカと轡を執り、

『扱てく、目覺ましき御働き振りに候ものかな、さばれ、斯かる雑兵、端武者を、殺せばとて、何の益か候はん、敵は、早、谷々に亂れ入りて、家をも焼き、亂暴をも働らき居り候なり、疾くく、馳せ還りて、相模入道殿に、御生害を勧め給ふべし』

と諫む、高重、聞いて、ハタと、鞍を拍ち、

『いしくも、申せしものかな、餘りに、敵の逃ぐるが面

白さに、ハタと、大殿への御約束を、忘れ居たるぞ、後
くれば、詮なし、イデヤ、立ち還らん』
主従八騎、目に餘る敵を、事ともせず、忽ち馬首を回へし
て、トットと、葛西ヶ谷の方へ、馳せ還る。

廿三

兒玉黨、斯くと見るより、急に勢付き、

『逃ぐるとは、卑怯ぞ、返せ〜』

と呼び掛け、數百の士卒、先きを争うて、追ひ来る、高重
の眼中、敵なし、知らぬ顔して、尙も、トットと、馳せ去
れば、兒玉黨、

『扱ても、鎌倉武士の卑怯さよ、何とて、返り戦はざる
ぞ』

と口々に、罵り叫びつゝ、勢ひに乗じて、嚴しく、追ひ迫
る、高重、忽ち馬首を回へし、赫と眼を怒らして、

『扱ても、着蠅き蟲どもかな』

と一喝すれば、兒玉黨、ワツと叫びて、散じ去る。

又走れば、敵又逐ふ、又回へせば、敵又散ず、回へしては、
走り、走りては又回へす、高重、山の内より、葛西ヶ谷の

口に至るまで、返し戦ふこと、都合十有七度。
敵兵今は、敢て迫り近づかず、遠くより、逐ひ駆け〜、
矢を放つ。

敵矢、高重の鎧に立つもの、二十三筋、高重、更に意とせ
ず、馬を馳せて、終に東勝寺に還り着く、祖父入道圓喜、
出でて待つ、

『何とて、遅かりしぞ、最早、是れまでなるか』

と言へば、高重、ハツと畏まり、

『祖父君、それに涉らせ候か、高重、敵の大將義貞と組
んで、勝負を決せんと存じ候ひしも、無念なるかな、終
に顔を合はせ候はず、唯、敵の端武者四五百騎がほど、
切つて捨て、由なき罪を作りて候、腕に立つべき敵とて
も候はねど、大殿の御事の、心に懸ければ、好き程にし
て、馳せ還り候なり、イザ、御前に罷り出て候はん』
と答へ、圓喜と與に、高時の坐所に向ふ、大創小創、身に
満つれど、剛氣の高重、蚊の螫せる程にも感せず。

廿四

長崎入道思元の其子爲基と別かれて、敵の軍中に突入する

や、敵兵、前後左右より、太刀袈を作つて、斫つて懸かる、
思元の心、只管、高時の上に在り、

『傍の敵に、心を、な向けそ、唯、前なる敵を、突き破
れよ、功名手柄も、早、入らぬ身なるぞ』

と告げ、大刀を打ち揮りつゝ、従兵を勵まして、前面の敵
を、突き破り、突き破る。

味方、小勢と雖も、皆、死を決す、大刀をも恐れず、矢を
も怖れず、目に餘る大軍を、物の數ともせず、ドツと喚い
て、遮ざる敵を、突き退け、突き崩して、突進す。

敵は、幾重にも、重なり合ふ、圍を出て、は、又圍に陥い
り、敵を抜けては、又敵に包まる、奮戦數刻、従兵、今は、
殆んど、盡きて、残るもの、只、六七騎、思元、前方を見
れば、敵の備、稍、薄し、

『扱ては、此あたりは、敵、尙、少なきぞ、イザ駆け抜
けん』

と言ひつゝ、猛然として奮進し、忽ち一條の血路を開いて、
敵外に走り出づ。

ホツと、一息吐きつゝ、馳せて、北條の館に抵れば、淺ま

しやかな、今朝まで、巍然たりし高第、早、化して、灰と
なる、思元、憮然として、低回すること少時。
既にして、高時、葛西ヶ谷に在りと聞き、又馳せて、東勝
寺に抵れば、今や、一族、門葉を集めて、名残の宴を開く。
九代の榮華、此に消えて、一門の運命、今や、盡きなんと
す、身世の興亡、實にや、奕棋の如し。

廿五

高時、廣堂に坐して、杯を取る。

攝津刑部大輔入道道準、諏訪入道直性、金澤大夫入道崇顯、
佐介近江前司宗直、甘名宇駿河守宗顯、其子左近大夫將監
時顯、小町中務大輔朝實、常葉駿河守範貞以下、一、門
葉、ズラリと、左右に居並ぶ、今、死せんとする身にも、
上下宗屬の分義、最と正し。

感慨、胸に満つれば、杯は、回はれども、酔は回はず、
皆、沈み勝ちにて、多く口をも開かず。

斯かる所へ、長崎次郎高重、其祖父圓喜と共に、入り來り
て、平伏し、

『高重、罷り歸りて候、御先きを仕つりて、手本に見せ

奉つらん、早々、御自害あらせ給ふべし』
と言ひ放つ、語氣さへ、最と勇まし。

腹切矢倉

鎌倉葛西ヶ谷東勝寺址の西北隅に在り此處を北條高時の腹切矢倉と稱すれども非なり其遺族埋没の處なるべし。



百戦を経て、
胴ばかり残
れる鎧を取
つて、ドツ
と、投げ棄
つれば、鮮
血、そこか
らも、こゝ
からも、噴
き出づ、高
重、突と、
膝行り寄り
て、高時の
前にある杯
を、手に取
り、

『イザ酌せよ』

と言ひつゝ、坐に侍せる舍弟新左衛門の眼前に、グツと、
差し付け、満々と注がせて、續けさまに、呑み乾すこと三
度、杯を入道道準の前に置いて、莞爾と笑み、つゝ、

『思ひ獻しに候ぞ、イデく、下物を進らせん』

刀を取るより早く、左の小脇に、突き立て、キリ、と、右
の脇腹まで、一文字に、掻き切り、中なる腸を、手繰り出
しくて、道準の前に置き、其儘、カツバと、倒れ伏す、
鮮血、今や、始めて、坐上を濡ほす。

道準、盃を取つて、満々と受く、

『美事なる下物に候ものかな、如何なる下戸にても、呑
めぬことは候まじ』

と言ひつゝ、呵々と笑ひて、グツと傾け、半ば呑み残した
る酒を、入道直性の前に置き、

『イザ助け給へ』

と告げ、又腹を屠つて、前に仆る。

直性、其杯を取つて、心徐かに、三度傾むけ、ツイと、高
時の前に、差し置き、

『若き人の、藝を盡くして、振舞はれ候ものを、年寄な
ればとて、何條、ヒケを取り候はんや、イザ、之れを送
肴に致し候はん』

と述べて、忽ち腹十文字に、掻き切り、刀を抜いて、高時
の前に置く。

執事長崎入道圓喜は、如何なる心にや、嫡孫高重を始め、
人々の腹切る状を見れども、我れ、死せんとする氣色も、
見えず。

孫の新右衛門、年甫めて十五、言ひ甲斐なき祖父の容子を
見て、悶かしさ、言ふばかりなし、手に取れる銚子を、下
に置きさま、突と、膝を進めて、圓喜の前に、差し寄り、

『父祖の名を顯はすを、子孫の孝行とこそ申して候へ、

神明佛陀も、赦させ給ふらん、イザ御介抱申し候べし』

と言ふや否や、刀を抜くより、早く、圓喜の脇を刺すこと
二たび、必ず刀に、我が腹を、サツと、掻き切り、圓喜を
取つて、引き寄せつゝ、其上に重なり合うて、息絶ゆ。

此壯絶の光景を見て、一坐、誰かは、感奮せざらん、高時、

『扱ても、健氣なる小冠者の振舞かな、左らば、我れも、

生害を急ぐべきぞ』

刀を取つて、腹を掻き切れば、城入道、

『さらば、御供仕つらん』

亦、刀を執つて、自殺す。

今は、誰かは、躊躇せん、彼處には、首を掻き切るあり、
此處には、腹を掻つさばくあり、金澤大夫入道崇顯以下、
堂上に坐を列したる一族、門葉、三百六十四人、皆、我れ
もくと、殉死す、死屍狼藉、流血、川の如し。

折りしも、猛火、忽ち起つて、殿堂伽藍、一時に、パツと、
燃え上れば、門の内外を固めたる士卒、

『扱ては、早、失せ給へりと覺ゆるぞ、疾く、冥途に追
つ付き参らせん』

と言ひつゝ、或は自殺し、或は刺し、或は猛火の中に躍
り入りて、死するもの、八百七十餘人。

北條氏、此に亡びぬ。

時は、元弘三年五月二十二日、夜、深けて、天、暗きとこ
ろ、山鶴聲々、啼いて、血をや吐くらん。

工藤新左衛門入道、鎌倉に仕へて、重用せらる、屢々其

非政を諫めしと雖も、高時、之れを用ひざるを以て、終に世を捨て、家を出で、高野に入る、會々北條氏の滅亡するを聞くに及び、塵外の身にも、流石に、望郷の念、止みがたく、今一度、關東の有様を見ばやと思へば、

故郷に着て歸るこそ悲しけれ

錦にあらぬ墨のころもを、

との一首の歌を、宿坊の柱に書き附けて、高野を出で、程なく、鎌倉に着して、其處此處と見廻るに、樓臺、跡なく消へて、野草、徒に繁し、北條の館に到れば、九代の榮華も、空しく、一片の灰燼と化し去りて、唯、鳥の聲のみ哀し、入道、低回顧望の餘、

故郷の昔を見ずばもとよりの

草の原とや思ひなさまし

との歌に、無量の感慨を寓す、關東第一の繁華を誇りし鎌倉も、早、風物荒涼、見る影だもなき光景なりしを想ひ見るべし。

新田義貞の太刀を海中に投じて、退潮を祈りしと云ふは、士氣を鼓舞する一種の計略に過ぎざるべし。

往時、鎌倉より、京都に上るには、由比ヶ濱より、稻村ヶ崎を迂回して、七里ヶ濱に出でたるものにして、當時、唯一の京街道なりしなり。

極樂寺良觀の極樂寺切通を開鑿せし以後は、廢道に歸せしと雖も、當時、尙、通行し得たることは、太平記に、

『南は、稻村ヶ崎にて、沙頭狭きに、浪打涯まで、逆茂木を、繁く引懸けて、澳四五町が程、大船共を並べて、矢倉をかきて、横矢に射せんと構へたり』

とあるにて、知らるゝなり、若し、此口にして、通行し得ずんば、唯、捨て置きて可なり、何ぞ、斯くまで嚴重の防備を設くるを要せんや。

單に逆茂木を樹つるに止まらず、沖には、多くの兵船を並べて、横矢を射んと構ゆるを見れば、唯、陸岸のみならず、干潮時には、海上をも徒涉し得らるゝ虞あるが爲めにあらずや。

義貞は、敵の防禦の手段を見て、早くも、海上の徒涉し得べきを知り、里人に尋ねて、其祕密を聞き、其夜の月の入方、即ち干潮時を期して、徒涉せんと決したるもの

なるべく、其太刀を投じて、龍神に祈りしと云ふは、全く全軍の士氣を鼓舞せんとするの策略に過ぎざるべきのみ。

彼の大正十二年に於ける關東震災の直後、著者の季子、由比ヶ濱に遊ぶ、會々干潮時に際し、稻村ヶ崎の海上、一面の干潟となりて、所謂、平沙渺々の觀を呈せしを見て、義貞とは反對に、由比ヶ濱より、七里ヶ濱の方へ、下駄ばきの儘、徒涉したることありき。

震災後、幾分か地盤の隆起したる關係もあるべしと雖も、特に此間の干潟となれるを見れば、他に比して、海底の浅き處なりしを知り得べきなり、太平記には、

「前々更に干る事も無かりける稻村崎」

と記載すれども、從來、干ることこそ無けれ、干潮時には、徒涉することも出来たるものなるべく、義貞は、此間の消息を聞き定めて、彼の計略を施せるものなること、疑ふべからず。

二條富小路殿址

建武中興發令の地

二條富小路殿は、後醍醐天皇の皇居なり、京都二條の北、冷泉の南、高倉の東に在り、即ち今の上京區寺町の西、高倉の東、二條の北、夷川通の南に在り、舊は、西園寺相國實氏の常磐井殿なりしに、後、皇居となる。

後醍醐天皇は、土御門東洞院に於て、禪を受けさせられ、後、二條富小路殿へ還らせらる、元弘二年、隱岐に遷幸、三年六月を以て、還幸あらせ給ひ、尋いで、宮西の高倉に、離宮を造營あらせ給ふ。

建武中興の號令は、此御所より、發し給へるものにして、歴史上、記念すべき地なりとす。

紛々たる天下、何れの時にか、定まらん。

後醍醐天皇、船上山の行宮に坐し、一日も早く、回天の偉業を立てばやと、日々夜々、唯、其事のみに、大御心

を勞し給ふ。

五月十二日、意外なる吉報は、京師より達して、滿山、俄に、歡呼の聲に、動搖めき渡る、此れぞ、千種頭中將忠顯、足利治部大輔高氏、赤松入道圓心等より、思ひ／＼に發したる六波羅没落の注進なりける。

京師、今や、恢復せられぬ。

『然らば、速かに、還幸あらせらるべきにや』

諸卿、俄に御前に集りて、僉議を開く、勘解由次官藤原光守、

『六波羅、既に陥ると雖も、千早攻撃の東兵、尙、畿内に充滿致し候ひぬ、古來の俗諺にも、關東八州は、六十餘州に敵し、相武二州は、關東八州に敵すところ申し候へ、承久の役にも、伊賀判官光季を亡ぼすは、易しと雖も、東兵、一たび、西上すれば、官軍、忽ち敗れて、天下、久しく、武人に屬し候ひぬ、前鑑、此の如し、今や、御方は、十にして、一二を得るに過ぎず、六波羅は、亡ぶと雖も、關東にして、尙、存する上は、天下、未だ定まらざりとは、申すべからず、皇居は、姑く此儘となし置

き、繪旨を、諸國に下して、關東の違變を御覽せさせ給

書寫山

書寫山は播磨國飾磨郡曾左村大字書寫に屬す山上に圓教寺あり後醍醐天皇の鳳轡を枉げさせ給へる處。

ふべくもや』

と申せば、諸卿、

皆、

『此議、最も

然るべし』

と贊す、天皇、

未だ可否を決し

給はず、親しく、

之れを占はせ給

へば、師の蒙に

之くに遇ふ、此

れぞ、

『大君、命あ

り、國を開き、

家を承く、小

人用ゆること

勿れ』

との卦の語、王室中興の機運、此語に見はる、

『今は、何をか疑ふべき』

天皇、此に還幸の御志を定めさせ給ふ。

十七日、勅を下して、關白藤原冬教、左大臣藤原基嗣等の

官を停め、左大臣藤原道平、權大納言藤原經通、同藤原道

教の官を復して、京師の政を委ね給ひ、又尊澄法親王を始

め、藤原藤房等、流所より、召し還し給ふ。

二

陰雲、霽れ去りて、天日、今や、輝き渡りぬ。

五月二十三日、天皇、腰輿に召されて、船上山を發し給ふ、

鹽治判官高貞は、先驅たり、

一千騎を率ゐて、一日早く進む、朝山太郎義連は、後衛た

り、五百騎を率ゐて、一日後れて従ふ。

名和伯耆守長年以下の諸將、各、士卒を率ゐて、前後を護

衛し奉つる、人馬、峰を下りて、峰を上り、旌旗、雲を出

で、雲に入る、儀容、特に堂々たり。

二十六日、播磨の千本驛に着し給ひ、二十七日には、書寫

山に登らせ給ひ、二十八日には、法華山寺に詣でさせ給ひ、



二條富小路殿址